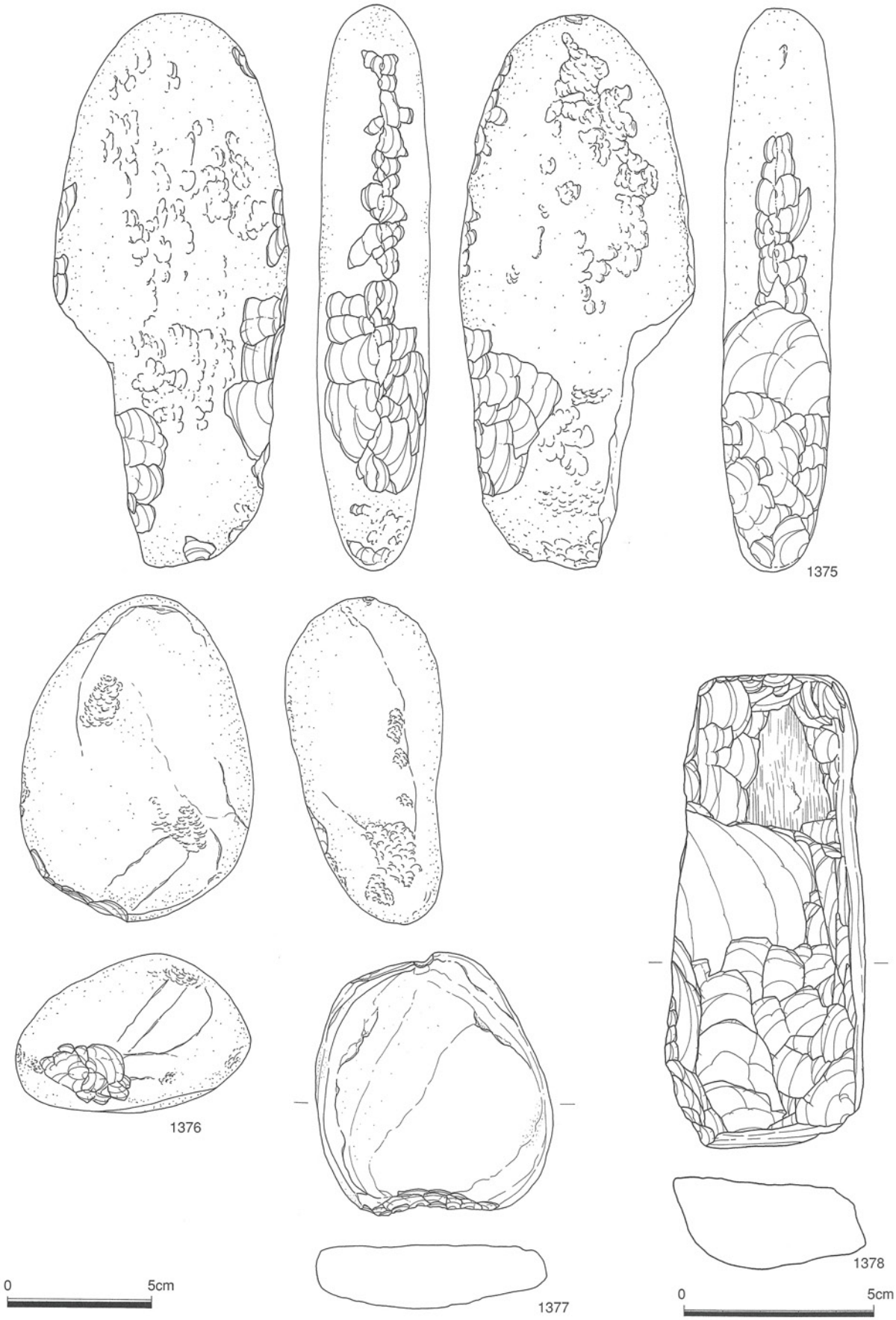
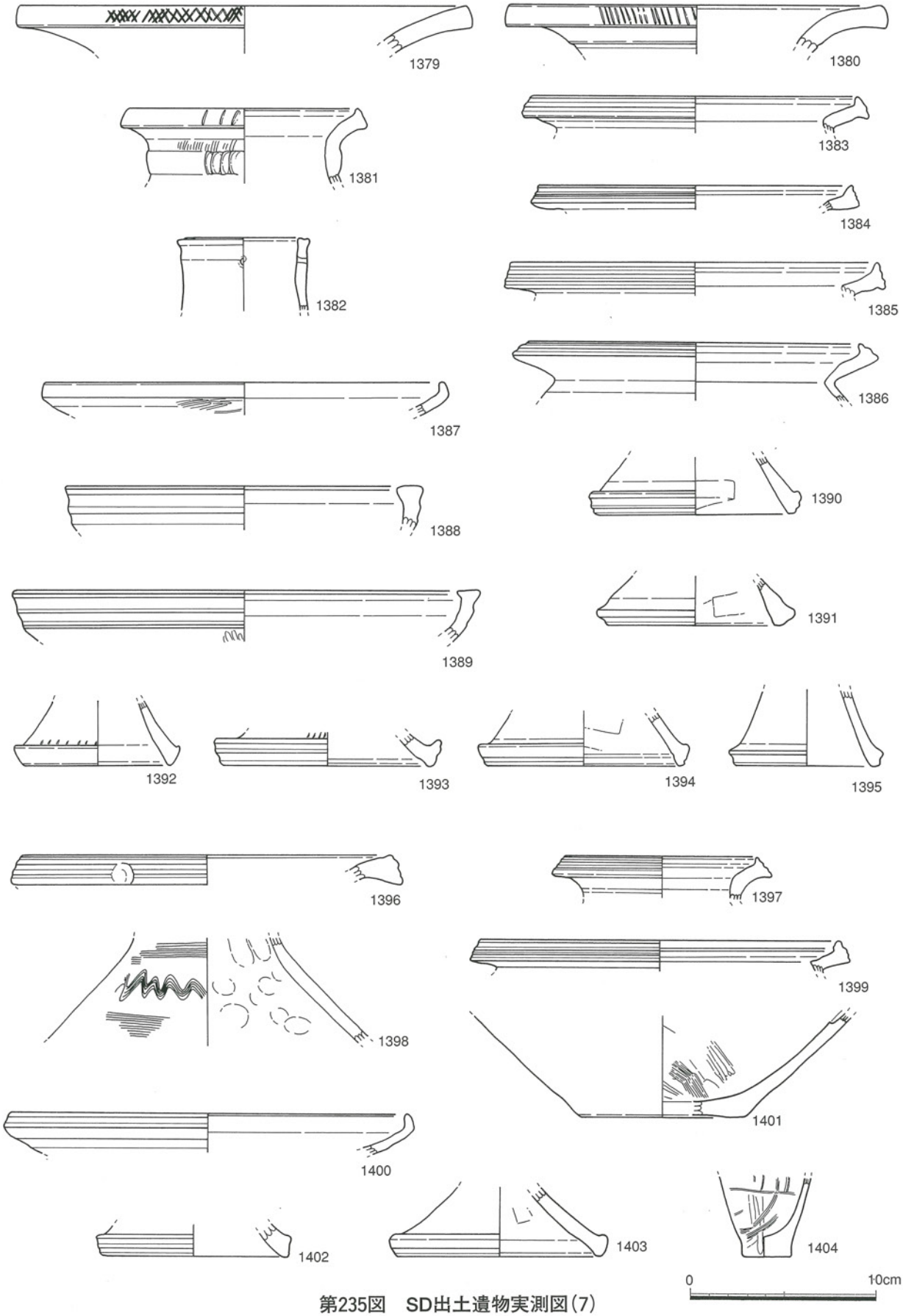


第234図　SD出土遺物実測図(6)



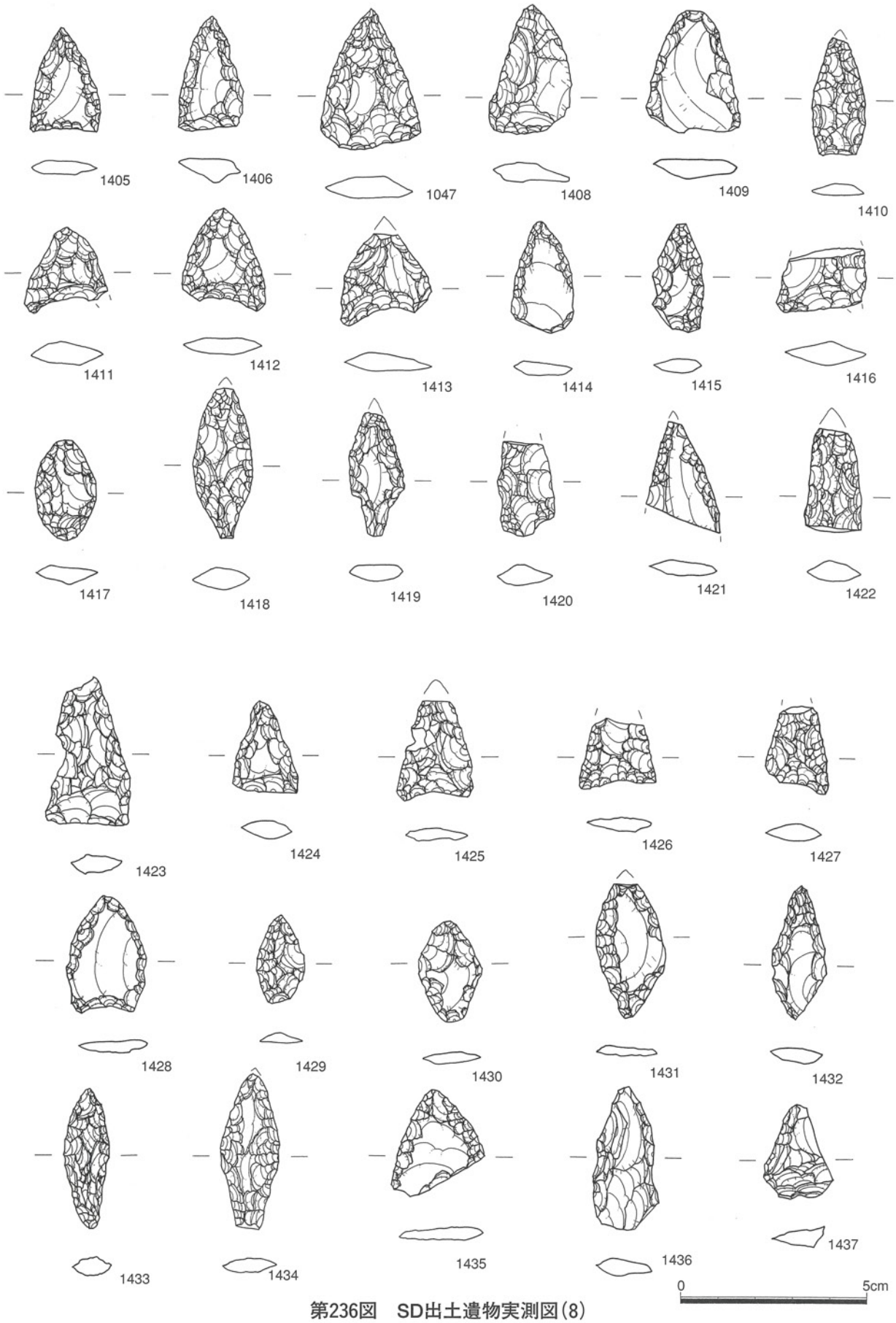
第235図　SD出土遺物実測図(7)

斜格子目文が描かれている。1159～1162の壺は、外反する口縁の端部が上下に拡張され複数の凹線が巡らされている。1163～1168は直線的、または緩やかに外反する上方への開きの小さい口縁部を持つ壺である。口縁端部は平坦に仕上げられたものと、内外方に拡張された頂部がわずかにくぼむ形態がある。文様は乏しく1163と1170の口縁部にそれぞれ刻目が施されているだけである。1171は同じく緩やかに外反する上方への開きの小さい口縁部を持ち、外方に拡張された口縁端部の頂部がわずかにくぼむ形態の壺であるが、他の壺と比較して外反の度合いが強く、口径も著しく大きいものである。1172も緩やかに外反する上方への開きの小さい壺であるが、頸部が他の壺と比較して長く、外下方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部の形態が高杯の脚端部の形態に類似している。1173・1174は口縁部に刻目の施された断面三角形の貼付突帯を2本廻した壺である。1174の口縁部の形態が突帯を廻した壺に典型的な受け口状あるいは漏斗状であるのに対して、1173は上方への開きのほとんどない直口壺のような形態をしている。1175～1190は甕である。1175はほとんど膨らみのない体部と、外反する短い口縁部を持つ甕である。1176は「く」の字に屈曲する頸部と比較的長い直線的な口縁部を持つ甕で、口縁端部は円く仕上げられている。頸部の屈曲は他の甕と比較してやや鈍く、長い体部は中程に最大径を持つと考えられる。1177～1179は「く」の字に屈曲する頸部から直線的にのびる口縁部と、膨らみの小さい長い体部を持つ甕である。口縁部端部は1177のように円いものと1178・1179のように鈍く尖らされるものがあるが、いずれも頸部の屈曲は弱く、体部外面には全面に丁寧なヘラ磨きが行われている。1182・1183は「く」の字に屈曲する頸部と直線的またはわずかに外反する口縁部をもち、体部にほとんど膨らみがない甕である。口縁端部はわずかに上方に拡張され狭い平坦面を作り出している。また、頸部内面の屈曲部が内側に向かってわずかに突出している。1181・1185は「く」の字に屈曲する頸部と内湾する口縁部に、下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され円味を持って仕上げられている。また頸部内面の屈曲部直下に強い横ナデが加えられ、幅広くくぼんでいる。1188はやや肩の膨らむ体部に、「く」の字に屈曲する頸部と直線的な短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張されて平坦に仕上げられ、斜格子目文が描かれている。また、頸部の屈曲部には指頭圧痕の加えられた突帯が1本廻されている。1189も「く」の字に屈曲する頸部と直線的な短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され凹線が2条巡らされている。1191は内湾する浅い体部と平坦に仕上げられた口縁端部を持つ高杯の杯部である。口縁端部には刻目が施され、頂部はわずかにくぼんでいる。また口縁部直下には幅広い横ナデ調整が施され、円形の刺突が加えられている。1192は内傾する深い体部と平坦に仕上げられた口縁端部を持つ高杯、または鉢と考えられる個体である。口縁端部は肥厚し頂部はわずかにくぼんでいる。1193は緩やかに内湾する体部と「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持つ鉢である。口縁端部は平坦で頸部の屈曲は弱い。1195は細く締まった頸部と外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ壺である。頸部には幅広の凹線が多段に巡らされている。1196も1195と同じくよく締まった頸部と外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺であるが、口縁と頸部、頸部と体部の各部の境ごとに、それぞれ刻目の施された貼付突帯が廻されている。口縁部が漏斗状を呈する壺であろう。1194・1197はそれぞれ櫛描文の施された壺の破片である。1194は頸部に多段の直線文が、また1197は体部上半に直線文と波状文が描かれている。1197は肩の膨らみが小さいことから、比較的体部が長い壺であろう。1198・1199は筒状の頸部と肩の膨らみがやや大きい体部を持つ壺である。1198の体部には肩の部分にヘラ先による連続刺突文が加えられている。1199は二次焼成によって器形が変形しているが、残された櫛目の痕跡から頸部下半から体部上半にかけて簾状文が施されていたと

考えられる。1200はよく膨らんだ球形の体部を持つ壺である。体部上半は頸部との境に指頭圧痕を施した貼付突帯を廻し、その下には櫛描の平行線文と波状文を多段に施している。口縁は広口短頸壺であろう。1201も球形の体部を持つ壺であるが、丁寧なヘラ磨きの施された体部は中央部に櫛描の簾状文が残されている。1203～1205は高杯の脚部である。緩やかに外反しながら外下方に向かってのびる裾部分は拡張されることなく、そのまま尖り気味に仕上げられている。杯部と脚柱部の境には単独、または一対の穿孔が加えられているものもある。

SD1027では、上述した3地区以外からも多くの弥生土器が出土している。1207は外反しながら上方に向かって大きく開く朝顔型の口縁部を持つ壺で、口縁端部が円く仕上げられたものである。1208～1210は直線的に外上方にのびる上方への開きの小さい口縁部を持つ壺である。口縁端部はわずかに内外方、または外方に拡張され、平坦に仕上げられているが頂部がわずかにくぼんでいる。1210はよく膨らんだ球形に近い体部を持っている。1211は外反する頸部から短くのびる口縁部を持つ甕である。口縁端部は平坦に仕上げられ体部は膨らんでいる。1212は「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な短い口縁を持つ甕である。口縁端部は円く仕上げられ体部はわずかに膨らんでいる。1214は頸部から外反する短い口縁部と「ハ」の字に開く体部を持つ甕である。口縁端部は平坦で中程はわずかにくぼんでいる。1215は「く」の字に屈曲する頸部と、外上方に開く直線的な短い口縁部を持つほぼ完形の小型の甕である。口縁端部は平坦で一対の円孔が穿たれ、球形の体部は器高が低い。1216は内湾しながら上方にのびる体部と「く」の字に屈曲し水平にのびる短い口縁部を持つ高杯の杯部である。口縁端部は平坦に仕上げられ頂部は凹線状にくぼんでいる。1217は内湾する浅い体部と内方に拡張された口縁端部をもつ高杯の杯部である。口縁端部は平坦に仕上げられ頂部はわずかにくぼんでいる。1220は緩やかに外反しながら外下方に向かってのびる台付き鉢または高杯の脚部である。脚端部は拡張されず平坦に仕上げられ、中央部がわずかにくぼんでいる。

石器はサヌカイト製の打製石鏃をはじめ、結晶片岩製の打製石庖丁や打製石鍬・磨製石斧・敲石・砥石などが出土している。1245～1264のサヌカイト製の打製石鏃は、それぞれ1245～1247が平基無茎式、1248～1257が凹基無茎式、1258～1260が凸基無茎式、1261・1262が凸基有茎式に分類できる。1268は横長の剥片の打面と遠端部縁辺に両面調整を加え一方の側辺を尖らせた尖頭器状の石器である。類似するものが他にSB1021などで出土している。1270～1272は剥片の縁辺部に両極剥離を加えた両面調整の石器の一端を折断したもので、明瞭な截断面を持たないこと以外は楔型石器に類似している。1273～1275は打製石剣、または打製石庖丁の破片と考えられる石器である。横長の剥片を素材にし、側縁部には丁寧な調整が加えられている。1273・1274は折断されている。1269・1276・1277はそれぞれ両極打法による剥離が加えられ、截断面を持つ楔型石器と考えられる石器である。1276は盤状剥片を分割した際に生じる平坦面を打面にして両極剥離が行われている。1278・1279はサヌカイト製の大型剥片の縁辺部に細部調整が加えられている。1279の剥片は打点を移動することなく連続して剥片が剥離されている。1280～1291は結晶片岩製の打製石庖丁である。多くは片面に自然面を大きく残す剥片を素材に使用している。端部にくり込み込が加えられたものが4点出土しているが、整った短冊形の形態に仕上げられるものはわずかである。1292～1294は同じく結晶片岩を使用した削器状の石器である。厚みのある比較的大型の剥片の周囲に粗い調整を加えて鋭い刃部を作り出している。ただ、1294の場合は使用によるものか刃部に潰れが認められる。1295・1296は片面に自然面を残す大型の剥片を素材に使用した打製石鍬である。剥片の側縁に両面から丁寧な調整が加えられ長楕円形の形に整えられている。1297～1306はいずれ



第236図　SD出土遺物実測図(8)

も磨製石斧である。1297・1298は扁平片刃石斧、1299～1304、1306は太型蛤刃石斧である。扁平片刃石斧は1297が全面に丁寧な研磨が加えられ、整形痕をほとんど残さないが、1298は側縁の一部と刃部以外全く研磨が加えられていない。また、1297の刃部には人為的に一方向からの複数の打撃が加えられ、他の石器に転用しようとした痕跡が認められる。1299～1304、1306の太型蛤刃石斧はすべて敲石に転用されている。1299はこの中で唯一の小型の製品で石材も蛇紋岩を使用している。1305は長楕円形の大型の礫の一端を両面から研磨して製作された石斧を敲石に転用したものである。刃部周辺と片側の側縁部に粗い敲打痕が集中して残されている。1307～1310は敲石である。1307は楕円形の礫を縦方向に分割したものをさらに横方向に折断して片方の端部を取り去り、残されたもう一方の端部と分割面に打撃を加えた後、部分的に研磨したもので、礫の自然面と分割面の境の稜線上と表面の一部にはそれぞれ敲打痕が残されている。1308は一端が平坦な棒状の自然礫の平坦面と側面の一部に敲打痕が集中して残されている。1309は断面が円い楕円形の礫の両端を敲打に使用したもので、端部の比較的狭い範囲に敲打痕が集中して残されている。1310は球形の礫を半球状に分割し、分割面と自然面との境の稜線を敲打に使用したものである。1311は周囲を打ち欠いて形を整えた片岩の礫を使用した砥石である。片面が使用のためにわずかにくぼんで凹面状になっている。1312～1314は石英の礫を使用した敲石である。1312は楕円形の礫の両端に細かな敲打痕が集中して残されている。1313も同じく楕円形の礫を使用しているが敲打の範囲が側面部全面に及んでいる。1314はやや角張った礫を使用したも、ので、1312同様、細かな敲打痕が両端を中心に残されている。1315は大型の砂岩礫を使用した台石で敲打痕が多く残されているが、砥石としても使用されている。

丸山遺跡ではSD1027以外にも大小30余りの溝が検出され、弥生時代の遺物が出土している。これらの溝の多くは隣接する遺構との関係や出土遺物から、所属時期が弥生時代以降に属すると考えられるものである。しかし、出土した弥生時代の遺物のなかには石器を中心に見るべき遺物も多いため、ここでは直接遺構の時期には関係しないが、出土した遺物の一部を掲載することとする。

溝　3　*(SD1003)*

中世の溝SD1005の西側でSD1005に隣接してほぼ平行するように検出された遺構である。
出土遺物のなかには弥生時代の遺物以外は出土していないが、SD1005との位置関係から何らかの関連をもって設置された中世段階の遺構と考えられる。

出土遺物（第229・230図）

1316は「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ甕である。口縁端部は上下に拡張され、凹線が２条巡らされている。1334～1340はサヌカイト製の打製石鏃である。1334は平基式、1335・1336は凹基無茎式に分類される。1340は凹基無茎式であろうか？

溝　5　*(SD1005)*（第247図）

中世の土師器の杯がまとまって出土していることから、中世段階の遺構であるが、周囲に弥生の遺構が集中しているためか遺物の出土が多い。

出土遺物（第230～234・248図）

1317は外反しながら上方に向かって大きく開く口縁を持つ広口壺である。口縁端部は上方に向かってわずかに拡張され凹線が2条巡らされている。1318も外反しながら上方に向かって大きく開く口縁を持つ広口壺である。下方に垂下して平坦面が作り出された口縁端部には凹線が3条巡らされている。1319は頸部から強く外反する短い口縁部を持つ短頸壺である。口縁端部は上下に拡張され、凹線が巡らされている。1320は緩やかに外反する上方への開きの小さい筒状の頸部と、内外方に拡張された口縁端部を持つ直口壺で、口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。1321も上方に向かってわずかに開く筒状の頸部と内方に拡張された口縁端部を持つ直口壺で、口縁端部は頂部が円く仕上げられている。1322は「く」の字に屈曲する頸部と外上方にのびる直線的な短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は拡張され頂部は凹線状にくぼんでいる。また、頸部の屈曲部には指頭圧痕の加えられた貼付突帯が廻されている。1323も同じような形態を持つ甕であるが、口縁端部には凹線が巡らされている。1324はよく膨らんだ体部と外反する短い口縁部を持つ甕である。口縁端部はわずかに上方に拡張され平坦に仕上げられている。1325は水平口縁を持つ高杯である。口縁部は水平に長くのばされ、内側には隆起帯が巡らされている。また、口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条巡らされている。1326は浅い皿状の体部と「C」字状に巻き込むように内湾する口縁部を持つ高杯で、口縁端部は円く仕上げられている。1330は高さの低い高杯の脚台部である。大きく開く脚台の下端面は肥厚し円く仕上げられている。1341～1349はサヌカイト製の打製石鏃である。1341・1342が平基無茎式、1343～1347は凹基無茎式、1348が凸基無茎式、1349が凸基有茎式に分類される。おおむね左右対称な丁寧な作りであるが、1347は逆刺の部分の大きさが著しく異なっている。1350はサヌカイト製の打製石錐である。1351は両面調整の削器と考えられる石器である。断面がレンズ状で打製石鏃を転用した可能性がある。1352はサヌカイト製の打製尖頭器である。側縁部には片側からの角度の急な調整を加えている。基部には浅い挟りが加えられた痕が残されていることから、打製石庖丁を転用したと考えられる石器である。1353もサヌカイト製の打製尖頭器である。大型の横長剥片の縁辺部に両面調整を加えて形を整えている。1354はサヌカイト製の打製石剣の先端部である。両面には側縁から丁寧な調整が加えられ、部分的に研磨がほどこされた石器は断面が肉厚のレンズ状を呈している。1355は遠端部縁辺に細部調整を加えた剥片で部分的にノッチ状の挟りが施されている。1356は折断によって不整方形の形に整えられた剥片の一辺に主剥離面側から折断面に向かって急角度の調整を加えノッチ状の挟りが施されている。1357・1358はサヌカイトの横長の剥片の縁辺部に片面または両面調整を加えた打製石庖丁である。1357の両端には浅いくり込みが作り出され、使用された剥片は翼状剥片の可能性がある。1358は蝶番状の遠端部縁辺と打面との間で両極打法が行われ刃部が作り出されている。1359は翼状剥片、1360・1361は盤状または板状剥片とされるサヌカイトの大型の剥片である。1362～1368は結晶片岩製の打製石庖丁である。図示していないものを含めると、片面に自然面を残す剥片を素材に使用するものが8点、両端にくり込みが加えられるタイプが7点出土している。一般に調整は粗く、端部のくり込みの有無にかかわらず整った短冊形に仕上げられるものはわずかで、不整形な剥片の形をほとんど変えず縁辺部に簡単な調整を加えただけのものや、背の部分への調整が全くおこなわれていないものがある。1369は結晶片岩の礫を割って得られた、片面に自然面を残す大型の剥片の縁辺部に、粗い調整を加えて形態を整えた打製石鍬である。側縁部は両方とも外側に向かって緩やかな弧を描くが、片方が途中大きく抉り込まれ、くびれたような形状になっている。1370・1371は自然の礫を素材にした磨製石斧で、礫の形状を大きく変えることなく石斧として使用している。1370は扁平な

楕円形の礫の一方の端部周辺を加撃して頭部の形状を整え、もう一端に片側から研磨を加えて刃部を作り出している。1371は柱状の結晶片岩の礫の一端を打ち欠いたものをさらに研磨して刃部を作り出したもので、その後、敲石に転用している。1372・1373は太型蛤刃石斧に分類される磨製石斧の破片で、いずれも全面に整形の際に加えられた丁寧な研磨の痕が残されている。2点とも敲石に転用されているが、1372の場合は残された鼠噛状の痕跡からに石器製作に使用された可能性がある。1374～1376は敲石である。それぞれ長楕円形、球形または不整楕円の形態の礫を使用している。1374は不整楕円の礫の縁辺部に敲打痕が集中している。1377は扁平な石英の円礫の両端を打ち欠いて紐掛けが作り出された打製石錘である。1378は方形の片岩の自然石を使用した砥石である。

溝　7　*(SD1007)*

SD1003・1006同様、SD1005に隣接して掘り込まれた溝である。遺構内の出土遺物のなかに土師器の杯や釜が含まれていることから明らかに中世段階の遺構であるが、遺物の出土量は圧倒的に弥生時代のものが多い。遺構が溝SD1005にほぼ平行して掘り込まれていることから、SD1005と何らかの関連する意図のもとに設置されたものと考えられる。

出土遺物（第229図）

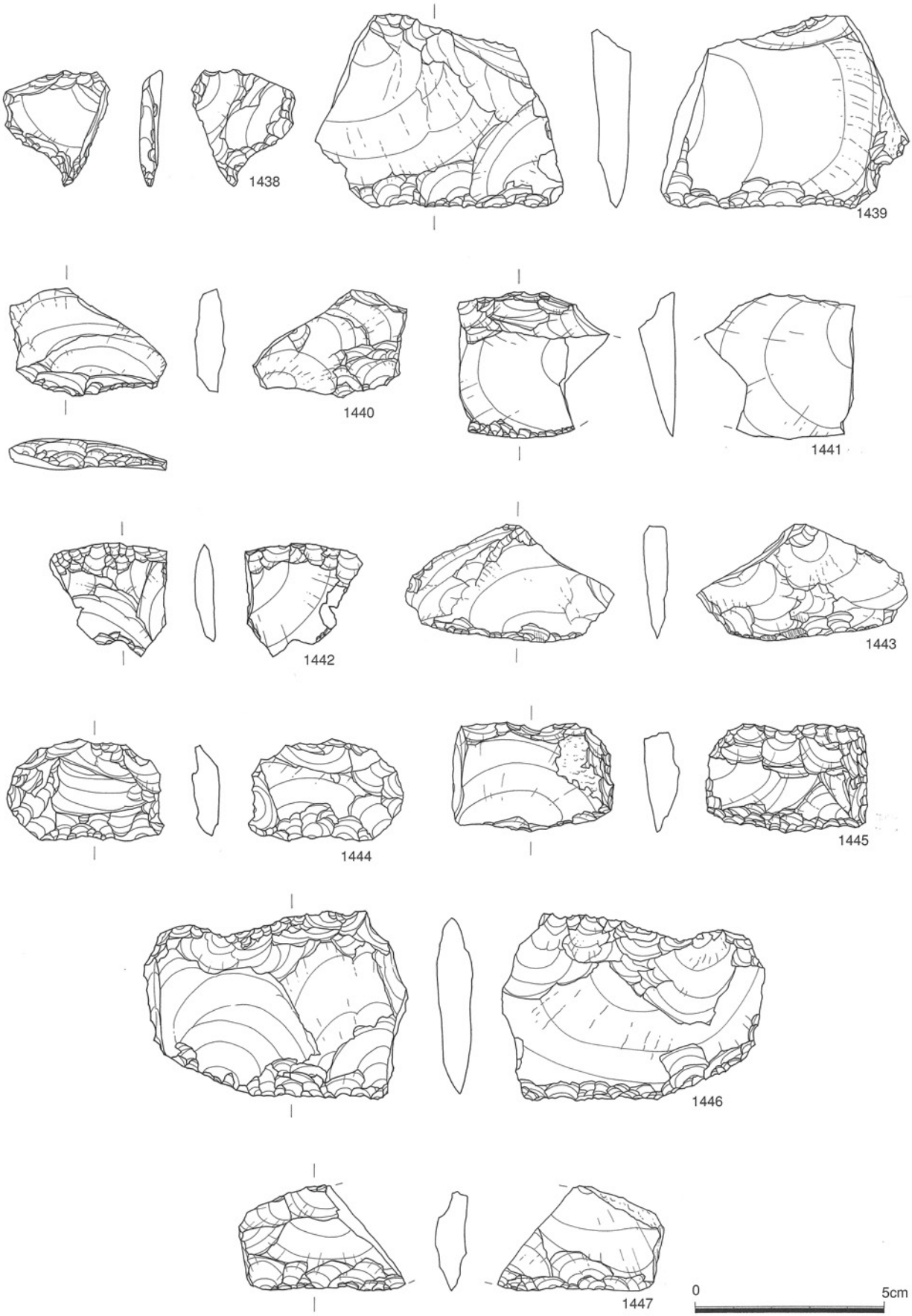
1332は内湾する体部と内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部を持つ大型の鉢と考えられるものである。体部は上方への開きが小さく身が深い。

溝　12　*(SD1012)*

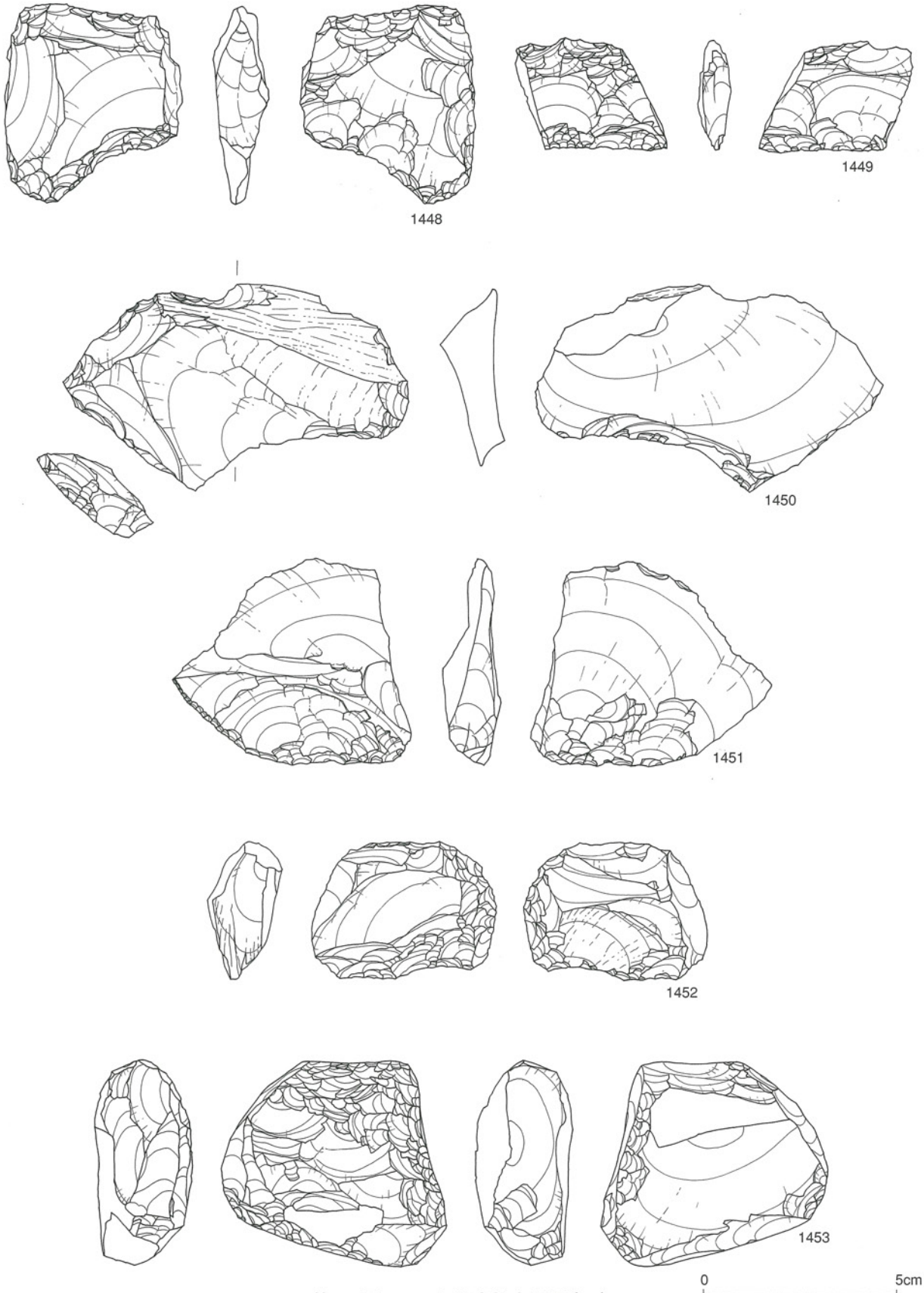
調査区中央部の緩斜面を北から南に向かって緩やかな弧を描きながらのびる溝で、途中、溝SD1015と合流している。遺構内の堆積は締まりのない砂礫層で、遺構の形状も不規則な分岐を繰り返すなど不自然な点が多く、人為的に作られた溝というよりも自然流路の可能性が高い遺構と考えられる。遺構内の出土遺物には弥生時代のもの以外は含まれていないが、合流するSD1015で中世の遺物が出土していることから中世段階のものと考えられる。

出土遺物（第235～240図）

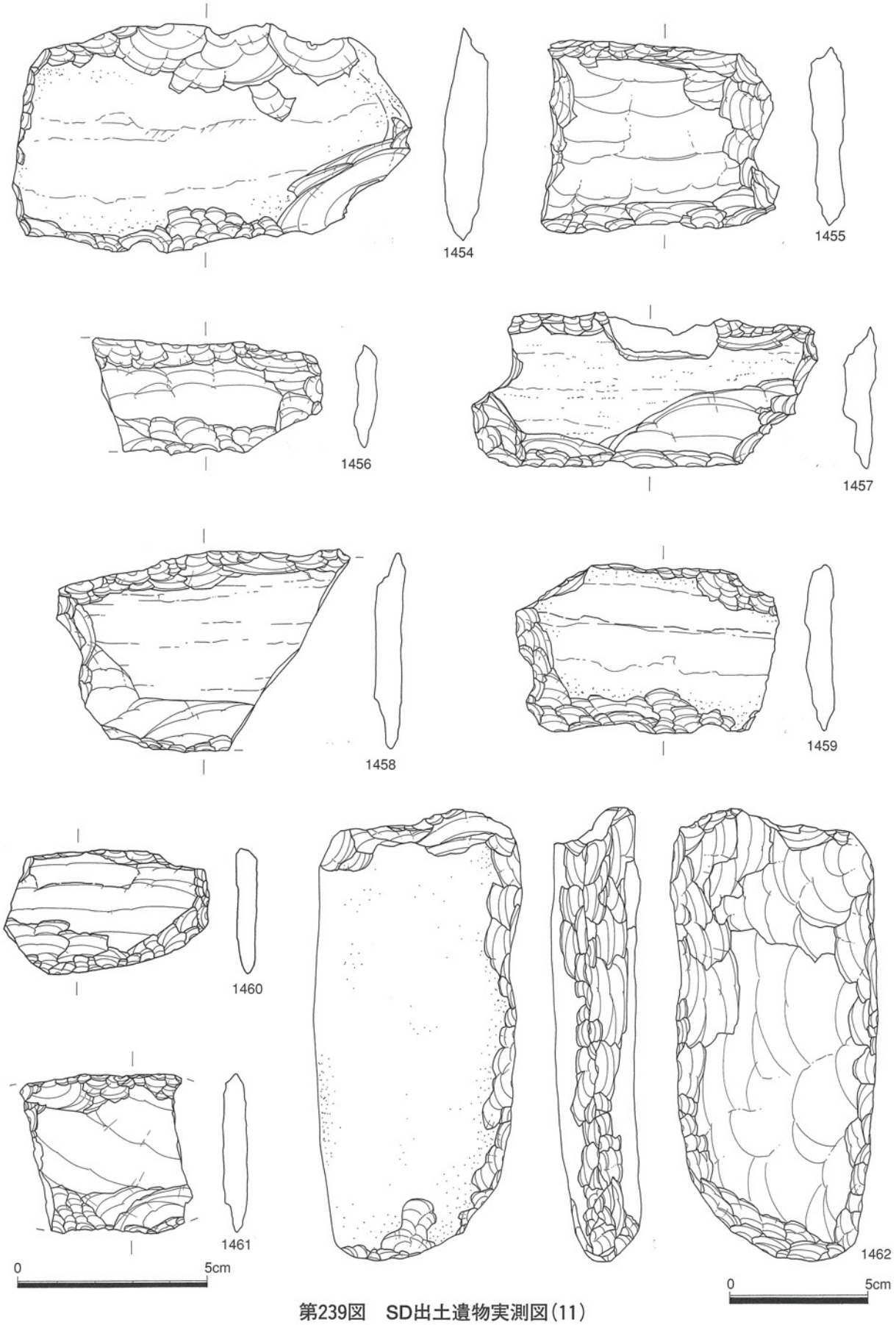
1379・1380は緩やかに外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ壺である。口縁端部は拡張されることなく平坦に仕上げられ、斜格子目文や斜線文が描かれている。1381は筒状の頸部と外反する短い口縁部を持つ壺である。口縁端部は上方に拡張されて平坦に仕上げられ、斜線が描かれている。また、頸部には圧痕のつけられた幅広の低い突帯が廻されている。1383～1386は拡張された口縁端部に複数の凹線がめぐらされた甕である。口縁端部の拡張は上方のみのものと上下に行われるものがある。1383・1386は頸部が「く」の字に強く屈曲している。1387～1389は高杯の杯部である。1387は浅い皿状の体部と、「C」字状に内湾し円く仕上げられた口縁部を持っている。1388・1389はそれぞれ内湾する上方への開きの少ない体部と、内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部を持ち、口縁部外面には凹線がめぐらされている。1390は高杯の脚台部である。脚端部は上方に拡張され拡張部には複数の凹線が巡らされている。1390～1395は何れも高杯の脚台部である。1392は脚端部が上方に拡張され、裾部には紡錘形の刺突が加えられている。1393も脚端部を上方に拡張するものであるが、拡張部には凹線がめぐらされて



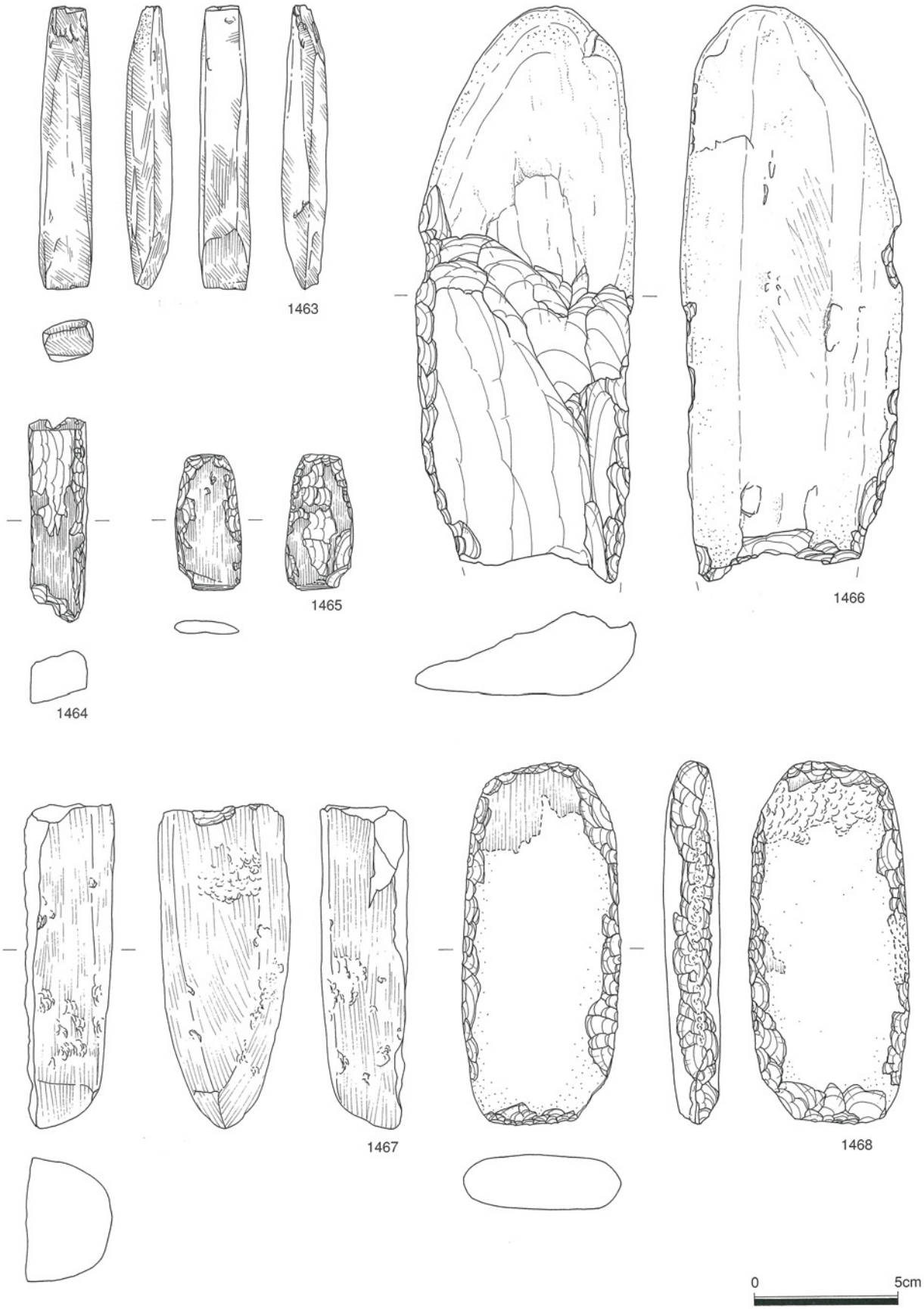
第237図　SD出土遺物実測図(9)



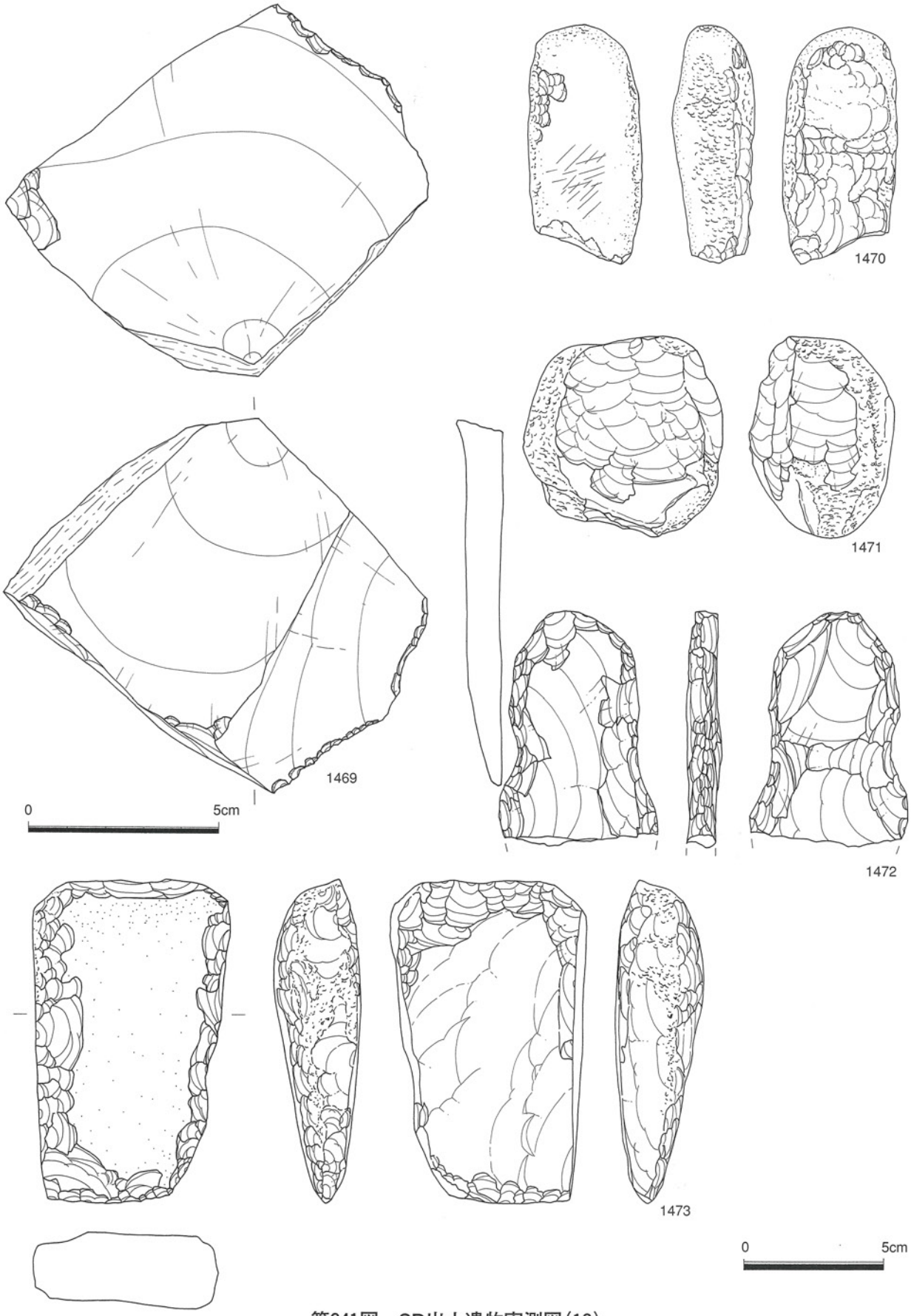
第238図　SD出土遺物実測図(10)



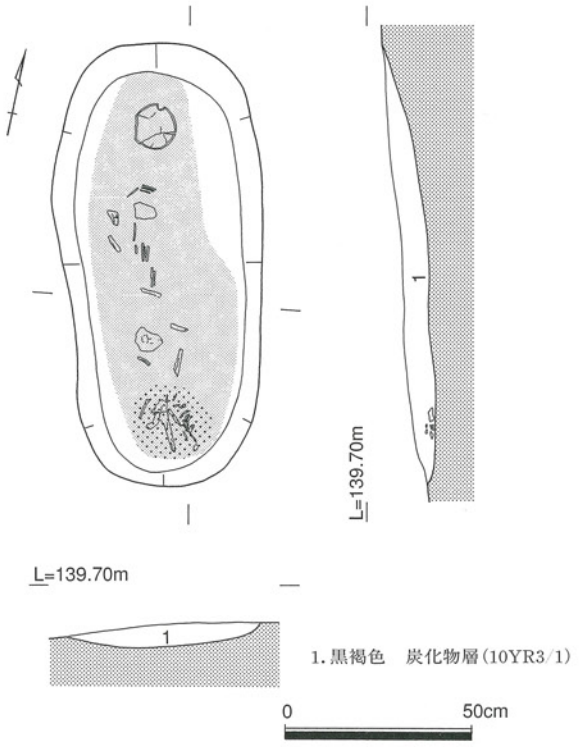
第239図　SD出土遺物実測図(11)



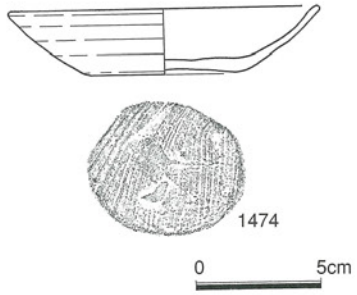
第240図　SD出土遺物実測図(12)



第241図　SD出土遺物実測図(13)



第242図　ST1001　実測図

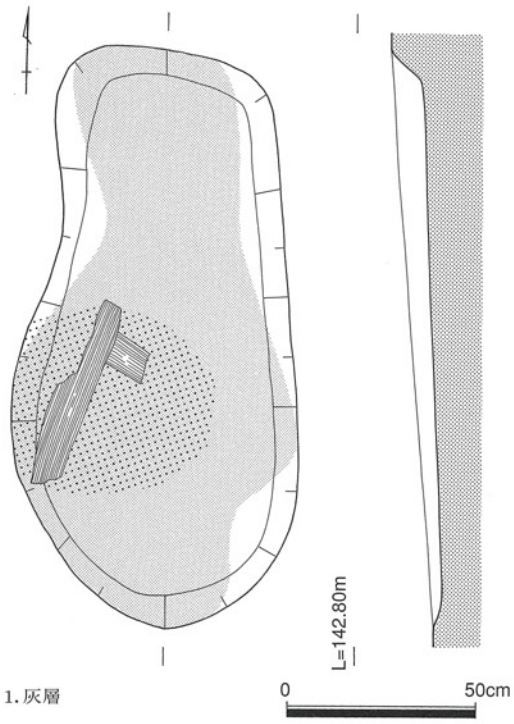


第243図　ST1001　出土遺物実測図

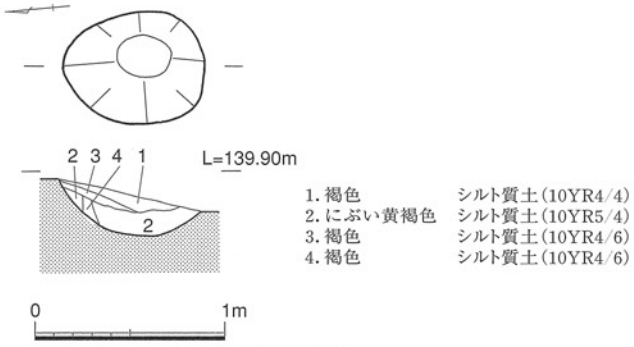
いる。また、裾部には刺突が加えられている。1394も脚端部を拡張し凹線をめぐらせるものである。1395は脚端部が肥厚し凹線状のくぼみが付けられている。1405～1422はいずれもサヌカイト製の打製石鏃である。基部の形態から分類すると1405～1408が平基無茎式、1410～1413・1415・1416が凹基無茎式、1418～1420が凸基有茎式に属している。1441・1442は縁辺部に片面または両面から細部調整を加え簡単な刃部を作り出した剥片である。1445は横長剥片の主剥離両側の縁辺部を中心に調整を加え不整方形の形に仕上げられた石器である。長軸側の一辺は縁辺部に潰れが残されている。1447は自然面をそのまま打面として使用する剥片の遠端部縁辺に両面調整が加えられた石器である。これら2点は小型ではあるが打製石庖丁や削器の可能性がある。1448・1449は向かい合う2辺に両極剥離が加えられ截断面を持つ楔型石器と考えられるものであるが、1449は打製石庖丁や打製石剣など断面レンズ状のの両面調整の石器を截断した可能性も考えられる。1448は折断面を打面にして調整が加えられている。1450・1451は縁辺部に調整を加え簡単な刃部を作り出した比較的大型で不整形な剥片である。1454～1456は片岩製の打製石庖丁である。このうち端部にくり込みが設けられたものが2点含まれている。1462は片面に自然面を残す片岩の大型剥片を素材にした打製石鍬である。側縁部の片側には両面調整が加えられているのに対し、もう一方は主剥離面側だけしか行われていない。1463は緑色片岩製の柱状片刃石斧である。頭部の一部を除くほぼ全面に入念な研磨が加えられている。1466は扁平な長楕円形の片岩の礫の片面を大きく打ち割り、縁辺部に簡単な調整を加えたもので、石鍬の可能性があるが、表面の一部には研磨の痕跡が残されている。1467は太型蛤刃石斧の破損品を敲石に転用したものである。表面と側縁にそれぞれ敲打痕が集中する所が残されている。1468は扁平な楕円形の礫の端部を研磨して製作された磨製石斧を敲石に転用したもので、側面にはすべて粗い敲打が加えられ刃部の一部にも敲打痕が残されている。

溝　15　*(SD1015)*

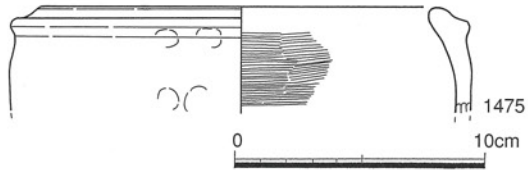
溝SD1012の南側を平行して走り途中でSD1012と合流する溝である。SD1012でも触れたように、遺構の形状が不規則で、遺構内の堆積も締まりのない砂礫によって占められていることから、人為的な遺構



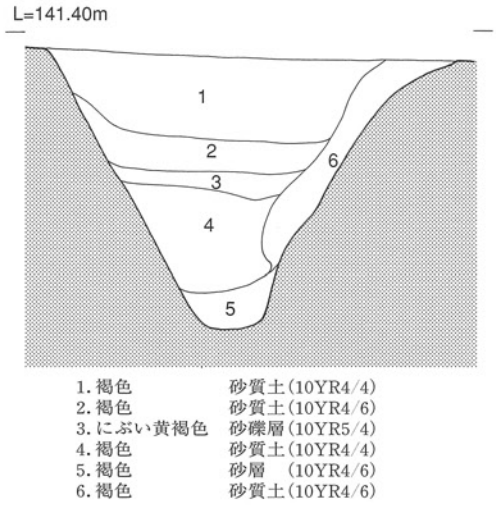
第244図　ST1002　実測図

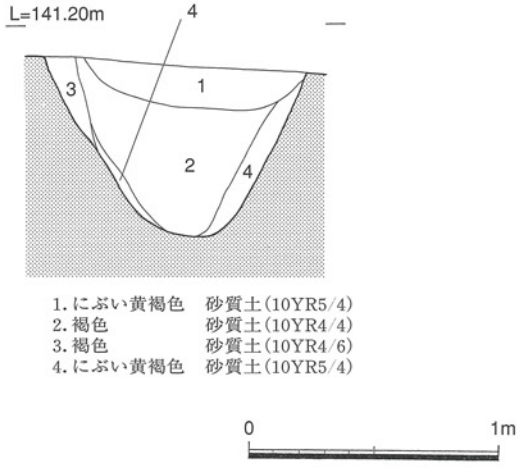


第245図　SK1005　実測図



第246図　SK1005　出土遺物実測図



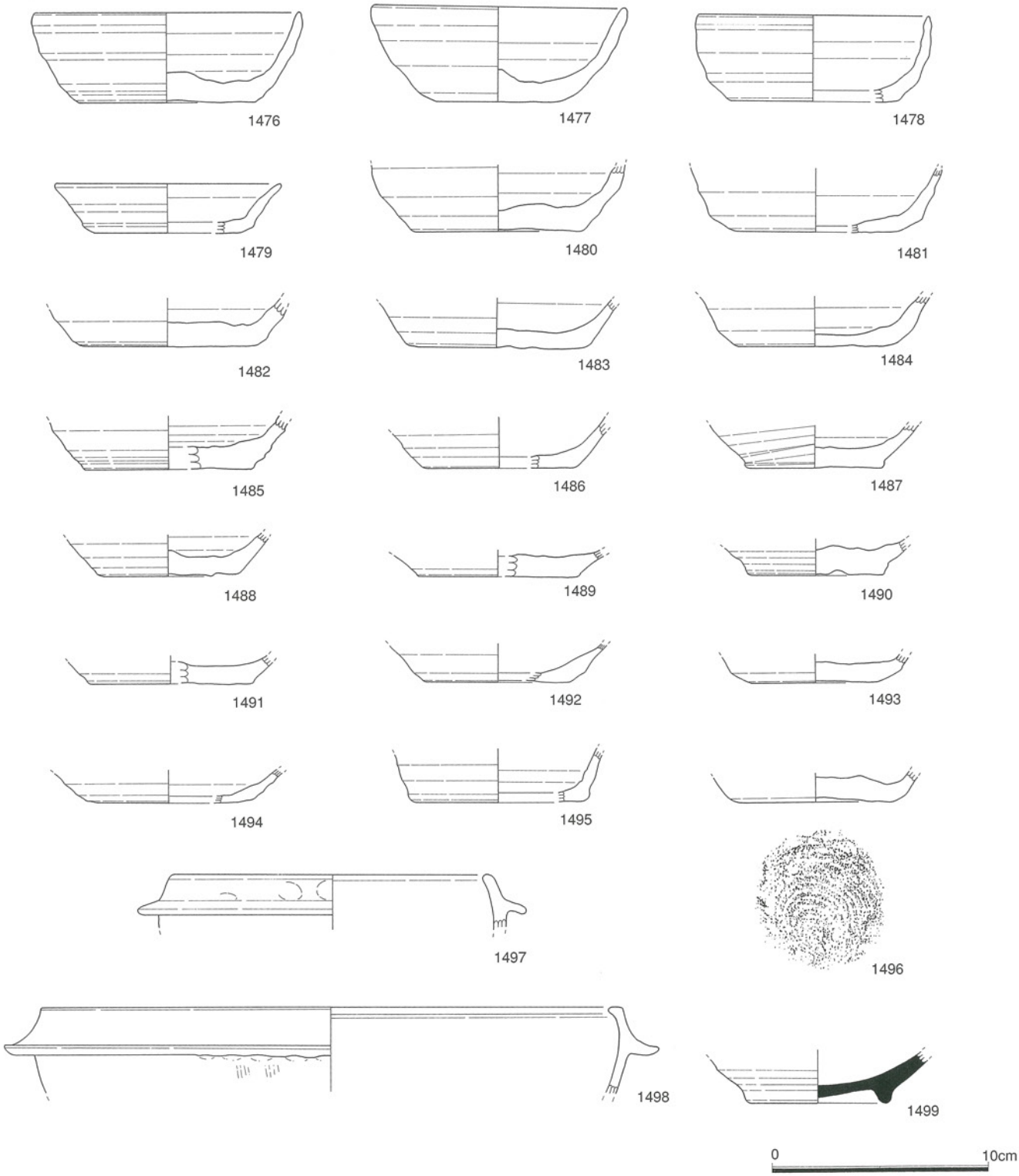


第247図　SD1005　遺構断面図

と考えるよりも自然流路の可能性が高い遺構である。出土遺物は圧倒的に弥生時代の遺物が多いが、少数ではあるが中世の遺物が出土していることから、所属時期は中世段階と考えられる。

出土遺物（第235～240図）

1396は外上方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺である。肥厚させて平坦面を作り出した口縁端部には複数の凹線文が巡らされるほか、円形浮文も付けられている。1397は外反する短い口縁部を持つ短頸壺である。口縁端部は上下に拡張され複数の凹線が巡らされている。1398はよく締まった頸部と肩の膨らむ体部を持つ壺である。体部上半には櫛描の平行線文と波状文が交互に描かれている。1399は「く」の字に屈曲する頸部と、直線的な短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は上方に拡張され、複数の凹線がめぐらされている。1400は浅い皿状の体部と、「く」の字型に内屈する口縁部をもつ高杯で、口縁端部は円く仕上げられて

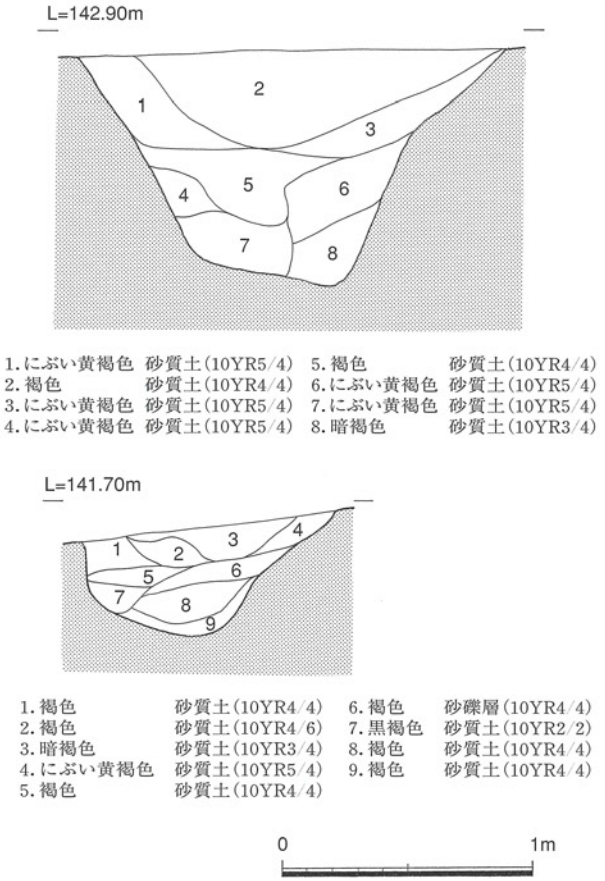


第248図　SD1005　出土遺物実測図

いる。1404はミニチュアの甕の体部である。上方への開きが小さく直線的な体部は外面に半截竹管による幾何学文様が描かれている。1402・1403は高杯の脚台部である。２点とも脚端部の上方への拡張は弱く、凹線が巡らされている。1423～1437はサヌカイト製の打製石鏃で、1423・1424が平基無茎式、1425～1428が凹基無茎式、1429～1432が凸基無茎式、1433・1434が凸基有茎式に分類される。　1438はサヌカイト製の打製石錐である。剥片の折断面と縁辺部の交点に細かな調整が加えられ、短い錐部が作り出

されている。1439・1440・1443・1444は縁辺に片面または両面調整を加えて刃部が作り出された剥片で、1443は部分的に研磨されている。1446は横長剥片を使用した両面調整の石器で、打製石庖丁の可能性があるが、両端を欠くうえに使用痕も残されていないため確実なことは不明である。1452・1453はサヌカイトの石核である。截断または折断によって不整方形の形に分割された剥片に両極打法による剥片の剥離作業が行われている。縁辺部の稜線は潰れが著しい。1457～1461は結晶片岩製の打製石庖丁である。1460・1461以外は端部にくり込みが作り出されている。1464は柱状石斧、1465は扁平片刃石斧である。柱状石斧は未研磨の部分には粗割の際の剥離面がそのまま残されていることから、粗割で得られた手頃な大きさの柱状の石片を部分的に研磨しそのまま製品としたものと考えられる。扁平片刃石斧の斧身は最も厚い部分でも５mmに満たない薄さで、片面は丁寧に研磨されているが、もう一面には剥離痕が多く残されている。

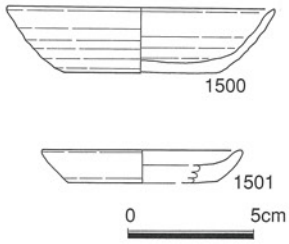
上述した溝以外でもSD1006や1018・1030などで多くの遺物が出土しているが、1027や1005・1012などと類似する遺物が多いため。ここでは他でも比較的出土数が少ないものを取り上げることにする。1469はSD1006で出土したサヌカイトの板状剥片である。打点を移動することなく連続して剥離が行われている。1470も同じ1006から出土した蛇紋岩の長楕円形の礫を使用した敲石で、片面を残してほぼ全面に敲打痕が残されている。1471・1472はSD1018から出土した石器である。1471は石英の円礫を使用した敲石で、礫の側面の稜線に沿ってほぼ縁辺部を一周するように細かな敲打痕が残されている。1472は片岩製の打製石鍬である。刃部を欠失するが基端部は円く仕上げられ、両側縁には明瞭なくびれが付けられている。1473はSD1030で出土し石器である扁平で四角い礫の縁辺部に粗い剥離と敲打痕が残されている。敲石の一種であろうか？



第249図　SD1015　遺構断面図

中世の遺構と遺物

調査区内からは多数の溝や柱穴が検出されているが、出土遺物から確実に中世に時期を特定出来る遺構はきわめて少ない。



第250図　SD1015　出土遺物実測図

火葬墓　1 *(ST1001)*

（第242図）

調査区の南東側、弥生時代の竪穴住居址SB1027に隣接して検出された南北方向に長軸を持つ長さ約

1.2m、幅0.55m、深さ10cmの不整楕円形の形態の火葬墓である。遺構内には炭化した歯などの骨片を含む木炭粒や焼土、灰が充満していたが、特に遺構の南側は直径約20cm範囲で円形に焼土層が広がり、骨片が集中していた。また、遺構の北側では副葬品として置かれていた土師器の皿が1点出土している。

出土遺物（第243図）

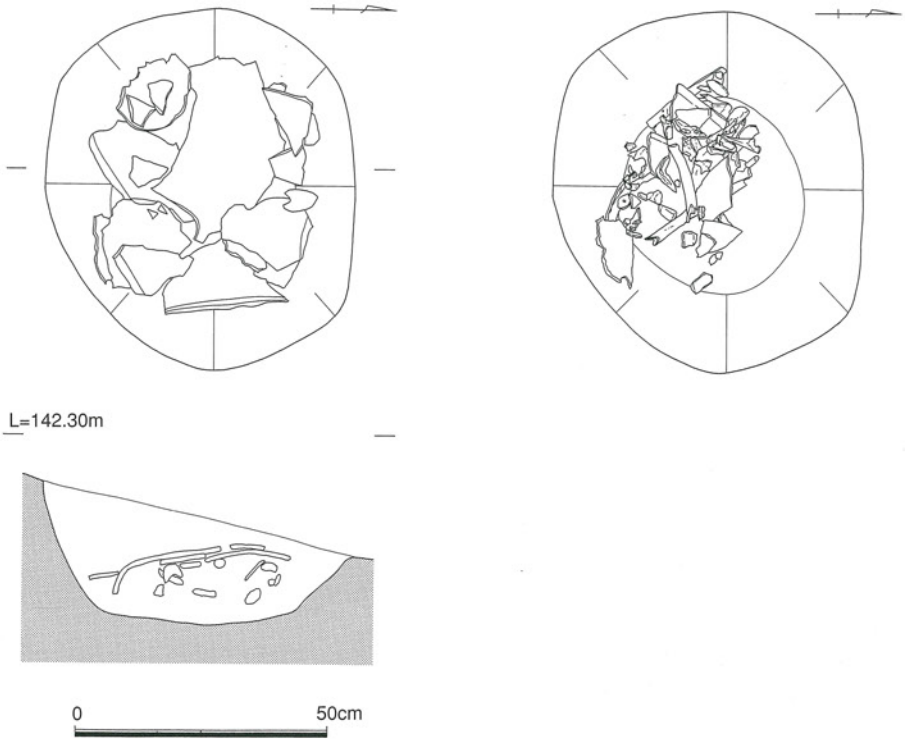
1474は口径12.4cm、底径6cm、器高2.4cmをはかる土師器皿である。上方に向かって大きく開く体部と尖り気味に仕上げられた口縁端部の形態を持つ焼成良好な土器で、体部内外面には丁寧な横ナデ調整が加えられ、底部には静止糸切り痕が残されている。

火葬墓　2　*(ST1002)*（第244図）

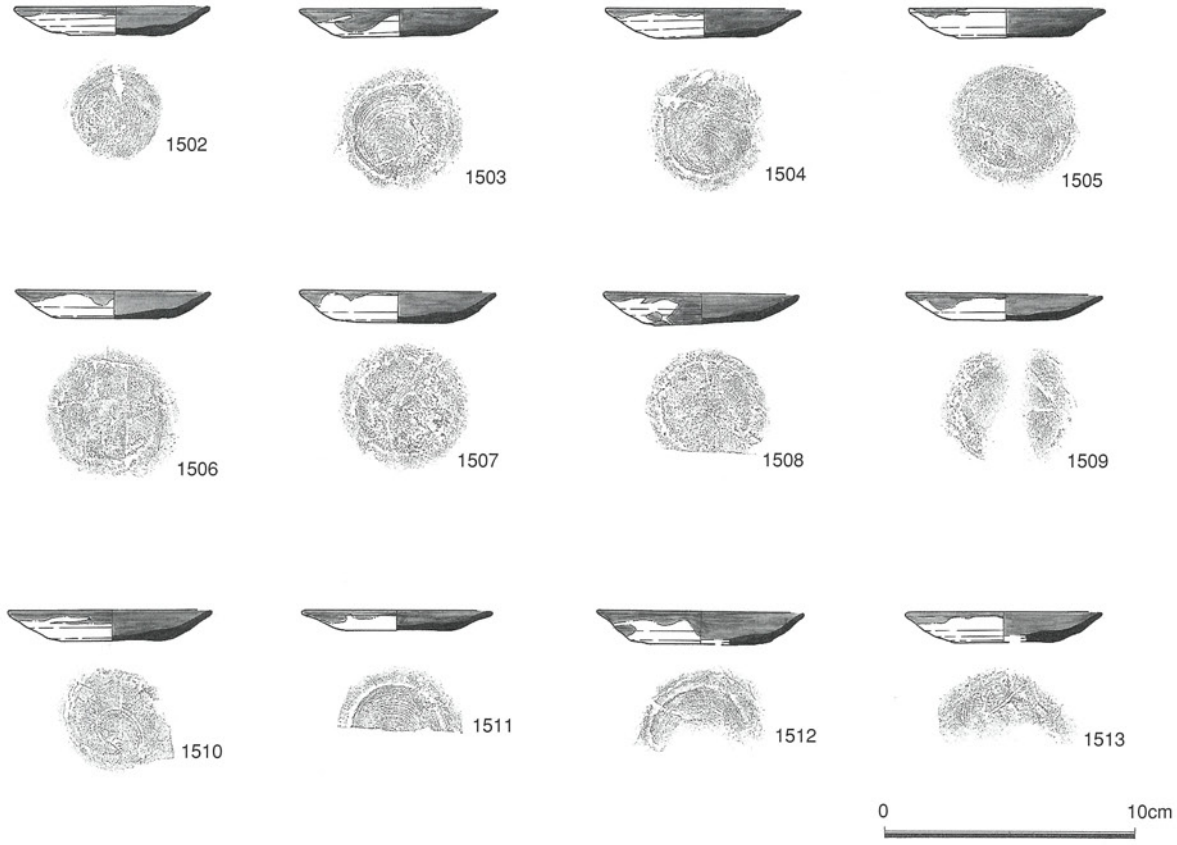
調査区中央から南東に残された浅い谷状の落ち込み部分で検出された南北方向に長軸を持つ長さ約1.55m、最大幅約0.75m、深さ10cmの不整楕円形の形態の遺構である。遺構内には炭化した骨片を含む大量の炭化物を混じえた灰層が充満していたが、特に中央部からやや南西よりの一角は直径約50cmの範囲に円形に焼土層が広がり、そのなかには長さ約50cm、幅5cm余りの炭化した木片が含まれていた。遺構内から遺物は出土しなかったがST1001と遺構の形態や遺構内部の状態が類似することから、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

土坑　5　*(SK1005)*（第245図）

調査区南西部の斜面上で検出された長さ約0.75m、幅0.6m、深さ約20cmの楕円形の土坑である。遺構内の埋土は3枚に分けられるが、何れも小礫を含むシルト質の土が堆積している。



第251図　ST1015　実測図



第252図　ST1015　出土遺物実測図(1)

出土遺物（第246図）

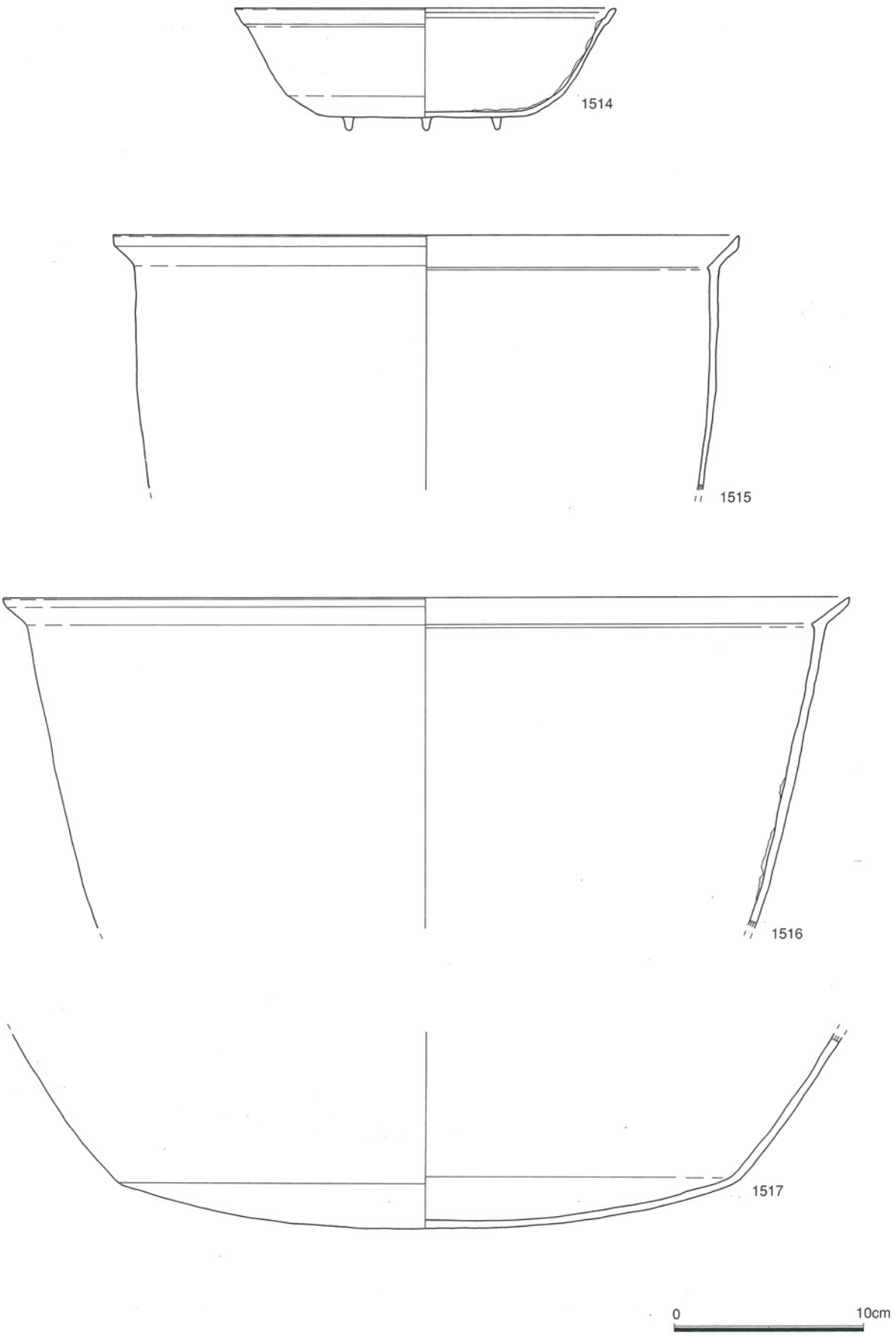
1512は内傾する体部と若干肥厚し、円く仕上げられた口縁端部を持った土師器の釜である。口縁端部からやや下がった位置には太い隆帯状の鍔が廻されている。体部外面は指頭圧痕が残され表面の凹凸が著しいが、内面は板状工具によるナデによって平滑に仕上げられている。

溝　5　*(SD1005)*（第247図）

調査区の中央やや西よりの地点で調査区を北から南に横断して掘り込まれた遺構である。溝の規模は一定していないが最も大きいところで深さ１m、幅3.2mを計る。遺構内には砂礫が厚く堆積し、一部には大型の砂岩礫を積んだ集石が検出されたが、この溝に伴う遺構であるかは不明である。また、溝の周辺にはこの溝に平行して走る規模の小さな溝SD1004・1006・1007・1008などが検出されている。これらの溝はSD1007以外は出土遺物からみる限りでは弥生時代の遺構と考えられるが、遺構の方向やSD1005との距離を考えると、SD1005となんらかの関連性を持っていたことは明らかで、これらも中世の遺構と考えてよいだろう。

出土遺物（第248図）

1476～1496は土師器の杯・皿類である。1476は緩やかに内湾する体部と鈍く尖らされた口縁端部を持



第253図　ST1015　出土遺物実測図(2)

ち、口径に対して器高が高い身の深い形態の杯である。体部内外面には強い横ナデ調整が加えられ、厚い底部には回転ヘラ切り痕が残されている。1477も1476と同じような特徴を持つ土師器の杯であるが、1476と比較して口径と底径の差が若干大きいため、上方への開きがわずかに大きい。1478は底部との境から内湾しながら外上方にのびる体部が途中で直立する、上方への開きの小さい杯である。1479は外反する短い体部と尖り気味に仕上げられた口縁端部を持つ皿である。他の杯同様、体部内外面には強い横ナデ調整が加えられ底部には回転ヘラ切り痕が残されている。1480～1495はいずれも杯の底部である。1476～1478の杯同様、底部の切り離しには回転ヘラ切り技法が用いられているが、多くの場合はその後ナデ調整が加えられている。1496も杯の底部であるが、他の杯とは異なり、底部の切り離しに回転糸切り技法が用いられている。他の杯は胎土中への砂粒の混入が少ない橙色の軟質土器であるが、1496は砂粒の混入の多い明褐色のやや焼成のよい土器で、他地域から搬入された可能性も考えられる。1497・1498はいずれも土師器の羽釜である。1497は緩やかに内傾する口縁部と、口縁端部からやや離れた位置に付けられた比較的高い鍔を持っている。口縁端部は円く仕上げられ鍔の端部は下方に延びている。1498はわずかに上方に開く体部と内湾する口縁部を持ち、内方に拡張される口縁端部は平坦に仕上げられている。また、口縁端部からやや離れた位置には比較的高い鍔が付けられているが、鍔の端部は水平方向にのびている。口縁部内外面には横ナデが施され、鍔直下の体部外面には指頭圧痕と刷毛目調整が加えられている。1499は西村系の須恵器椀である。底部には幅広の低い高台が付けられているが、全体に摩滅が激しくハケ目の有無などは確認できない。この溝の中からはこれ以外にも須恵質土器の甕と青磁碗の破片が出土している。須恵質土器の甕は頸部の破片で時期決定の要素に欠ける資料であるが、青磁碗は龍泉窯系の鎬連弁文碗Ⅰ－５類とされるものである。

溝　15　*(SD1015)*（第249図）

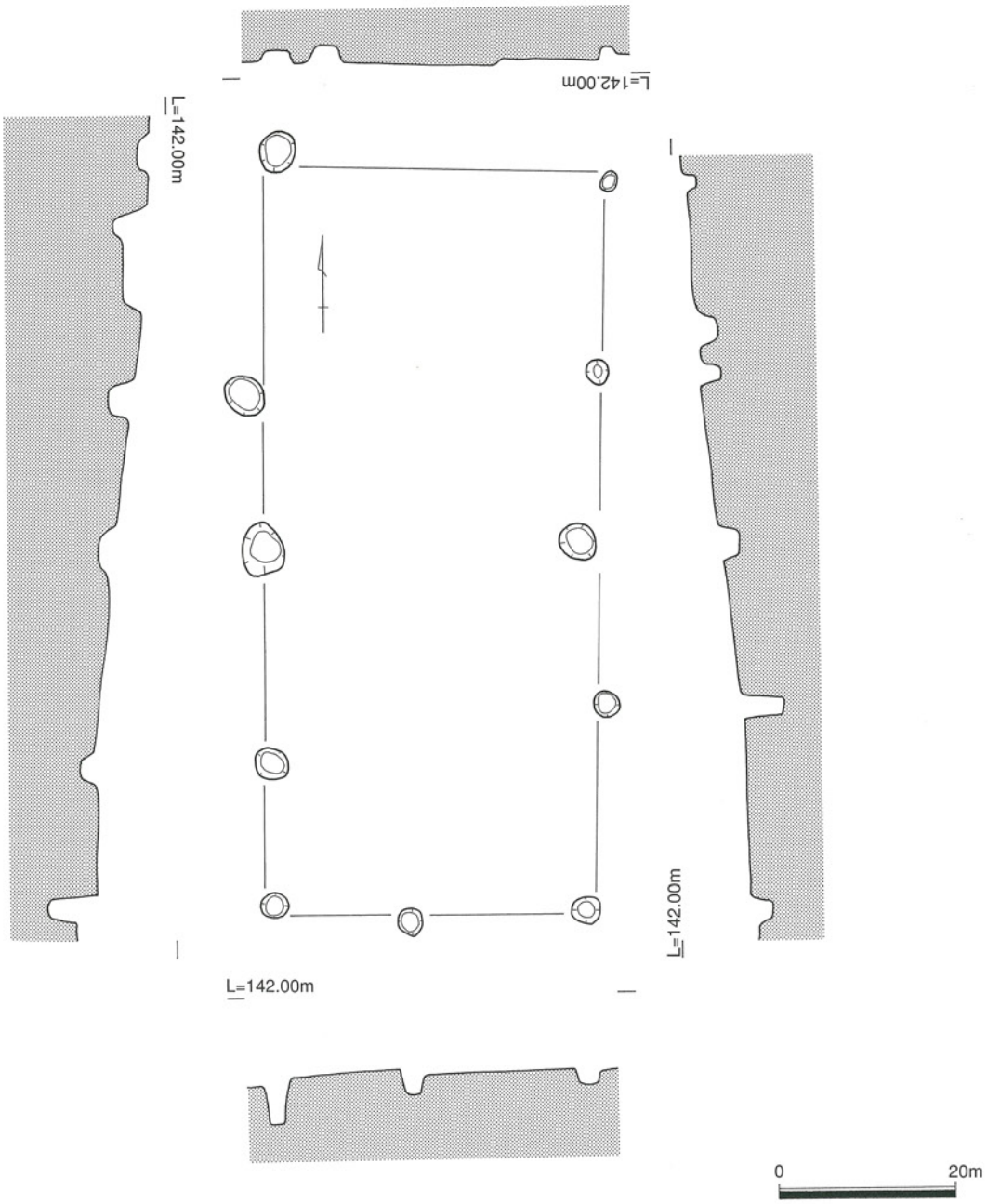
調査区中央部を緩やかな弧を描いて北東から南西に向かってのびる溝である。途中、他の溝と合流と分岐を繰り返している。SD1030・1031は1015と同じ遺構の可能性があるが、途中で途切れているうえに、方向が同じ複数の溝が存在することから、確実に同じ遺構である確証はない。先述したようにこれらの溝は遺構内の埋土が締まりのない砂礫土であることや、その大きさが不規則で途中で分岐と合流を繰り返し、方向も一定していないことなどから、人工的なものというよりも浸食作用によって生じた自然流路の可能性が高い。

出土遺物（第250図）

1500はわずかに内湾しながら上方に向かってのびる体部と、尖り気味に仕上げられた口縁端部を持つ土師器の杯である。口径と底径の差が比較的大きいため、体部の上方への開きが大きい。体部内外面には丁寧な横ナデが加えられ、底部には回転ヘラ切り痕が残されている。1501は短い直線的な体部と鈍く尖らされた口縁端部を持つ小皿である。1500の杯同様、体部内外面には横ナデが加えられ、底部には回転ヘラ切り痕が残されている。

近世の遺構と遺物

近世の遺構と遺物は主として西側の調査区西側の斜面を造成したテラス状の平坦地から発見されてい

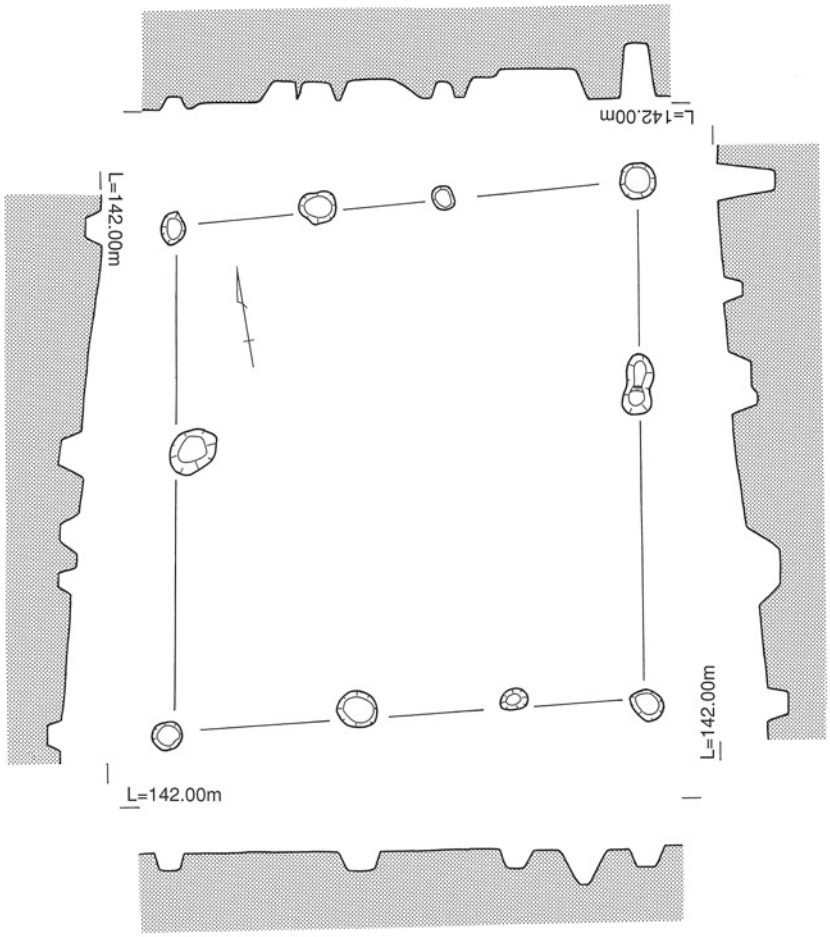


第254図　SA1003　実測図

る。検出された遺構は砂岩の円礫を使用した墓と考えられる大小14の方形や円形の集石遺構で、集石本体の掘り下げが行われなかったため集石下の遺構の有無は不明だが、集石上面からは供献されたと考えられる伊万里をはじめとする陶磁器類が出土している。ここではこれら集石墓以外の特異な出土状態を示すST1015を取り上げてみたい。

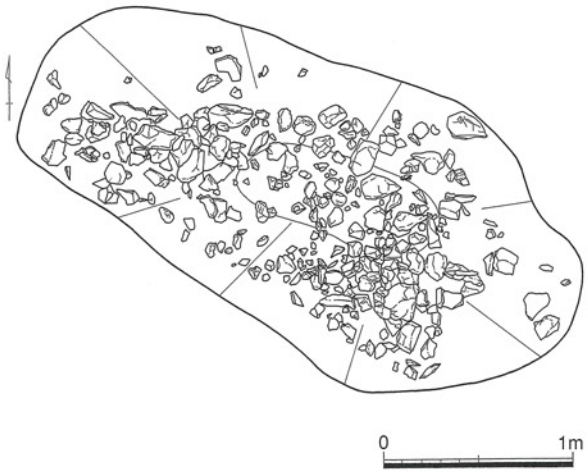
近世墓　15　*(ST1015)*（第251図）

調査区の西側に集中する集石を伴う近世墓群からやや離れた地点で検出された遺構である。他の近世墓とは異なり、墓の上には集石を伴わない土廣墓である。遺構の主体部は直径約0.7m、深さ20cmの不整形な土坑で、遺構内からは人骨の上部を覆うように置かれていた破損した鉄鍋や土師器の小皿が出土



第255図　SA1004　実測図

0　20m

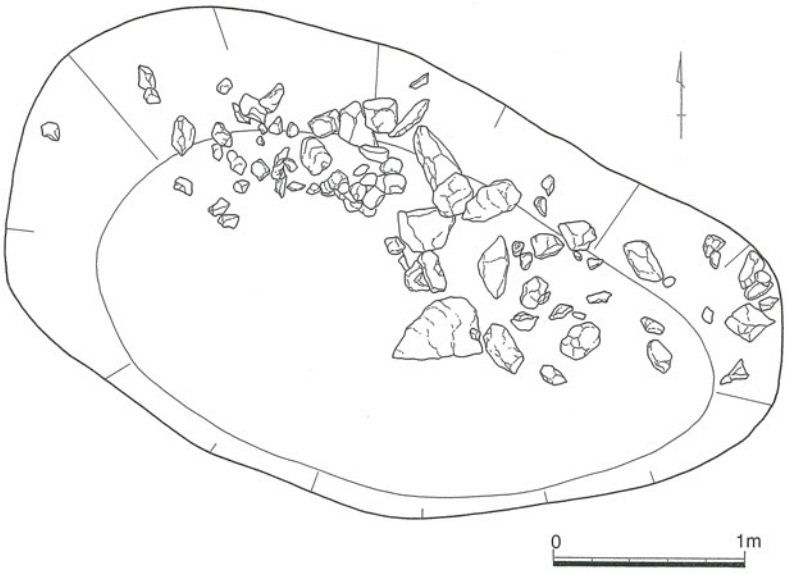


第257図　SK1129　実測図

した。鉄鍋は調査の時点では１個体分が破損したもの、または意図的に壊されたものが使用されていると考えられたが、整理してみると口縁部や底部の形態から少なくとも４個体分の部品を寄せ集めたものであったことが明らかになった。鉄鍋と一緒に出土した土師器皿は直径約８cmの小皿で、大きさ、形ともに類似している。復元できた個体は12個だが、それ以外にも別個体が存在していることから実際はさらに２～３枚多い数の小皿が副葬されていたものと考えられる。

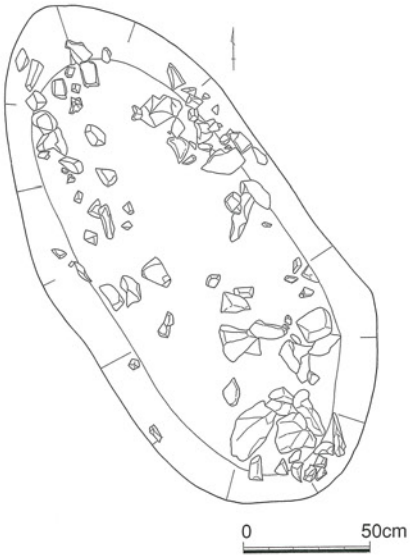
出土遺物（第252・253図）

1502～1513は口縁端部がわずかに端反る土



第258図　SK1131　実測図

師器の小皿である。底部の切り離しにはすべて回転糸切り技法が用いられ内面全体と外面の口縁端部周辺には柿色の釉がかけられている。胎土は精良で夾雑物をいっさい含まないが焼成はやや軟質である。1514は短い脚を持つ三足の鉄鍋で、上方へわずかに開く直線的な体部と平坦に仕上げられた口縁端部を持っている。同じく1515・1516も鉄鍋である。上方への開きが小さい体部は、わずかに内湾しながら上方にのびている。体部との境で「く」の字に屈曲して外上方にのびる短い口縁部は、端部が平坦に仕上げられている。また、体部との境の屈曲部は内面が若干内方に突出している。1517は鉄鍋の底部である。上方に向かって開く体部は浅い円錐形の底部との境で屈曲部を形作っている。体部の立ち上がりの角度は1516の鉄鍋とほぼ同じで同一個体と考えられたが体部の径が整合しないことから別個体であると考えられる。これらの遺物自体は徳島県下においては現段階では時期決定の要素に欠ける資料ばかりであるが、墓の中からはこれ以外に大谷焼の灯明受け台の破片が出土していることから、おおむね19世紀代の年代が考えられる。



第259図　SK1132　実測図

時期不明の遺構

掘建柱建物跡　3　*(SA1003)*（第254図）

梁間１間、桁行４間の南北棟の掘建柱建物跡である。柱間の間隔は梁間が3.5～3.8m、桁行が1.6～2.6mと不揃いで、柱穴も直径や深さが一定していない。SD1005に隣接し、溝にほぼ平行していることから何らかの関係がある遺構かもしれないが、出土遺物に乏しく時期は不明である。

掘建柱建物跡　4　*(SA1004)*（第255図）

梁間２間、桁行３間のほぼ方形に近い建物であるが桁行側がやや長い。柱間の間隔は梁間側が２～3.5

m、桁行側が1.3～2.0mと不揃いで、柱穴も直径や深さが一定していない。SA1003と同じく中世のSD群に隣接する場所に溝と平行して作られていることから、なんらかの関係がある遺構とも考えられるが、出土遺物に乏しく時期は不明である。

掘建柱建物跡　5　*(SA1005)*（第256図）

梁間３間、桁行３間の方形に近い形態の掘建柱建物跡であるが、南北方向がわずかに長くなっている。柱間の間隔は、１mに満たないところから長い場合は2.4mと不規則で、柱穴も直径や深さが不揃いである。

掘建柱建物跡　6　*(SA1006)*（第256図）

梁間１間、桁行３間の東西棟の掘建柱建物跡である。柱間の間隔は梁間側が約1.5m、桁行側が1.9～3.0mと不規則で、柱穴も直径や深さがまちまちである。弥生時代の竪穴住居群の中央部に位置し、SA1001・1002と同じ東西棟の建物であることから弥生時代の遺構の可能性も考えられるが出土遺物に乏しく時期を確定することは出来ない。

掘建柱建物址　7　*(SA1007)*（第256図）

東側の桁行きの柱穴を１本欠いているが、梁間１間、桁行４間の南北棟の掘建柱建物跡である。柱間の間隔は梁間側が2.8～3.0m、桁行側が1.4～3.0mと不揃いで、桁行側は南側の柱間が他と比較して著しく長くなっている。また、柱穴の大きさや深さも一定していない。SA1003同様、中世のSD群に隣接する場所にほぼ溝と平行して作られていることから、なんらかの関係も考えられる遺構であるが、出土遺物に乏しく、時期を確定することができない。

掘建柱建物跡　8　*(SA1008)*（第256図）

梁間１間、桁行２間の東西棟の掘建柱建物跡である。柱間の間隔は梁間が2.4m、桁行が1.8～2.4mを計り桁行間の東側の間隔が他に比べて短くなっている。

掘建柱建物跡　9　*(SA1009)*（第256図）

梁間１間、桁行３間の南北棟の掘建柱建物跡である。柱間の間隔は梁間が2.4～2.8m、桁行が2.0～2.6mと不規則で柱穴も直径や深さが一定していない。出土遺物に乏しく、時期は不明である。

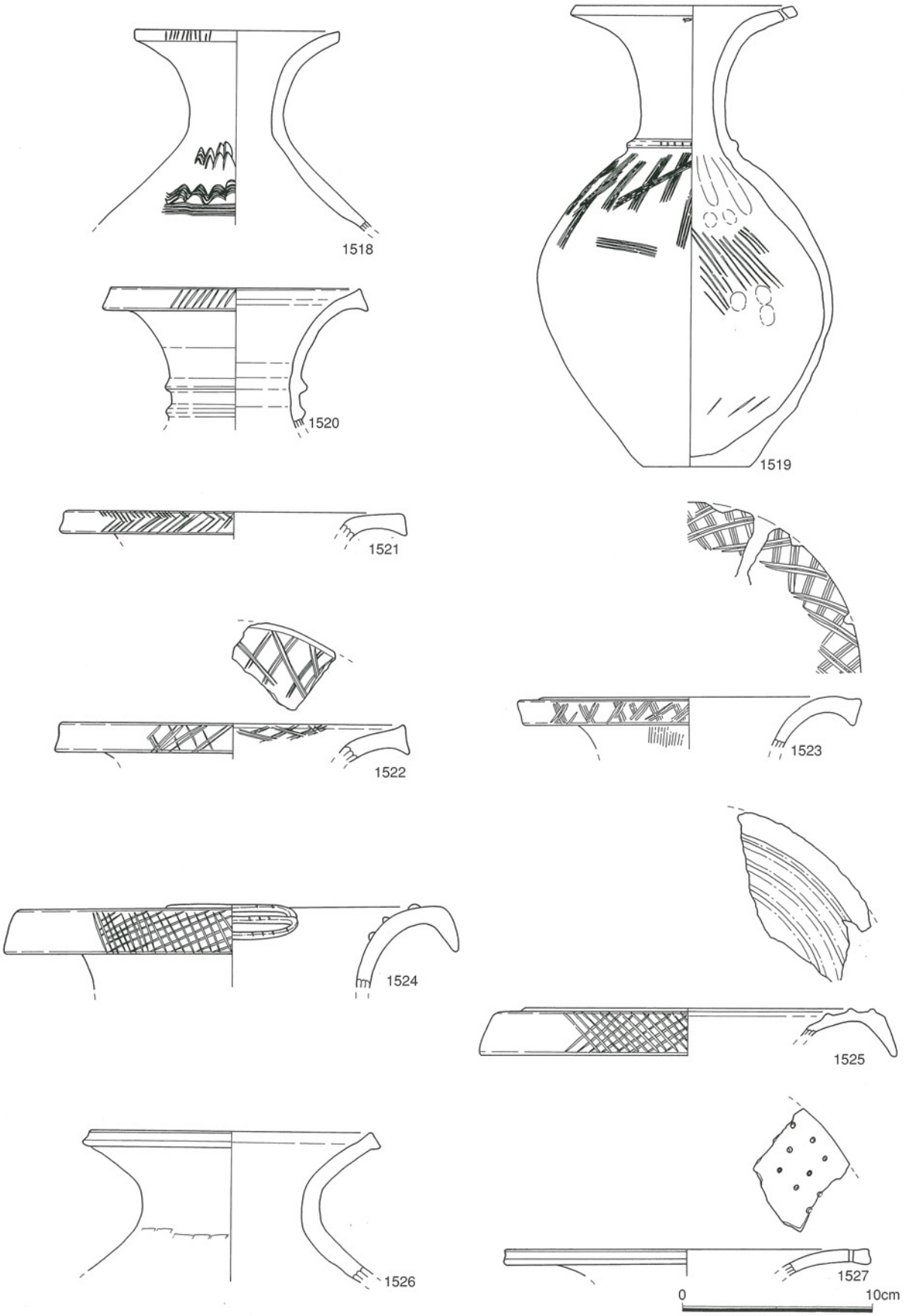
掘建柱建物跡　10　*(SA1010)*

梁間１間、桁行２間の掘建柱建物跡で、攪乱のために桁行側の柱穴が１本欠けている。柱間の間隔は2.4～2.6mで他の掘建柱建物跡よりも間隔が揃っている。出土遺物に乏しく、所属時期は不明である。

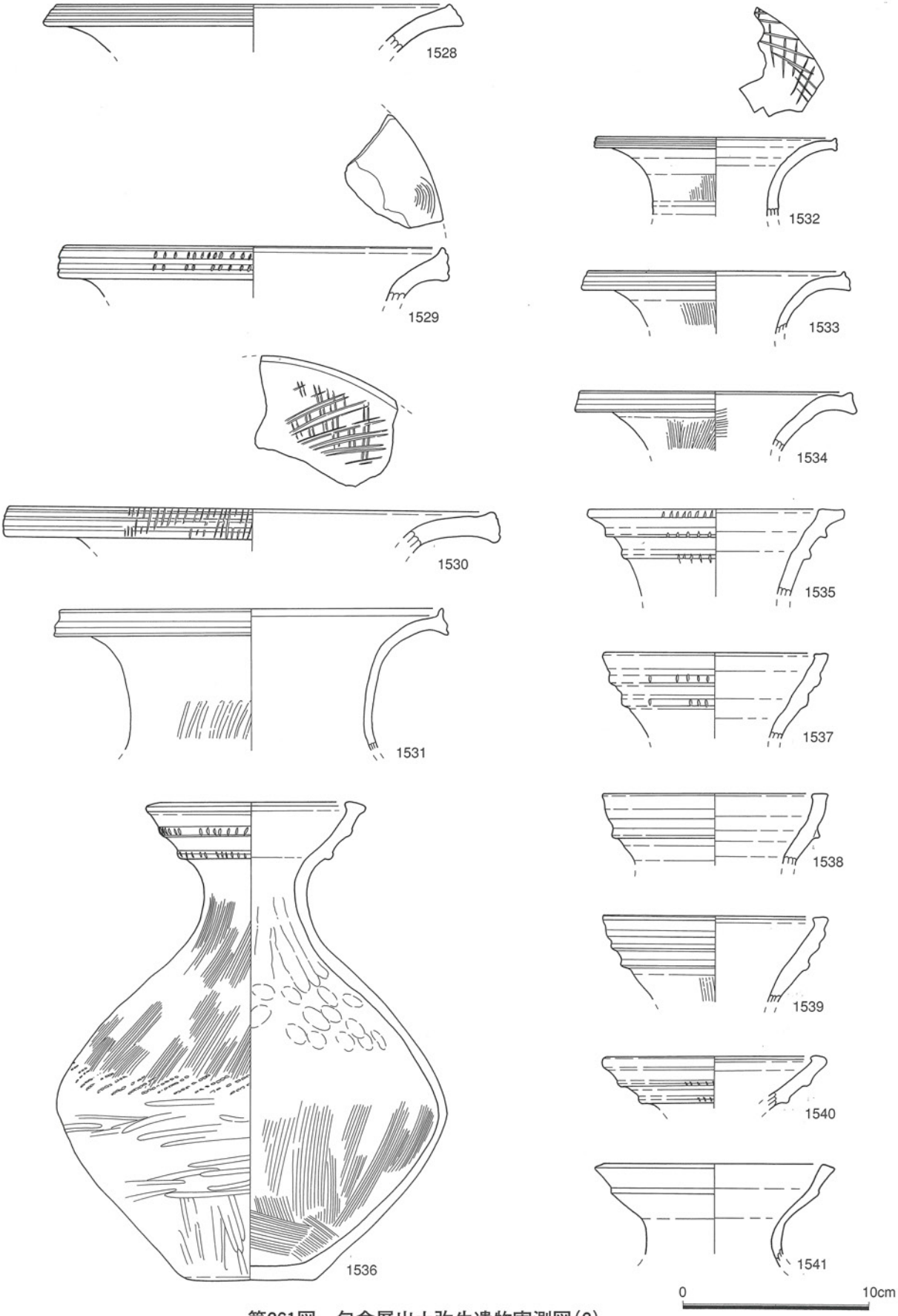
土　　坑

土坑　129　*(SK1129)*

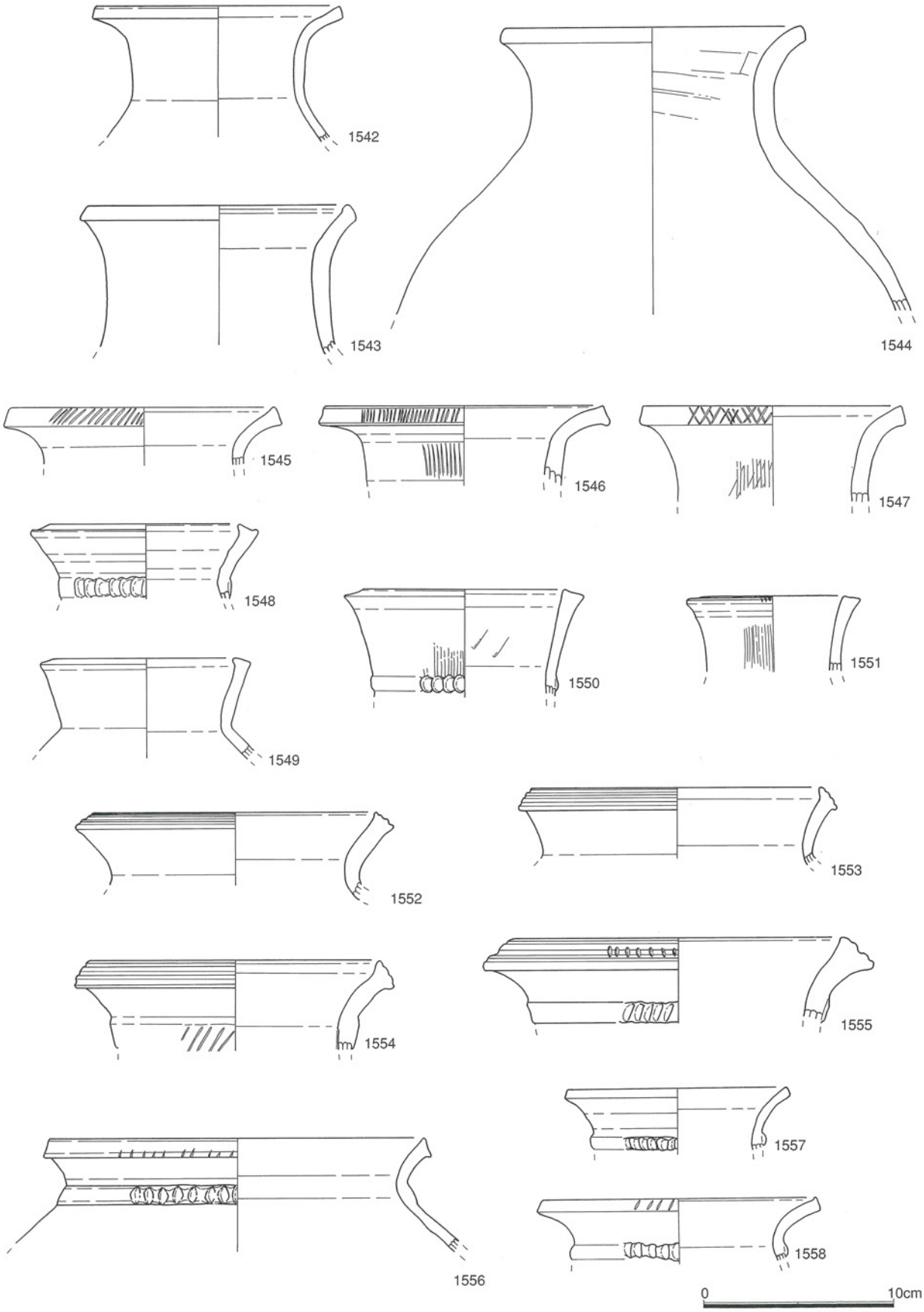
溝SD1027に隣接して検出された長さ約3.1m、幅1.5m、深さ50cmの不整楕円形の土坑である。遺構



第260図　包含層出土弥生遺物実測図(1)



第261図　包含層出土弥生遺物実測図(2)



第262図　包含層出土弥生遺物実測図(3)

内からは砂岩の礫がきわめて多量に出土している以外出土した遺物はなく、時期は不明である。このような集石を伴う土坑は阿波町桜の丘遺跡など県下の弥生時代中期の遺跡で多く検出されているが、本遺跡の場合は時期決定の資料に欠けるため、一応、時期不明の遺構の中に含めておく。

土坑　131　*(SK1131)*

溝SD1027の南側で検出された遺構で、周辺にはSD1027以外、同じ集石を伴う土坑SK1132が存在するだけである。遺構は長さ約4.2m、幅2.4m、深さ10cmの不整楕円形で、遺構内からは砂岩の角礫が多く出土した以外、遺物の出土はなく所属する時期は不明である。

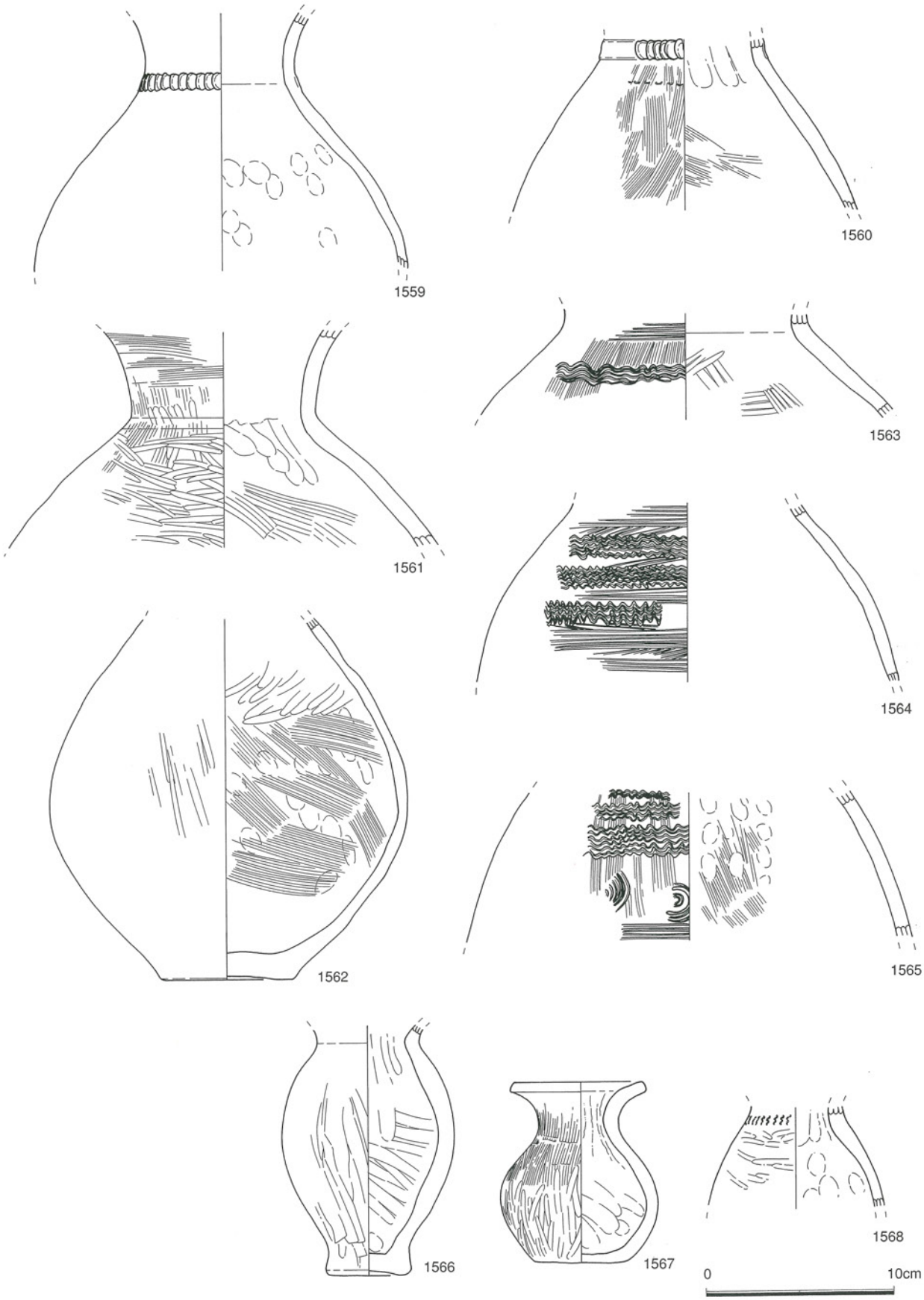
土坑　132　*(SK1132)*

SK1131の西側で検出された長さ約2.9m、幅1.4m、深さ20cmの浅い不整楕円形の遺構である。周囲に遺構らしい遺構は存在せずほぼ単独に近い状態で検出されている。遺構内からは砂岩の角礫などが多量に出土した以外、遺物の出土はなく正確な時期は不明である。

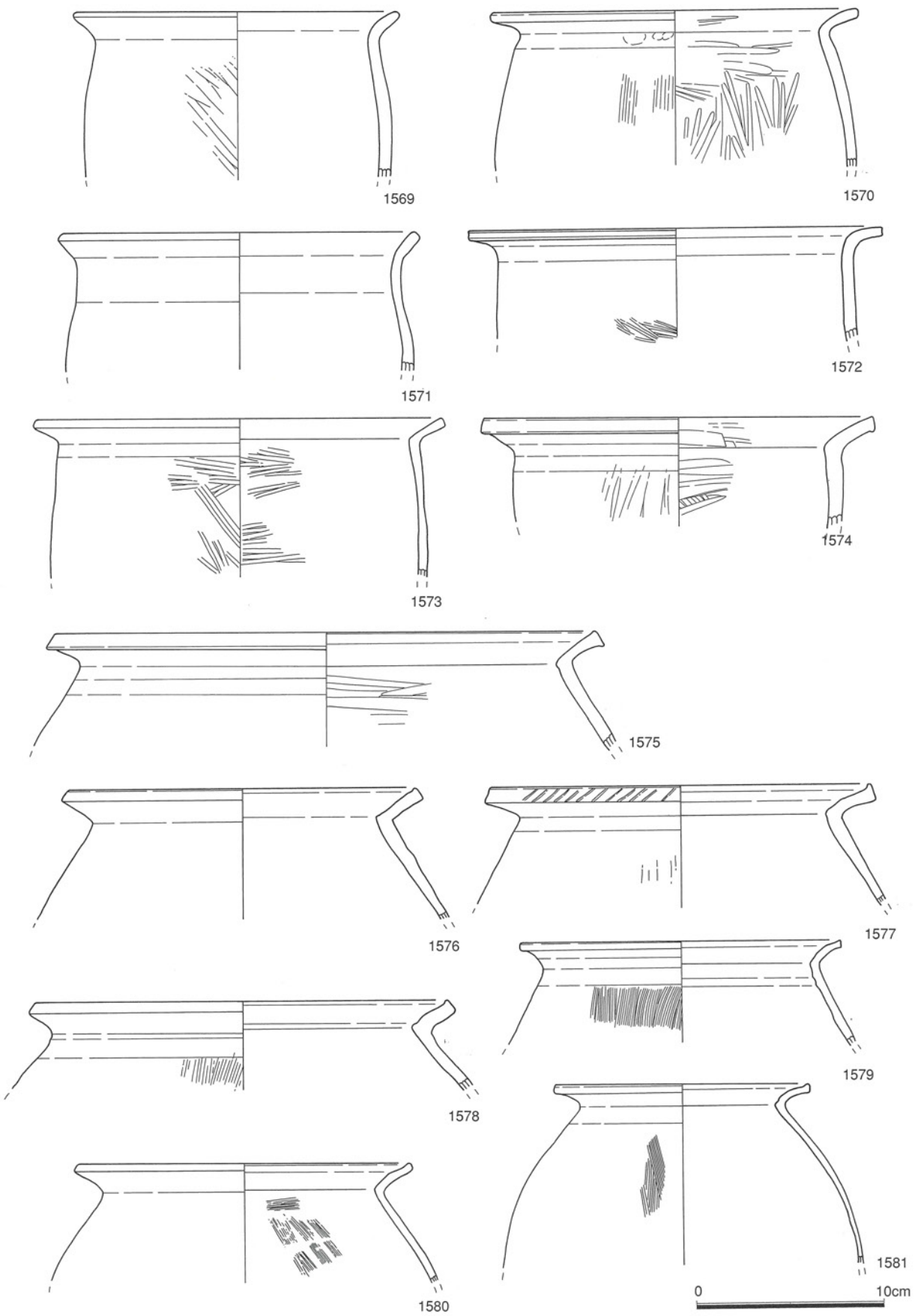
包含層出土遺物（弥生）

弥生土器

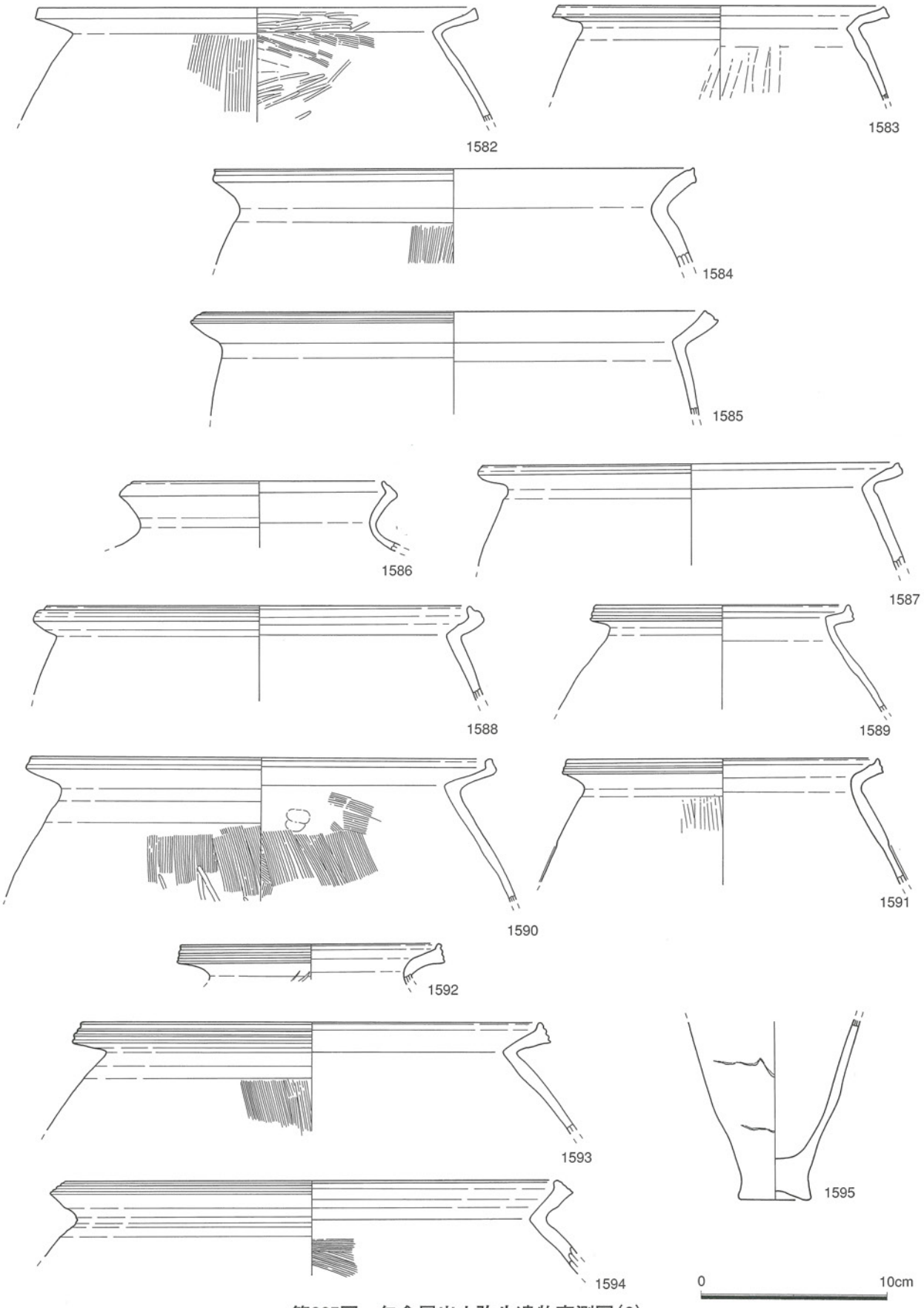
1518は細く締まった頸部と、上方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺で、拡張されず平坦に仕上げられた口縁端部には、刻目が施されている。また、膨らみの強い体部上半には櫛描波状文と平行線文が描かれている。1519も同様の形態を持つ壺であるが頸部がさらに長く筒状を呈し、体部との境には刻目の施された断面三角形の貼付突帯が付けられている。口縁端部は平坦に仕上げられている。体部上半には1518同様、櫛による文様が描かれているがその文様は不規則な斜格子目文である。1520～1523は大きく外反する口縁と、下方または上下に拡張された口縁端部が横ナデによってわずかに凹線状にくぼむ壺である。いずれも口縁端部には斜格子目文や綾杉文などが付けられている。また一部には1522や1523のように、外反して上方を向いた口縁部内面にまで施文の範囲が及ぶ個体もある。1520の頸部には1519同様、断面三角形の貼付突帯が２本、タガ状に廻されている。1524・1525は大きく開く口縁を持つ壺の口縁端部を、下方に向かって大きく垂下させ幅広い平坦面を作り出したものである。垂下させて作り出された広い口縁端部の平坦面には沈線により斜格子目文が描かれ、上方を向いた口縁部内面には貼付突帯が付けられている。1526・1527は上方に向かって大きく開く口縁部を持つ壺の口縁端部に凹線を１条巡らせたものである。1527の口縁部には貫通する３個一組の孔が口縁部を一周している。1528～1531は同じく頸部から外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ壺である。程度の差はあるが、いずれも口縁端部が上下に拡張され、拡張部には複数の凹線が巡らされている。1532～1534も同じく大きく外反する口縁部と上下に拡張された口縁端部に複数の凹線文が巡らされた壺であるが、1530などと比較すると口径が小さく頸部が細く締まっている。これらの壺の口縁端部には凹線文以外にもヘラ先による沈線状の連続する刺突文が残され、口縁部内面には斜格子目文や櫛描波状文が描かれている。1535は細く締まった頸部と緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ壺である。口縁端部は内外方に拡張され頂部はわずかにくぼんでいる。口縁部には連続する刻目の施された断面三角形の貼付突帯が２本平行して廻



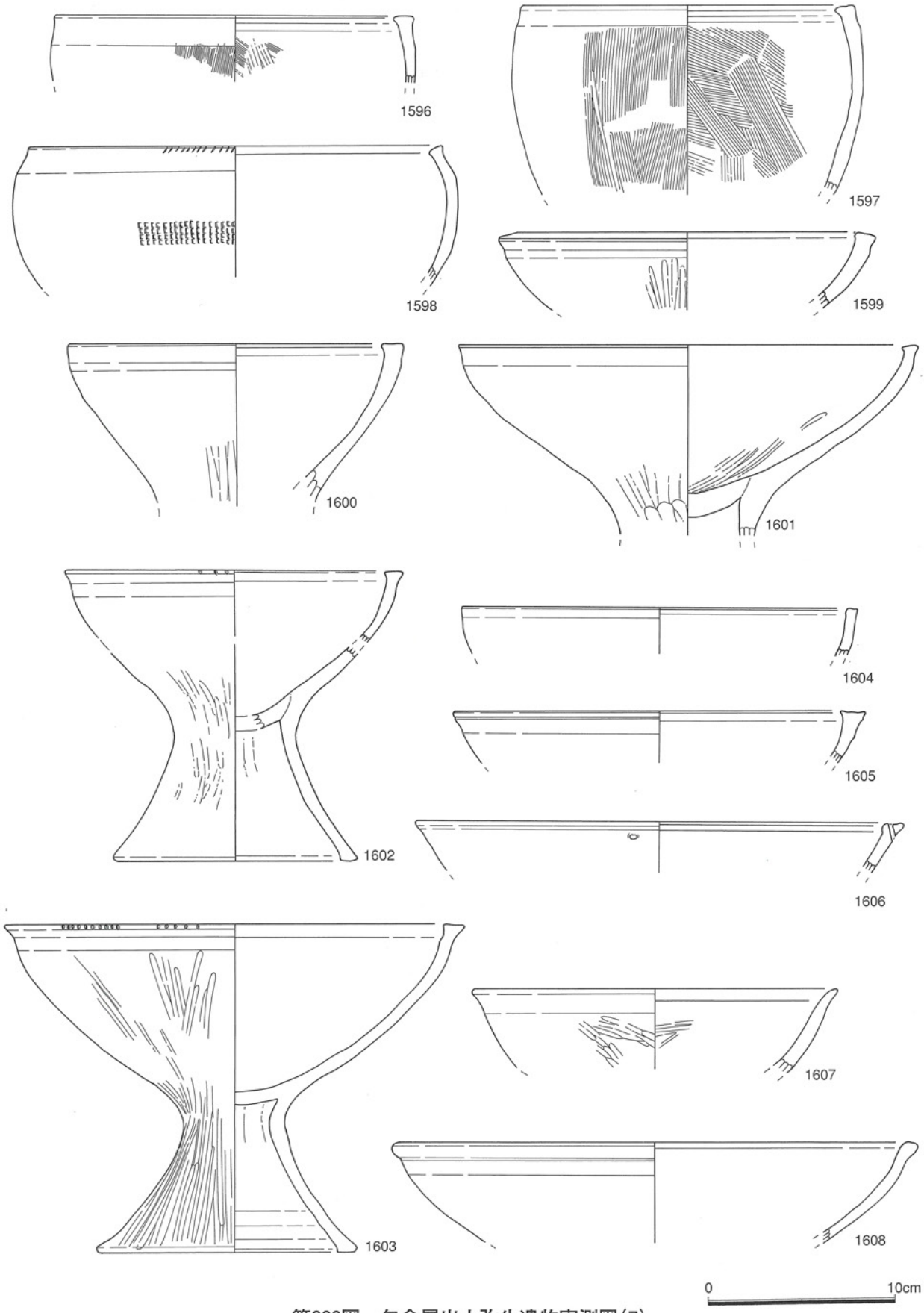
第263図　包含層出土弥生遺物実測図(4)



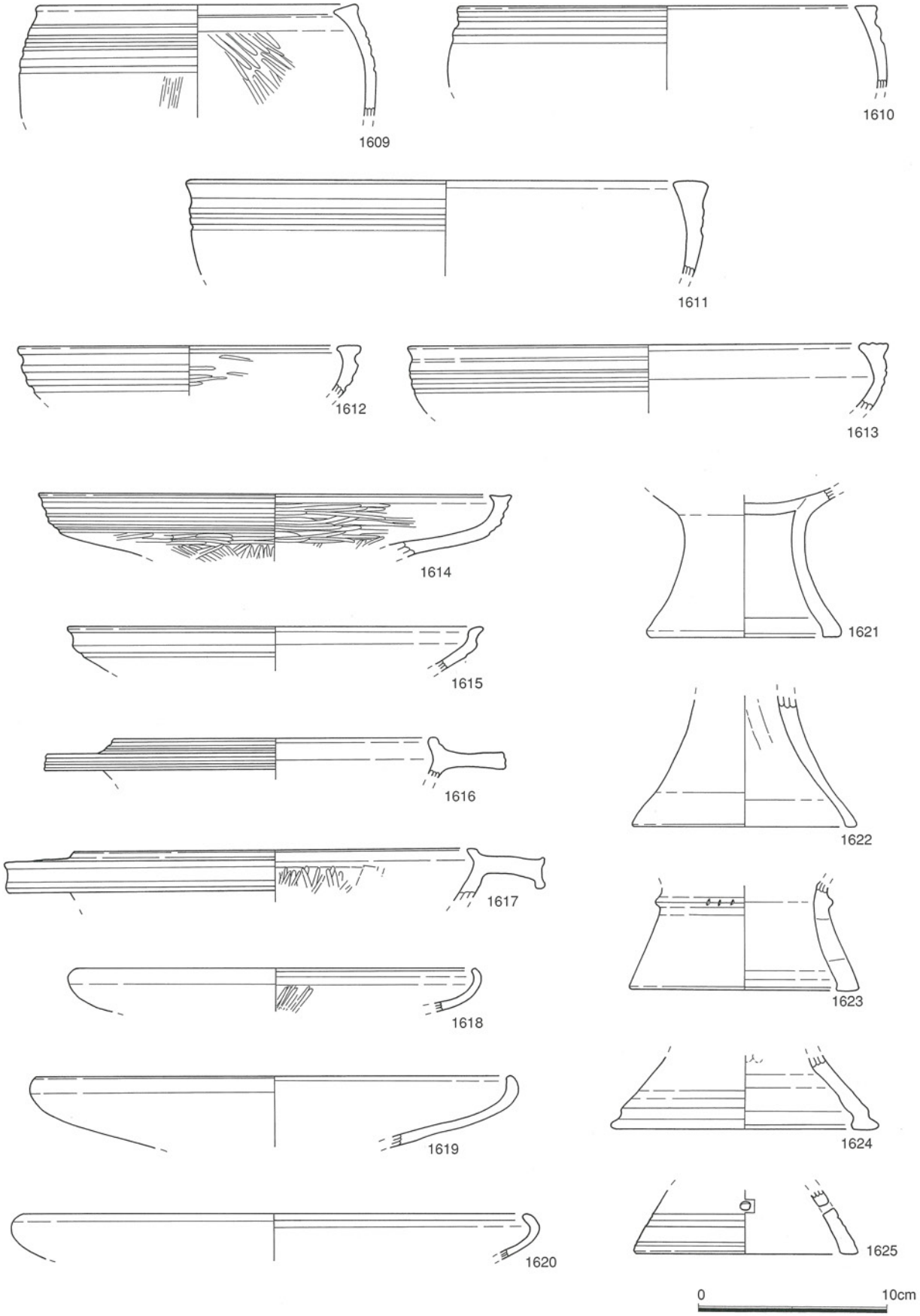
第264図　包含層出土弥生遺物実測図(5)



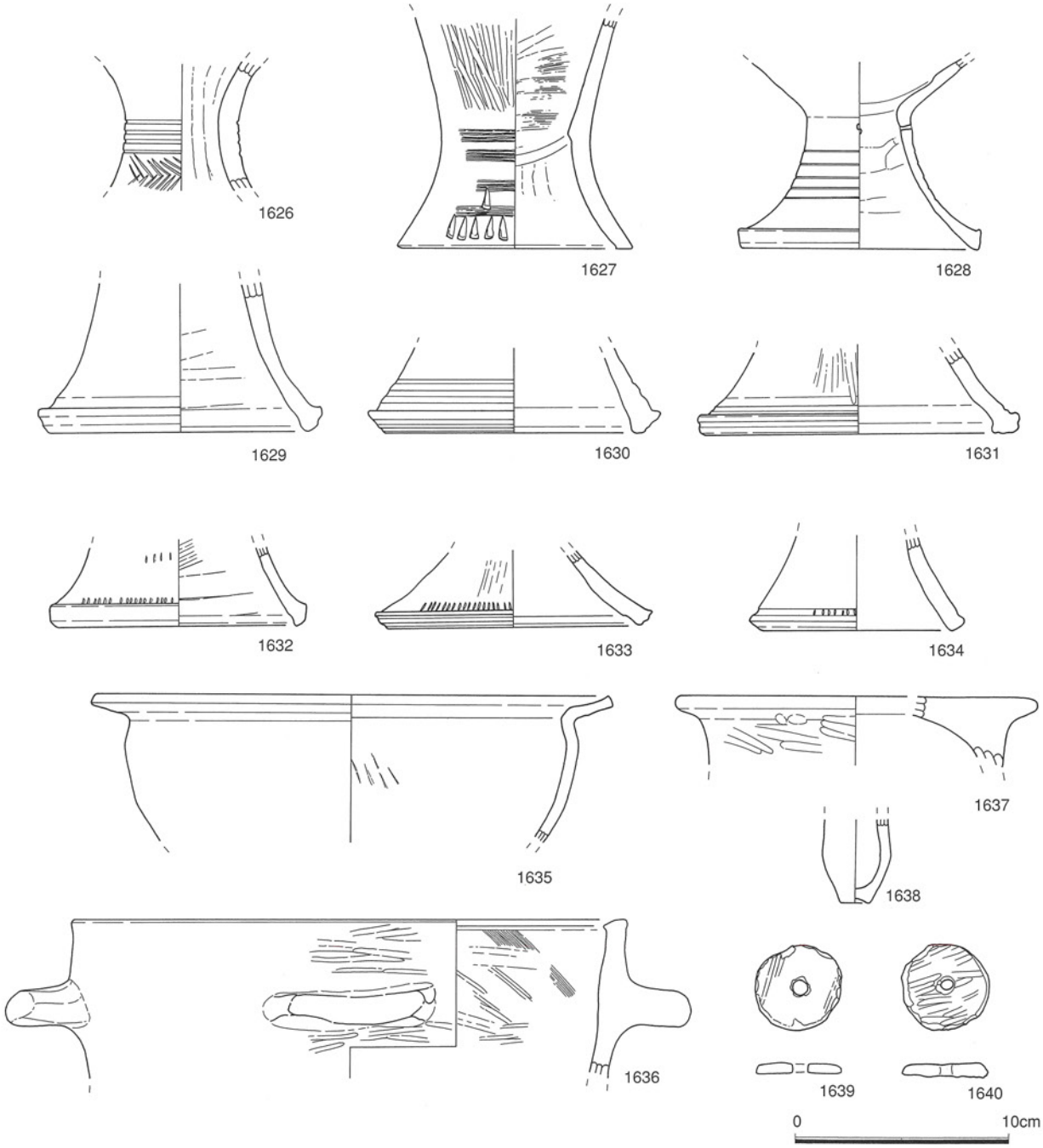
第265図　包含層出土弥生遺物実測図(6)



第266図　包含層出土弥生遺物実測図(7)



第267図　包含層出土弥生遺物実測図(8)



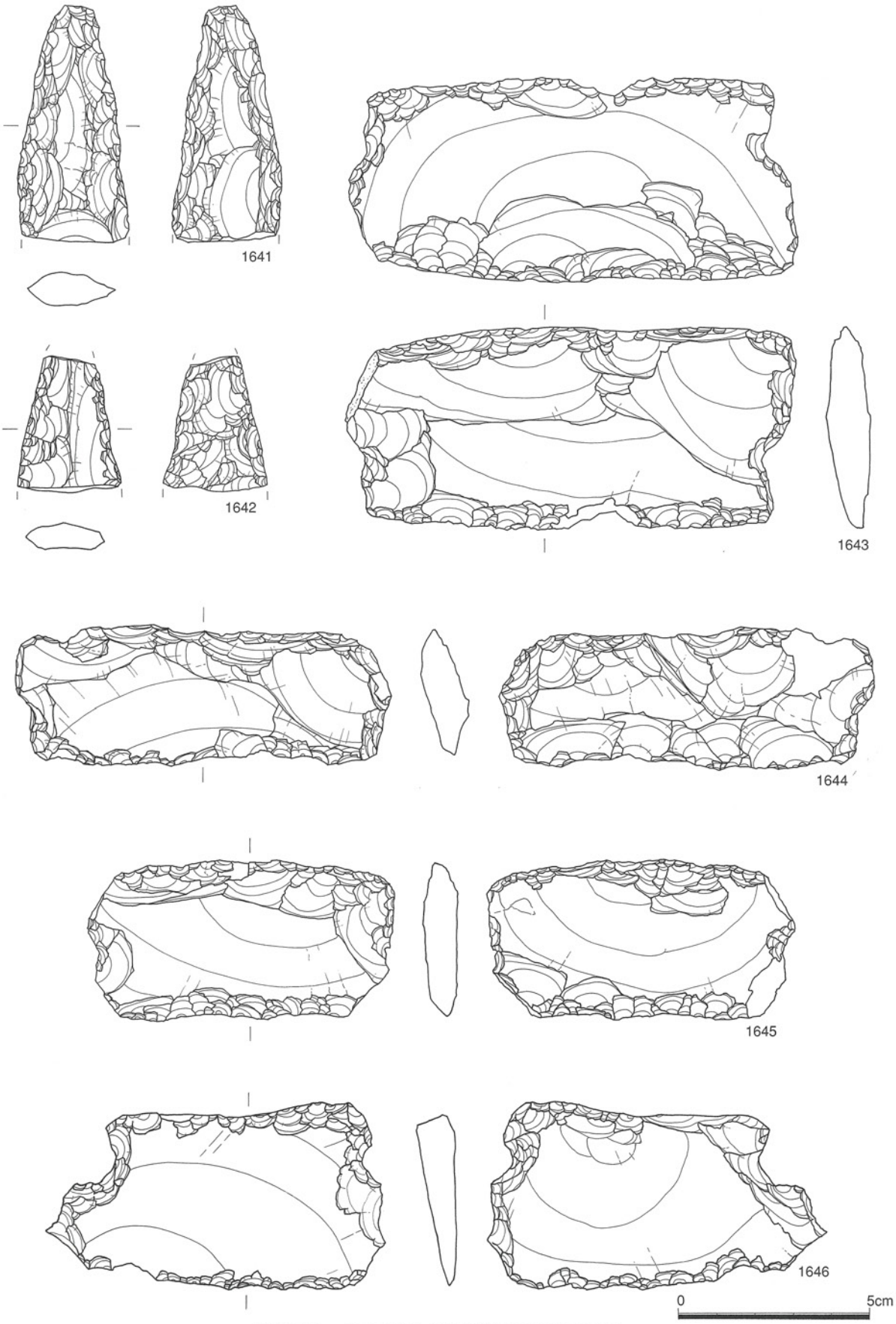
第268図　包含層出土弥生遺物実測図(9)

されている。1536～1541は細く締まった頸部と内湾しながら上方に向かって大きく開く漏斗状の口縁部を持つ壺である。口縁端部は内外方に拡張され頂部はわずかにくぼむものが多い。1535と同じく口縁部には平行する貼付突帯がタガ状に廻されるものが多いが、なかには1541のようにこれを欠く個体もあるようである。1536はSB1022の例とともにほぼ全形を伺える数少ない個体である。体部は中央に最大径を持つ算盤玉型の形態で、肩部に施される櫛による連続刺突文を挟んで、上半部にはハケ目調整、下半部には丁寧なヘラ磨きが施されている。1542～1541は筒状の頸部と外反または屈曲する直線的な短い口縁部を持つ壺である。1543の口縁端部は上方に拡張されてはいるが凹線は認められない。1545～1547は

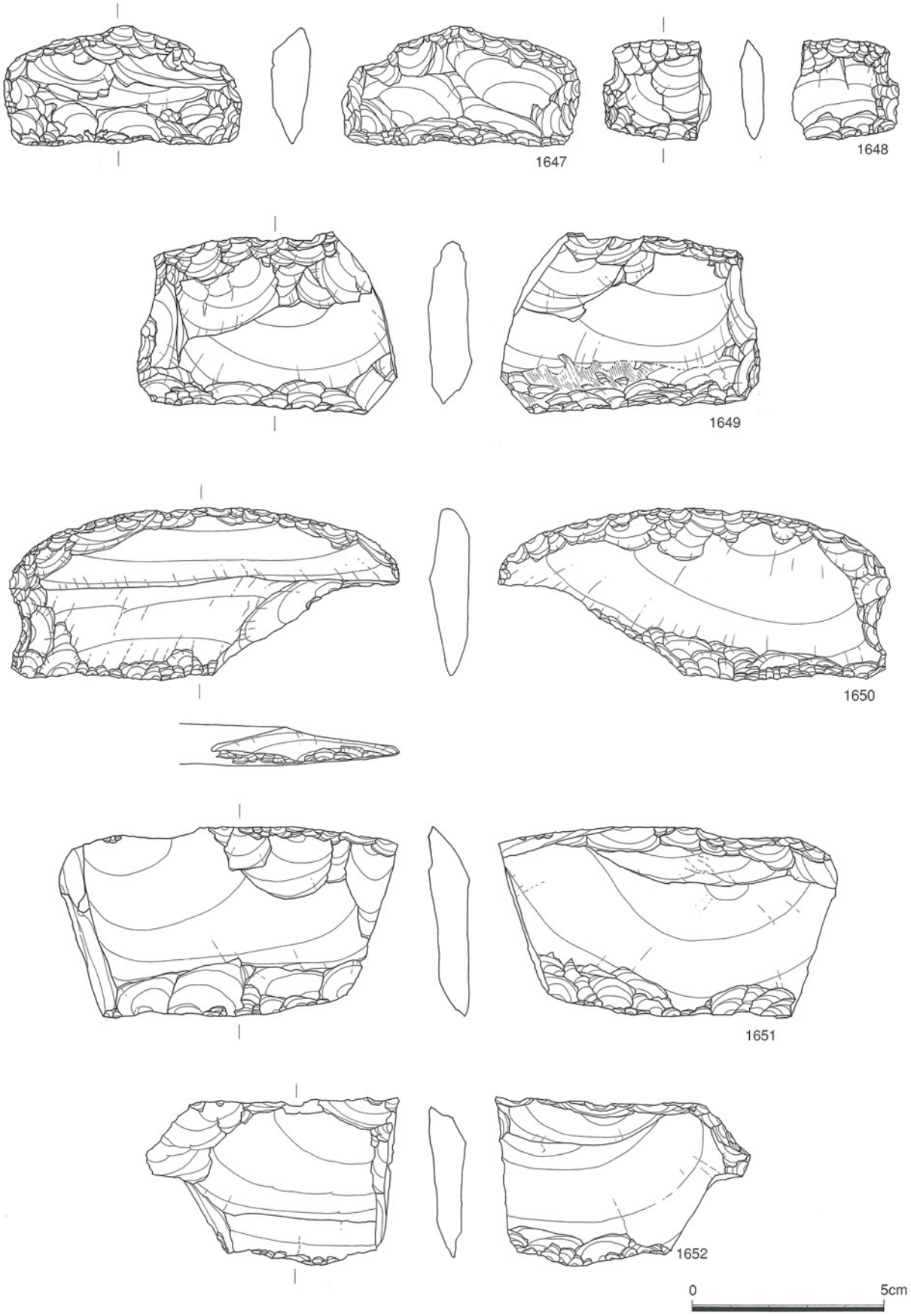
筒状の頸部と外反する直線的で短い口縁部をもつ壺である。1545・1546は口縁端部がわずかに拡張されるのに対し、1547では拡張は行われていない。いずれも端部には斜線文や斜格子目文などの文様が施されている。1548～1549は上方に向かってわずかに開く直線的な筒状の口縁部を持つ壺である。1548・1549の口縁端部は内方に拡張されているが、1550・1551の場合は拡張というよりも肥厚するといったほうがよい。いずれにせよ拡張によって口縁端部に形成されたわずかな平坦面は頂部が凹線状にくぼんでいる。1548と1550は体部との境に指頭圧痕の施された貼付突帯が廻されている。1553～1555は緩やかに外反する頸部と上下に拡張された口縁端部を持つ短頸壺である。いずれも口縁端部の拡張部に凹線文が3条巡らされている。また、1554・1555は体部との境にそれぞれ刻目のが加えられた幅広の帯状の突帯が1本廻されている。1556も外反する頸部と上下に拡張される口縁端部を持ち、体部との境に刻目の加えられた幅広い突帯が廻された個体であるが、拡張された口縁端部はわずかにくぼむだけで明瞭な凹線は認められない。壺か甕かは不明である。1557・1558は外反する頸部から上方に向かってのびる短い口縁部をもつ壺である。平坦に仕上げられた口縁端部は、1558が上方に拡張されているのに対して、1557では拡張は認められない。2個体とも頸部には指頭圧痕またはヘラ先による刻目が加えられた貼付突帯が廻されている。1559～1568は壺の頸部から底部にかけてである。1559・1560はよく締まった頸部に指頭圧痕の加えられた貼付突帯が1本廻されている。1561もよく締まった頸部から外上方に向かって大きく開く口縁部と、外方に大きく張り出した体部を持つ壺で、体部外面は入念なヘラ磨きが施されている。1563は細く締まった頸部と、下半部が大きく張り出す体部を持った1536と同じような形態の壺と考えられる。1563～1565はいずれも櫛描きによる波状文と直線文が描かれた壺の体部である。1563では直線文からやや離れた位置に波状文が描かれているのに対して、1564では波状文と直線文がほぼ交互に描かれたようになっている。また、1565の場合は、波状文と直線文に加えてコンパス文も描かれている。1566～1568は小型の壺と考えられるものである。1569の頸部には貝殻腹縁文が連続して施文されている。

1569～1571は膨らみの小さい体部と、外反する短い口縁部を持つ甕である。最大径を口縁部または体部中央部付近に持ち、短く外反する口縁は端部が円く仕上げられているだけである。1572は外反する口縁部が水平方向にのびる甕で、口縁端部は中央が凹線状にくぼんでいる。1573・1574も膨らみの小さい直線的な体部と、平坦に仕上げられた口縁端部を持つ甕であるが、1569などとは異なり、頸部が「く」の字に屈曲している。1575～1583は「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる短い口縁の端部がわずかに上方、または上下に拡張される甕である。拡張された口縁端部は平坦、または円く仕上げられただけで、凹線文が施されたものはない。口縁端部が上方に拡張される場合、口縁部内面には丁寧な横ナデが加えられ凹線状に幅広くくぼむ個体が認められる。体部は中央部よりやや上に最大径を持ち、肩部は外下方に向かって直線的に「ハ」の字に開くものが多いが、1581は円みを持った倒卵形の形態である。1584～1594は拡張または肥厚する口縁端部に凹線が施された甕である。頸部は「く」の字に屈曲する場合が多いが、なかには大きく外反するだけで明瞭な屈曲部を持たないものも若干含まれている。

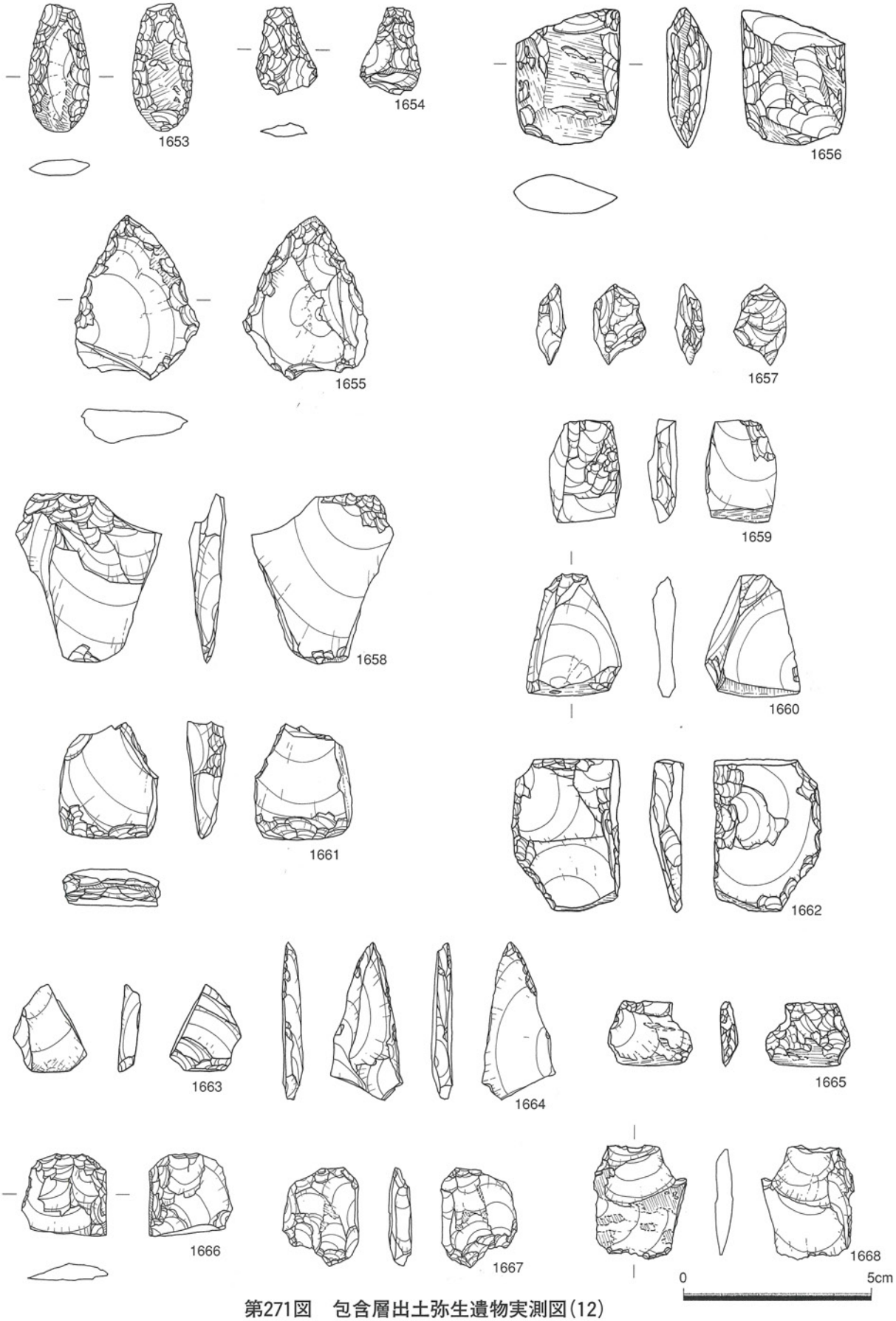
1596～1608は、高杯または鉢と考えられる土器である。これらの土器は何れも口縁端部直下に幅広い横ナデ調整が加えられているが凹線は認められない。1596～1613は口縁部と体部の境が不明瞭で、内湾する体部が内外方に拡張された口縁端部にそのまま移行している。体部は深いものと比較的浅いものに分けられるが、数量的には後者が圧倒的に多い。1596・1597は緩やかに内湾しながら外上方にのびる体部が、途中で内側に向かって屈曲する体部の深いタイプである。端部が内外方に拡張される口縁部は、内外面とも丁寧な横ナデが加えられ、頂部は平坦、またはわずかにくぼんでいる。1598も口縁部が内側



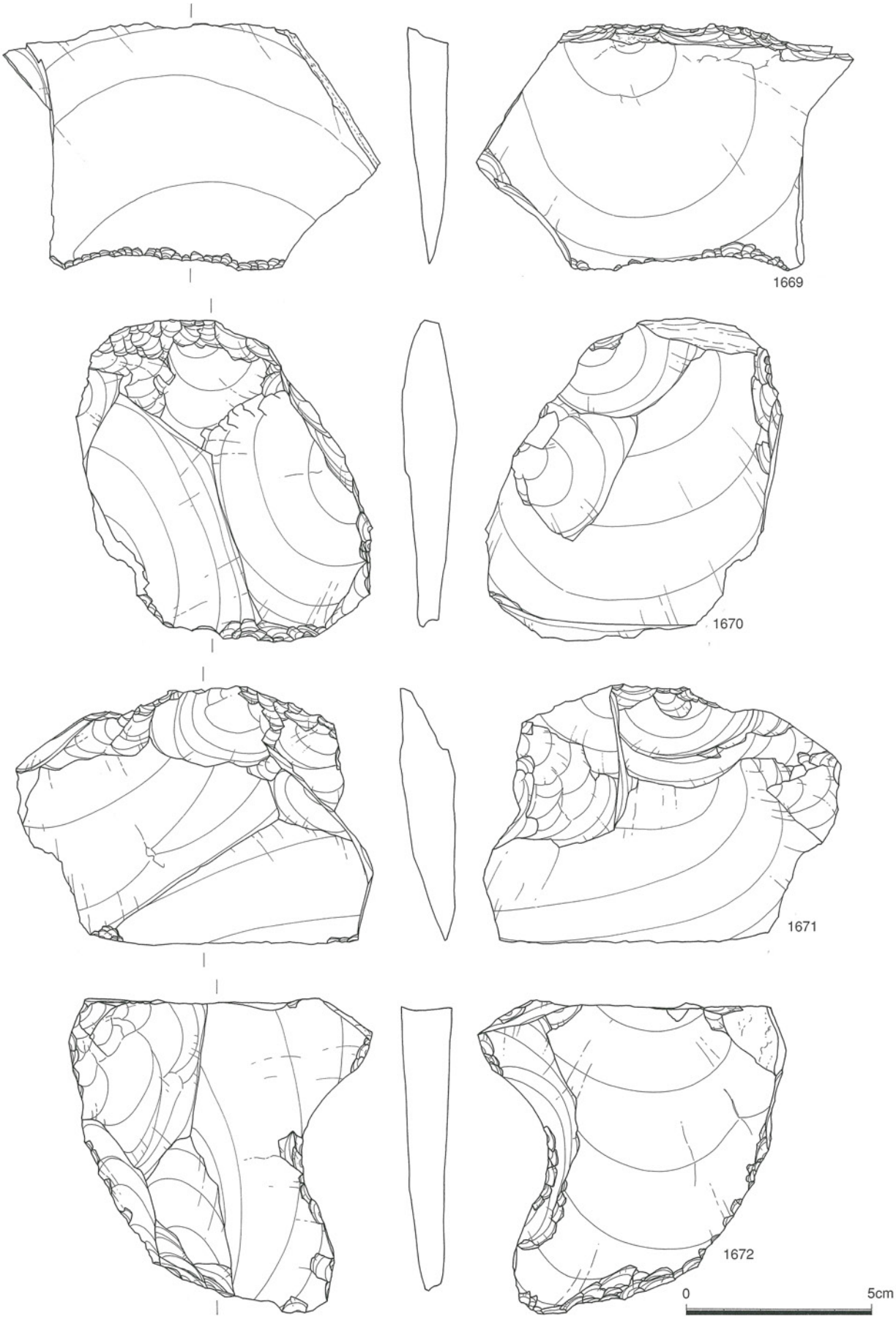
第269図　包含層出土弥生遺物実測図(10)



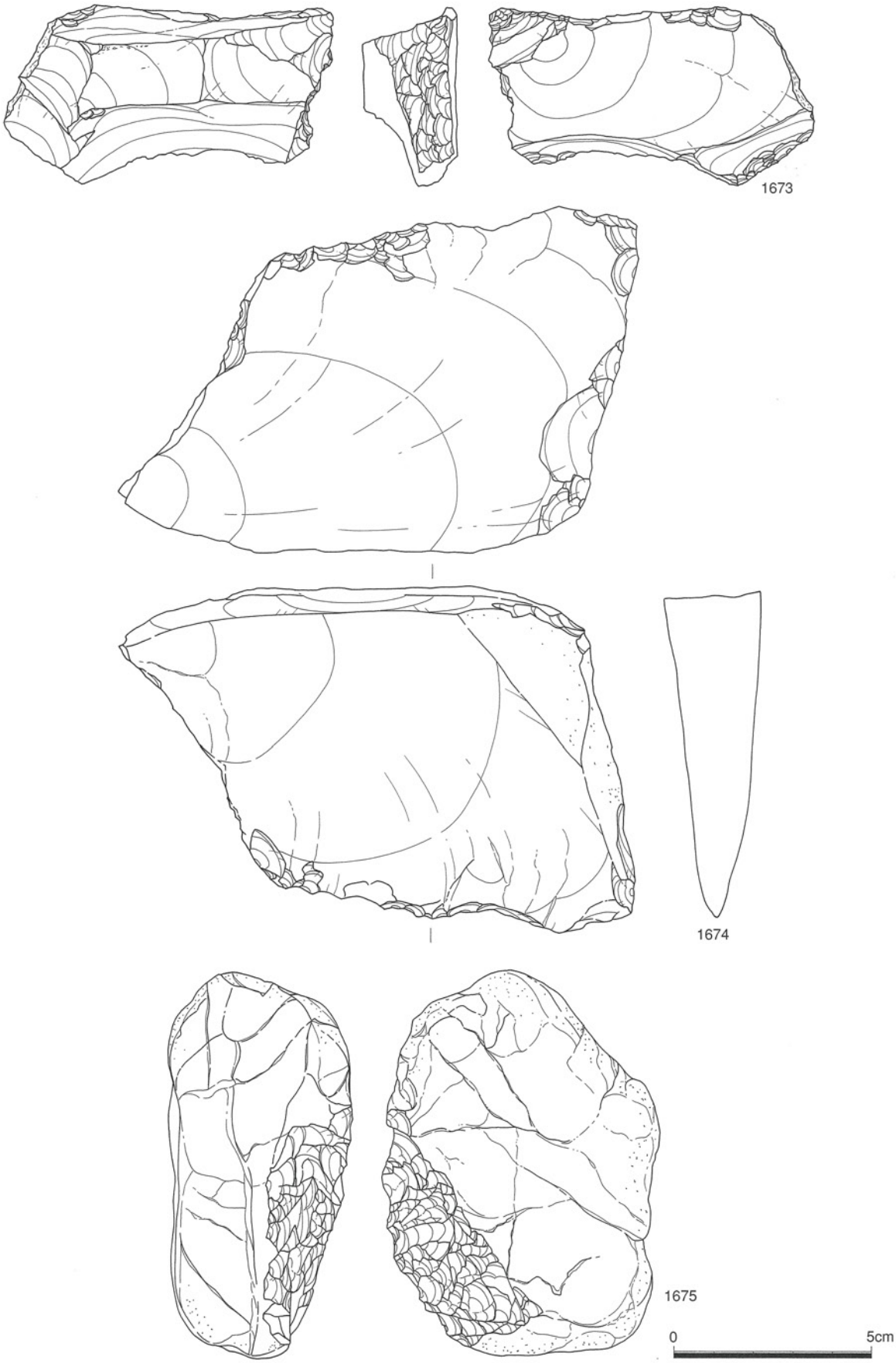
第270図　包含層出土弥生遺物実測図(11)



第271図　包含層出土弥生遺物実測図(12)

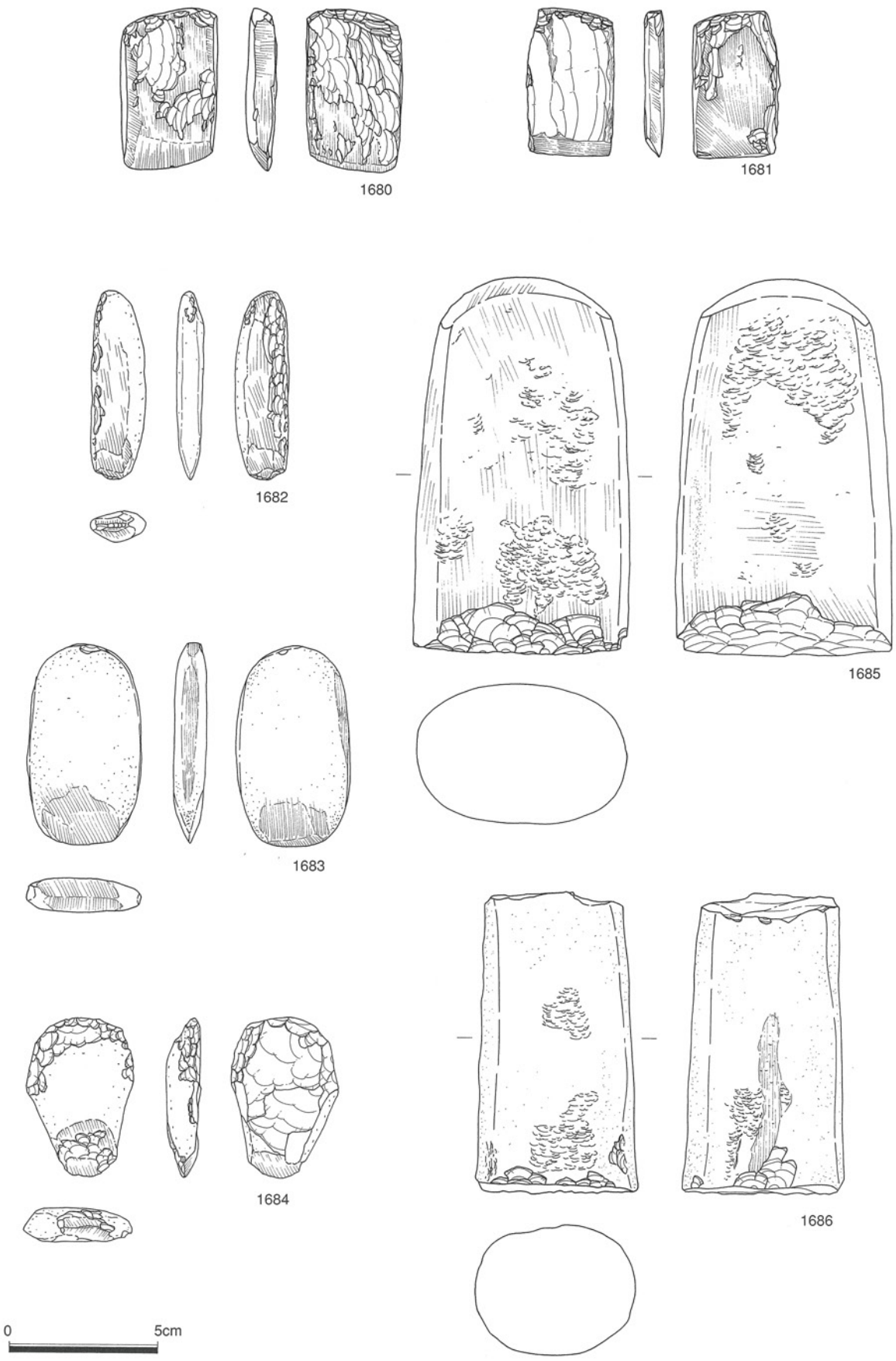


第272図　包含層出土弥生遺物実測図(13)

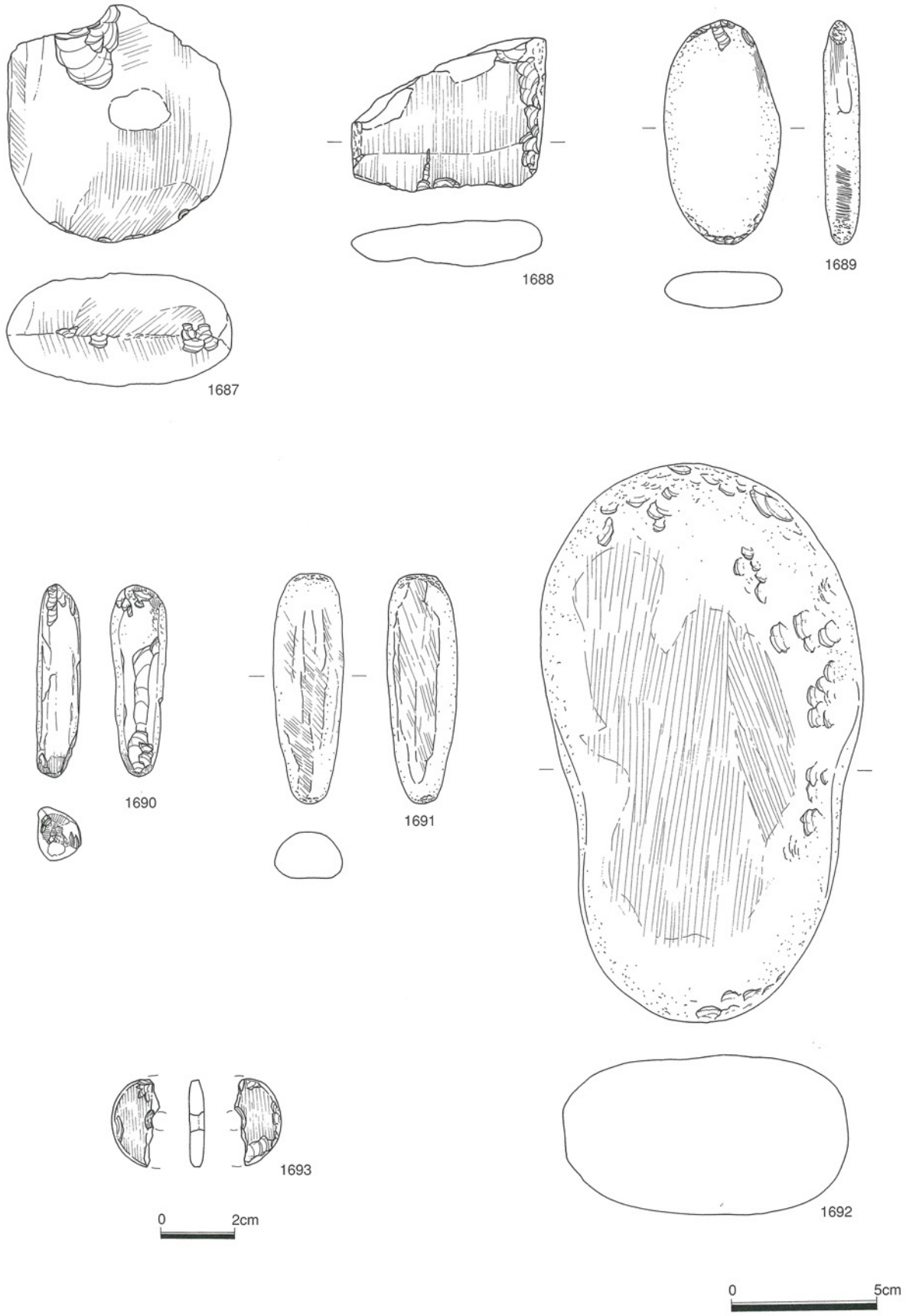


第273図　包含層出土弥生遺物実測図(14)

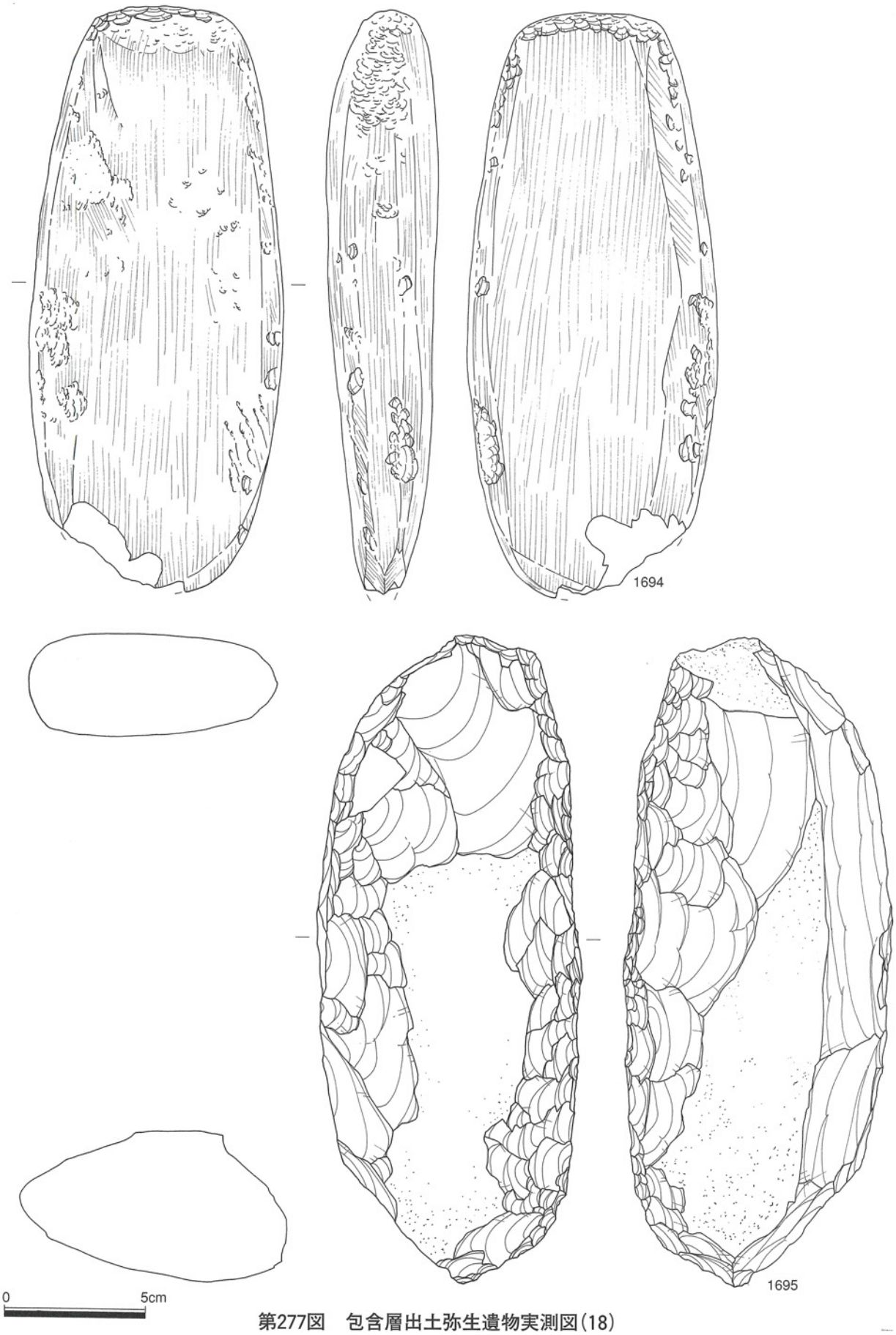
第274図　包含層出土弥生遺物実測図(15)



第275図　包含層出土弥生遺物実測図(16)



第276図　包含層出土弥生遺物実測図(17)

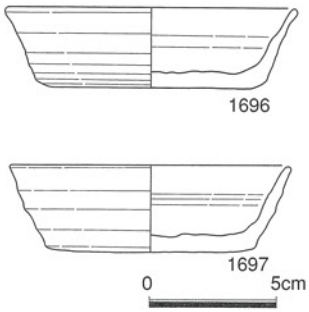


第277図　包含層出土弥生遺物実測図(18)

に向かって屈曲する比較的体部の深い個体で、口縁部の内側への屈曲の度合いはさらに著しい。また、体部外面には貝殻腹縁文が連続して付けられている。1601・1603は体部の浅い個体で、体部の深いものより口径が大きい。1599・1600・1602も体部の浅い個体であるが口径は小さい。1598・1602・1603は口縁端部外面に刻目が施されている。1604・1607・1608は口縁端部が拡張されないものである。1605は平坦に仕上げられた口縁端部の頂部がわずかにくぼんでいる。1607では内湾する体部が口縁部付近でわずかに外反し端部は鈍く尖らされている。1608は口縁部が肥厚しながらわずかに外反し端部は円く仕上げられている。1609～1613は内湾する体部と内外方に拡張される口縁端部を持ち、凹線文が施される高杯または鉢と考えられる土器である。1609～1611は何れも体部の深いと考えられる個体で、1611が口縁部がほぼ直立しているのに対して、1609・1610の口縁部は内湾している。1612・1613は比較的体部の浅い個体で、何れも口縁端部の内外方への拡張が著しい。また、1613は体部と口縁部の境にわずかに屈曲部を持っている。1614・1615は体部と口縁部の境に屈曲部を持ち、凹線文が施されたものである。1614は口縁部と体部の境の屈曲部が円味を持ち、口縁端部は1613などと同様、内外方に拡張され、頂部が凹線状にくぼんでいる。一方1615では口縁端部の拡張は外方にのみ行われ、体部の屈曲が明瞭で口縁部との間が無文のまま残されている。1616・1617は緩やかに内湾しながら上方に向かって大きく開く体部が口縁部付近で短く内側に向かって屈曲し、その屈曲部にはタガ状の張り出しが円形に巡らされている内面隆起帯をもつ水平口縁の高杯である。1616の口縁端部はそのまま方形に仕上げられ、凹線文が巡らされているだけであるが、1617は端部が上下に拡張され凹線が施されている。1618～1620は外上方に向かって大きく開く浅い杯部と内湾する「C」字状の口縁部を持つ高杯である。口縁端部は円く仕上げられている。1621～1634は高杯の脚部である。1621～1625は外下方にのびる脚が脚端部付近で軽く内湾するものである。脚端部は1621～1623のように内方に拡張されるものと、1624のように内外方に拡張されるもの、1625のように拡張されることなく平坦に仕上げられるものがある。1623は脚柱部近くに刻目の施された貼付突帯が廻され、その下に方形の透かしが付けられたもので、高杯とは異なる器種の可能性がある。1626はヘラ状工具により螺旋状の沈線文と矢羽根状文が描かれた脚柱部の破片である。1627は脚柱部から脚端部にかけてのもので、脚端部は拡張されず平坦なままである。全体に櫛描の多条沈線を間隔をあけて多段に施し、その間に三角形の透かしを付けている。1628～1634は脚柱部から外下方に向かって緩やかにのびる裾部と上方に向かって拡張される脚端部をもつ脚部である。拡張された脚端部には複数の凹線文が施されるものが多く、裾部にはヘラ先による連続刺突文が加えられるものがある。1628の脚柱部には細い沈線が螺旋状に描かれているが、1632～1634ではヘラ先による連続刺突が行われている。1635は内湾する体部と「く」の字に屈曲する頸部から外方にのびる直線的な口縁部を持つ高杯、または鉢である。口縁端部は平坦である。1636は把手付きの鉢である。直立する体部と内方に向かってわずかに拡張された平坦な口縁端部を持ち、体部上半には方形の把手が水平に取り付けられている。破片のため把手の数は不明である。1637は回転台形土器であろうか。

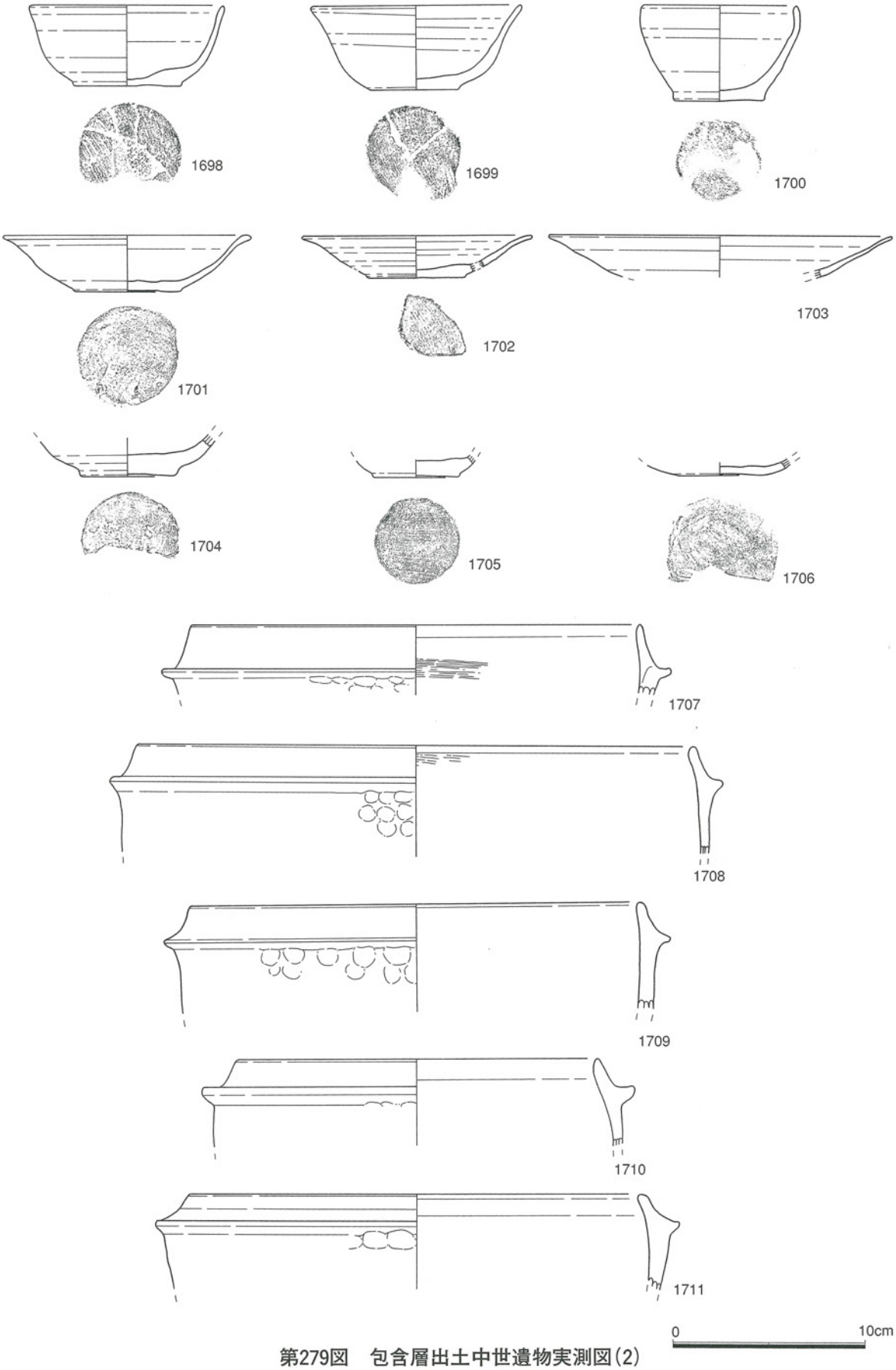
弥生石器

丸山遺跡の包含層からは、遺構同様、各種の石器が多量に出土している。出土した石器で最も出土点数が多いものはサヌカイトを素材とする打製石鏃で、破片を含めると265点を数えるが、未製品と考えられるものも10点出土している。石鏃は基部の形状から平基無茎式、凹基無茎式、凸基無茎式、凸基有茎式の４種類に大きく分類出来る。基部を欠くため分類不可能な57点を除くタイプ別の出土数は、平基

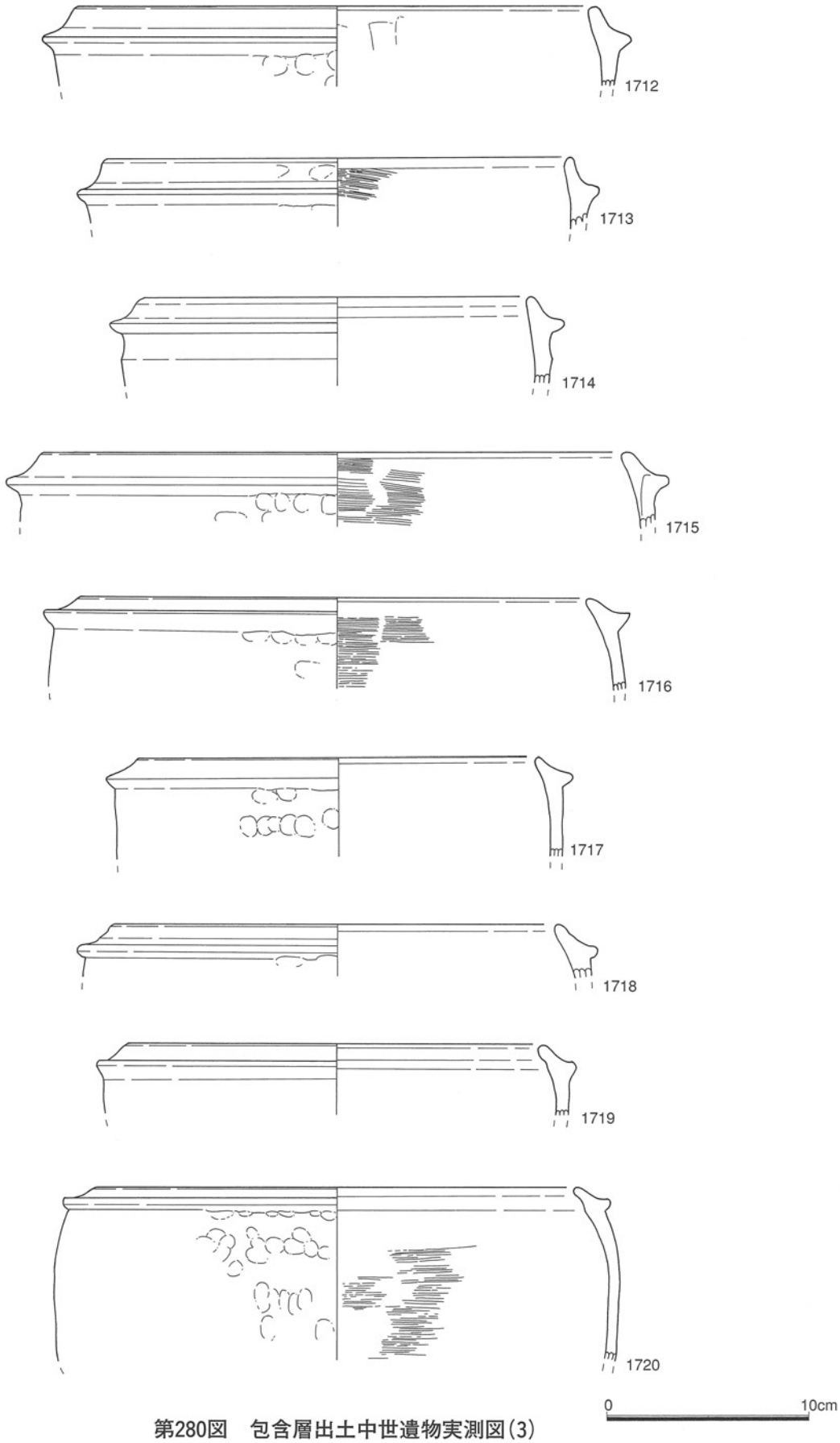


第278図
包含層出土中世遺物実測図(1)

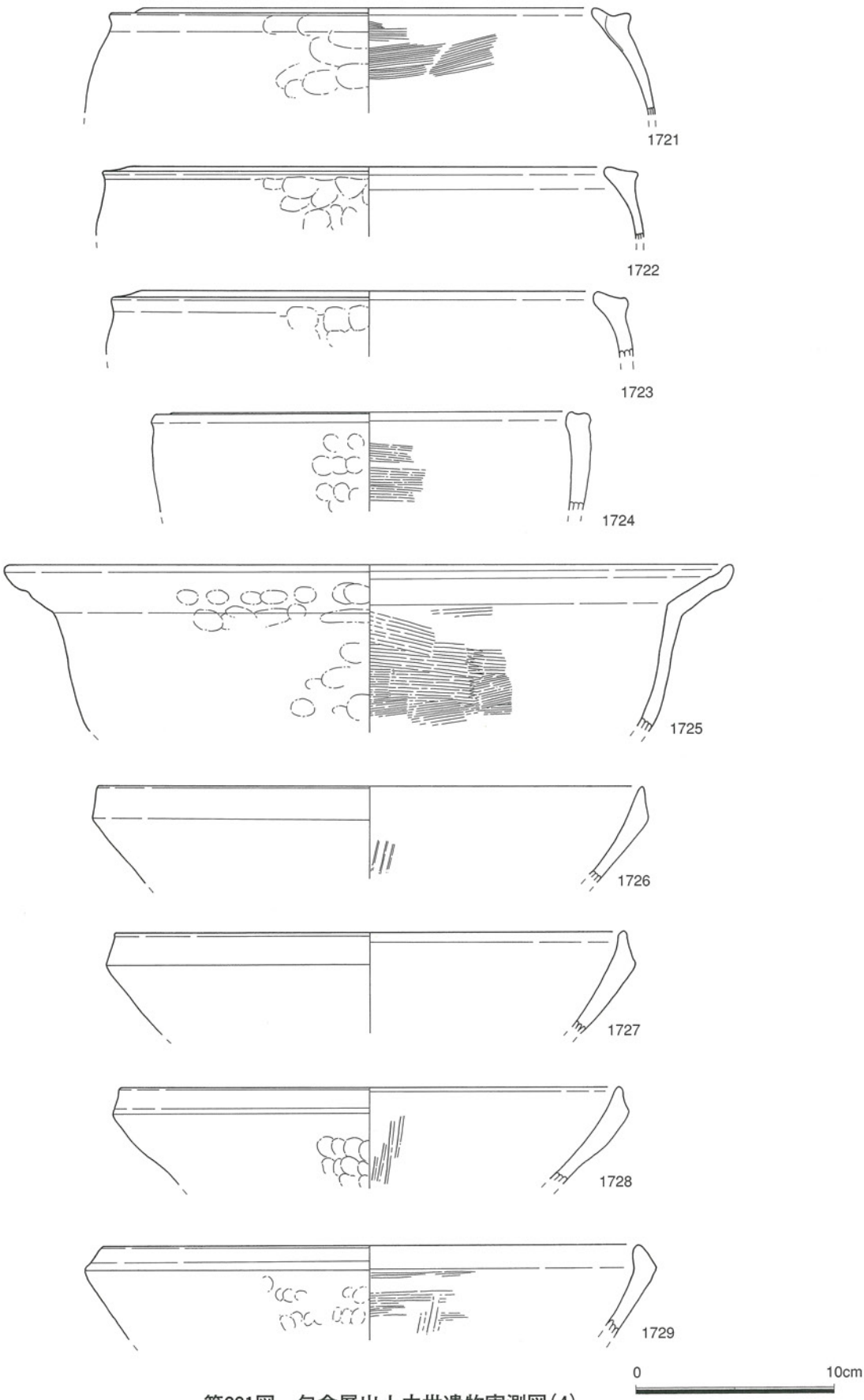
無茎式が71点、凹基無茎式が137点、凸基有茎式が21点、凸基無茎式が31点と、凹基無茎式のものが最も多い。ただ、凹基無茎式のなかには基部の挟りが浅く、平基式との区別が困難なものが多数含まれている。それぞれのタイプは長さと幅との比率や側縁部の形状からさらに細かい分類が可能であるが、無茎の場合では平基・凹基を問わず長さが幅よりやや長く直線的に仕上げられた側縁を持つ形態のものが最も多く、側縁部が緩やかに外湾するものがそれに次ぎ、側縁部が内湾するものはごく少数である。打製石鏃以外のサヌカイト製の剥片石器としては、打製石錐や打製石剣、打製石庖丁、楔型石器、それに縁辺部に簡単な調整が加えられた細部調整剥片などがある。打製石錐は錐部が長く頭部につまみが付く形態のものを中心に未製品や破片を含めて21点出土している。なかには打製石鏃の側縁部に再調整を加えて石錐に転用したものも1点混じっている。打製石剣の場合、明確に打製石剣といえるものは1641・1642の2点だけである。何れも切っ先に近い部分の破片で、両面調整により断面レンズ型に仕上げられている。しかし切っ先部分を伴わない破片の場合、打製石庖丁の破片と区別がつきにくいことから本来の出土数はもっと多かったと考えられる。打製石庖丁(1644～1651)は完全な形で出土した例は少なく、1648や1649のように細かく分割されて出土する場合が多いため、端部にくり込みが設けられた典型的な形態のもの以外は1649のように縁辺部や身部に使用痕が残されたものがそれと確認できるだけで、同じように縁辺部に調整を加えた他の両面調整の石器や剥片との区別が困難で、正確な総数を把握することが難しい。典型的なタイプは1643～1646のような背と刃の部分が平行する短冊形の形態で端部にくり込みが設けられたものであるが、単に方形に仕上げられただけのものや、身の中央部付近に最大幅を持ち、端部に向かうにつれて徐々に幅を減じる木葉形の形状のものも出土している。また大きさも1643のような長さ13cm、幅5cmを越えるような大型のものから、1648のように最大幅が3cmに満たないような小型のものまでまちまちである。素材に使用される剥片もさまざまで、なかには1643や1650のように翼状剥片の可能性のある剥片を使用した例もある。1651・1652は翼状剥片の遠端部縁辺に両面調整が加えられたものである。打製石庖丁の可能性もあるが両端を欠くため確実ではない。楔型石器は多数出土しているが、これ以外にも剥片を截断あるいは折断して方形または不整形の形状にしたものや、折断面を打面にして両極打法による剥離を加えたものがある。さらにこの折断面に調整を加えて刃部を作り出した削器状の石器や使用痕のある剥片は多量に出土している。サヌカイトを素材にした石器で注目されるものは、剥片や破損した石器に部分的に研磨を加えたものである。これらのなかには明らかに形態を整えたり刃部を作り出すために研磨が加えられたものが多いが、意図が不明なものも含まれている。1653・1654は打製石鏃に研磨を加えて刃部を作り出し石器としたものである。1653は先端部を欠失した凸基無茎式と考えられる打製石鏃の基部に、両面から研磨を加えて刃部を作り出した石器である。1654も同じく身部中央で破損した打製石鏃の破損部分の一部に研磨痕が残されたものである。1655は打面と遠端部縁辺に調整を加え2辺の交点付近を尖らせた尖頭器状の石器の、先端部から遠端部縁辺部にかけて部分的に研磨を加えたものである。1656は打製石庖丁や打製石剣のようなレンズ状の断面を持つ両面調整の石器に粗い研磨を加え方形の形状に整えたものに、一方の端部を両面から研磨して刃部を作り出して石



第279図　包含層出土中世遺物実測図(2)



第280図　包含層出土中世遺物実測図(3)



第281図　包含層出土中世遺物実測図(4)

斧としている。1657は小型の剥片の鋭角な交点に研磨を加え短い錐部を作り出した石錐である。1568～1661は厚みのある剥片を折断することによって得られた不整方形の素材の縁辺部に簡単な研磨を加えて刃部を作り出したものである。研磨は両面から加えられるものと片面のみのものが両方認められるが作り出された刃部は鈍いものが多い。1662は折断面を打面として両極打法を加えた剥片の側縁を両面から研磨して刃部を作り出している。1663は折断面を持つ小型の剥片の縁辺部に簡単な研磨痕が残されている。1664は２つの折断面の鋭角な交点に簡単な調整と研磨が加えられている。1665は不整形な小型の剥片の縁辺に両面から研磨を加えて直線的な刃部を作り出している。1666も折断面を持つ不整形な小型の剥片の縁辺の両面をわずかに研磨して直線的な刃部が作り出されている。1667は楔型石器の表裏両面の一部に研磨痕が残されている。1668は片面に剥片が剥離される以前に付けられたと考えられる研磨痕が残されている。包含層からはこれらの石器の素材となった板状または盤状と称されるサヌカイトの大型剥片や、サヌカイト以外の石材を使用した石器が少数ではあるが出土している。1669は打面に翼状剥片と類似する打面調整が加えられた板状の横長剥片で、遠端部縁辺には細かな調整が行われている。また、主剥離面と背面では打面の位置が180度移動している。1670は自然面をそのまま打面にした盤状剥片で、主剥離両側の打点付近には剥片を２回剥離した痕が残されている。1671の盤状剥片も主剥離面と背面の打面に複数の剥片の剥離痕が残されている。1672は折断によって打面を取り去った盤状剥片の縁辺部に主として主剥離両側に向かう調整が加えられている。この剥片の場合、主剥離面側と背面では打面を90度移転させている。1673は折断によって分割された盤状剥片の打面部分である。右側縁部には主剥離面側から背面に向かって急角度の剥離が複数加えられている。1674は頁岩と考えられる石材を使用した大型の板状剥片で、剥片の側縁には粗い調整が交互に加えられている。1675は縁辺部に複数の打撃が加えられ、打面の縁辺が鋭い鋸歯状になった不整楕円のチャートの礫である。石核の可能性があるが、石材には節理が縦横に走り良好な剥片を得られる可能性は少ない。サヌカイトを素材に使用する石器以外で最も出土点数が多いのは片岩製の打製石庖丁である。包含層中からは結晶片岩の破片が多く出土しているが、確実に打製石庖丁と認められるものは108点である。片面に自然面を残す結晶片岩の剥片を素材とし、岩脈と平行する方向に刃部を作り出すのが一般的であるが、ごくまれに扁平な礫を使用したり、岩脈と直角に刃を付けたものもある。形態がわかる98点のうち、サヌカイト製品に類似する短冊形で両端にくり込みが設けられたものが41点あるが、不整台形または不整方形の形態で端部にくり込みがないもののほうが57点と数量的には多く、このなかには長さ５cm、幅３cm未満の小型のものが10点ほど含まれている。また、くり込みも両端にあるものと片方だけのものがある。縁辺部への調整は背、刃部ともに両面調整が行われるが中には背の部分に全く調整が加えられないものもある。また、光沢を持つ使用痕の認められる個体もかなりある。打製石庖丁以外にも、結晶片岩の剥片を使用する石器として打製石斧または打製石鍬と考えられる石器が６点出土している。片面に自然面を残す片岩の大型剥片の縁辺部に、粗い調整を施して長楕円形に近い形態に整えたもので、素材となる結晶片岩は打製石庖丁よりも大型で厚いものを使用している。形状からは打製石庖丁との区別がつかないものもあるが、側縁部の一方または両方に弱いくびれ部を持つものが多い。調整は粗雑で、側縁部にくびれを持つものではくびれ部の縁辺が潰れている。また、刃部として使用されたと考えられる先端部分は磨滅している。打製石庖丁以外の石器では磨製石斧と敲石・磨石の類が多く出土している。磨製石斧には扁平片刃石斧や柱状片刃石斧、太型蛤刃石斧が含まれているが、その他にも自然の礫の一部を研磨して刃部を作り出したものも出土している。柱状片刃石斧は無抉式で、1679のように刃の付け方が両刃に近いものが含まれている。

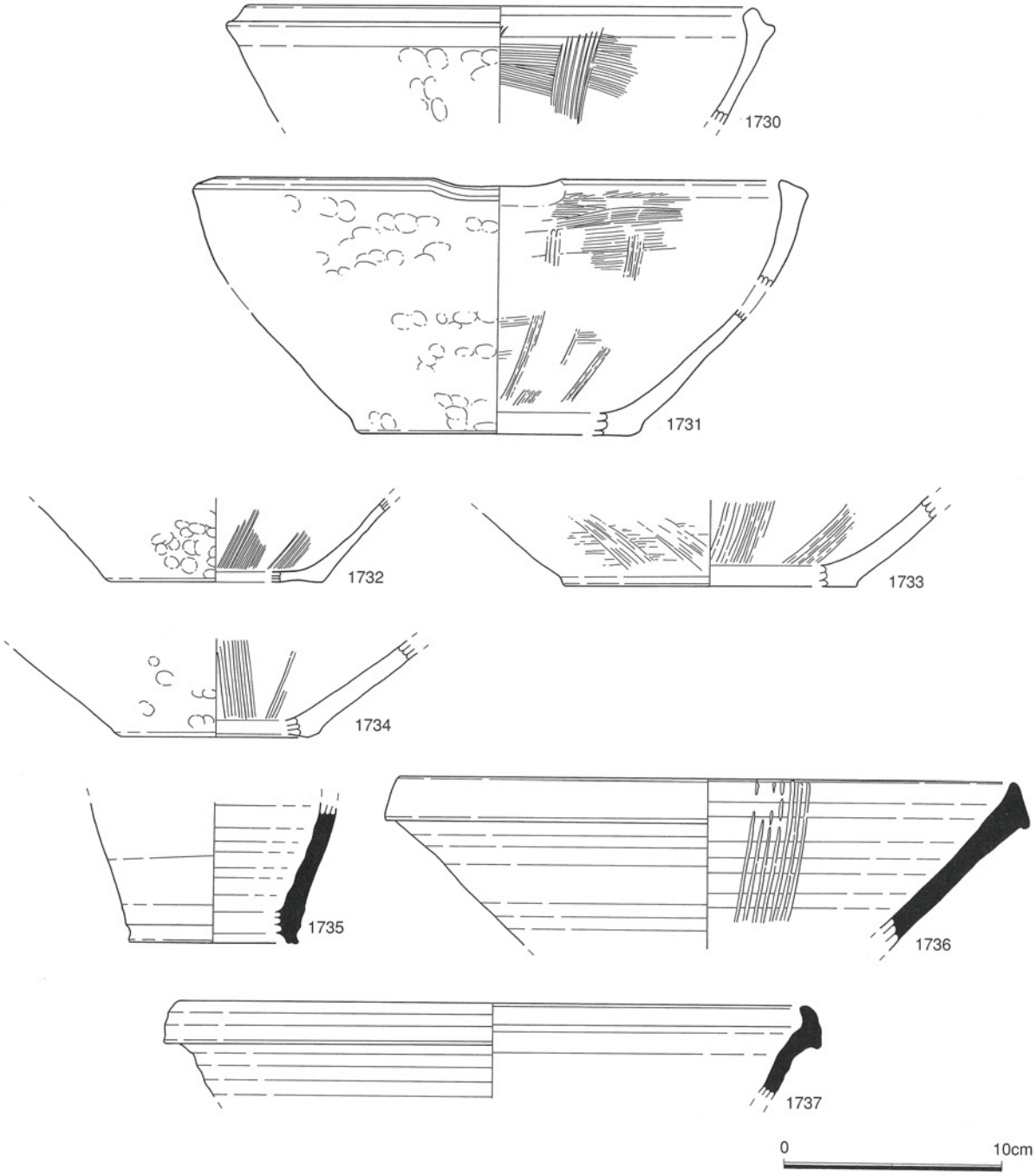
1676以外は研磨が全面に行われている。1676は著しく刃面が狭いが、本来もっと幅広の刃面を持った柱状石斧が石材の節理に沿って縦に割れたものをそのまま使用し続けた可能性が高い。1677は刃部近くの破片であるが、破損部分に敲打痕が集中していることから敲石に転用されたものと考えられる。

扁平片刃石斧（1680・1681）は平面形が平行する側縁に対して頭部・刃部が斜めに交差する菱形に近い不整四辺形の形態に仕上げられたものである。刃部以外の研磨は粗雑で、なかには殆ど研磨が行われていない部分がある。また、研磨が行われていない面では整形の際の敲打痕が全く残されていない。1682～1684も磨製石斧であるが、素材に自然の礫を使用したものである。1682は細長い棒状の礫の端部を両面から研磨して刃部を作り出している。1683は扁平な楕円形の礫の長軸側の縁辺部を研磨して側縁部とし、短軸側の一方を平坦に、もう一端を両面から研磨して刃部を作り出している。1684は使用した礫の一端が大きく膨らむ滴状の不整形な形状のためか、膨らみの強い部分の縁辺部を加撃して厚みと幅を減らし頭部とした上で、反対側の尖った部分を両面から研磨して幅の狭い刃部を作り出している。1685～1688は磨製石斧の破片である。1685・1686は残された斧身のほぼ全面に研磨が加えられているが、部分的に敲打痕が集中して残されていることから、この遺跡から出土した他の多くの磨製石斧同様、敲石に転用されたものと考えられる。ただ、1685の敲打痕は一般的な粗いものとは異なる鼠歯状の細かいものでストーンリタッチャーとして使用された可能性がある。また1686も敲石以外にも砥石として使用されたらしく研磨痕が太い溝状になって残されている。1687・1688も磨製石斧の刃部付近の破片であるが敲石へ転用された痕跡はない。これ以外にも楕円形や球形、角柱状の自然礫を使用した敲石や磨石が多く出土している。特殊なものとしては、両端に細かな敲打痕が残された楕円形の礫の片方の側縁部に、研磨痕と筋状の刻目が別々に残されている1689のような石器や、短い棒状の礫の両端に細かな敲打や研磨の痕跡が残された1690・1691のような石器がある。1691は身部の一部に砥石として使用した痕跡も残されている。これらは利器としての機能を全く持っていないことから石器を製作する際の一種の調整具として使用された可能性が考えられる。1694は太型蛤刃磨製石斧、1695はその未製品である。1694の石斧はこの遺跡から出土した他の磨製石斧とは異なり、敲石などへ転用された痕跡は残されていない。1695は楕円形の礫の縁辺部に荒い調整を加え形を整えている。他のは1693は不整楕円の礫の片面を砥石に、もう一方を台石として使用している。1693は片岩の剥片を素材に使用した有孔円盤である。ほぼ全面に研磨が加えられ両側から穿孔されている。

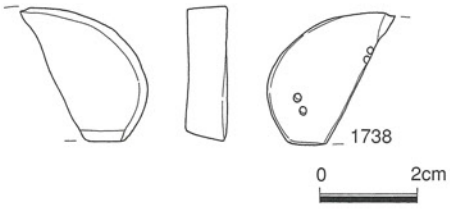
包含層出土遺物（中世）

土師器

1696・1697は直線的またはやや外反気味に上方にのびる体部を持つ上方への開きの小さい杯である。口縁端部は円く仕上げられ、底部には回転ヘラ切りが施されている。1698～1700は、いずれも立ち上がりが内湾する体部をもつ椀である。静止糸切り痕を持ち端部がわずかに外方に突出する底部から、内湾しながら外上方にのびる体部は、口縁端部近くの形態がそれぞれ異なっている。1698は緩やかに内湾する体部が途中で直立し、口縁端部はわずかに外反している。1699は口縁端部が端反っている。1700は緩やかに内湾する口縁部を持っている。いずれも体部内外面には丁寧な横ナデ調整が加えられている。1701・1702は底部に静止糸切り痕を持つ皿である。底部との境から緩やかに内湾しながら上方に大きく開く体部と、外反する口縁部を持っている。口縁端部は1701がわずかに肥厚しながら円く仕上げられて



第282図　包含層出土中世遺物実測図(5)



第283図　包含層出土中世遺物実測図(6)

いるのに対して、1702では薄く尖らされている。1703は外上方に向かって大きく開く直線的な体部を持つ皿である。底部を欠くため、切り離しの技法は明らかではないが、おそらく他の土師器と同じく静止糸切り技法が用いられていると考えられる。体部内外面には横ナデ調整が施され、口縁端部は薄く尖り気味に仕上げられている。1704・1705は椀の底部、1706は皿の底部で、何れも切り離しに静止糸切り技法が用いられ

ている。

1707～1724は土師器釜である。何れも口縁部に鍔が巡らされているが、その鍔の位置と形態により口縁部は様々な形態を持っている。1707～1709は体部から口縁部にかけてがほぼ直立し、口縁端部から離れた位置に鍔が巡らされた、比較的幅広い口縁部を持つものである。巡らされる鍔は高さがやや低く、端部は水平にのびている。1710～1720は緩やかに内湾する体部と口縁端部からやや離れた位置に鍔が付けられる口縁部の狭いもので、鍔の端部は水平か外上方に反り返るものが多い。口縁端部と鍔との距離は様々で1710のように比較的離れているものから、1720のように端部近くに付けられるものまで様々であるが、鍔の位置が口縁端部に近いほど口縁部が強く内湾する傾向がある。1721～1723は口縁部が強く内湾し、口縁部に付けられる鍔の端部が口縁端部とほぼ同じ高さまでせり上がったものである。このため、口縁端部と鍔との間は凹線状のくぼみとなってわずかに残されているだけである。1724は体部から口縁部にかけてわずかに内湾し、口縁端部とほぼ同じ位置につけられた鍔によって頂部が凹線状にくぼんでいるものである。これらの土師器釜は形態に差はあるものの、器面調整は、口縁部外面が指オサエの後横ナデ、体部外面が指オサエとナデ、内面が刷毛または板状工具によるナデというようにほぼ共通した技法が用いられている。ただ、口縁部の幅が広いものについては鍔の下に指オサエの際の爪痕が明瞭に残されているものが多い。1725は土師器の鍋である。わずかに上方に向かって開く直線的な体部と、強く「く」の字に屈曲する頸部から外上方に大きく開く直線的な口縁部を持っている。口縁端部はわずかに内湾し、円く仕上げられている。1726～1734は土師器の擂鉢とその底部である。擂鉢はその口縁部の形態から2種類に分けられる。1726～1728は直線的な体部と肥厚させた口縁部に幅広く横ナデを加えて口縁端部直下を凹線状にくぼませるとともに、口縁端部を鈍く尖らせたものである。1729～1731は緩やかに内湾する体部と「く」の字に内屈させる短い口縁部を持つもので、口縁部外面は横ナデによってわずかにくぼみ、内面にはハケ目調整が施されている。この擂鉢は小片で擂目を欠く場合、土釜と区別できない場合がある。

須恵器・陶器

1735は須恵器の壺である。底部には低い高台がつけられている。1736は備前焼の擂鉢である。外上方に大きく開く直線的な体部と平坦に仕上げられた幅広の口縁部を持つが、口縁部は内面が横ナデによってわずかにくぼみ、体部との境は下方に垂下している。内面には7条1単位の擂目がつけられているが、使用によって表面が著しく摩滅している。1737は東播系の須恵質の捏鉢である。口縁部は体部との境で内側に向かって「く」の字に折り曲げられ、端部は下方に垂下している。

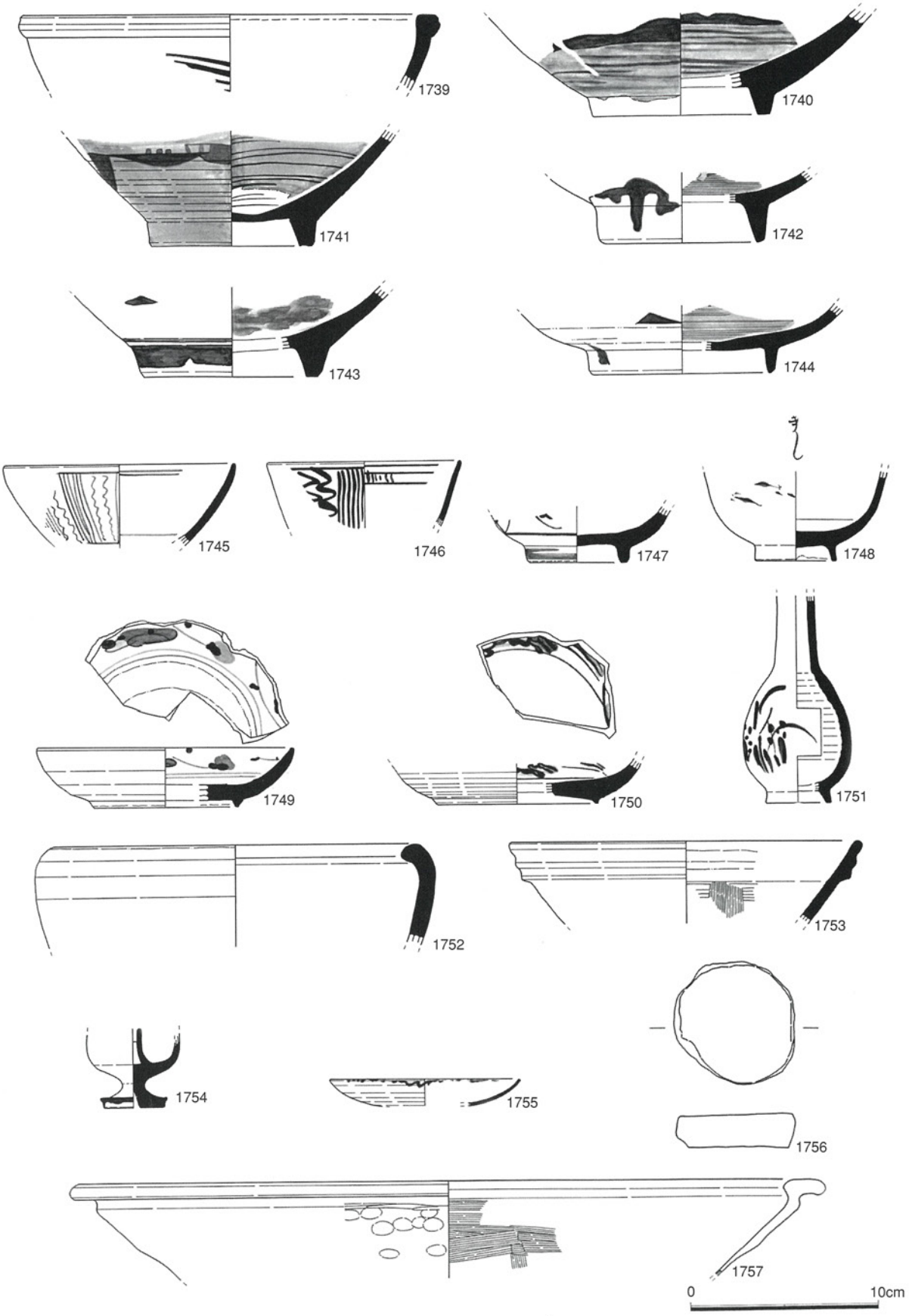
石製品

1788は鉤帯の円鞆で素材に白色の石材が使用され、約半分が欠けている。

包含層出土遺物（近世）

陶器・磁器

1739～1744、1752～1755は陶器、1745～1751は磁器である。1739～1744は唐津焼の鉢である。内湾する体部と比較的高い削りだし高台をもつもので、内外面には鉄釉などを用いて文様が描かれている。1739



第284図　包含層出土近世時代遺物実測図

は口縁部の破片であるが端部には方形の張り出しがつけられている。1752・1753は大谷焼の鉢と擂鉢である。鉢は上方への開きの小さい体部と内側に強く内湾する口縁部からなり、口縁端部は円く仕上げられている。1753は上方への開きの大きい直線的な体部と粘土を帯状に貼り付けた幅広い口縁部を持ち口縁端部は円く仕上げられている。内面には横方向に刷毛目が施され、縦方向に間隔を置いて擂目が付けられている。1754は秉燭、1755は備前焼の灯明皿である。1757は土師器の焙烙である。浅い皿状の体部と「く」の字に屈曲し水平にのびる口縁部をもっている。

Ⅳ まとめ

1　丸山遺跡出土の弥生土器について

丸山遺跡では、検出された26基の住居跡をはじめ、土坑・溝などの各遺構から壺・甕を中心とする弥生土器が出土している。しかし、遺物の多くは遺存状況が悪く全形を伺えるような資料は少数である。出土した弥生土器を器種ごとに分類するとおおよそ以下のようになる。

【壺】

壺　A　細い筒状の頸部と大きく外反する口縁部を持つ広口壺（1518・1519）。口縁端部は平坦または円く仕上げられている。体部と頸部の境は不明瞭で、口縁端部には刻み目が加えられたり体部との境に貼付文が廻されるものがある。体部外面には櫛描きの波状文や斜線文が描かれている。

壺　B　細い筒状の頸部と喇叭状に開く口縁部を持つ壺（1037・1038）。口縁端部は鈍く尖らされている。出土数は少ない。1037の体部には櫛描廉状文が付けられている。

壺　C　球状の体部と、頸部から緩やかに外反する口縁部を持つ広口壺（1544）。頸部と体部との境は不明瞭である。口縁端部は平坦または円く仕上げられている。外面には丁寧なヘラ暦きが加えられている。出土点数は少ない。

壺　D　筒状の頸部と外反または水平方向にのびる口縁部を持つ広口壺（1035）。口縁端部は平坦または円く仕上げられ平坦なものは頂部が凹線状に凹むものがある。頸部はCに比べて短く、体部と頸部の境も明瞭なものがある。比較的大型の個体（1025・1026・1035）とそれよりも一回り小さい中型のもの（1030・1031）がある。口縁端部には斜格子目文や櫛描波状文が描かれ頸部と体部の境には貼付突帯が廻されているものがある。1036の体部外面や口縁部内面には刺突文や櫛描波状文、平行線文などが多段に描かれている。

壺　E　筒状の頸部と大きく外反する口縁部を持つ広口壺（805・807）。口縁端部は上下に拡張され平坦に仕上げられているが、頂部がわずかに凹むものがある。口縁端部の拡張部や口縁部内面には斜線文や綾形文、斜格子白文などが描かれ、頸部には断面三角形の貼付突帯が多段に廻されている。また、体部にも櫛描波状文や平行線文、斜格子目文などが描かれる加飾性の強い土器である。

壺　F　筒状の頸部と大きく外反する口縁部を持つ広口壺。大（1060・1534）、中（543）、小（541）の３種類の大きさのものが出土している。口縁端部は上方、または上下に拡張され、横ナデ調整によって平坦に仕上げられただけのものと、複数の凹線が巡らされるものがある。また、口縁端部に刻目や斜線文が付けられたり、口縁部内面に櫛描波状文や斜格子目文が付けられるものもあ

る。頸部と体部の境は不明瞭で貼付突帯が廻される個体がある。体部への加飾は少なく櫛描列点文が加えられているものがある。

壺　G　細い筒状の頸部と大きく上方に開く受け口状、または喇叭状の口縁部を持つ壺（554・1536）。口縁端部は拡張されて平坦に仕上げられ、口縁部には刻目の加えられた断面三角形の貼付突帯が多段に廻されている。

壺　H　太くて短い頸部と外反する短い口縁部を持つ広口壺（1057・1058）。上方、または上下に拡張されて平坦に仕上げられた口縁端部には斜格子目文や刻目が、体部には櫛描波状文が描かれ、頸部には幅広の低い貼付突帯が廻されている。SD1027とSK1124で３点出土しているだけである。

壺　I　筒状の頸部と大きく外反する口縁部を持つ広口壺（769・1524・1525）。口縁端部は下方に垂下し幅広い平坦面が作り出されている。平坦面には斜格子目文や櫛による羽状の列原文が加えられ口縁部内面や頸部外面には貼付突帯による幾何学文が描かれている。

壺　J　筒状の頸部から大きく外反する口縁部を持つ広口壺（770）。口縁端部外面に扁平な粘土帯が貼り付けられている。口縁部内面には綾形状の沈線が付けられている。土佐からの搬入品でわずか１点出土しているだけである。

壺　K　頸部から外反または「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ広口壺（546・553）。口縁端部は外方または内外方に拡張され頂部は凹線状に凹んでいる。頸部には全て指頭圧痕の加えられた貼付突帯が廻され、口縁端部に斜線文が付けられているものがある。

壺　L　頸部から大きく外反する短い口縁部を持つ短頸壺（1160・1161）。口縁端部は上下に拡張され凹線が巡らされている。文様としてはこれ以外にも刻目が加えられたり、頸部に幅広の貼付突帯が廻されるものがある。

壺　M　筒状の頸部と、「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ壺（1096）。口縁端部は上下に拡張され平坦に仕上げられている。口縁端部には斜線文や斜格子目文が付けられているものがある。

壺　N　筒状の頸部と直線的または緩やかに外反しながら上方へのびる開きの小さい口縁部を持つ直口壺（921・1210）。口縁端部は平坦なものと、外方または内外方に拡張されるものがある。口縁端部が拡張されるものは頂部がわずかに凹んでいる。一般に無文のものが多いが、口縁部に刻目が施されるものや、頸部と体部の境に刻目を持つ貼付突帯が付けられるもの、体部上半に廉状文が施されるものがある。

壺　O　頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部は、そのまま口縁端部に続くものと受け目状に内湾するものに分かれる（555・557）。口縁端部は平坦なものや円く仕上げられるものが多

いが、なかには鈍く尖らされるものやわずかに外方に拡張されるものがある。口縁端部の刻目以外、文様が施されるものは見あたらない。

壺　P　球形の体部と直線的に上方にのびる口縁の開きの小さい直口壺（1061・1062）。僅か3点が出土しているだけである。1点は口縁部に刻目が、他の2点は頸部と体部との境に貼付突帯が廻されている。

壺　Q　低い貼付突帯が廻される頸部から大きく外反する短い口縁部を持つ壺（1557・1558）。出土数は2点と少ない。

壺　R　上方に向かってわずかに開く長い筒状の頸部と「く」の字に屈曲する短い口縁部を持つ長類壺（678）。頸部との境が明瞭な球形の体部を持っている。口縁端部は上方に拡張され複数の凹線が巡らされている。SB1026で1点出土している。

壺　S　内傾する口縁部を持つ無類壺（228・514）。出土点数はごくわずかで、口縁部に複数の凹線が巡らされるものと、櫛描波状文が描かれただけのものがある。

【甕】

甕　A　頸部から緩やかに外反する短い口縁部と、殆ど膨らみのない体部を持つ長胴の甕（1111・1569）。口縁部に最大径を持ち口縁端部は円く仕上げられている。

甕　B　頸部から緩やかに外反する短い口縁部と、殆ど膨らみのない体部を持つ長胴の甕（1179）。口縁端部は鈍く尖らされている。

甕　C　頸部から大きく外反し水平にのびる口縁部と殆ど膨らみのない体部を持つ長胴の甕（1572）。口縁部に最大径を持ち口縁端部は平坦に仕上げられている。

甕　D　「く」の字に屈曲する頸部から直線的にのびる口縁部と、殆ど膨らみのない体部を持つ甕（1182・1574）。口縁部付近に最大径を持ち、口縁端部は平坦に仕上げられている。

甕　E　強く外反する短い口縁部と膨らみの大きい体部を持つ甕（1134・1135）。口縁端部は円く仕上げられ、刻目が施されるものがある。体部は大きく球形に膨らむものと、それよりも膨らみの小さいものに分かれる。

甕　F　強く外反する短い口縁部と球形の体部を持つ甕（425）。上下に拡張される口縁端部は横ナデによって中央部が大きく凹線状に凹む。

甕　G　「く」の字に屈曲する頸部から直線的に上方にのびる口縁部と、比較的膨らみの大きい体部を持つ甕（571）。口縁端部は円、または平坦に仕上げられ、なかには中央部が横ナデによって凹線状に凹むものがあるが、凹線は施されていない。体部は上半部が下方に向かって「ハ」の字に開くものと、球形に近いものがある。

甕　H　「く」の字に屈曲する頸部と、端部が上方または上下に拡張される口縁部をもつ甕（574・575）。口縁部は直線的なものや、外反するもの、受け目状に内湾するものなどに分けられ、体部は上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開くものと、大きく膨らむものがある。

甕　I　強く外反する頸部と、複数の凹線が巡らされる上方または上下に拡張される口縁端部を持つ、比較的体部の膨らみの大きい甕（683・684）。竪穴住居SB1026で多く出土している。

甕　J　「く」の字に屈曲する頸部と、複数の凹線が巡らされる上方または上下に拡張された口縁端部を持つ、比較的体部の膨らみの大きい甕（209・969）。竪穴住居SB1009で多く出土している。

【高杯】

高杯A　緩やかに内湾する上方への開きの大きい浅い杯部と、「く」の字に屈曲する頸部から外方に水平にのびる口縁部を持つ高杯（1216）。

高杯B　内湾する林部と、内外方に拡張され平坦に仕上げられる口縁端部を持つ高杯（1597・1603）。杯部には上方への開きが大きく浅いものと開きの小さい比較的深いものがある。口縁端部の拡張は僅かに肥厚する程度で殆ど目立たないものから広い平坦面を持つものまで様々だが、頂部が凹線状に凹んでいるものが多い。

高杯C　内湾する杯部と、内外方に拡張される口縁端部を持ち、口縁部に凹線が巡らされる高杯（1609・1612）。杯部には上方への開きの大きい浅いものと、開きの小さい比較的深いものがある。口縁端部の拡張部は頂部が凹線状に凹んでいるものが多い。

高杯D　浅い皿状の体部の境から強く内湾し上方にのびる口縁部を持つ高杯（1141）。口縁端部は内外方に拡張され凹線状に凹み、口縁部には複数の凹線が巡らされている。

高杯E　体部との境で屈曲部を持ち上方にのびる口縁部を持つ高杯（449・965）。口縁端部は外反するものと僅かに内外方に拡張され平坦に仕上げられるものとがある。

高杯F　水平口縁の高杯（1616・1617）。水平縁の口縁の内側に1本の隆起帯を廻している。口縁端部は平坦に仕上げられるものと上下に拡張されるものがある。

高杯G　浅い皿状の体部と、「C」字状に大きく内湾する口縁部を持つ高杯（1619・1620）。口縁端部は円く仕上げられている。

高杯H　直線的で上方への開きの大きい深い杯部と、僅かに外方または内外方に拡張される口縁端部を持つ高杯。平坦な口縁端部は頂部が僅かにくぼんでいる。

【鉢】

鉢　A　高杯BまたはCと同じ形態で口径が大きいもの（1332）。形態から高杯との区別は難しい。

鉢　B　緩やかに内湾する体部と、屈曲部を持ちながら外上方にのびる直線的な口縁部を持つ鉢（1193）。口縁端部は平坦に仕上げられている。

鉢　C　上方に向ってわずかに開く直線的な体部を持つバケツ状の鉢（925）。出土数は少ない。

鉢　D　器高のある椀状の体部に低い台が付く台付鉢。1140の個体しか出土していない。

鉢　E　直立する体部と内方に拡張される口縁端部を持つ鉢。58の個体しか出土していない。

以上のように分類された弥生土器の遺構からの出土状況を見ると、凹線文が出現する以前と、出現以後の二つの時期に分けることができる。しかし、竪穴住居跡を含む大多数の遺構は凹線文出現以後のものによって占められ、凹線文出現以前の可能性のある遺物を出土した遺構はSK1112、SX1006などごく少数である。土坑SK1112は図示できた資料が6点と少ないうえに、出土した壺が1点を除いて全て口縁部を欠く資料である。その中で唯一口縁部の形態が明らかな805や同じ土器の体部と考えられる807の壺Eは阿讃山脈を越えた讃岐ではⅢ様式中段階（註1）の典型と考えられるものである。事実、805や806～808など器壁の薄い焼成良好な壺は、同じ吉野川流域でⅢ様式中段階の遺物がまとまって出土した阿波郡阿波町桜ノ岡Ⅰ遺跡の土坑SK1008・1039から出土した軟質で厚手の壺とは形態や胎土、焼成に至るまで大きく異なっていることから、これらSK1112から出土した壺E類は讃岐からの搬入品の可能性が高い遺物と考えるのが妥当であろう。一方、SX1006からは、壺D・Nと甕E・G・H、それに鉢が出土しているが、その組成は壺D・G・N・O、甕B・E・G・Hなどから構成される桜の岡Ⅰ遺跡のSK1008・1039の出土遺物と共通する部分が多い。しかし、これらSX1006の遺物は同じ桜ノ岡Ⅰ遺跡でⅢ様式終末期（註2）の凹線文出現期の遺物を出土した遺構SK1014や、1016から出土する遺物とも共通する点が多く、確実にⅢ様式の中段階まで遡るという確証を備えている資料とはいえない。SX1006以外にもこの段階に位置づけられる可能性が高い土器を出土した遺構に、竪穴住居跡SB1027や土坑SK1026・SK1027・SK1035などがあげられるが、SX1006同様、遺物の出土数が少なく凹線文出現期以前に位置づけられるものかどうかは不明な点が多い。次に凹線文出現期以後の遺物を出土する遺構に関してであるが、凹線文出現期以後の遺構には、凹線の使用頻度が少ない凹線文出現期のⅢ様式終末段階に属すると考えられる遺構と、Ⅳ様式段階以降の凹線文が多用される時期の遺構に分けられる。凹線文出現期と考

えられる遺構としては、SB1011や1022、それにSD1027の出土遺物の一部を上げることができるが、なかでもSB1022からは、この時期に限らず遺跡内で検出された遺構の中でも最も良好な一括遺物が出土している。SB1022からは、壺F・G・K・O、甕E・G・H・１、高坏B・Cが出土している。これらは何れも４様式の古い段階まで降る要素を持つものを含んでいるが、壺、甕、高坏などの凹線を持つ個体が、出土遺物全体の中でごく少数であることや、壺Fの中に凹線文を持ちながらも斜格子目文が施される例や、壺・甕の頸部に貼付突帯が付けられることなど古い文様要素を持つものが多いことなどを考慮すると、４様式の古い段階よりも３様式の新段階（註３）と考えるほうが妥当であろう。これは、先述したⅢ様式終末期の阿波町桜ノ岡Ⅰ遺跡の土坑SK1014や1016出土遺物の内容とも共通する点が多いことからも言える。竪穴住居跡SB1011も凹線が施された無頸壺や高杯が出土していることや、甕ではG類が中心を占めていることから1022に並行するか、その次のⅣ様式の古い段階に属する可能性がある遺構であろう。SD1027は今回の調査で最も遺物の出土が多かった遺構である。出土した弥生土器は元々出土点数の極端に少ない壺J・Sや甕F、高杯E・Fを除き、丸山遺跡出土の弥生土器の殆どの種類を含んでいる。これらは凹線の有無によって、壺A・B・C・D・E・G・H・M・O・P・R、甕A・B・C・D・E・F・G・H、高杯A・B・D・Eなどの凹線を持たないグループと、凹線が施される壺F、甕Ⅰ・J、高杯Cの２つのグループに分けられるが、各器種を出土数で見れば圧倒的に凹線を持たないものが多い。これら凹線を持たない各種の土器は、遺構での出土状況から凹線文と供伴する比率が高いものと、殆ど、または全く伴わないものに分けられる。他の遺構で凹線が施された土器に伴うものは壺D・G・K・O・P、甕F・G・H、高杯B・Gなどで、逆に凹線文との供伴が認められないものに壺B・C・E・H・I・R、甕Bなどが上げられる。しかし、後者の場合、壺を例にとってみると、何れも出土数が１点あるいは２～３点と少数なものばかりであることが特徴である。次に凹線に伴うグループでも遺構からの出土状況を見ると壺CがSB1011とSX1007で１点ずつ、壺がSB1024で１点、壺がSB1025で１点出土している以外は、ほぼすべてSB1022からの出土である。このことから考えるとSD1027出土の凹線を持たない土器のグループもSB1022同様、概ね凹線文出現期の３様式終末段階頃を中心とする時期のものであると考えられ、SD1027が掘削された時期もその段階まで遡ることが可能であろう。凹線文が多用される段階でまとまった遺物が出土した遺構としては竪穴住居跡SB1009・1018・1026、SK1114などが上げられる。SB1018は壺の資料に欠け、甕の一部に貼付突帯など古い要素を持つ資料が混じっているが、頸部が「く」の字に屈曲し凹線文が多用された甕Ⅰとともに、体部との境に屈曲部を持つ高杯E類が出土していることなどからⅣ様式並行段階でも後出する時期のものと言えるだろう。同じように甕Ⅰが出土遺物の中心となるSB1009やSK1114も、SB1018とほぼ同じかそれに前後する時期に含められる遺構と思われる。SB1026も遺構内から凹線文が多段に施される壺や甕が多く出土している。遺構内からは、壺F・K・O・R、甕Ⅰ・J、高杯Dなどの土器が出土しているが、壺の中に長頸壺Rが含まれることや、頸部の屈曲部が弱まる甕J類が多いことが大きな特徴である。これらは中期最終末から後期にかけての時期まで降る要素と考えられることから、SB1026はSB1018や1009、SK1114より若干降る時期に位置づけられる遺構であろう。

2　丸山遺跡出土の石器について

丸山遺跡からは、石鐵や石剣・石錐・石庖丁・石鏃など各種の打製石器と、太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧などの磨製石斧に、磨石、敲石を含む石器が多数出土している。中でも打製石鏃は出土数が最も多く、打製石庖丁がこれに次いでいる。打製石鏃は全てサヌカイトを素材に使用しているが、形態的には側縁部が外湾弧を描く凹基無茎式の出土数が最も多く、平基無茎式、凸基無茎式、凸基有茎式の順に続いている。凹基無茎式の形態の石鏃の出土点数が最も多いのは吉野川流域の他の弥生遺跡と同じだが、竪穴住居跡SB1022出土の610の凸基有茎式の石鏃は阿波町桜ノ岡遺跡SB1004、1010出土例とともに確実にⅢ様式段階までさかのぼれるもので、このタイプの石鏃の出土例としては県下では最も古い時期のものである。打製石庖丁は吉野川流域の他の弥生遺跡と同様、素材に結晶片岩を使用したものが大多数であるが、それ以外にもサヌカイト製のものが一定量出土していることが注目される。遺跡内からは、これらの打製石器の素材に使用されたSB1003の37やSB1013の311、SD1005の1361などのような不整形な盤状または板状の形をした剥片と、SP1030出土の992のような翼状剥片に類似する形態の２種類のサヌカイトの大型剥片が出土している。前者のような盤状剥片が折断や裁断によって分割された包含層出土のブロック状の剥片1673や、これに両極打法を加えたSD1015出土の1452・1453などのような楔型石器やSB1022出土の618例のような剥片に類似するものは多量に出土している。一方、後者の翼状剥片は盤状剥片よりも出土例が少ないが、これを素材に使用した打製石庖丁、または削器のような石器が出土している。前者のように盤状または板状の剥片を折断や截断によって分割し、両極打法などによる剥離を行って剥片を生産する方法は洗谷型剥片剥離技法とされているが、SB1016出土の418の分割された剥片のように、丸山遺跡出土の剥片の多くがこのような剥片剥離技法の過程で生産されたものと考えられる。一方の翼状剥片を剥離する技法については金山型剥片剥離技術（註４）と呼称されている。この技法によって生産される翼状剥片は打製石庖丁を生産するためだけに用意された剥片とは限定できないが、本遺跡の場合は、確実に石器への使用が確認できるものは打製石庖丁と、石庖丁に類似する削器に限られている。また、このような打製石庖丁自体も、SB1009出土の222のように折断や裁断によって分割され、調整が加えられて他の石器に転用されたり、そこから新たに剥離された剥片を素材にして石器の生産が行われている。基部に石庖丁のくり込みの痕が残された尖頭器（1346）や表面に打製石庖丁の使用痕が残る打製石剣（1641）などは、調整が加えられて他の器種への転用がはかられた例であるが、他にも打製石鏃（148）のように、打製石庖丁から剥離された表面に使用痕が残る剥片を素材にして新たに生産されたと考えられる石器も出土している。磨製石斧は太型船刃石斧や柱状石斧、扁平片刃石斧など定型的な石斧以外にも自然の礫の端部を磨いて刃部を作り出したものが一定量出土している。これらの磨製石斧で特筆されることは、太型蛤刃、柱状を問わずその殆とが敲石などに転用され、出土した時点で使用に耐える状態のものは、自然の礫の端部に研磨を加えただけの状態の磨製石斧を除けばごく少数であるという点である。磨製石斧類が木材の伐採や加工という石斧本来の機能を他の工具に取って代わられた結果、敲石などに転用されたこと示唆した状況と捉えることも可能で、金属器の普及を考えるうえで興味深い。

註

1）菅原康夫・梅木謙一編『弥生土器の様式と編年　四国編』木耳社　2000　のⅢ－２様式にあたる。

2）註１の文献のⅢ－３様式にあたる。

3）註１の文献のⅢ－３様式にあたる。

4）森下英治「石器の生産と流通」『弥生時代末期・中期初頭の動態』第16回古代学協会四国支部研究大会　2002。

参考文献

湯浅利彦『桜ノ岡遺跡（Ⅰ）桜ノ岡遺跡（Ⅲ）－四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告３－』（財）徳島県埋蔵文化財センター　1993

小泉信司『日古谷遺跡－四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－４』（財）徳島県埋蔵文化財センター　1994

松永住美・森直樹『名東遺跡（天神地区）－県営名東団地建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』徳島県教育委員会　1990

菅原康夫・瀧山雄一「阿波地域」『弥生式土器の様式と編年　四国編』木耳社　2000

森下英治「石器の生産と流通」『弥生時代末期・中期初頭の動態』第16回古代学協会四国支部研究大会　2002

丸山遺跡遺構出土遺物観察表（土器）

第１表　SB1001出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1	壺　D 口縁部	口径 11.1	緩やかに外反しながら上方に大きく開く口縁は端部が平坦に仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
2	壺 体部		体部上半には平行する半截竹管による区画の中に斜格子目文が描かれている。	内面には指オサエとハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　褐灰色 外　にぶい赤褐色	
3	甕　I 口縁部	口径 28.2	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には複数の凹線がめぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	

第２表　SB1002出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
13	甕　H 口縁部	口径 19.0	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に水平方向にのびる口縁部を持つ。わずかに上方に拡張された口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられ、頸部外面には指オサエの痕跡を残している。体部外面は頸部との境の狭い範囲にヘラミガキ、それ以下は丁寧なナデが加えられ、内面は指頭圧痕とナデが行われている。	石英・雲母・長石･赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
14	甕　I 口縁部	口径 14.2	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線がめぐらされている。	口縁は内外面とも横ナデ調整。体部外面は縦方向のヘラ磨き、内面は指頭圧痕とナデが行われている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい褐色	
15	高林C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 21.2	緩やかに内湾する浅い皿状の体部と上方にのびる口縁部を持つ。内外方に拡張された口縁端部は平坦に仕上げられている。口縁部には複数の凹線がめぐらされている。	外面は横ナデ調整、内面はナデ調整。	石英・結晶片岩・砂粒 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	

第３表　SB1003出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
16	甕　G 口縁部	口径 18.5	頸部から外反する短い口縁部と、内湾しながら外下方に向かって開く膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	調整は不明。	石英・長石 焼成不良	内　明赤褐色 外　赤褐色	
17	壺 体部		体部には櫛描の平行線文がつけられている。	体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい褐色	
18	壺 底部	底径 8.1	体部は底部から外上方に直線的にのびている。		石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　褐灰色 外　にぶい黄橙色	
19	甕 底部	底径 6.1			石英･雲母･長石・赤色斑粒 焼成不良	内　黒褐色 外　明赤褐色	

第４表　SB1004出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
20	壺　F 口縁部	口径 16.0	筒状の頸部から大きく外反し水平方向にのびる口縁部を持つ広口壺。上下に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	
21	壺　G 口縁部	口径 13.0	細く括れる頸部と、内湾しながら外上方に大きく開く受け口状の口縁部を持つ細頸壺。口縁部から頸部との境にかけては断面三角形の貼付け突帯が２本まわされている。	口縁内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	
22	甕　H 口縁部	口径 13.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と、緩やかに内湾しながら外下方に向かって開く膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部はわずかに上方に拡張され、凹線状にくぼんでいる。	調整は不明。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	
23	甕　H 口縁部	口径 22.3	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上下に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
24	高杯 脚部	底径 10.4	比較的長い脚柱部と外反しながら外下方に向かって開く裾部を持つ。脚端部は上方に拡張され拡張部には凹線が3条めぐらされている。また、脚柱部には圏線が回され、裾部にはヘラ先による連続する刺突が加えられている。	脚部外面はヘラ磨キ脚端部は横ナデ、内面はヘラ削りが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	
25	高杯 脚部	底径 12.0	脚台部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張され、裾部には連続刺突文を加えている。	外面は裾部に横ナデが加えられている。脚柱部内面にはヘラケズリが、脚端部には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	
26	高杯 脚部	底径 10.5	脚台部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張されている。	外面は裾部に横ナデが加えられ凹線状にくぼむんでいる。脚柱部内面にはヘラケズリが、脚端部には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	

第5表　SB1005出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
56	壺　O 口縁部	口径 11.8	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方に開く口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられ凹線状にくぼんでいる。	口縁部外面は口縁端部直下を強く横ナデし、それ以下の口縁部から頸部にかけては縦のハケメ調整が加えられている。	石英・長石 焼成不良	内外面とも明赤褐色	
57	壺　N 口縁部	口径 10.5	わずかに括れる頸部から直線的に外上方にのびる上方への開きの小さい壺。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。頸部の括部には刻目を加えた突帯が1本まわされている。	口縁部内外面は横ナデ調整を加えている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒・砂岩 焼成不良	内外面とも橙色	
58	壺　E 口縁部	口径 19.3	直立する体部と、内方に拡張され、尖り気味に仕上げられる口縁端部を持つ。口縁部には凹線をめぐらせている。	口縁部内外面から体部外面にかけては横ナデ調整。体部内面は縦方向のハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　赤褐色 外　赤色	
59	甕　H 口縁部	口径 13.2	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部は尖り気味に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ調整を加えられ、体部外面はハケ目調整、内面はナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成不良	内　褐色 外　黒褐色	
60	甕　J 口縁部	口径 19.4	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が2条めぐらさせている。	口縁部内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　明赤褐色	
61	甕　I 口縁部	口径 15.5	強く「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張され2条の凹線がめぐらされている。	口縁部内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい橙色 外　橙色	
62	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 25.0	内湾する体部と肥厚し平坦に仕上げられた口縁端部を持つ。口縁部には幅広の凹線がめぐらされている。	口縁部内外面はナデ調整。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明黄褐色 外　にぶい赤褐色	
63	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 29.7	内湾する体部と内外方に拡張され平坦に仕上げられる口縁端部を持つ。口縁部には複数の凹線がめぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整。	石英・雲母・赤色斑粒・砂岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
64	壺 底部	底径 8.5	弱い上げ底の底部と強く膨らむ球形の体部を持っている。	体部外面は丁寧なヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・長石 焼成良好	内外面とも赤褐色	
65	壺 底部	底径 9.3	体部は底部との境から外上方に大きく開く。	体部外面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　褐灰色	
66	甕 底部	底径 5.3		体部外面はヘラミガキ内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
67	高杯 脚部	底径 15.0	脚台は下半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張され2条の凹線がめぐらされている。また、裾部には沈線とヘラ先による鋸歯文と連続刺突文が描かれている。	脚台下半部外面は横ナデ調整が加えられている。内面はヘラケズリが加えられ、脚端部横ナデによって凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・礫 焼成良好	内外面とも橙色	
68	高杯 脚部	底径 11.0	脚台は下半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張され凹線がめぐらされている。裾部にはヘラ先による連続刺突文が行われている。	脚台下半部外面は横ナデ調整。内面は脚端部付近が横ナデのために凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも明褐色	
69	高杯 脚部	底径 11.2	脚台は下半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張され凹線が1条めぐらされている。裾部には沈線により鋸歯文が描かれ、ヘラ先による連続刺突文が施されている。	脚台下半部内面は脚端部付近までヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明黄褐色 外　明赤褐色	
70	高杯 脚部	底径 12.4	脚台は下半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張され円く仕上げられている。	脚台下半部内面にはヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
71	高杯 脚部	底径 7.4	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部はわずかに上方に拡張されて円く仕上げられ、穿孔が加えられている。	外面は横ナデ調整。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも橙色	
72	高杯 脚部	底径 11.0	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は円く仕上げられ凹線が１条めぐらされている。	脚台内面は端部近くまでヘラケズリが行われている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　明赤褐色 外　にぶい赤褐色	
73	高杯 脚部	底径 7.8	脚台は下半部が外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く。脚端部は拡張され凹線が２条めぐらされている。	脚台下半部外面は横ナデ、内面はヘラケズリが加えられ、脚端部付近の内面は横ナデのために凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　赤褐色 外　明赤褐色	
74	台付鉢 脚部	底径 10.7	低い脚台は外下方に向かって「ハ」の字に開き、端部は肥厚している。	脚台は内外面に横ナデ調整が加えられているが、脚端部は横ナデ調整によって凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　赤褐色 外　明赤褐色	

第６表　SB1006出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
134	壺　G 口縁部	口径 11.8	細く括れる頸部から外上方に大きく開く受け口状の口縁部と、球形に大きく膨らむ体部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられ刻目が加えられるが、同様の刻目は頸部との境に付けられた突帯上にも施されている。	口縁部内外面は横ナデ調整。頸部から体部外面にかけては縦方向のハケメ調整、頸部内面は指頭によるナデ、体部内面は指オサエの後にハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・砂粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
135	甕　H 口縁部	口径 19.1	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、球形に膨らむ体部を持つ。口縁端部は上方にのみ拡張され凹線が１条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整。頸部から体部外面にかけては縦方向のハケメ調整、頸部内面はナデ調整が加えられている。	石英・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい赤褐色	
136	高杯F 口縁部	口径 31.2	口縁部は水平口縁で口縁部内面には隆帯が付けられている。水平にのびる口縁端部は上下に拡張され、２条の凹線と斜線文がつけられている。	口縁部は横ナデ調整、体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はハケメとヘラミガキが施されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　橙色 外　褐灰色	
137	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 28.5	内湾しながら外上方に大きく開く浅い皿状の体部は屈曲部を持たず口縁部に移行する。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。口縁部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ、体部外面は縦方向のヘラミガキを加えている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも黒褐色	
138	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 28.8	内湾しながら外上方に大きく開く身の浅い体部はそのまま口縁部に移行する。内方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には刻目が加えられ、口縁部は横ナデによって大きくくぼんでいる。	口縁部外面は横ナデによって体部との境に弱い段を持つ。体部外面と内面全面はハケメ調整と縦方向のヘラミガキが平癒されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
139	甕 底部	底径 8.8	体部は底部との境でいったん縊れた後、外上方にのびている。	体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整。	石英･雲母･長石・赤色斑粒 焼成良好	内　褐色 外　にぶい褐色	
140	甕 底部	底径 5.8	体部は底部との境でわずかに縊れた後、外上方にのびている。		石英・雲母・長石 焼成不良	内　灰黄褐色 外　赤褐色	
141	甕 底部	底径 9.1		内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	

第７表　SB1007出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
176	甕　I 口縁部	口径 14.5	外反する口縁の端部は上方に拡張され凹線が２条めぐらされている。	口径端部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
177	甕　I 口縁部	口径 27.0	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線がめぐらされている。	口径部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	

第８表　SB1008出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
178	壺　D 口縁部	口径 19.5	筒状の頸部から外反しながら上方に向かって大きく開く口縁を持つ広口壺。下方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜格子目文が描かれている。	口縁部内外面は横ナデ調整。頸部外面はハケメ調整と横ナデを併用している。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成不良	内外面とも橙色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
179	壺　O 口縁部	口径 13.0	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方に開く口縁部は端部近くで内湾する。口縁端部は円く仕上げられ、頂部は凹線状にくぼんでいる。	内面は横ナデとヘラミガキが併用されている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
180	壺 底部	底径 10.4	体部は外上方に向かって大きく開く。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石・砂粒 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　明赤褐色	
181	甕 底部	底径 4.8		外面にはヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい褐色	外面に黒斑有り
182	甕 底部	底径 3.7	底部は上げ底である。	外面はヘラミガキ、内面は指オサエが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　にぶい黄橙色	

第９表　SB1009出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
197	壺 口縁部	口径 10.4	頸部から強く外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は下方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
198	壺 口縁部	口径 10.5	筒状の頸部と、緩やかに内湾しながら外下方に向かって開く膨らみの小さい長胴の体部を持つ。頸部には櫛の刺突文が加えられ、体部上半には櫛描波状文や簾状文、平行線文などがつけられている。	外面は頸部から体部にかけてはヘラミガキ、内面は頸部に指頭によるナデ調整、体部上半に指オサエが施されている。	石英・雲母・結晶片岩・長石・赤色斑粒・砂岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
199	壺 体部	体部 最大径 12.0	中程が「く」の字に屈曲する算盤玉型の体部を持っている。	外面は体部上半にハケメ、下半にヘラミガキ、内面は体部上半に指頭によるナデ調整、下半にハケメ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黒褐色 外　橙色	
200	甕　G 口縁部	口径 20.0	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外方にのびる口縁部は、端部が鈍く尖らされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも褐色	
201	甕　I 口縁部	口径 12.0	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張され、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
202	甕　I 口縁部	口径 17.2	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる比較的長い口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張され、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　にぶい橙色	
203	甕　I 口縁部	口径 19.8	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる比較的長い口縁部を持つ。口縁端部は大きく上下に拡張され、凹線が３条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　にぶい褐色	
204	甕　I 口縁部	口径 21.2	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張され、凹線が３条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内外面とも明黄褐色	
205	甕　I 口縁部	口径 18.8	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる比較的長い口縁部と、緩やかに内湾しながら外下方に向かって開く膨らみの大きい体部を持つ。口縁端部は上下に拡張され、凹線が２条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデとナデ、体部外面はハケメの後にヘラミガキが加えられている。頸部の屈曲部直下の外面は内側に加えられた強い横ナデによってわずかに外方に突出している。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
206	甕　I 口縁部	口径 17.2	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる比較的長い口縁部と、上半が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上方に拡張され、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は内面がハケメ調整が加えられている。頸部の屈曲部直下の外面は内側に加えられた強い横ナデによってわずかに外方に突出している。	石英・長石・砂粒 焼成良好	内　橙色 外　明褐色	
207	甕　I 口縁部	口径 23.2	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる短い口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上下に拡張され、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも浅黄橙色	
208	甕　I 口縁部	口径 24.0	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる短い口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上下に拡張され、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
209	甕　I 口縁部	口径24.7 体部 最大径 29.8	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる短い口縁部と上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つが、体部の膨らみは弱い。口縁端部は上下に拡張され、凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は上半部がハケメとヘラミガキの併用、下半部がヘラミガキ、内面は指オサエとハケメ調整が加えられている。頸部の屈曲部直下の外面は内面に加えられた強い横ナデによってわずかに外方に突出している。	石英・長石 焼成良好	内　暗灰黄色 外　灰黄褐色	
210	壺 底部	底径 9.6	外上方に向かって大きく開く直線的な体部と軽い上げ底の底部を持っている。	体部内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　灰褐色 外　橙色	
211	甕 底部	底径 4.9	体部は緩やかに外反しながら外上方にのびている。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　明赤褐色	
212	甕 底部	底径 6.0	体部は緩やかに外反しながら外上方にのびている。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　黒色 外　明赤褐色	
213	甕 底部	底径 7.7	体部は緩やかに外反しながら外上方にのびている。	体部外面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　浅黄橙色	
214	高杯 脚部	底径 10.3	脚台は細い上半部から、外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張され拡張部は平坦に仕上げられている。	脚台部内外面とも調整は不明。脚端部内面は横ナデによって凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・砂粒 焼成良好	内　橙色 外　明褐色	

第10表　SB1011出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
226	壺　F 口縁部	口径 15.2	外反する頸部から上方に向かって大きく開く口縁と膨らみの強い体部を持つ広口壺。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面にはハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
227	壺　N 口縁部	口径 14.5	外反する頸部から直線的に上方に向かってのびる上方への開きの小さい口縁を持つ。口縁端部は内方に拡張され平坦に仕上げられるが、頂部がわずかにくぼんでいるむ。頸部には指頭圧痕の加えられた帯状の低い貼付突帯が1本廻されている。	口縁部外面は強い横ナデ、頸部外面には縦方向のハケメ調整が加えられている。内面はナデ調整。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　橙色 外　にぶい橙色	
228	壺　S 口縁部	口径 10.0	内傾する直線的な口縁部を持つ無頸壺。口縁部には凹線が多段にめぐらされ、刻目と棒状浮文がつけられている。	内面には横ナデとハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄褐色	
229	甕　E	口径27.7 底径11.8	頸部から大きく外反する口縁は端部が平坦に仕上げられている。体部は上半部が緩やかに内湾しながら外下方にのびる膨らみの小さい形態であるが、下半部は球形に大きく膨らんでいる。	体部下半の外面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　赤色 外　にぶい黄橙色	
230	甕　H 口縁部	口径 12.6	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と上半が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上方にわずかに拡張され平坦に仕上げられている。	外面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、体部上半はハケメ調整が加えられている。頸部の屈曲部直下は内面に加えられている強い横ナデによってわずかに外方に膨らんでいる。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　褐灰色 外　にぶい褐色	
231	甕　H 口縁部	口径 18.0	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら上方に大きく開く口縁と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方にのびる膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は上方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけて内外面は横ナデ、体部内外面にはハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
232	甕　H 口縁部	口径 18.0	「く」の字に屈曲する頸部から、わずかに内湾しながら上方に大きく開く口縁と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方にのびる膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は上方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけて内外面は横ナデ、体部内外面にはハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　にぶい赤橙色	
233	甕　H 口縁部	口径 17.5	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら上方に大きく開く口縁部は、端部がわずかに上方に拡張され、凹線が1条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ，体部外面はハケメ調整が加えられている。	石英・結晶片岩 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	外面頸部～体部にかけて煤付着
234	甕　H 口縁部	口径	「く」の字に屈曲する頸部から、わずかに内湾しながら上方に大きく開く口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上方に拡張されている。	体部外面はハケメ調整。	石英・雲母 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　浅黄橙色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
235	甕　H 口縁部	口径 20.7	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	
236	甕　H 口縁部	口径 21.6	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。わずかに上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。	口縁部内外面は横ナデ調整。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも橙色	
237	甕　H 口縁部	口径 17.5	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら水平方向にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は内外面ともハケメ調整。	石英・結晶片岩 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
238	甕　H 口縁部	口径 22.9	「く」の字に屈曲する頸部から、わずかに内湾しながら外上方にのびる短い口縁部と、上半部が大きく球状に膨らむ体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は内外面ともハケメ調整。	石英・雲母・赤色斑粒・角閃石 焼成不良	内外面とも明赤褐色	
239	鉢 口縁部	口径 18.3	外上方に向かって直線的にのびる円錐形の体部を持つ。肥厚し平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部外面は2cm余りの幅で強く横ナデが加えられている。体部外面にはハケメ調整が縦方向に加えられている。	石英・結晶片岩 焼成不良	内　にぶい褐色 外　にぶい赤褐色	外面に黒斑有り
240	鉢 口縁部	口径 23.0	直線的な体部は外上方に向かって大きく開く。わずかに内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は、頂部がわずかにくぼんでいる。	外面は横方向のヘラミガキ、内面はハケメ調整のうえにヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・長石・砂粒 焼成不良	内外面とも赤褐色	
241	鉢 口縁部	口径 25.8	直線的な体部は外上方に向かって大きく開く。口縁端部は外方にのみ拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁内外面は横ナデ調整。体部外面には縦方向のナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
242	高杯A 口縁部	口径 27.0	わずかに内湾しながら外上方にのびる浅い皿状の体部は屈曲部を持つことなく口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され平坦に仕上げられている。	体部外面は横方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラミガキか？	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成不良	内　にぶい赤褐色 外　赤褐色	
243	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 27.9	内外方に拡張され頂部が平坦に仕上げられる口縁端部には刻目が付けられている。口縁部には幅広の凹線が2条めぐらされ、口縁端部同様、刻目が加えられている。	口縁部外面は横ナデとヘラミガキ、内面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
244	壺 底部	底径 14.0	体部は外上方に大きく開く。	外面にはヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　にぶい赤褐色	
245	甕 体部	体部 最大径 19.5	倒卵形の体部中央には櫛による刺突文が一周している。	体部外面は上半部がハケメ調整の後ナデ、下半部がヘラミガキ調整。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄褐色 外　にぶい橙色	
246	甕 底部	底径 5.5		内面はヘラケズリか？	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面ともにぶい赤褐色	
247	甕 底部	底径 6.0	底部は上げ底。	体部外面はヘラミガキ、内面は指オサエ。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　にぶい褐色 外　明赤褐色	
248	甕 底部	底径 6.0		体部は内外面ともていねいなヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面ともにぶい褐色	外面に黒斑有り 煤付着

第11表　SB1012出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
274	壺　D 口縁部	口径 15.3	筒状の頸部と大きく外反しながら外上方にのびる口縁部を持つ広口壺。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面ともにぶい橙色	
275	壺　F 口縁部	口径 15.0	大きく外反しながら外上方にのびる口縁部を持つ広口壺。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には3条の凹線がめぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　褐色 外　灰褐色	
276	壺 底部	底径 11.0	直線的な体部は外上方にむかって大きく開く。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
277	壺 底部	底径 10.0	直線的な体部は外上方にむかって大きく開く。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい褐色 外　にぶい黄橙色	
278	ミニチュア甕	底径 2.0			石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	

第12表　SB1013出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
293	壺　N 口縁部	口径 9.4	長い筒状の頸部から外反しながら上方にのびる短い口縁部を持つ長頸壺。口縁部の上方への開きは小さく、口縁端部は平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも明赤褐色	
294	甕　I 口縁部	口径 17.6	強く「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な短い口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され、凹線が1条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整を加えている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも橙色	
295	甕　I 口縁部	口径 19.9	強く「く」の字に屈曲する頸部とわずかに内湾しながら水平にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整を加えている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	小片の為口径・傾き共に不正確 煤付着
296	甕 底部	底径 7.0		体部外面はヘラミガキ。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黄橙色 外　橙色	
297	高杯 脚部	底径 14.0	脚台下半部は外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く。上下に拡張され平坦に仕上げられた脚端部には凹線が2条めぐらされている。	脚台下半部の外面はハケメ調整、内面は横ナデ、脚端部外面は横ナデが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
298	高杯 脚部	底径 14.5	脚台下半部は外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く。上方に拡張され平坦に仕上げられた脚端部には凹線が2条めぐらされている。脚台部には平行沈線がつけられている。	脚台部内面にはヘラケズリが施されている。	石英・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　明赤褐色 外　にぶい褐色	
299	高杯 脚部	底径 12.8	脚台下半部は外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く。上方に拡張され平坦に仕上げられた脚端部には凹線が2条めぐらされている。	脚端部内面は横ナデによって凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	

第13表　SB1014出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
314	壺　F 口縁部	口径 12.8	細く締まった頸部と大きく外反する口縁部を持つ広口壺。口縁端部は上下に拡張され凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられているが、口縁部直下は2段にナデ分けられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　橙色 外　黒褐色	
315	壺　N 口縁部	口径 13.0	上方に向かって直線的にのびる口縁部を持つ直口壺。口縁端部はわずかに内方に拡張され頂部は円く仕上げられているが、端部直下の口縁部には凹線状のくぼみが1条めぐらされている。	口縁端部周辺は横ナデ調整、口縁部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも橙色	
316	壺 頸部		細く締まった頸部と大きく外反しながら外上方にのびる口縁部を持つ広口壺。頸部にはヘラ先による斜行する刺突文が描かれている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部内面は指頭による縦方向のナデ調整。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　明赤褐色 外　明褐色	
317	甕　I 口縁部	口径 18.0	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながらが外方にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部を上方に拡張して平坦面を作り出し、凹線を2条めぐらせている。	口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面はナデ調整を施されている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　にぶい橙色 外　にぶい褐色	
318	壺　F 頸部		頸部から体部上半にかけては「ハ」の字に開く。頸部にはヘラ先による刺突文がまわされている。	頸部から体部上半の外面は横ナデとヘラミガキ調整が併用されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄橙色 外　橙色	
319	壺 頸部		体部外面には櫛描波状文が描かれている。	体部外面はハケメ、内面はナデによる調整が施されている。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
320	高杯A 口縁部	口径 14.0	緩やかに内湾しながら外上方にのびる身の浅い体部は屈曲部を持つことなく口縁に移行する。肥厚する口縁端部は頂部が平坦に仕上げられている。口縁部は横ナデにより幅広く凹線状にくぼんでいる。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
321	高杯C 口縁部	口径 20.0	緩やかに内湾しながら外上方にのびる身の浅い体部は屈曲部を持つことなく口縁部に移行する。外方に拡張され平坦に仕上げられた幅広の口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。口縁部と体部の境には凹線がめぐらされている。	体部外面はヘラミガキか？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黄色 外　黄橙色	
322	高杯A？ 鉢　A？ 口縁部	口径 30.0	内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は、頂部がわずかにくぼんでいる。口縁端部直下は横ナデにより凹線状にくぼんでいる。	外面はヘラミガキが施されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　明赤褐色 外　赤褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
323	鉢　A 口縁部	口径 32.0	緩やかに内湾しながら上方にのびる身の深い体部は屈曲部を持たず口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され平坦に仕上げられている。口縁部には幅広の凹線が2条めぐらされている。	調整は不明。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも灰オリーブ色、橙色	
324	高杯A？ 鉢　A？ 口縁部	口径 18.0	直立する体部は屈曲部を持たず、口縁部に移行する。内外方に拡張される口縁端部は頂部がわずかに盛り上がっている。	体部内外面ともナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　赤色	
325	壺 底部	底径 8.8	直線的な体部は外上方に向かって大きく開く。		石英・雲母・結晶片岩・砂粒 焼成不良	内　黒褐色 外　褐灰色	
326	甕 底部	底径 6.0		調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい橙色 外　橙色	
327	高杯 脚部	底径 5.5	脚台の下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。円く仕上げられた脚端部は肥厚するだけで拡張されていない。	脚台部内面はヘラケズリが加えられている。	雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	

第14表　SB1015出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
363	壺　N 口縁部	口径 12.5	弱い屈曲部を持つ頸部から直線的に上方に向かってのびる筒状の口縁部を持つ直口壺。平坦に仕上げられた口縁端部には沈線により斜格子目文がつけられ、頸部の屈曲部には断面三角形の貼付突帯が1本まわされている。	口縁部から頸部にかけては外面が横ナデ、内面が指頭によるナデと横ナデが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい褐色	
364	甕　J 口縁部	口径 16.3	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と上半部が膨らむ体部を持つ。口縁端部はわずかに上下に拡張され、凹線が2条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整。体部外面上部はハケメ調整か？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
365	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 23.7	内外方に拡張される口縁端部は頂部が平坦に仕上げられている。口縁部外面には凹線が2条めぐらされている。	口縁部内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　浅黄橙色 外　黄橙色	
366	甕 底部	底径 5.6		体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　橙色	
367	甕 底部	底径 7.0	底部は弱いあげ底か？	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　浅黄橙色 外　橙色	

第15表　SB1016出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
400	壺　D 口縁部	口径 22.8	外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部にはヘラ先による刻線文が加えられている。また上方を向く口縁部内面には沈線により斜格子目文が描かれている。	口縁部内外面とも横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
401	甕　H 口縁部	口径 18.8	「く」の字に屈曲する頸部から、わずかに内湾しながら上方にのびる口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方に向かって開くやや膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	横ナデ調整が加えられた口縁部内外面は、端部内面が横ナデによってわずかにくぼんでいる。体部は外面が縦方向の丁寧なハケメ調整、内面がハケメの後にヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
402	甕　G 口縁部	口径 15.1	屈曲する頸部から外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられ、頂部が凹線状にくぼんでいる。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が施されている。	石英・長石 焼成良好	内外面とも褐色	
403	甕　G 口縁部	口径 18.8	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる口縁部と上半部が緩やかに内湾しながら外下方に開く小さく膨らみの小さい体部を持つ。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。	口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はナデ調整と縦方向のヘラミガキが加えられ、内面は横方向の丁寧なヘラミガキが行なわれている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
404	高杯A 口縁部	口径 18.8	緩やかに内湾しながら外上方にのびる体部は屈曲部を持つことなく口縁部に移行する。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。外面の口縁端部直下は横ナデによって幅広くくぼんでいる。	内面は口縁部付近はハケまたは板状工具によるナデ、体部はヘラミガキがそれぞれ加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
405	壺 体部		体部には櫛描波状文がつけられている。		石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
406	土製有孔円盤	直径 4.8 孔径 0.4		調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	明黄褐色	

第16表　SB1017出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
423	壺　D 口縁部	口径 14.0	長い筒状の頸部と、外反しながら上方にのびる比較的短い口縁部を持つ壺。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部外面は横ナデ、内面はナデ、頸部外面はハケメ調整か？内面は指頭による縦方向のナデ調整を施している。	石英・結晶片岩・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　黄褐色 外　橙色	
424	壺　N 口縁部	口径 11.5	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ直口壺。口縁端部は拡張されることなく平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
425	甕　F	口径 13.0	強く外反する頸部から水平方向にのびる短い口縁部と大きく球形に膨らんだ体部を持つ。上下に拡張された口縁端部は、強い横ナデによって凹線状にくぼんでいる。	口縁部内外面は横ナデ調整、頸部外面は横ナデ調整、内面は板状工具によるナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ。	石英・雲母 焼成不良	内　暗赤褐色 外　褐色	
426	高杯A 口縁部	口径 27.1	緩やかに内湾する上方への開きの大きい体部と、強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
427	壺 底部	底径 7.0	体部は直線的に外上方にのびる。体部と底部との境は円みをおびている。	体部外面はヘラミガキで底部との境は横ナデが施されている。内面は指オサエとハケメ調整を併用している。	石英・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
428	壺 底部	底径 7.0	体部は直線的に外上方にのびる。体部と底部との境は円みをおびている。	体部外面はヘラミガキで底部との境は横ナデが施されている。内面は指頭によるナデと指オサエを併用している。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい赤褐色	
429	甕 底部	底径 6.0	体部は直線的に外上方にのびる。体部と底部との境はわずかに突出している。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　褐色 外　赤褐色	
430	甕 底部	底径 5.5	体部と底部との境はわずかに突出している。	内面は指頭によるナデ調整を施している。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも赤褐色	

第17表　SB1018出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
444	甕　J 口縁部	口径 14.1	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、頸部との境付近の体部外面は横ナデ調整を施している。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　灰黄色 外　にぶい黄褐色	
445	甕　I 口縁部	口径 21.3	強く「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる口縁部と、外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く体部を持つ。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部との境付近の体部まで内外面とも横ナデ調整を施している。頸部の屈曲部直下の内面は強い横ナデによって幅広くくぼんでいる。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　橙色	
446	甕　G	口径14.2 底径 6.2	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と上半部が球形に膨らむ体部を持つ。肥厚する口縁端部は横ナデにより凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけての外面は横ナデ調整、内面は横方向のハケメ調整、体部外面は上半部がハケメとヘラミガキの併用、下半分はヘラミガキ、内面は全面にヘラケズリが施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黒色 外　褐灰色	
447	甕　I 口縁部	口径 19.0	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外方にのびる短い口縁部と、上半部が外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く体部を持つ。上下に大きく拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部との境付近の体部まで内外面とも横ナデ調整を施している。体部は外面が縦方向のハケメ調整、内面が指オサエと指頭によるナデ調整が加えられている。頸部の屈曲部直下の内面は強い横ナデによって幅広くくぼみ、外面はわずかに突出している。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面ともにぶい赤褐色	
448	甕　G 口縁部	口径 23.2	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外方にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部は拡張されず平坦に仕上げられ、頸部の屈曲部外面には指頭圧痕の施された断面三角形の貼付突帯がまわされている。	口縁部内外面は横ナデ調整を施している。	石英・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
449	高杯E 口縁部	口径 19.4	直線的に外上方にのびる体部と、屈曲部をもって上方に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部はわずかに肥厚し頂部は平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ調整を施している。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　にぶい黄橙色	
450	高杯C 口縁部	口径 19.4	わずかに内湾しながら上方に立ち上がる身の深い体部と、内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部を持つ。口縁端部は頂部がわずかにくぼみ刻目が施され口縁端部直下は強い横ナデによって幅広く凹線状にくぼんでいる。	口縁部内外面は横ナデ調整を施している。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい褐色	
451	高杯C 口縁部	口径 25.0	緩やかに内湾しながら上方に向かって大きく開く浅い皿状の体部は屈曲部を作ることなく口縁部に移行する。内外方に拡張された口縁端部の拡張部は平坦に仕上げられ、口縁部には幅広い凹線が2条めぐらされている。	体部外面はヘラミガキ、内面は調整不明。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　赤褐色 外　褐色	
452	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 28.3	緩やかに内湾しながら上方に向かって大きく開く体部は、屈曲部を形成することなく口縁部に移行している。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部内外面は横ナデ、体部内面はハケメ調整を加えている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　浅黄橙色	
453	壺 底部	底径 6.5	直線的な体部は外上方に向かって大きく開く。底部はわずかに上げ底である。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリが施されている。	石英・長石 焼成良好	内　にぶい褐色 外　明褐色	
454	甕 底部	底径 7.0	体部はやや外反しながら外上方にのびている。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は指頭によるナデ調整が施されている。	石英･雲母･結晶片岩･赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄褐色 外　明赤褐色	
455	甕 底部	底径 5.0	体部と底部の境は外方に突出している。	体部外面はヘラミガキで底部との境は横ナデが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい橙色 外　橙色	
456	高杯 脚柱部		杯部と脚台部との接合には円盤充填法が用いられている。	杯部から脚台部にかけての外面はヘラミガキが施されている。	石英･雲母･結晶片岩・長石 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい赤褐色	
457	高杯 脚部	底径 11.5	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張され、平坦に仕上げられた拡張部には凹線が3条めぐらされている。	脚台下半部内面はヘラケズリ、脚端部内外面は横ナデを施している。脚端部内面は横ナデによって幅広くくぼんでいる。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　赤褐色 外　明赤褐色	
458	高杯 脚部	底径 11.6	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張され、平坦に仕上げられた拡張部には凹線が1条めぐらされている。	脚台下半部内面はヘラケズリ、脚端部外面は横ナデを施している。脚端部内面は横ナデによって凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	
459	甕 口縁部	口径 34.5	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と上半部が膨らみの小さい体部を持つ。口縁部は端部が円く仕上げられ、間隔の不規則な刻目が加えられている。外面の頸部直下には口縁に平行する沈線が2条めぐらされている。	口縁部から体部まで内外面とも横ナデ調整が加えられている。口縁部外面には指頭圧痕の痕跡がわずかに残されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	

第18表　SB1019出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
496	壺　G 口縁部	口径 9.5	わずかに内湾するする上方への開きの小さい口縁部と平坦に仕上げられた口縁端部を持つ壺。口縁部には端部からやや離れた位置に刻目の施された断面三角形の貼付突帯が1本廻されている。	口縁部外面は横ナデ、内面はナデ。頸部外面はハケメ調整か？	石英・長石 焼成良好	内外面とも赤褐色	
497	甕　I 口縁部	口径 14.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外方にのびる短い口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が3条めぐらされている。	口縁部から体部上半の一部は内外面とも横ナデ調整。体部外面はハケメまたはヘラミガキか？内面はナデ？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも赤褐色	

第19表　SB1021出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
512	壺　F 口縁部	口径 15.6	外反しながら上方に大きく開く口縁部と、上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部を持つ広口壺。口縁端部の拡張部には凹線が3条めぐらされている。	口縁部内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面ともにぶい褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
513	壺　K 口縁部	口径 10.4	頸部の屈曲部から直線的に上方にのびる口縁部を持つ直口壺。口縁部の上方への開きは小さく、内方に拡張される端部は頂部が平坦に仕上げられている。頸部の屈曲部には指頭圧痕の加えられた貼付突帯が1本まわされている。	口縁部内外面は横ナデ調整、頸部内面は指頭によるナデが施されている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　にぶい赤褐色	
514	壺　S 口縁部	口径 14.0	内傾する口縁部を持つ無頸壺。口縁端部は平坦に仕上げられ、外面には沈線により粗雑な波状文が描かれている。	口縁部内外面はともに横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい黄褐色	
515	甕　G 口縁部	口径 19.3	「く」の字に屈曲する頸部から、わずかに外反しながら外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は拡張されることなく平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ調整、頸部内面は指頭によるナデが施されている。横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄褐色 外　にぶい褐色	
516	甕　I 口縁部	口径 17.4	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる口縁部と上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上方に拡張され、拡張部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面と体部の一部が横ナデ、体部上半部外面は縦方向のハケメ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　浅黄橙色 外　橙色	
517	高杯B？ 鉢　A？ 口縁部	口径 18.8	わずかに内湾しながら上方にのびる身の深い体部は、途中、屈曲部を作り出すことなく口縁部に移行している。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は刻目が加えられ、頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁端部は内外面とも横ナデ、口縁部内面はナデまたはヘラミガキ、体部内外面はハケメ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄褐色 外　にぶい黄橙色	
518	壺 底部	底径 15.6	直線的な体部は外上方に向かって大きく開く。	体部外面はヘラミガキ、内面は横ナデ調整。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
519	甕 底部	底径 7.0		体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが施こされる。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　浅黄橙色 外　橙色	
520	高杯 脚部	底径 9.7	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張され、拡張部は平坦に仕上げられている。	脚台内面はヘラケズリ、脚端部内面は横ナデにより凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
521	土製有孔円盤	直径3.5 孔径0.4			石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	橙色	

第20表　SB1022出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
536	壺　F 口縁部	口径 15.0	頸部から大きく外反しながら水平方向にのびる口縁部を持つ広口壺。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文が施されている。	口縁部内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黄灰色 外　黒褐色	
537	壺　F 口縁部	口径 15.4	頸部から大きく外反しながら水平方向にのびる口縁部を持つ広口壺。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文が施されている。	口縁部内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
538	壺　F 口縁部	口径 17.4	頸部から大きく外反しながら水平方向にのびる口縁部を持つ広口壺。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は中程がわずかにくぼんでいる。外反し上方を向く口縁部の内面には、斜格子目文が施されている。	口縁部内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも橙色	
539	壺　F 口縁部		頸部から大きく外反しながら水平方向にのびる口縁部を持つ広口壺。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文が施されている。	口縁部内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　褐色 外　赤褐色	
540	壺　F 口縁部	口径 12.6	細く締まった筒状の頸部から大きく外反しながら外上方にのびる口縁部を持つ広口壺。口縁端部は上方に拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ調整、頸部外面はハケメ調整がそれぞれ加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
541	壺　F 口縁部	口径 10.5	細く締まった筒状の頸部から、大きく外反しながら上方にのびる口縁部を持つ広口壺。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされ、外反し上方を向く口縁部内面には沈線により斜格子目文が描かれている。	口縁部内外面は横ナデ調整、頸部は外面がハケメ、内面が横ナデ調整がそれぞれ加えられている。	石英・結晶片岩・長石 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤褐色	
542	壺　F 口縁部	口径 10.2	細く締まった筒状の頸部から、大きく外反しながら上方にのびる口縁部を持った広口壺。口縁端部は上方に拡張され、平坦に仕上げられていている。	口縁部内外面は横ナデ調整、頸部は外面がハケメ調整がそれぞれ加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
543	壺　F 口縁部	口径18.0 体部 最大径 24.7	筒状の頸部から大きく外反しながら水平方向にのびる口縁部と、中程が強く膨らむ体部を持つ広口壺。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が３条めぐらされ、外反し上方を向く口縁部内面には沈線により斜格子目文が描かれている。頸部と体部の境には指頭圧痕の加えられた貼付突帯が１本まわされ、体部の肩部には櫛により列点文が帯状にめぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整、頸部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は上半部がハケメ、下半部が指頭によるナデ、体部外面は上半部がハケメ、下半部がハケメとヘラミガキの併用、内面は指オサエとハケメの併用、下半部はヘラケズリが行われている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	
544	壺　O 口縁端部	口径 12.5	上方に向かって緩やかに外反する口縁部を持つ壺。平坦に仕上げられた口縁端部には沈線により斜格子目文が描かれている。	口縁部から頸部にかけては外面が横ナデ調整を加えている。	石英・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい橙色 外　橙色	
545	壺　O 口縁端部	口径 10.0	細く締まった頸部からわずかに外反しながら上方に開く口縁部を持つ壺。円く仕上げられた口縁端部には、連続する刻目が加えられている。	口縁部から頸部にかけての外面はナデ調整、内面はナデまたは指頭によるナデが加えられている。	石英・結晶片岩 焼成不良	内外面ともにぶい黄褐色	
546	壺　K 口縁端部	口径 16.5	外反する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ短頸壺。下方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文が連続して付けられ、頸部の屈曲部には指頭圧痕の加えられた貼付突帯が１本まわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黄褐色 外　明赤褐色	
547	壺　K 口縁端部	口径 13.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ短頸壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜行する刻目が連続して付けられ、頸部の屈曲部には指頭圧痕の加えられた貼付突帯が1本まわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩・長石 焼成良好	内　褐色 外　にぶい赤褐色	口縁部外面に黒斑有り
548	壺　K 口縁部	口径 13.5	緩やかに外反する頸部はそのまま外上方にのび口縁部に移行する。口縁端部は肥厚して平坦に仕上げられ、頸部には指頭圧痕の加えられた貼付突帯が１本まわされている。	口縁部から頸部にかけては外面は横ナデ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　橙色	小片の為口径・傾き共に不正確
549	壺　K 口縁部	口径 12.4	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ短頸壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼみ斜線文が連続して付けられ、頸部の屈曲部には指頭圧痕の施された貼付突帯が１本まわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられているが、貼付け突帯がつけられた頸部の内面には指オサエの後ナデ調整が行われている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明褐色	
550	壺　K 口縁部	口径 10.6	緩やかに外反する頸部はそのまま外上方にのび口縁部に移行する。体部は上半部が強く膨らんでいる。口縁端部は肥厚して平坦に仕上げられ、頂部がわずかにくぼんでいる。頸部には指頭圧痕の加えられた貼付突帯が1本まわされている。	口縁端部周辺は横ナデ、他は調整不明。	石英・結晶片岩・砂粒 焼成不良	内　褐色 外　にぶい黄橙色	
551	壺　K 口縁部	口径 13.1	緩やかに外反する頸部はそのまま外上方にのび、口縁部に移行する。体部は上半部が強く膨らんでいる。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は、頂部がわずかにくぼんでいる。頸部には指頭圧痕の加えられた貼付突帯が１本まわされている。	口縁部から頸部外面にかけては外面は横ナデ、内面はハケメの後ナデ調整か？体部外面は横ナデ、内面はヘラミガキか？	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい赤褐色	
552	壺　K 口縁部	口径 12.4	緩やかに外反する頸部はそのまま外上方にのび口縁部に移行する。口縁端部は外方に拡張され平坦に仕上げられている。頸部には指頭圧痕の加えられた貼付突帯が１本まわされている。	口縁部から頸部にかけては外面は横ナデ、内面はナデ調整か？	石英・長石 焼成良好	内　にぶい橙色 外　橙色	
553	壺　K 口縁部	口径 10.4	緩やかに外反する頸部はそのまま外上方にのび口縁部へ移行する。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は、頂部がわずかにくぼんでいる。頸部には指頭圧痕の加えられた貼付突帯が１本まわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
554	壺　G	口径11.0 体部 最大径 19.7 底径 8.0 器高25.7	細く締まった筒状の頸部との境に屈曲部を持ち内湾しながら外上方にのびる受け口状の口縁部を持つ。体部は中程に最大径を持ち外方に大きく膨らんでいる。口縁端部は内外方へ拡張され、頂部はくぼんでいる。口縁部と頸部との境には刻目の加えられた断面三角形の貼付突帯が1本まわされている。	口縁部内外面は横ナデ調整、頸部から体部上半部の外面は縦方向のハケメ、内面は指頭圧痕と指頭によるナデ、体部中程の外面は横方向のヘラミガキ、内面は指オサエとハケメの併用、外面下半部は縦方向のヘラミガキ内面は縦方向のハケメ調整が行われている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　黒褐色 外　灰黄褐色	讃岐からの搬入品
555	壺　O 口縁部	口径 11.0	筒状の頸部と内湾しながら上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は縦方向のヘラミガキが加えられ、頸部内面には絞り目が残されている。	石英・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明褐色	
556	壺　O 口縁部	口径 10.0	頸部からわずかに内湾しながら上方に開く口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は縦方向のヘラミガキが加えられ、頸部内面には絞り目の痕跡が残されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい橙色 外　橙色	
557	壺　O 口縁部	口径 12.0	細く締まった頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は内方に拡張され端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部上半部にかけては横ナデ、頸部下半部の内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・砂粒 焼成良好	内　黒褐色 外　にぶい橙色	
558	甕　H 口縁部	口径 16.5	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上方にわずかに拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁外面は横ナデ調整、内面は調整不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　明黄褐色	
559	甕　G 口縁部	口径 17.4	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が球形に大きく膨らむ体部を持つ。口縁端部は上下に拡張され円く仕上げられている。	内外面とも調整は不明。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも明赤褐色	
560	甕　H 口縁部	口径 15.5	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に水平方向にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上方に拡張され平坦に仕上げられている。	口頸部内外面は横ナデ調整、体部外面は縦方向のハケメ調整の後、ナデが加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
561	甕　H 口縁部	口径 12.5	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が大きく球形に膨らむ体部を持つ。口縁端部は上方に拡張されて平坦に仕上げられ、頂部は凹線状にくぼんでいる。	口頸部は内外面とも横ナデ、体部は内外面ともハケメ調整が加えられている。強い横ナデによって体部内面は頸部との境がくぼんでいる。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　橙色 外　にぶい橙色	
562	甕　H 口縁部	口径 15.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が球形に大きく膨らむ体部を持つ。上方に拡張されて平坦に仕上げられた口縁端部は中程が凹線状にくぼんでいる。	口頸部は内外面とも横ナデ調整が施される。体部は外面が縦方向のハケメ、内面は横ナデが施されている。頸部直下の体部内面は強い横ナデが加えられ凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも橙色	
563	甕　H 口縁部	口径 14.8	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張されて平坦に仕上げられ、頂部は凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部外面は縦方向のハケメ調整。	石英・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
564	甕　G 口縁部	口径 17.3	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方に開く膨らみの小さい長胴の体部を持つ。口縁端部はわずかに肥厚し円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけての外面は横ナデ、体部外面は上半部が縦方向のハケメ、下半部がヘラミガキを加えている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　明褐色 外　褐色	
565	甕　G 口縁部	口径 16.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方に向かってのびる膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部はわずかに肥厚し円く仕上げられている。	口頸部は内外面とも横ナデ調整が施される。体部は外面が縦方向のハケメ、内面はハケメまたは板ナデが施されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
566	甕　H 口縁部	口径17.2 体部 最大径 19.0	「く」の字に屈曲する頸部から、わずかに外反しながら外上方にのびる口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方にのびる膨らみの小さい長胴の体部を持つ。口縁端部は鈍く尖らされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は上半部が縦方向のハケメ、下半部はヘラミガキ、内面はハケメ調整が全面に施されている。	石英・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
567	甕　G 口縁部	口径17.2 体部 最大径 21.0	「く」の字に屈曲する頸部から外方にのびる短い口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方にのびる膨らみの小さい長胴の体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は上半部が縦方向のハケメ、それ以下はヘラミガキ、内面は指オサエの後にハケメ調整が全面に施されている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
568	甕　H 口縁部	口径 23.4	「く」の字に屈曲する頸部とわずかに内湾しながら外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され、平坦に仕上げらている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成不良	内　にぶい赤褐色 外　黒褐色・橙色	
569	甕　H 口縁部	口径 20.5	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が大きく膨らむ体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部外面はハケメ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
570	甕　H 口縁部	口径 24.0	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部外面は縦方向のハケメ、内面は丁寧なヘラミガキが施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも暗褐色	
571	甕　G 口縁部	口径 19.6	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が緩やかに外下方に向かってのびる膨らみの小さい長胴の体部を持つ。わずかに肥厚する口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては横ナデ調整、体部内外面はハケメ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
572	甕　E 口縁部	口径 26.6	「く」の字に屈曲する頸部と、わずかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部はわずかに肥厚し平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が施されている。	石英・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
573	甕　E 口縁部	口径 25.0	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部はわずかに肥厚し平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデが施されているが、外面には指オサエの痕跡が残されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	
574	甕　H 口縁部・底部	口径17.5 体部 最大径 17.3 底径 5.9	「く」の字に屈曲する頸部から水平方向にのびる短い口縁部と、肩部を持たず膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は上方に拡張され、凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部外面は上半部が縦方向のハケメ下半部がヘラミガキ、内面は上半部が指オサエとハケメ調整下半部がヘラケズリをそれぞれ施している。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　赤褐色 外　明赤褐色	
575	甕　I 口縁部	口径 18.2	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く肩の膨らみの強い体部を持つ。口縁端部は上下に拡張され凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデとナデ調整、体部は外面が板状工具による縦方向のナデ、内面がハケメ調整が施される。頸部の屈曲部外面は指頭による横ナデが強く加えられ、幅広く凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・結晶片岩・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい褐色 外　にぶい橙色	
576	甕　H 口縁部	口径 22.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く肩の膨らみの強い体部を持つ。口縁端部は上下に拡張されて平坦に仕上げられ、斜線文が付けられている。また、頸部の屈曲部外面には指頭圧痕の施された貼付突帯が1本まわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデとナデ調整、体部は外面が板状工具による縦方向のナデ、内面がハケメ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　浅黄橙色	
577	甕 口縁部	口径 34.0	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石・砂粒 焼成不良	内　にぶい赤褐色 外　にぶい褐色	
578	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 34.2	緩やかに内湾しながら外上方にのびる浅い皿状の体部と、内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部を持つ。口縁部外面には凹線が5条めぐらされている。	体部内面にはナデとヘラミガキ調整が施されている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい橙色 外　赤褐色	外面に黒斑有り
579	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 26.0	内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部に凹線状のくぼみが2条めぐらされている。口縁部外面には凹線が2条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒・砂岩 焼成良好	内　橙色 外　にぶい黄橙色	
580	高杯B？ 鉢　A？ 口縁部	口径 23.0	緩やかに内湾しながら外上方にのびる比較的身の深い体部と、内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部を持つ。口縁端部は頂部に凹線状のくぼみが2条めぐらされ、刻目が加えられている。	口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はヘラミガキまたはナデ調整か？内面はハケメ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤色	
581	鉢　？ 口縁部	口径 12.0	直立する体部は屈曲部を持たず口縁部に移行する。口縁部はわずかに肥厚し端部は平坦に仕上げられている。	口縁部内外面はナデ調整が施されている。	石英・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
582	鉢　？ 口縁部	口径 15.9	上方に向かって大きく開く口縁部は、端部が内外方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも赤褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
583	壺 体部	体部 最大径 17.4	頸部には断面三角形の貼付突帯が１本まわされている。体部は下半部が球形に大きく膨らんでいる。	体部外面の調整は不明。内面は上半部が指頭によるナデ調整、下半部が板状工具によるナデと指頭によるナデ調整を併用している。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　明黄橙色 外　橙色	
584	壺 頸部	－	口縁部は頸部から外反しながら上方に向かって大きく開く。頸部には指頭圧痕の施された貼付突帯が１本まわされている。	口縁部外面は横ナデ、頸部は縦方向のハケメ、内面は指オサエとナデ調整を併用している。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも褐色	
585	壺 体部	－	筒状の頸部と、上半部が「ハ」の字に開く外下方への膨らみの大きい体部を持っている。	頸部外面は横ナデ、内面はヘラミガキとナデを併用する。体部外面はヘラミガキ、内面は頸部との境付近が指頭によるナデ調整、上半部は指オサエとハケメ調整を併用する。	石英・長石 焼成良好	内　黒褐色 外　明黄褐色	
586	壺 体部	体部 最大径 22.0	大きく球形に膨らむ体部を持つ。体部上半には櫛先による列点文が付けられている。	体部外面は上半部がハケメ調整、中程が横方向のヘラミガキ。内面は指オサエとハケメ調整を併用している。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄褐色 外　にぶい黄橙色	
587	壺 底部	底径 6.3	体部下半が大きく球形に膨らんでいる。	体部内面には指オサエとナデ調整が施されている。	石英･雲母･長石・赤色斑粒 焼成良好	内　褐灰色 外　黄褐色	
588	壺 底部	体部 最大径 26.7 底径 7.0	体部は底部との境から緩やかに内湾しながら外上方に向かってのびている。	体部外面はヘラミガキか？体部内面は指頭によるナデとヘラ削の後にハケメ調整を加えている。	石英･雲母･結晶片岩・長石 焼成良好	内　黒褐色 外　にぶい黄橙色	外面に黒斑有り
589	壺 底部	底径 9.0	体部は底部との境から直線的に外上方にのびる。底部は平底。	体部外面には縦方向のヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黄橙色 外　橙色	
590	壺 底部	底径 9.8	体部は底部との境から直線的に外上方にのびる。底部は平底。	体部外面には縦方向のヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも浅黄橙色	
591	壺 底部	底径 9.1	体部は底部との境から直線的に外上方にのびる。底部は平底。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・結晶片岩・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明赤褐色	外面に黒斑有り
592	壺 底部	底径 9.0	体部は底部との境から直線的に外上方にのびる。底部は平底。	体部外面には縦方向のヘラミガキが加えられている。	石英･雲母･結晶片岩・砂粒 焼成良好	内　にぶい褐色 外　にぶい赤褐色	外面体部下位～底部に黒斑有り
593	壺 底部	底径 8.0	体部は底部との境から直線的に外上方にのびる。底部は平底である。	体部外面には横方向のヘラミガキ、内面には指頭圧痕がそれぞれ加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　黒褐色 外　橙色	
594	甕 底部	底径 5.7	体部は直線的に外上方にのびる。底部と体部との境はわずかに突出している。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は指頭による縦方向にナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも赤褐色	
595	甕 底部	底径 5.6	体部は直線的に外上方にのびる。体部と底部の境はわずかに突出している。	体部外面には縦方向のヘラミガキが加えられている。	石英・結晶片岩･長石･砂粒 焼成良好	内　褐色 外　赤褐色	
596	甕 底部	底径 6.2	体部は直線的に外上方にのびる。体部と底部の境はわずかに突出している。	体部外面には縦方向のヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・長石・砂粒 焼成良好	内外面ともにぶい褐色	
597	甕 底部	底径 5.8	体部は直線的に外上方にのびる。体部と底部の境はわずかに突出している。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は同じく縦方向のヘラケズリが加えられている。	石英･雲母･結晶片岩・長石 焼成良好	内　黒褐色 外　橙色	
598	甕 底部	底径 5.0	体部は底部との境から直線的に外上方にのびる。底部は平底。	体部内外面にはヘラミガキが施されている。	石英・結晶片岩・長石 焼成良好	内　灰黄褐色 外　赤褐色	
599	高杯 脚柱部	－	杯部と脚台部の接合には円盤充填法が用いられている。	杯部は内外面ともヘラミガキ。脚台部外面はヘラ磨き、内面は指頭によるナデ。	石英・結晶片岩・長石 焼成良好	内　明赤褐色 外　にぶい褐色	
600	高杯 脚柱部	底径 8.3	脚台部上半は太く、外下方に向かって直線的にのびる。脚端部は拡張されることなく円く仕上げられている。	脚台部内面は指頭によるナデ調整が施されている。	石英･雲母･結晶片岩・長石 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　明黄褐色	
601	台付甕 脚部	底径 7.0	脚台部は低く、外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は円く仕上げられている。	体部から脚台部外面にかけてはヘラミガキ、体部内面と脚台部内面はナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
602	台付鉢 脚部	底径 9.0	脚台部は低く、外下方への開きが小さい。脚端部は内外方に拡張され平坦に仕上げられている。	脚台部外面はハケと横ナデ調整、内面は横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　褐灰色 外　灰黄褐色	

第21表　SB1023出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
636	壺 体部	－	「く」の字に屈曲する頸部と、わずかに内湾しながら外下方に向かって開き大きく膨らむ体部を持っている。	頸部の屈曲部外面は強い横ナデによってくぼんでいる。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　にぶい黄褐色	

第22表　SB1024出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
637	壺　D 口縁部	口径 9.9	筒状の頸部と外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部内外面と頸部外面は横ナデ調整、頸部内面は指頭によるナデ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明褐色 外　黒褐色	
638	壺　G 口縁部	口径 12.0	わずかに内湾しながら外上方にのびる、上方への開きの大きい漏斗状の口縁を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられ頂部はわずかにくぼむ。口縁部に上下２段にまわされた断面三角形の貼付突帯には、ヘラ先による刻目が加えられている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　明黄橙色	
639	壺　G 口縁部	口径 10.2	強く内湾する上方への開きの大きい口縁を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部外面は横ナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい橙色 外　橙色	
640	甕　G 口縁部	口径 14.0	「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持つ。口縁端部はわずかに肥厚し平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。体部内外面の調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
641	甕　I 口縁部	口径 16.0	「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる直線的な口縁部を持つ。口縁端部は肥厚し、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整を加えている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
642	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 21.2	内湾する体部と内外方に拡張された口縁端部を持ち、口縁端部は頂部がわずかにくぼむ。口縁部には凹線がめぐらされている。	口縁端部は横ナデ、内面はナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　明赤褐色 外　褐色	
643	高杯 鉢 口縁部	口径 24.1	内湾する体部と内外方に拡張された口縁端部を持ち、口縁端部は頂部がわずかにくぼむ。口縁部には凹線が多段にめぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整、体部内面はナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　赤褐色 外　明黄褐色	
644	壺 底部	底径 8.4	体部は直線的に外上方にのびている。	調整は不明。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
645	甕 底部	底径 7.8	直線的に外上方にのびる体部は底部との境がわずかに外方に突出している。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・砂粒 焼成良好	内外面とも橙色	
646	甕 底部	底径 6.1	直線的に外上方にのびる体部は底部との境がわずかに外方に突出している。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　にぶい黄橙色	

第23表　SB1025出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
664	壺　N 口縁部	口径 10.0	上方への開きの小さい筒状の口縁を持つ壺。口縁端部は平坦に仕上げられ、ヘラ先による刻目が加えられている。	口縁部内外面から頸部外面にかけては丁寧な横ナデ、頸部内面はナデ調整を施している。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
665	甕　I 口縁部	口径 12.7	「く」の字に屈曲する頸部と外上方にのびる直線的な口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から体部上半部の一部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部内面はナデまたはヘラケズリか？	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　明赤褐色	
666	甕 底部	底径 7.8	体部は底部との境で上方に直立している。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
667	甕 底部	底径 4.2	上げ底の底部と体部の境は円みをおびている。	内面は指頭によるナデか？	石英・長石・砂粒 焼成不良	内　にぶい赤褐色 外　赤褐色	

第24表　SB1026出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
673	壺　F 口縁部	口径 20.9	外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。口縁端部は上下に拡張され、凹線が３条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　褐色	
674	壺　F 口縁部	口径 19.5	外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。口縁端部は上下に拡張され、凹線が３条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　明褐色 外　暗赤褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
675	壺　F 口縁部	口径 17.0	外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。口縁端部は上下に拡張され凹線が３条めぐらされている。	口縁部から頸部外面にかけては横ナデ調整、頸部内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	外面口縁端部に黒斑有り
676	壺　L 口縁部	口径 11.7	外反する短い口縁部をもつ短頸壺。口縁端部は上下に拡張され凹線が２条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい黄橙色	
677	壺　F 口縁部	口径 10.8	細く締まった頸部から外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられ、凹線が２条めぐらされている。	口縁部内外面から頸部内面にかけては横ナデ、頸部外面はハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　橙色 外　にぶい橙色	
678	壺　R	口径14.0 体部 最大径 22.0 底径 7.0 器高32.5	筒状の頸部と緩やかに外反する短い口縁部を持つ長頸壺。口縁端部は上方に拡張され、凹線が２条めぐらされている。体部は中央が大きく膨らみ球形を呈する。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、頸部内面は指頭によるナデ、体部外面はヘラ磨き、内面は指オサエとヘラ削りが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　黒褐色 外　橙色	外面体部上位に黒斑有り、煤付着
679	壺　N 口縁部	口径 8.9	上方への開きの小さい筒状の口縁を持つ直口壺。口縁端部は平坦に仕上げられ、口縁部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部内外面から頸部内面にかけては横ナデ、頸部外面はヘラミガキ調整が加えられている。	石英･雲母･長石・赤色斑粒 焼成不良	内　褐色 外　明褐色	外面に黒斑有り
680	甕　J 口縁部	口径 15.7	外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁部内外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　明褐色 外　にぶい赤褐色	
681	甕　J 口縁部	口径 19.8	外反する短い口縁部は端部が上方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられ、頸部内面には指頭圧痕が残されている。体部上半の内面は頸部との境までヘラケズリが加えられている。	石英･雲母･結晶片岩・長石 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　赤褐色	口縁端部に黒斑有り
682	甕　J 口縁部	口径 18.1	外反する短い口縁部は端部が上方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部内外面はナデまたは横ナデ調整、頸部の屈曲部から体部上半にかけての内面にはナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい橙色	
683	甕　J 口縁部	口径16.8 体部 最大径 24.5	外反する短い口縁部は端部が上方に拡張され平坦に仕上げられている。口縁端部の拡張部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は全面にハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい赤褐色	外面に煤付着
684	甕　J 口縁部	口径 17.1	外反する短い口縁部は端部が上方に拡張され平坦に仕上げられている。口縁端部の拡張部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。体部上半の外面はハケメ調整、内面は頸部との境までヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　黄褐色	
685	甕　J 口縁部	口径 17.5	外反する短い口縁部は端部が上下に拡張され拡張部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。体部上半の外面はハケメ調整、内面は頸部との境までヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面ともにぶい褐色	
686	甕　I 口縁部	口径 17.7	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部は、端部が上方に拡張され、拡張部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
687	甕　J 口縁部	口径 23.0	外反する短い口縁部は端部が上下に拡張されて平坦に仕上げられ、凹線が３条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい橙色	
688	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 22.8	緩やかに内湾する体部と内外方に拡張された口縁端部を持つ。口縁端部は頂部がわずかに上方に突出する。口縁部には複数の凹線がめぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整か？	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　褐色 外　灰褐色	
689	高杯D 口縁部	口径 24.8	緩やかに内湾する浅い体部は口縁端部近くで内側に巻き込まれるように内湾する。口縁端部は内外方に拡張され頂部は平坦に仕上げられる。口縁部には凹線がめぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・赤色斑粒 焼成良好	内　褐色 外　黒色	
690	高杯D 口縁部	口径 26.2	緩やかに内湾する浅い体部は口縁端部近くで内側に巻き込まれるように内湾する。口縁端部は内外方に拡張され頂部は平坦に仕上げられる。口縁部には凹線がめぐらされている。	口縁部内面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　赤褐色 外　明赤褐色	剥離激しい為、口径傾き共に不正確
691	壺 底部	底径 8.4	体部は底部との境から上方に大きく開きながら直線的に外上方にのびている。底部と体部の境は円みをおびている。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリか？	石英・雲母・長石・砂粒 焼成良好	内　暗赤褐色 外　にぶい赤褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
692	壺 底部	底径 9.4	体部は底部との境から上方に大きく開きながら直線的に外上方にのびている。底部と体部の境は円みをおびている。	体部内外面とも調整は不明。	石英・結晶片岩・砂粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	
693	壺 底部	底径 9.6	体部は底部との境から上方に大きく開きながら直線的に外上方にのびている。	体部外面はヘラミガキか？内面はヘラケズリ。体部と底部との境は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　黒褐色 外　橙色	
694	壺 底部	底径 6.8	体部は底部との境から上方に大きく開きながら直線的に外上方にのびている。	体部外面はヘラミガキとハケメ調整を併用する。内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　青黒色 外　赤褐色	
695	壺 底部	底径 5.7	体部は底部との境から上方に大きく開きながら直線的に外上方にのびている。底部と体部の境は円みをおびている。	体部外面はハケメ調整、内面は調整不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黄灰色 外　橙色	
696	壺 底部	底径 8.1	体部は底部との境から上方に大きく開きながら直線的に外上方にのびている。	外面は体部と底部の境に横ナデを加えている。内面はヘラケズリ調整を行っている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　にぶい橙色	
697	壺 底部	底径 7.8	体部は底部との境から直立気味に上方にのびている。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリか？内面はヘラケズリが施されている。	石英・雲母・砂粒 焼成良好	内　橙色 外　赤褐色	
698	甕 底部	底径 5.8	体部は底部との境から直線的に外上方にのびている。	体部外面はヘラミガキ、内面は指頭圧痕が加えられている。	石英・雲母 焼成不良	内　灰黄褐色 外　にぶい黄橙色	
699	甕 底部	底径 8.0	体部は底部との境から直線的に外上方にのびている。体部と底部との境はわずかに外方に突出している。	体部内外面とも調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
700	高杯 脚柱部	口径 8.8	杯部と脚柱部の接合部は円盤充填法を用いられている。	脚台上半部内面には絞り目の痕跡が残されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　暗褐色 外　黒褐色	
701	高杯 脚部	底径 8.8	脚は外下方に向かって「ハ」の字にのびる。脚端部は外上方に拡張され拡張部には凹線がめぐらされている。	脚台下半部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ、脚端部は横ナデ調整が加えられている。脚端部の外面裾部と内面は横ナデによって凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　暗褐色 外　黒褐色	

第25表　SB1027出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
731	甕　E 口縁部	口径 18.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に上方にのびる口縁部と、上半部が膨らむ体部を持つ。肥厚し円く仕上げられた口縁端部は中程がわずかにくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は縦方向のヘラミガキ調整を加えている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも褐色	
732	甕　E 口縁部	口径 20.8	外反する頸部から外上方にのびる短い口縁部と球形に膨らむ体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整を加えている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　黒褐色 外　赤褐色	
733	甕 底部	底径 9.8	体部は底部との境から直線的に外上方にのびている。底部は軽い上げ底である。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黄橙色 外　赤橙色	
734	甕 底部	底径 6.0	体部は底部との境から直線的に外上方にのびている。底部は軽い上げ底である。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	
735	甕 底部	口径 5.0	体部は底部との境から直線的に外上方にのびている。体部と底部の境をわずかに外方に突出し底部は軽い上げ底である。	調整は外面は不明だが内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも橙色	
736	甕 底部	底径 5.9	体部は底部との境から直線的に外上方にのびている。	体部外面にはヘラミガキが加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　黒褐色 外　褐色	
737	甕 底部	底径 6.0	体部は底部との境からわずかに外反しながら上方にのびている。底部は軽い上げ底である。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい褐色 外　橙色	
738	土製有孔円盤	直径 4.3 孔径 0.5			石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	橙色	

第26表　SA1001出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
742	壺　D 口縁部	口径 13.7	細く締まる筒状の頸部と大きく外反しながら上方にのびる口縁部を持つ壺。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
743	甕　I 口縁部	口径 14.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が3条めぐらされ、頸部の屈曲部外面には指オサエの施された貼付突帯が1本まわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキとハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黄灰色 外　黒褐色	
744	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 16.8	緩やかに内湾しながら上方にのびる体部は屈曲部を作ることなくそのまま口縁部に移行する。口縁端部は外方に拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、体部内面はヘラミガキか？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　黄灰色	
745	高杯A 口縁部	口径 21.0	わずかに内湾しながら上方にのびる体部と、「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部内面はヘラ磨キが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　橙色 外　明褐色	
746	壺　F 口縁部	口径 14.0	外上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。下方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	調整は不明。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	
747	甕　I 口縁部	口径 17.5	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部屈曲部直下の体部まで内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい赤褐色	
748	甕　I 口縁部	口径 18.5	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上方に拡張され凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
749	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 22.0	外上方に向かってのびる身の深い直線的な体部はそのまま口縁部に移行する。内外方に拡張される口縁端部は頂部が平坦に仕上げられている。口縁部には幅広い凹線が2条めぐらされている。	口縁部外面は横ナデ、体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は全面横方向のヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	
750	壺 底部	底径 13.5		体部外面にはヘラミガキが施こされる。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤褐色	

第27表　SA1002出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
751	甕　I 口縁部	口径 16.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部屈曲部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリの後にナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　明黄褐色 外　明赤褐色	
752	高杯B？ 鉢　A？ 口縁部	口径 24.5	緩やかに内湾しながら外上方にのびる身の浅い体部はそのまま口縁部に移行している。内外方に大きく拡張され、頂部が平坦に仕上げられた口縁端部には刻目が施されている。	口縁部内外面は横ナデ、体部外面はハケメの後にヘラミガキ、内面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　明赤褐色	

第28表　SK1006出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
765	壺　L 口縁部	口径 11.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ短頸壺。口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけて内外面とも横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　褐色 外　明赤褐色	
766	壺 底部	底径 8.5	体部は底部との境から直線的に外上方にのびている。	体部外面はヘラミガキとハケメ調整を併用する。内面はナデ調整を加えている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明赤褐色	

第29表　SK1011出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
767	甕　H 口縁部	口径 15.9	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方に向かってのびる膨らみの小さい長胴の体部を持つ。器壁の薄い口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部外面はハケメ調整、内面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成不良	内　明赤褐色 外　褐色	
768	甕　H 口縁部	口径 18.8	「く」の字に屈曲する頸部から、緩やかに内湾しながら外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開くやや肩の張る形態の体部を持つ。器壁の薄い口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部外面は縦方向のハケメ調整、内面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい橙色 外　橙色	

第30表　SK1022出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
769	壺　I 口縁部	口径 24.9	頸部から徐々に開きながら直線的に外上方にのびる口縁部は、途中から大きく外反し端部が下方に垂下する。口縁端部の平坦面には沈線により斜格子目文が描かれる。口縁部内面には刻目の加えられた貼付突帯がまわされる。口縁部外面直下と頸部には貼付突帯がそれぞれ1本ずつまわされ、縦方向の2本一組の突帯によってつながれている。	口縁部内面から頸部内面にかけては指オサエの後に板状工具またはハケメによる調整が加えられている。頸部外面はナデ調整。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも橙色	

第31表　SK1026出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
770	壺　J 口縁部	口径 16.7	筒状の頸部から大きく外反する口縁を持つ広口壺。口縁端部外面に粘土帯が貼り付けられて肥厚し、平坦に仕上げられた口縁端部は中央が凹線凹線状にくぼんでいる。上方を向く口縁内面には綾杉文が描かれ、頸部には櫛描の平行線文がつけられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　明黄褐色 外　にぶい黄橙色	
771	壺　B 口縁部	口径 13.5	細い筒状の頸部から外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は鈍く尖らされている。	頸部内面は指頭による縦方向のナデ調整か？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　褐色 外　橙色	
772	壺　N	口径 8.5 体部 最大径16.0	直立する筒状の口縁部と球状に膨らむ体部を持つ直口壺。口縁端部は円く仕上げられている。	体部上半の内面が指頭によるナデ調整が施されている可能性がある。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　赤褐色 外　にぶい黄橙色	

第32表　SK1027出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
773	壺　D 口縁部	口径 16.9	筒状の頸部と大きく外反しながら上方に向かって開く口縁部を持つ広口壺。肥厚する口縁端部は平坦に仕上げられ、口縁内面には円形浮文がつけられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　灰褐色 外　にぶい赤褐色	
774	甕　H 口縁部	口径 23.0	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ甕。口縁端部は上下に拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁部から体部上半にかけては外面はナデ調整、内面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも明赤褐色	
775	壺 体部		球形に膨らむ体部上半を平行する沈線で区画し、その中に斜格子目文が描かれている。	体部外面はハケメとヘラミガキ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　黒褐色 外　褐色	
776	壺 体部		体部上半には櫛描による波状文と粘土の貼り付けによって円形浮文がつけられている。	内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　明褐色	
777	壺 底部	底径 10.0	体部は底部との境でわずかに外方に突出している。底部は軽い上げ底である。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリが施されている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　にぶい黄橙色	
778	壺 底部	底径 6.2	体部は底部との境から大きく開きながら直線的に外上方にのびている。底部は軽い上げ底である。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は指頭によるナデ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも褐灰色	
779	甕 底部	底径 5.5	体部は底部との境でわずかに外方に突出している。底部は軽い上げ底である。	調整は不明。	石英 焼成不良	内　浅黄橙色 外　にぶい黄橙色	

第33表　SK1029出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
780	甕　H 口縁部	口径 20.6	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる口縁と、上半部が球形に膨らむ体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部から頸部外面にかけては横ナデ、体部外面は縦方向のハケメ調整、口縁部から体部内面にかけてはナデ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黄灰色 外　暗灰色	

第34表　SK1034出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
781	甕　I 口縁部	口径 16.0	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる口縁部と上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が3条めぐらされている。	口縁から頸部にかけて内外面は横ナデ、体部外面はナデ、内面は横ナデ調整が施されている。頸部の屈曲部外面は強い横ナデによって凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
782	甕　I 口縁部	口径 17.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上方に拡張され平坦に仕上げられ、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部外面は平行タタキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい赤褐色	

第35表　SK1035出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
783	甕　E 口縁部	口径 19.4	外反する頸部からそのまま続く短い口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方に向かってのびる膨らみの小さい長胴の形態の体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ、刻目が加えられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメとヘラミガキ、内面はハケメとナデ調整をそれぞれ併用している。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい赤褐色	
784	甕　E 口縁部	口径22.5 体部 最大径 26.0	「く」の字に屈曲する頸部から外反しながら上方にのびる短い口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方に向かってのびる膨らみの小さい長胴の形態の体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部内外面はそれぞれヘラミガキ調整を加えている。	石英・雲母・結晶片岩・砂礫 焼成不良	内　明黄褐色 外　にぶい橙色	
785	高杯A	口径12.0 底径 6.0 器高	緩やかに内湾する体部は途中口縁部との境で外反し大きく外上方に開いている。脚部は外反しながら外下方に向かって開いている。	体部外面はヘラ磨き、内面はナデ調整を加えている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　にぶい橙色	
786	甕 底部	底径 8.8	体部は底部との境から外上方に向かって直線的にのびている。上げ底の底部と体部の境はわずかに外方に突出している。	体部外面はヘラミガキを加えている。内面は調整不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　灰黄褐色 外　橙色	外面に黒斑有り
787	甕 底部	底径 8.0	体部は底部との境から外上方に向かって直線的にのびている。底部は軽い上げ底になっている。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリを加えている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　橙色	
788	甕 底部	底径 5.9	体部は底部との境から緩やかに外反しながら上方にのびている。底部と体部の境はわずかに外方に突出している。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　褐灰色 外　橙色	
789	甕 底部	底径 6.4	体部は底部との境から緩やかに外反しながら外上方に向かってのびている。底部は軽い上げ底になっている。	内面はヘラケズリの後にナデ調整を加えている。	石英・長石・結晶片岩 焼成不良	内　明黄褐色 外　橙色	
790	杯 脚柱部	－		脚台部上半は外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリを加えている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内（杯部）橙色 （脚部）灰褐色 外にぶい赤褐色	外面に黒斑有り

第36表　SK1047出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
791	壺　F 口縁	口径 12.6	筒状の頸部から外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。上方に拡張され平坦に仕上げられる口縁端部には、凹線が２条めぐらされている。筒状の頸部には断面三角形の突帯がタガ状に２本まわされ、突帯にそって穿孔が施されている。	口縁部から頸部外面は横ナデ調整、頸部内面は指頭による縦方向のナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも明黄褐色	
792	甕 底部	底径 6.2		体部外面はヘラミガキ、内面もヘラミガキか？	石英・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも褐色	

第37表　SK1076出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
797	壺　G 口縁部	口径 10.0	内湾しながら上方に大きく開く受け口状の口縁部を持つ壺。内方に拡張される口縁端部は平坦に仕上げられ口縁部と頸部との境には断面三角形の貼付突帯が1本まわされている。	口縁部内外面とも横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい橙色 外　にぶい黄橙色	

第38表　SK1077出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
798	壺　F 口縁部	口径 12.2	筒状の頸部から大きく外反しながら水平方向にのびる口縁部をもつ広口壺。肥厚する口縁の端部は平坦に仕上げられ、凹線が2条めぐらされている。	口縁内外面は横ナデ、頸部外面はヘラミガキ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
799	甕　I 口縁部	口径 15.2	「く」の字に屈曲する頸部から水平方向に直線的にのびる口縁部と、上半部が球形に大きく膨らむ体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒・砂粒 焼成不良	内外面とも橙色	

第39表　SK1079出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
800	壺　F 口縁部	口径12.0 体部 最大径 17.3	筒状の頸部から外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部と、中程が球形に膨らむ体部を持つ広口壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ、外面は頸部から体部上半にかけてがハケメ調整、体部中程は横方向のヘラミガキ、体部下半は縦方向のヘラミガキ、内面は頸部から体部下半まで指頭によるナデと指頭圧痕が併用されている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
801	甕　I	口径15.4 体部 最大径 21.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と、上半部が球形に膨らむ体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面ともヘラミガキ、体部外面は縦方向のヘラミガキ内面はヘラケズリが施されている。	石英・雲母・長石・砂粒 焼成不良	内　赤褐色 外　明赤褐色	
802	壺 底部	底径 5.5	体部は外上方に向かって直線的にのびている。	調整は不明。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
803	甕 底部	底径 6.2	体部は底部との境から緩やかに外反しながら上方にのびている。底部と体部の境はわずかに外方に突出している。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　にぶい黄橙色	798と同一個体か？

第40表　SK1082出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
804	高杯C	口径26.3 底径 9.8	緩やかに内湾しながら外上方に向かって大きく開く皿状の浅い体部は屈曲部を持たず口縁部に移行する。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。口縁部には幅広の凹線が2条めぐらされている。緩やかに外反しながら外下方に向かってのびる脚台部は脚端部が上方に拡張され凹線が2条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケメ調整、脚台部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ、脚端部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。脚端部内面は横ナデにより凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明赤褐色	

第41表　SK1112出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
805	壺　E 口縁部	口径 19.1	細く締まった頸部から外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部と口縁部内面には沈線による斜格子目文が描かれ、櫛による連続刺突も加えられる。頸部には断面三角形の貼付け突帯が多段にまわされている。	頸部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のヘラミガキが施されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも橙色	内面に黒斑有り
806	壺 頸部	－	細く締まった頸部から、外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。頸部には断面三角形の貼付突帯が1本まわされている。	頸部外面の調整は不明。内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　赤褐色 外　明赤褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
807	壺 体部		よく締まった頸部から緩やかに内湾しなが外下方に向かって開く体部を持つ。頸部から体部にかけては平行する沈線で区画され、区画内には櫛描波状文や斜格子目文が描かれている。	体部外面は縦方向のハケメ、内面は指オサエとナデ調整を併用している。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　黄橙色	802と同一個体
808	壺 体部	体部 最大径 14.5	膨らみが小さい長胴の形態の体部を持つ。中央には体部を二分するように櫛描の平行線文が描かれ、これに向かって頸部から緩やかに曲線を描く縦方向の櫛描文がのびている。	体部外面は上半部がナデ、下半部がヘラミガキとナデの併用、体部内面は指オサエとナデ調整を併用している。	石英・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　赤色	外面に黒斑有り
809	壺 体部	体部 最大径 21.7	細く締まった頸部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方に向かって開く体部は、下半部が球形に大きく膨らんでいる。	外面は頸部が縦方向のハケメ、体部上半が縦方向のヘラミ ガキ、中央付近から下半部は横方向のヘラミガキが加えられる。内面は頸部に指頭によるナデが加えられている以外は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　褐灰色 外　にぶい黄橙色	外面に黒斑有り
810	壺 体部	−	細く締まった頸部と、中央部が球形に大きく膨らむ体部を持つ。体部にはヘラ先による斜行する刺突が中央部付近を一周している。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面から体部上半部にかけては外面が縦方向のハケメ調整、内面は頸部の屈曲部が指頭によるナデ、体部が指頭圧痕とハケメ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
811	壺 底部	底径 8.4	体部は底部との境から外上方に向かって大きく開きながら直線的にのびている。	体部外面はヘラミガキと横ナデが併用され、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　橙色 外　褐灰色	

第42表　SK1114出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
812	壺　F 口縁部	口径 17.3	外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。口縁端部は上下に拡張され、凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　橙色	
813	壺　F 口縁部	口径 14.6	外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。口縁端部は上下に拡張され、凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　にぶい黄橙色	
814	甕　H 口縁部	口径 15.0	外反する頸部から外上方に向かってのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張された口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部上半部の外面は板状工具などによるナデまたはハケ、内面はヘラケズリが施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
815	甕　C 口縁部	口径 15.6	大きく外反する頸部から水平方向にのびる口縁部と、上半部がわずかに内湾しながら外下方に向かってのびる殆ど膨らみのない体部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
816	甕　E 口縁部	口径 14.0	大きく外反する頸部から外上方に向かってのびる口縁部と、上半部が強く球形に膨らむ体部を持つ。肥厚する口縁端部は平坦に仕上げられ、中程がわずかにくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部上半部の外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリが施されている。	石英・雲母 焼成良好	内　橙色 外　暗赤褐色	
817	甕　G 口縁部	口径 19.7	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方に向かってのびる口縁部と、上半部が強く球形に膨らむ体部を持つ。肥厚する口縁端部は平坦に仕上げられ、中程がわずかにくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキ、内面は頸部に接する部分がヘラケズリと指頭によるナデの併用、それ以下は縦方向のヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　暗赤褐色 外　赤褐色	
818	甕　I 口縁部	口径 12.2	「く」の字に屈曲する頸部から、わずかに内湾しながら水平方向にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部内外面は横ナデ、体部上半は外面が縦方向のハケメ、内面はヘラケズリが施されている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも明褐色	
819	甕　I 口縁部	口径 17.4	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が球形に膨らむ体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部上半は外面がハケメまたはヘラミガキ、内面が指オサエとナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　橙色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
820	甕　I 口縁部	口径 13.9	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながらに外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く肩の張る体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部上半は外面が縦方向のハケメ、内面は指頭によるナデとヘラミガキが施されている。頸部の屈曲部直下は内面に強く横ナデが加えられているため外面はわずかに外方に突出している。	石英・雲母・結晶片岩・砂粒 焼成不良	内外面とも明赤褐色	
821	甕　I 口縁部	口径 15.6	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　灰褐色 外　にぶい赤褐色	
822	甕　I 口縁部	口径 14.8	「く」の字に屈曲する頸部から、わずかに内湾しながらに外方にのびる口縁部と、上半部が球形に膨らむ体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が２条めぐらされている	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部内面は頸部近くがヘラミガキとナデ、それ以下はヘラケズリが施されている。頸部屈曲部直下は内面に強く横ナデが加えられているため外面はわずかに外方に突出している。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　橙色 外　赤色	
823	高杯B？ 鉢　A？ 口縁部	口径 26.3	緩やかに内湾しながら上方に大きく開く杯部は、口縁端部が外方に拡張されている。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部内外面は横ナデ、体部内外面はヘラミガキ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　赤褐色 外　褐色	
824	甕 体部	－	「く」の字に屈曲する頸部と大きく球形に膨らんだ体部を持つ。肩部にヘラによる斜行線文が連続して施されている。	調整は不明	石英・雲母・長石 焼成不良	内　にぶい橙色 外　明褐色	
825	甕 底部	底径 7.3	体部は底部との境からわずかに外反しながら上方にのびている。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリの後にナデ調整が加えられている。	石英・雲母・砂粒 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
826	甕 底部	底径 6.8	体部は底部との境からわずかに外反しながら上方にのびている。	体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい赤褐色	
827	高杯 脚柱部	－		脚台部上半の外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも赤褐色	

第43表　SK1117出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
836	甕　I 口縁部	口径 18.5	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら水平方向にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメの後ナデ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも橙色	
837	高杯 脚部	底径 9.0	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開き、脚端部は上方に拡張されている。	外面は横ナデ、内面は下半部がヘラケズリ、脚端部が横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　橙色 外　暗赤褐色	

第44表　SK1118出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
838	不明土製品	－	側面部が緩やかな弧を描く厚い盤状の土製品。表面には櫛による幾何学型の文様が描かれているようだが判然としない。	ヘラ磨きか？	石英・赤色斑粒 焼成良好	灰白色	

第45表　SK1124出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色調	備考
839	壺　H 口縁部	口径 17.0	外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張され中央部が凹線状にくぼんでいる。頸部の屈曲部には、指頭圧痕が２列に施された貼付突帯が１本まわされている。	外面は口縁部から頸部上半が横ナデ、それ以下は縦方向のハケメ調整、内面は口縁部から頸部全面にかけてが横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　明褐色 外　褐色	

第46表　SX1001出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
876	甕　I	口径16.5 体部 最大径 24.6 底径 5.6	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に水平方向にのびる口縁部と、肩部が球形に膨らむ倒卵形の体部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部上半は外面がハケメ調整、頸部屈曲部直下の内面は強い横ナデが加えられて凹線状にくぼむため、外面はわずかに外方に突出している。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　明褐色 外　黒褐色	

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
878	甕 体部	－	体部上半は「く」の字に屈曲する頸部から外下方に向かって「ハ」の字に開いている。	体部内面はヘラミガキ調整か？外面の調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・長石・砂粒 焼成不良	内　明赤褐色 外　明褐色	
879	壺 体部	体部 最大径 22.4	大きく球形に膨らむ体部を持っている。	外面は頸部と体部の境に強く横ナデ調整を加え、体部上半はハケメまたは板状工具による調整、下半はヘラミガキを併用している。内面はヘラケズリと指オサエを併用している。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい赤褐色 外　明赤褐色	外面に黒斑有り
877	甕 底部	底径 6.0	体部は緩やかに外反しながら上方に向かってのびている。体部と底部の境はわずかに外方に突出している。	体部内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　褐色	
880	壺 底部	底径 9.7	体部は直線的に外上方に向かってのびている。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリとナデ調整が併用されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　橙色	

第47表　SX1002出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
881	甕　I 口縁部	口径 16.5	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	剥離激しく口径・傾き共に不正確
882	甕　I 口縁部	口径 13.5	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部の屈曲部直下の体部までは内外面とも横ナデ、それ以下の体部は外面がハケメ、内面はヘラケズリが施されている。頸部直下の体部外面は内面に加えられる強い横ナデによって表面がわずかに外方に突出している。	石英・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明赤褐色	外面に黒斑有り
883	壺 底部	底径 7.0	底部との境から直線的に外上方にのびる体部は上方に向かって大きく開いている。	体部外面は横方向の強いヘラミガキ、内面はハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　褐灰色 外　にぶい褐色	

第48表　SX1003出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
884	壺　L 口縁部	口径 13.3	「く」の字に屈曲する頸部と、直線的に外上方にのびる短かい口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけての外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
885	高杯B？ 鉢　A？ 口縁部	口径 21.5	内湾しながら上方に向かって大きく開く身の深い体部は屈曲部を持たずそのまま口縁部に移行する。内外方に拡張された口縁端部は頂部が平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケメ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤褐色	
886	壺 底部	底径 6.5	底部との境から直線的に外上方にのびる体部は上方に向かって大きく開いている。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・長石・雲母・結晶片岩 焼成不良	内　オリーブ褐色 外　明赤褐色	
887	甕 底部	底径 5.0	体部の立ち上がり付近が細く締まり、底部は上げ底に仕上げられている。	体部外面はハケメ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黒褐色 外　にぶい橙色	

第49表　SX1004出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
899	高杯B？ 鉢　A？ 口縁部	口径 15.4	緩やかに内湾しながら上方に向かってのびる身の深い体部と、内外方に拡張された口縁端部を持つ。口縁端部は頂部が平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　褐灰色 外　橙色	
900	壺 体部		体部上半は「ハ」の字に開き、外面には櫛描の波状文と平行線文が描かれている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	
901	壺 底部	底径 10.0	底部との境から直線的に外上方にのびる体部は上方に向かって大きく開いている。	外面の体部と底部の境は指オサエまたはヘラケズリの後ナデ調整が加えられている。体部内面は指オサエの痕が残されている。	石英・雲母 焼成良好	内　黒褐色 外　にぶい橙色	

第50表　SX1005出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
910	壺　L 口縁部	口径 12.8	緩やかに外反しながら外上方にのびる口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が2条めぐらされている。	口縁部外面は横ナデ、内面はナデ調整が施されている。	石英・雲母 焼成良好	内　橙色 外　にぶい赤褐色	
911	壺 底部	底径 8.9	体部と底部の境は外方に突出している。	体部外面はヘラミガキが施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい赤褐色	

第51表　SX1006出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
917	壺　D 口縁部	口径 15.7	外上方にのびる口縁は端部が平坦に仕上げられ、沈線により斜格子目文が描かれている。	口縁部外面は横ナデ、内面はナデ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
918	壺　D 口縁部	口径 12.2	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部と上半部が内湾しながら外下方に向かって開く体部を持つ広口壺。口縁端部は平坦に仕上げられ頂部は凹線状にくぼんでいる。また、頸部から体部上半部には櫛描の波状文と平行線文が交互に描かれている。	外面は口縁部から頸部上半にかけてが横ナデ、頸部下半から体部にかけてがハケメ調整、内面は口縁部から頸部上半にかけてが横ナデとハケメの併用、頸部下半から体部にかけてはヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
919	壺　N 口縁部	口径 6.7	筒状の頸部と緩やかに外反しながら上方にのびる短い口縁部を持つ壺。口縁の上方への開きは小さく、平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が浅くくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけての外面はヘラミガキとナデ調整を併用している。	石英・雲母 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	
920	壺　N 口縁部	口径 12.3	筒状の頸部と、緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ壺。口縁の上方への開きは小さく、平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が浅くくぼんでいる。	外面は口縁部付近が横ナデ、頸部は縦方向のヘラミガキ、内面は口縁部から頸部にかけて全面にヘラミガキが施されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
921	壺　N 口縁部	口径 13.0	筒状の頸部から直線的に上方にのびる口縁部と上半部が大きく膨らむ体部を持つ壺。口縁の上方への開きは小さく、外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼみ刻目が施されている。	口縁端部は横ナデ、頸部内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　褐灰色 外　橙色	
922	甕　E 口縁部	口径 14.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と、上半部が大きく球形に膨らむ体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部外面は横ナデ、体部外面は縦方向のハケメ、内面はナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黄橙色 外　橙色	
923	甕　G 口縁部	口径 22.8	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら水平にのびる口縁部と、大きく球形に膨らむ体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁部から頸部にかけてが横ナデ、体部が縦方向のハケメ調整、内面は口縁部から体部上半まですべてヘラミガキが施されている。	石英・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
924	甕　H 口縁部	口径 20.4	頸部で強く外反し水平にのびる口縁部と大きく球形に膨らむ体部を持つ。口縁端部はわずかに上方に拡張され尖り気味に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては横ナデ調整、体部外面はハケメ、内面はヘラミガキ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　にぶい褐色	
925	鉢　C 底部	底径 15.1	弱い上げ底の底部と上方に直立する体部を持っている。	体部内外面にはすべて丁寧なヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面ともにぶい褐色	
926	壺 底部	底径 7.7	底部との境から直線的に外上方にのびる体部は上方に向かって大きく開いている。	体部外面はヘラミガキ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面ともにぶい赤褐色	
927	甕 底部	底径 11.3	底部との境から直線的に外上方にのびる体部は上方に向かって大きく開いている。	体部内外面にはすべて丁寧なヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
928	甕 底部	底径 6.0	体部は緩やかに外反しながら上方に向かってのびている。体部と底部の境はわずかに外方に突出し底部はわずかに上げ底である。	体部外面はヘラミガキ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明赤褐色	
929	甕 底部	底径 6.2	体部と底部の境は外方に突出している。底部は軽い上げ底である。	体部外面は底部との境付近に横ナデが加えられている。内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　オリーブ黒色 外　にぶい赤褐色	
930	甕 底部	底径 5.0	体部は緩やかに外反しながら上方に向かってのびている。	体部外面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい褐色 外　にぶい橙色	内面 煤付着

第52表　SX1007出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
935	壺　D 口縁部	口径 16.2	筒状の頸部と大きく外反しながら上方にのびる口縁を持つ広口壺。口縁端部は肥厚し、円く仕上げられる。頸部には斜行する櫛描列点文がつけられている。	外面は口縁部から頸部にかけてが横ナデ、頸部内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明黄褐色	
936	壺　L 口縁部	口径 11.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ短頸壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面ともに横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	
937	甕　E 口縁部	口径 18.6	外反する短い口縁部を持つ甕である。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけての内面はナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも赤橙色	
938	甕　H 口縁部	口径 16.5	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が1条めぐらされている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
939	甕　G 口縁部	口径 19.2	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方にのびる膨らみの小さい長胴の体部を持つ。口縁端部はわずかに肥厚し、平坦に仕上げられている。	外面は口縁部から頸部にかけてが横ナデ、体部がヘラ磨き、内面は頸部に指頭圧痕が残されている以外はすべてヘラ磨きが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　褐灰色	
940	甕 口縁部	口径 11.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部とやや膨らみの小さい体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が1条めぐらされている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は上半部がハケメと平行タタキの併用、下半部が縦方向のヘラミガキ、内面はハケメとヘラミガキを併用するが下方に向かうほどヘラミガキの使用頻度が高くなっている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
941	鉢　A 口縁部	口径 32.1	内湾しながら上方にのびる身の深い体部はそのまま口縁部に移行する。内外方に拡張された口縁端部の拡張部は平坦に仕上げられるが、頂部がわずかにくぼんでいる。口縁部外面には幅広の凹線が2条めぐらされている。	口縁部外面は横ナデとナデ調整が加えられている。	石英・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも明黄褐色	
942	壺 底部	底径 8.3	底部との境から直線的に外上方にのびる体部は上方に向かって大きく開いている。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリの後にナデが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明褐色	
943	甕 体部	－	「く」の字に屈曲する頸部と上半部の膨らみの小さい長胴の体部を持っている。	頸部内外面は横ナデ、体部外面は縦方向のハケメ調整が施されている。頸部直下は内側に強い横ナデが加えられるため外面がわずかに突出している。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも明黄褐色	
944	甕 体部	体部 最大径 18.4	「く」の字に屈曲する頸部と、膨らみの小さい長胴の体部を持つ。体部の径の最も大きい部分には三角形の角押文が体部を一周するように2列付けられている。	頸部外面は横ナデ、体部外面は上半部がハケメとヘラミガキの併用、下半部が縦方向のヘラミガキ、内面頸部の一部に指オサエの痕が残されている以外はすべてヘラミガキを行っている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも明黄褐色	

第53表　SX1008出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
958	土製有孔円盤	直径 4.7 孔径 1.1		調整は不明	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	明赤褐	
959	土製有孔円盤	直径 3.2 孔径 0.5		調整は不明	石英・長石・結晶片岩 焼成不良	赤	
960	土製有孔円盤	直径 3.8 孔径 0.5		調整は不明	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	にぶい褐	

第54表　SX1009出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
964	甕　L 口縁部	口径 19.3	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　黄橙色 外　橙色	
965	高杯　E 口縁部	口径 20.5	直線的に外上方にのびる杯部は口縁との境で「く」の字に屈曲し上方に立ち上がる。口縁端部は内外方に拡張され、頂部が平坦に仕上げられる。	口縁部から体部にかけての外面はヘラ磨き、口縁部内面部は横ナデ、体部内面はヘラ磨き調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
966	高杯　C 口縁部	口径 26.9	緩やかに内湾しながら外上方にのびる身の浅い杯部と内外方に拡張される口縁端部を持つ。口縁部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラ磨きが加えられている。	石英・長石 焼成良好	内外面とも赤褐色	
967	壺 体部	－	体部上半には斜格子目文が描かれている。		石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　褐灰色	

第55表　SP1026出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
968	壺 体部	底径 6.0	体部は外方への膨らみが小さく明瞭な肩を持たない。底部は上げ底である。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキとナデ調整を併用している。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　にぶい黄橙色	

第56表　SP1034出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
969	甕　I 口縁部	口径 31.5	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が大きく膨らむ球形の体部を持つ。上下に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は上半部が縦方向のハケメ、下半部がヘラミガキ、内面は上半部がハケメ、下半部がヘラケズリが施されている。また、頸部屈曲部直下の外面には強い横ナデが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
970	甕　I 口縁部	口径 24.1	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く体部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は縦方向のハケメ、内面は斜方向のハケメが加えられている。また、頸部屈曲部直下の体部外面は強い横ナデが施されている。	石英・雲母・赤色斑粒・結晶片岩 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	

第57表　SP1039出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
971	甕　I 口縁部	口径 23.4	「く」の字に屈曲する頸部から内湾しながら外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は外面がハケメまたは板状工具によるナデ、内面は横ナデか？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい褐色 外　橙色	
972	甕 体部	－	「く」の字に屈曲する頸部と上部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持っている。	頸部の屈曲部直下は内外面とも強い横ナデ、体部は内外面とも入念なハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明黄褐色 外　橙色	

第58表　SP1058出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
973	甕　I 口縁部	口径 22.5	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁と、上半部が大きく球形に膨らむ体部を持つ。上下に拡張された口縁端部には凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のハケメと指オサエが併用されている。また体部には平行タタキが加えられている可能性が高い。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	

第59表　SP1102出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
974	高杯B？ 鉢　A？ 口縁部	口径 18.0	内湾しながら上方にのびる身の深い体部は屈曲部を持たず口縁部に移行する。内外方に拡張される口縁端部は頂部が平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも浅黄橙色	

第60表　SP1104出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
975	甕　I 口縁部	口径 12.5	「く」の字に屈曲する頸部と、外反しながら上方にのびる短い口縁を持つ。わずかに上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線凹線状にくぼんでいる。体部は膨らみが少なく肩の張りを持たない長胴の形態をとる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は横ナデ調整が加えられている。内面は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　淡黄色 外　浅黄橙色	

第61表　SP1126出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
976	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 30.3	緩やかに内湾する身の浅い体部は口縁部との境でわずかに屈曲部を持ちながら口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され頂部は平坦に仕上げられる。口縁部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケメ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　にぶい褐色 外　赤色	

第62表　SP1193出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
977	壺　F 口縁部	口径 9.7	大きく外反し水平にのびる口縁部を持つ広口壺。上方に拡張され平坦に仕上げられる口縁端部の拡張部には斜格子目文が施されているが、同様の文様は上方を向いた口縁部内面にも描かれている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　褐色	
978	壺　G 口縁部	口径 10.0	内湾しながら外上方にのびる漏斗状の口縁部を持つ壷。口縁端部は平坦に仕上げられ、頸部との境には断面三角形の貼付突帯が１本まわされている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　浅黄橙色 外　橙色	

第63表　SP1211出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
979	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 28.0	緩やかに内湾しながら外上方にのびる体部は途中で屈曲部を持ちながら口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され、頂部は平坦に仕上げられている。口縁部には凹線が３条めぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は粗いヘラミガキ、内面はハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	

第64表　SP1299出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
980	甕　I 口縁部	口径 17.8	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる短い口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ調整が加えられている。頸部屈曲部直下の体部外面には強い横ナデが施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
981	高杯 脚部	底径 11.1	長い柱状の脚台部は裾部から脚端部にかけて外下方に向かって開き、脚端部が上方に拡張されている。裾部には沈線による鋸歯文と格子目文が描かれ、脚端部には凹線が１条めぐらされている。	脚台部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　橙色	

第65表　SP1334出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
982	壺　I 口縁部	－	外反しながら上方に向かって大きく開く口縁の端部が著しく垂下する壺である。垂下した口縁端部の平坦面には沈線により斜格子文が描かれ口縁部内面には貼付け突帯により幾何学文が描かれている。	口縁部内面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい橙色 外　浅黄橙色	
983	高杯 脚部	底径 10.5	脚台下半部は下方に向かって大きく「ハ」の字に開く。脚端部は上方に拡張され円く仕上げられている。	脚台下半部は内外面ともナデ調整か？	石英・雲母・赤色斑粒・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	

第66表　SP1384出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
984	壺　N 口縁部	口径 7.8	筒状の頸部と外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は下方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部外面は横ナデ、口縁部内面と頸部外面はそれぞれヘラミガキ、頸部内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤褐色	

第67表　SP1398出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
985	甕 底部	底径 7.0	外反しながら上方にのびる体部と強い上げ底の底部を持っている。	体部外面はヘラミガキ、内面はナデと横ナデが併用されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　灰褐色 外　橙色	

第68表　SP1405出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
986	甕　H 口縁部	口径 25.6	強く「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら外方にのびる口縁部と、比較的膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は上方に拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部はハケメとヘラミガキの併用、内面は上半部が指オサエ、中程はヘラミガキが加えられている。また、頸部の屈曲部直下の外面は内面に加えられる強い横ナデ調整によってわずかに外方に突出している。	石英・赤色斑粒・結晶片岩 焼成良好	内　黄橙色 外　橙色	

第69表　SP1433出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
987	壺　D	口径12.0 底径 7.0	筒状の頸部から大きく外反する口縁部と、球形に大きく膨らむ体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。体部上半には櫛描の波状文と平行線文が描かれている。	口縁部外面は横ナデとヘラミガキが加えられ指頭圧痕も残されている。口縁部内面は横ナデ、頸部から体部にかけての外面はヘラミガキ、頸部内面は指頭によるナデ、体部内面はナデ調整か？	石英・雲母・赤色斑粒・結晶片岩 焼成不良	内外面とも橙色	

第70表　SP1438出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
988	壺　G 口縁部	口径 13.0	細く締まった頸部から直線的に外上方に向かって大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられ、頂部は凹線状にくぼんでいる。口縁部と頸部との境には断面三角形の貼付突帯が１本まわされている。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部外面は縦方向のハケメ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	

第71表　SP1541出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
989	甕　E 口縁部	口径 22.5	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ調整が加えられている。	石英・長石 焼成不良	内外面とも橙色	

第72表　SP1838出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
990	高杯 脚柱部	－	脚柱部には圏線がまわされている。	脚柱部外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも明赤褐色	

第73表　SP1860出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
991	甕　I 口縁部	口径 12.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内面　橙色 外面　褐色	

第74表　SD1027出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1025	壺　D	口径26.0 体部 最大径 36.0	筒状の頸部から大きく外反しながら上方にのびる口縁部と、中程が最も膨らむ長胴の体部を持つ広口壺。口縁端部は肥厚し平坦に仕上げられているが、中程がわずかにくぼんでいる。口縁部には端部に竹管による円形の刺突文がめぐらされる他、内面にも同じ刺突が縦方向に4列ずつ付けられている。頸部と体部の境には刻目の加えられた断面三角形の高い貼付突帯が1本まわされている。体部上半には口縁部と同じ施文具による刺突により、幾何学文が付けられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部外面はヘラ磨き、体部外面は丁寧なヘラ磨き、内面はハケ目調整と指オサエが施されている。	石英・雲母・長石・結晶片岩 焼成不良	内外面とも橙色	
1026	壺　D 口縁部	口径 20.0	筒状の頸部と「く」の字に屈曲し水平方向に大きく開く口縁部を持つ広口壺。口縁端部は平坦に仕上げられ斜格子目文がつけられている。また、口縁部内面には口縁部を貫通する２個一組の小円孔文が連続してつけられている。	頸部外面は縦方向のハケメ調整、口縁部から頸部にかけての内面は横ナデまたはナデ調整か？	石英・雲母・長石 焼成不良	内　暗灰黄色 外　橙色	
1027	壺　D 口縁部	口径 19.2	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部が途中で強く屈曲し水平方向にのびる広口壺。体部上半は球形に膨らんでいる。平坦な口縁端部は中央がわずかにくぼんでいる。体部上半には円形浮文がつけられている。	全体に剥落が著しく調整の観察できる部分は少ないが、頸部内面に指頭による縦方向のナデ調整がわずかに残されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　黄橙色 外　浅黄橙色	
1028	壺　D 口縁部	口径 13.6	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部が途中で強く屈曲し水平方向にのびる広口壺。体部は大きく球形に膨らんでいる。平坦な口縁端部は中央がわずかにくぼんでいる。頸部と体部との境には断面三角形の貼付突帯が１本まわされている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1029	壺　D 口縁部	口径 20.0	筒状の頸部と「く」の字に屈曲し水平方向に大きく開く口縁部を持つ広口壺。体部は大きく膨らんでいる。口縁端部はわずかに拡張され平坦に仕上げられている。頸部と体部の境には刻目の加えられた貼付突帯が1本まわされ、体部上半には櫛描波状文が描かれている。	調整は不明。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　橙色	
1030	壺　D 口縁部	口径 14.0	筒状の頸部と、大きく外反しながら水平方向にのびる口縁部を持つ広口壺。肥厚する口縁端部は平坦に仕上げられ刻目が加えられている。	頸部外面はナデか？口縁部内面は横ナデ、頸部内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	内外面に黒斑有り
1031	壺　D 口縁部	口径 13.5	筒状の頸部と、大きく外反しながら水平方向にのびる口縁部と、上半部が大きく膨らむ体部を持つ広口壺。肥厚する口縁端部は平坦に仕上げられ、刻目が加えられている。口縁部には上下に貫通する2個一組の小円孔文がつけられている。	頸部から体部外面はハケメ調整、内面は指頭によるナデと指オサエの痕跡が残されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄褐色	
1032	壺　D 口縁部	口径 12.3	筒状の頸部から強く屈曲し水平方向にのびる口縁部と、上半部が大きく膨らむ体部を持つ広口壺。口縁部は端部が円く仕上げられ、口縁部を貫通する小円孔文がつけられている。体部上半は大きく膨らんでいる。	外面は口縁部から頸部にかけてが横ナデとヘラミガキ、内面は指頭による縦方向のナデが頸部から体部上半まで加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
1033	壺　D 口縁部	口径 11.2	筒状の頸部と、大きく外反しながら水平方向にのびる口縁部を持つ広口壺。下方に拡張される口縁端部は平坦に仕上げられている。体部は中央部が大きく膨らんでいる。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面はナデ、内面は指頭による縦方向のナデが加えられている。	石英・結晶片岩・長石 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	
1034	壺　D 口縁部	口径 10.2	筒状の頸部から大きく外反しながら上方にのびる口縁部は端部が下方に垂下する。口縁端部は平坦に仕上げられ、斜格子目文が施されるとともに内面には２個一組の小円孔文がつけられている。	口縁部から頸部外面にかけては横ナデ調整が加えられ、頸部内面には絞り目の痕跡が残されている。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも浅黄橙色	
1035	壺　D 口縁部	口径 13.7	筒状の頸部と、大きく外反しながら水平方向にのびる口縁部を持つ広口壺。円く仕上げられた口縁端部はわずかに下方に垂下する。	口縁部から頸部にかけての外面は横ナデとナデ、内面は指頭による縦方向のナデが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　浅黄橙色	

1036	壺　B 口縁部	口径 15.0	筒状の頸部から大きく外反しながら上方にのびる口縁部と、大きく球形に膨らむ体部を持つ広口壺。口縁は端部が円く仕上げられ、内面には小円孔文とともに沈線による波状文が描かれている。また、体部上半は平行線文による多段の帯状の区画の中にヘラ先による刺突文と波状文が描かれている。	外面は頸部から体部にかけてはハケメ調整、内面は頸部の屈曲部付近が指頭によるナデ、体部上半はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
1037	壺　B 口縁部	口径 13.8	細く締まった筒状の頸部と外反する口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁部から頸部上半にかけてがナデとヘラミガキ、下半はヘラケズリの後ヘラミガキ、内面は口縁部付近がナデとヘラミガキ、頸部が指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1038	壺　N 口縁部	口径 10.0	細く締まる筒状の頸部から外反しながら上方にのびる短い口縁部と、大きく球形に膨らむ体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。頸部の一部から体部上半にかけ ては櫛描簾状文がつけられてい	外面は口縁部が横ナデ、頸部から体部上半にかけてがヘラミガキ、内面は口縁から頸部にかけてがヘラミガキ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　黄色 外　淡黄色	
1039	壺　N 口縁部	口径 16.0	筒状の頸部から外反しながら上方にのびる比較的短い口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	頸部内面はナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも黄橙色	
1040	壺　N 口縁部	口径 14.4	筒状の頸部と外反しながら上方にのびる比較的短い口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。頸部と体部の境には断面三角形の突帯が１本まわされている。	頸部内面はヘラミガキとナデ調整の併用か？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明褐色	
1041	壺　N 口縁部	口径 13.2	筒状の頸部と緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。体部上半には櫛描の簾状文が付けられている。	外面は口縁部と頸部の屈曲部が横ナデ、頸部はハケメ調整か？内面は口縁部から頸部上半部にかけてが板状工具を使用した横ナデが加えられている。	石英・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　明黄褐色	
1042	壺　N 口縁部	口径 12.2	口縁部は頸部からわずかに外反しながら上方に向ってのびる。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	外面は口縁部から頸部上半部まで横ナデ、それ以下はヘラミガキ調整が加えられている。内面の調整は不明。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　橙色	
1043	壺　N 口縁部	口径 10.8	口縁部は筒状の頸部からわずかに外反しながら上方に向ってのびる。肥厚し、平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	調整は不明。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも明黄褐色	
1044	壺　N 口縁部	口径 13.0	筒状の頸部から外反しながら上方にのびる比較的短い口縁部を持つ。口縁端部は肥厚し平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも赤褐色	
1045	壺　N 口縁部	口径 10.0	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方に向ってのびる口縁部と上半部が大きく膨らむ体部を持つ直口壺。肥厚し、平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼみ、刻目が施されている。上半が大きく膨らむ体部と頸部の境には刻目の施された貼付突帯が１本まわされ、体部上半には櫛描の平行線文がつけられている。	口縁部から頸部にかけての外面はナデまたは横ナデ、頸部内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　橙色 外　黄橙色	
1046	壺　N 口縁部	口径 12.3	頸部から外反しながら上方にのびる口縁部は端部がわずかに肥厚し円く仕上げられている。	外面は口縁部が横ナデ、頸部がヘラミガキ、内面は頸部の屈曲部付近が指頭による縦方向のナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	
1047	壺　N 口縁部	口径 13.0	筒状の頸部からわずかに開きながら上方に向かってのびる口縁部を持つ直口壺。外方に拡張された口縁端部は平坦に仕上げられ、頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は縦方向のハケメ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも暗赤褐色	
1048	壺　N 口縁部	口径 11.0	筒状の頸部から外反しながら上方にのびる口縁部と、上半部が大きく膨らむ体部を持つ直口壺。口縁端部は平坦に仕上げられている。	頸部内面は指頭による縦方向のナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
1049	壺　N 口縁部	口径 9.5	わずかに外反する筒状の口頸部と大きく膨らむ球状の体部を持つ直口壺。口縁端部は平坦に仕上げられている。	頸部から体部外面はハケメ調整、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　黄橙色 外　橙色	
1050	壺　N 口縁部	口径 6.5	わずかに外反する筒状の口頸部と、強く膨らむ球形の体部を持つ壺。口縁端部は平坦に仕上げられている。平行する櫛描簾状文によって帯状に区画される体部上半には円形浮文やU字状の幾何学文がつけられている。	口縁部から頸部にかけての外面は横ナデ、内面はナデ、頸部屈曲部の内面は指オサエが加えられている。	石英・結晶片岩 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	

1051	壺　N 口縁部	口径 10.5	筒状の頸部から外反する短い口縁部と緩やかに内湾しながら外下方にのびる膨らみの小さい長胴の体部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。体部は頸部との境が不明瞭である。	口縁部内外面は横ナデ、頸部内面は指頭による縦方向のナデ、体部上半部内面はヘラケズリが加えられている。	石英・結晶片岩 焼成不良	内　にぶい橙色 外　にぶい黄橙色	二次焼成で変色
1052	壺　N	口径11.3 体部最大径　22.0 底径 7.5	筒状の頸部と外反する短い口縁部を持ち、口縁端部は平坦に仕上げられている。長胴の体部は中程に最大径を持ち肩の張りは弱い。	口縁端部は内外面とも横ナデ、口縁部から体部外面にかけてはヘラ磨き、頸部から体部内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
1053	壺　O 口縁部	口径 11.5	頸部の屈曲部から外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は肥厚し円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけての外面はヘラミガキ、内面は横ナデ調整が加えられ頸部の屈曲部直下には指頭圧痕が残されている。	石英・長石 焼成良好	内　明褐色 外　赤褐色	
1054	壺　O 口縁部	口径 9.8	頸部から上方に向かって直線的にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	頸部外面はヘラミガキ、内面は横ナデか？	石英・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	
1055	壺　O 口縁部	口径 8.2	頸部から上方に向かって直線的にのびる短い口縁部を持つ。外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	外面は口縁部から頸部にかけてはヘラミガキ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　灰褐色 外　黒褐色	
1056	壺　O 口縁部	口径 12.5	筒状の頸部から緩やかに外反する口縁部を持つ。わずかに肥厚する口縁は端部が円く仕上げられ、刻目が加えられている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は縦方向のハケメとヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明黄褐色 外　黄褐色	
1057	壺　H 口縁部	口径 20.5	短い筒状の頸部と強く外反する短い口縁部を持つ。上下に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には、沈線によって斜格子目文が描かれている。外下方に向かって「ハ」の字に開く体部上半と頸部の境には、指頭圧痕の加えられた貼付突帯が１本まわされている。	調整は不明。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも褐色	
1058	壺　H 口縁部	口径 19.0	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。下方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には刻目が施されている。外下方に向かって「ハ」の字に開く体部と頸部の境には、刻目の加えられた貼付け突帯が１本まわされている。	外面は口縁部から頸部にかけてがナデ調整、内面は全面ヘラミガキか？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	
1059	壺　H 口縁部	口径 17.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。平坦に仕上げられた口縁端部は中程がわずかにくぼみ、沈線によって斜格子目文が描かれている。外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く体部と頸部の境には、刻目の加えられた貼付突帯が１本まわされている。突帯直下の体部には櫛描波状文や平行線文が描かれている。	頸部の屈曲部内面に指頭によるナデ調整が施されていることが確認出来る以外、他の調整は不明である。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも 赤褐色	
1060	壺　F 口縁部	口径 20.5	筒状の短い頸部から、外反しながら上方にのびる口縁部を持つ広口壺。口縁端部は平坦に仕上げられている。	外面は口縁部が横ナデ、頸部がヘラミガき、内面は口縁から頸部にかけて全面ヘラミガキか？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　にぶい黄橙色	
1061	壺　P 口縁部	口径 6.8	細く締まった頸部から直線的に上方に向かってのびる口縁部を持ち、口縁部の上方への開きが小さい直口壺。口縁端部は平坦に仕上げられている。大きく膨らむ体部上半と頸部との境には刻目の施された貼付突帯が１本まわされている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　橙色 外　暗灰黄色	
1062	壺　P 口縁部	口径 11.7	細く締まった頸部から直線的に上方に向かってのびる口縁部を持ち、口縁部の上方への開きが小さい直口壺。口縁端部は平坦に仕上げられ、刻目が加えられている。	調整は不明。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも橙色	
1063	甕　E 口縁部	口径 16.0	「く」の字に屈曲する頸部から外上方にのびる短い口縁部と下方への開きの小さい体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ斜行する刻目が加えられている。	外面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、体部はナデ、内面は口縁部から頸部にかけてはヘラミガキ調整が加えられている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明黄褐色	
1064	甕　A 口縁部	口径 13.2	外反する頸部からのびる短い口縁部と外下方への開きの小さい体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は縦方向のハケメ、内面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　灰黄褐色 外　にぶい黄褐色	

1065	甕　H 口縁部	口径 18.2	「く」の字に屈曲する頸部から大きく開きながら直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上方に向かってわずかに拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は縦方向のハケメ、内面はハケメの後ナデ調整か？	石英･雲母･長石・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	
1066	甕　H 口縁部	口径 18.0	「く」の字に屈曲する頸部から大きく開きながら直線的に外上方にのびる口縁部と、肩の張りの小さい体部を持つ。口縁端部は上方に向かってわずかに拡張されている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は外面は不明だが内面はヘラミガキが加えられている。	石英・長石 焼成不良	内　明黄褐色 外　赤褐色	
1067	甕　E 口縁部	口径 18.0	強く「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら外方にのびる口縁部と、膨らみの小さい長胴の体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部屈曲部直下まで内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ？内面は丁寧なナデまたはヘラミガキが加えられている。頸部屈曲部直下の外面は内面に加えられた強い横ナデによってわずかに外方に突き出ている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　明赤褐色 外　赤褐色	
1068	甕　E 口縁部	口径 17.2	強く「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら外方にのびる口縁部と、膨らみの小さい長胴の体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部屈曲部直下の体部までの内面は横ナデ調整、体部内面はハケメの後ナデ調整か？	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1069	甕　G 口縁部	口径 20.0	強く「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	外面は口縁部から頸部にかけてが横ナデ、内面は口縁部から頸部がハケメ、体部はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　にぶい黄橙色	
1070	甕　C 口縁部	口径 24.6	外反する頸部から直線的に外方にのびる口縁部と、殆ど膨らみを持たない体部を持つ。平坦に仕上げられた口縁端部は、中央がわずかに凹線状にくぼんでいるている。	外面は口縁部から頸部にかけてが横ナデ、体部はハケメとヘラミガキが併用されている。内面は全面にヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1071	甕　G 口縁部	口径 18.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と上半部が緩やかに内湾しながら外下方にのびる膨らみの小さい長胴の形態の体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面ともヘラミガキ、体部内面はヘラミガキ、外面もヘラミガキか？	雲母 焼成良好	内　橙色 外　浅黄橙色	
1072	甕　G 口縁部	口径 16.2	強く「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反する口縁部と、外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁部から頸部にかけてが横ナデ、体部はハケメ、内面は口縁部から頸部がヘラミガキ、体部はハケメとヘラミガキが併用されている。	石英 焼成良好	内　赤褐色 外　明赤褐色	外面・口縁端部に黒斑？
1073	甕　E （壺？） 口縁部	口径11.0 体部 最大径 15.8	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら外方にのびる口縁部と、中程が大きく膨らむ体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁部から頸部屈曲部直下の体部までは横ナデ、体部上半は縦方向のハケメ、中程が横方向のヘラミガキ、体部下半は縦方向のヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　明黄褐色 外　橙色	
1074	甕　H 口縁部	口径 20.0	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら外方にのびる口縁部と、上半が膨らむ体部を持つ。口縁端部は下方に拡張され、円く仕上げられている。	体部外面はナデ調整か？	石英・雲母・長石 焼成良好	内　明黄褐色 外　にぶい黄橙色	
1075	甕　G 口縁部	口径 13.8	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら外方にのびる口縁部と、上半部が膨らむ体部を持つ。口縁端部は下方に拡張され、円く仕上げられている。	外面は口縁部から体部上半部まで横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　橙色	
1076	甕　E 口縁部	口径 26.2	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ大型の甕。わずかに肥厚し平坦に仕上げられた口縁端部は中央部がわずかにくぼんでいる。	外面は口縁部から体部上半部まで横ナデ、体部はハケメとヘラミガキの併用、内面は頸部の屈曲部に指オサエを残す以外全面ヘラミガキ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤褐色	
1077	甕　E 口縁部	口径 26.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と大きく膨らむ体部を持つ大型の甕。わずかに肥厚し平坦に仕上げられた口縁端部は中央部が凹線状にくぼんでいる。	外面は口縁部から頸部にかけてが指オサエの後にナデ、体部はヘラミガキ、内面は口縁部がヘラミガキの後に横ナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　明褐色 外　赤褐色	
1078	甕　E 口縁部	口径 31.2	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら上方にのびる口縁部をもつ大型の甕。外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。		石英・雲母・長石 焼成	内　にぶい褐色 外　にぶい黄橙色	

1079	甕　E 口縁部	口径 28.5	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら上方にのびる口縁部をもつ大型の甕。外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけての外面はナデ、内面は横ナデまたはヘラミガキか？	石英・雲母 焼成良好	内　にぶい褐色 外　橙色	
1080	高杯G 杯部	口径 19.8	緩やかに内湾しながら外上方にのびる身の浅い体部と、内側に向かって強く湾曲するC字型の口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	内外面とも調整は不明。	石英・雲母・ 結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
1081	甕	口径10.3 体部 最大径 10.0 底径 5.5 器高11.7	外反する短い口縁部は端部を鈍く尖らせている。体部は膨らみが小さく緩やかに内湾しながら上げ底の底部に移行している。体部外面には連続する爪形文が２列つけられている。	口縁部から体部上半部にかけては内外面ともハケメ、体部下半部は外面がヘラミガキ、内面が指頭によるナデ調整が加えられ、体部と底部の境には指オサエの痕跡が残されている。	石英・雲母・ 赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	
1082	壺　P 頸部	－	上方に向かってわずかに開きながら直線的にのびる口縁部と、強く膨らむ体部を持つ直口壺。体部と頸部の境には刻目の加えられた貼付突帯が2本まわされている。	頸部外面は縦方向のハケメ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・ 結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
1083	壺 頸部	－	筒状の頸部から外反しながら上方にのびる口縁部と上半が球形に膨らむ体部を持つ。口縁部と頸部とは低い突帯で区画され、体部と頸部との境には刻目の加えられた断面三角形の貼付突帯が１本まわされている。	調整は不明。	石英・雲母・ 結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1084	壺 頸部	－	筒状の頸部から「く」の字に屈曲し水平方向にのびる口縁部と、球形に強く膨らむ体部を持つ広口壺。体部と頸部の境には刻目の加えられた貼付突帯が１本まわされ、直下の体部には櫛描平行線文と波状文が描かれている。	頸部から体部上半部にかけての内面は指頭によるナデ、体部上半部外面は指オサエの後ナデ調整が施されている。	石英・雲母・ 結晶片岩・長石 焼成不良	内　明黄褐色 外　明褐色	
1085	壺 体部	体部 最大径 22.5 底径 9.3	外方への膨らみが小さい緩やかに内湾する体部を持つ長胴の壺。平底の底部の器壁は体部と比較すると著しく厚い。体部上半には櫛描波状文と平行線文が交互に描かれている。	体部外面は上半部がハケメ、下半部がヘラミガキ、内面は底部近くにヘラケズリの痕跡が認められる。	石英・雲母・ 結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
1086	甕 体部	体部 最大径 22.3	外方への膨らみが比較的強い体部には一周するようにヘラ先による刺突が加えられている。	体部外面上半は縦方向のハケメ調整、下半部はハケメ調整の後にヘラミガキ、体部内面下半部は板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・ 結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　橙色	
1087	壺　D 口縁部	口径 20.6	筒状の頸部と大きく外反して水平にのびる口縁部を持つ広口壺。肥厚して平坦に仕上げられた口縁端部は中程がわずかにくぼみ、櫛描波状文が描かれている。また、大きく反り返り上方を向く口縁部内面には円形浮文が付けられ、体部と頸部の境の屈曲部には刻目の加えられた断面三角形の貼付突帯が１本まわされている。	頸部外面はハケメと板状工具によるナデを併用する。内面は横方向のヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・ 結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1088	壺　D 口縁部	口径 14.0	細い筒状の頸部と大きく外反して水平にのびる口縁部を持つ広口壺。肥厚して平坦に仕上げられた口縁端部には沈線で斜格子目文が描かれている。また、大きく反り返り上方を向く口縁部内面から頸部にかけては櫛描の平行線文が縦方向に描かれている。	口縁部外面は横ナデ、頸部外面にはヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・ 結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　赤褐色	
1089	壺　D 口縁部	口径 14.2	細い筒状の頸部と大きく外反しながら外方にのびる口縁部を持つ広口壺。わずかに下方を向く口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　明黄褐色 外　橙色	
1090	壺　D 口縁部	口径 13.4	細く締まった頸部と大きく外反しながら上方に開く口縁部を持つ広口壺。口縁端部は円く仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・ 赤色斑粒 焼成不良	内　黄灰色 外　橙色	
1091	壺　A 口縁部	口径 15.2	外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ広口壺。平坦に仕上げられた口縁端部には沈線により斜線文が付けられ、上方を向く口縁部内面には櫛描の波状文が描かれている。	口縁端部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・ 結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　灰白色 外　浅黄橙色	内面に黒斑有り

1092	壺 I 口縁部	口径 16.2	外反しながら上方にのびる口縁部は端部が大きく垂下し幅広い平坦面が作り出されている。この大きく垂下する口縁の平坦部には沈線により斜格子目文が描かれている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1093	壺 I 口縁部	口径 16.0	上方に向かって大きく開く口縁部は端部が垂下し、幅広い平坦面が作り出されている。この口縁部の平坦面には櫛描列点文が波状に施されている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄褐色 外　にぶい黄橙色	
1094	壺 M 口縁部	口径 12.6	筒状の頸部と外反しながら上方にのびる短い口縁部を持つ。わずかに肥厚し、平坦に仕上げられた口縁端部には沈線により斜格子目文がつけられている。	頸部外面はハケメ、内面は指頭による縦方向のナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　黄灰色 外　褐色	
1095	壺 M 口縁部	口径 12.7	筒状の頸部と外反しながら上方にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられ体部と頸部の境には刻目の加えられた貼付け突帯が1本まわされている。	口縁部外面は横ナデ、頸部外面はヘラミガキ？内面は口縁から頸部にかけてが板状工具によるナデ調整か？頸部の屈曲部には指頭によるナデが施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　褐灰色 外　明赤褐色	
1096	壺 F 口縁部	口径 11.1	筒状の頸部と外反しながら上方にのびる短い口縁部を持つ。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼんでいる。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は指頭によるナデと横ナデの併用、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	
1097	壺 F 口縁部	口径 14.3	筒状の頸部と、外反しながら上方にのびる短い口縁部を持つ。平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が2条めぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ頸部内面は横方向のヘラミガキ、頸部の屈曲部直下の内面はヘラケズリか？	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1098	壺 L 口縁部	口径 12.5	頸部から外反しながら上方に向かってのびる短い口縁部を持つ短頸壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が3条めぐらされている。	口縁部外面は横ナデ、内面は不明。	石英・雲母・長石・砂粒 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　にぶい赤褐色	
1099	壺 N 口縁部	口径 14.8	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。内外方に拡張された口縁端部は刻目が加えられ、頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部外面から頸部内面にかけては横ナデ、頸部外面は細かい縦方向のヘラミガキとハケメが併用されて施されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　橙色	
1100	壺 N 口縁部	口径 12.2	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。内外方に拡張された口縁端部は刻目が加えられ、頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部外面から頸部内面にかけては横ナデ、頸部外面は縦方向のヘラミガキが施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい橙色	
1101	壺 N 口縁部	口径 14.0	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。内外方に拡張された口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部外面から頸部内面にかけては横ナデ、頸部外面は板状工具を使用した縦方向のヘラミガキが施されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい橙色	
1102	壺 N 口縁部	口径 9.0	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。外方に拡張された口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部外面は横ナデ、頸部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は指頭によるナデ？が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　黒褐色 外　褐灰色	
1103	壺 N 口縁部	口径 13.8	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。外方に拡張された口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は縦方向のヘラミガキが施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも灰白色	
1104	壺 O 口縁部	口径 12.0	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部と大きく膨らむ体部を持つ。外方に拡張された口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	外面は口縁部が横ナデ、頸部がヘラミガキ？体部はハケメか？内面は頸部が指頭によるナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1105	壺 O 口縁部	口径 13.8	直線的に外上方にのびる口縁部は端部がわずかに肥厚し、平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面はヘラミガキ、内面は横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　褐色 外　暗褐色	
1106	壺 O 口縁部	口径 12.3	緩やかに外反しながら上方にのびる口縁は端部がわずかに肥厚し円く仕上げられている。	頸部内面はヘラミガキが施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
1107	壺 O 口縁部	口径 9.8	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部内面は横ナデ、他の調整は不明。	石英・結晶片岩・長石 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　にぶい黄橙色	
1108	壺 O 口縁部	口径 10.7	「く」の字に屈曲する頸部から外上方に向かって直線的にのびる口縁部を持つ。口縁端部は尖り気味に仕上げられ刻目が加えられる。	調整は不明。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも赤褐色	
1109	壺 G 口縁部	口径 12.6	口縁は外上方に向かって直線的にのびる。平坦に仕上げられ刻目が加えられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。口縁部には刻目が加えられた断面三角形の貼付突帯が1本まわされている。	口縁内面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黒色 外　黒褐色	
1110	壺 G 口縁部	口径 9.3	緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部には、貼付突帯が2本まわされ、口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　黄橙色	

1111	甕　A 口縁部	口径 12.9	わずかに括れる頸部からのびる口縁部は上方への開きが小さく、端部は鈍く尖らされている。また、体部は膨らみをほとんど持たない。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキ？内面はヘラミガキとナデ調整が併用されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1112	甕　D 口縁部	口径 21.7	外反する頸部と上方にのびる短い口縁部を持つ。円く仕上げられた口縁端部には斜線文がつけられている。	調整は不明。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも浅黄橙色	
1113	甕　G 口縁部	口径 14.2	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に上方にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部はわずかに肥厚し円く仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　にぶい褐色	
1114	甕　H 口縁部	口径 15.0	「く」の字に屈曲する頸部と直線的にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部はわずかに肥厚し円く仕上げられている。	頸部屈曲部内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも明褐色	
1115	甕　H 口縁部	口径 15.4	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる口縁部と、上半部が比較的膨らみの強い体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　橙色 外　浅黄橙色	
1116	甕　H 口縁部	口径 18.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部内面はナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成不良	内　明褐色 外　黄褐色	
1117	甕　H 口縁部	口径 18.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方に向かってのびる膨らみのある体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラミガキ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　明褐色 外　赤褐色	
1118	甕 口縁部	口径 11.6	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。わずかに肥厚する口縁端部は平坦に仕上げられている。	頸部屈曲部内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黄灰色 外　にぶい黄橙色	
1119	甕　G 口縁部	口径 13.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。わずかに肥厚する口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデか？頸部屈曲部直下の内面には強い横ナデが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄褐色	
1120	甕　G 口縁部	口径 17.4	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方にのびる膨らみの小さい体部を持つ。わずかに下方に拡張される口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリか？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　褐灰色 外　橙色	
1121	甕　G 口縁部	口径 17.2	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、やや膨らみの大きい体部を持つ。わずかに下方に拡張される口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は板状工具による縦方向のナデ、内面は横方向のヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1122	甕　G 口縁部	口径 21.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁は端部がわずかに肥厚し凹線状にくぼんでいる。	調整は不明。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
1123	甕　G 口縁部	口径 18.2	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁は端部がわずかに肥厚し凹線状にくぼんでいる。	口縁部外面は横ナデ、体部外面はヘラミガキ、内面は口縁部から体部にかけてすべてヘラミガキが加えられている。	石英・長石 焼成良好	内外面ともにぶい赤褐色	
1124	甕　G 口縁部	口径 13.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁は端部がわずかに肥厚し凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	外面に煤付着
1125	甕　E 口縁部	口径 17.8	大きく外反する頸部から上方にのびる短い口縁と上半部が大きく膨らむ体部を持つ。上方に拡張された口縁端部は平坦に仕上げられ、頸部との境近くの体部にはヘラによる刺突が加えられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部内面は板状工具によるナデが施されている。また口縁部外面の端部直下と頸部の屈曲部内面には指オサエの痕跡が残されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明黄褐色 外　橙色	
1126	甕 口縁部	口径 26.2	強く「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。平坦に仕上げられた口縁端部は中程が凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも灰黄褐色	
1127	甕　E 口縁部	口径 20.7	外反する頸部から外上方にのびる短い口縁部と、球形に膨らむ体部を持つ。端部が下方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文がつけられている。頸部には指頭圧痕の施された貼付突帯が1本まわされている。	口縁部から体部にかけても内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	

1128	甕　E 口縁部	口径 33.1	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には沈線によって斜格子目文がつけられている。		石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1129	甕　E 口縁部	口径 16.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部は端部が円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ？内面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも浅黄橙色	
1130	甕　E 口縁部	口径 17.0	頸部から外反しながら外方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部の屈曲部直下の体部までの外面は横ナデ、それ以下はヘラミガキ、内面は全面ナデ調整か？	石英・長石 焼成不良	内　明赤褐色 外　赤色	
1131	甕　G 口縁部	口径 15.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁は端部が円く仕上げられている。体部はやや膨らみを持ち緩やかに内湾している。	外面は口縁部から頸部にかけては横ナデ、体部はハケメとヘラミガキが併用されている。	石英・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　明褐色	
1132	甕　E 口縁部	口径 23.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	内面の口縁部から頸部にかけては横ナデ、体部は指オサエとナデ調整が併用されている。	石英・長石 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1133	甕　E 口縁部	口径24.8 体部 最大径 25.5	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら上方にのびる短い口縁部と、上半部が緩やかに内湾する膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては外面は横ナデ、内面はヘラミガキ、体部外面はハケメとヘラミガキの併用、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面ともにぶい黄褐色	
1134	甕　E 口縁部	口径 25.0	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら上方にのびる短い口縁部と、上半部が緩やかに内湾しながら外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ、体部にはヘラによる連続する刺突が加えられている。	外面は口縁部から頸部にかけてが横ナデ、体部外面は縦方向のハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　にぶい赤褐色	
1135	甕　E 口縁部	口径 28.3	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら上方にのびる口縁部と、大きく球形に膨らむ体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ、沈線によって斜格子目文が描かれている。	調整は不明。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　灰褐色 外　にぶい橙色	
1136	甕　G 口縁部	口径24.0 体部 最大径 28.0	「く」の字に屈曲する頸部から水平にのびる直線的な口縁部と膨らみの小さい長胴の体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ斜線文が付けられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は上半部がハケ目、下半部がヘラミガキ、内面はヘラミガキが施こされている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成	内外面とも明褐色	内外面に黒斑有り
1137	甕　I 口縁部	口径 15.7	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上方に拡張される口縁端部は平坦に仕上げられ、凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成不良	内　明赤褐色 外　橙色	
1138	甕　J 口縁部	口径 14.8	強く外反する頸部に、上下に拡張された端部を持つ短い口縁が付けられる。口縁端部の拡張部は平坦に仕上げられ、凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　赤褐色 外　明赤褐色	
1139	甕　I 口縁部	口径 14.3	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と膨らみの小さい長胴の体部を持つ。口縁端部は肥厚し凹線を2条めぐらせている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は頸部の屈曲部直下を除いて縦方向のハケメ、内面は上半部がヘラミガキ、下半部がヘラケズリが施されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　黄褐色	
1140	台付鉢D	口径 7.7 体部 最大径 8.1 底径 4.9 器高 8.4	底部からいったん内湾しながら上方に立ち上がった体部はその後上方に向かって直立する。口縁端部は円く仕上げられ、底部には「ハ」の字に開く低い脚台が付けられている。	体部外面はナデ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。また脚台部外面はヘラケズリの後、ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　灰白色 外　にぶい黄橙色	
1141	高杯D 杯部	口径 23.8	浅い皿状の杯部から屈曲部を持って内湾しながら上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は内外方に拡張され端部は平坦に仕上げられる。狭い口縁には凹線が3条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ、杯部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整？が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明黄褐色	
1142	壺 頸部	－	筒状の頸部から大きく外反する口縁と上半部が大きく膨らむ体部を持つ広口壺である。	頸部の屈曲部直下には指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　黄灰色 外　橙色	
1143	壺 頸部	－	筒状の頸部と強く膨らむ体部を持つ。体部と頸部の境には指頭圧痕の施された貼付突帯が1本まわされている。	体部上半部の外面はヘラミガキ？内面はヘラケズリか？	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　褐灰色 外　明黄褐色	

1144	壺 体部上半	体部 最大径 19.2	筒状の頸部と膨らみの強い長胴の体部を持つ。体部と頸部の境は不明瞭である。	体部外面は調整不明、内面は上半部に指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　灰黄褐色 外　橙色	
1145	壺 体部上半	－	体部上半が「ハ」の字に開く肩の膨らみの小さい土器。櫛描による波状文と平行線文が描かれている。	体部上半部の内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　黄褐色	
1146	壺 体部下半	－	筒状の頸部と強く膨らむ体部を持つ。体部と頸部の境は不明瞭で櫛描の波状文が描かれている。	調整は不明。	石英・結晶片岩・長石 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	
1147	壺 体部下半	底径 9.0	浅い上げ底の底部と球形に膨らむ体部を持っている。		石英・雲母・結晶片岩・長石・砂粒 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	
1148	壺 体部下半	底径 6.0	浅い上げ底の底部と球形に膨らむ体部を持っている。	体部外面はヘラミガキ、内面はハケメがそれぞれ施され、底部と体部の境は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1149	壺 体部下半	底径 10.6	体部は軽い上げ底の底部との境から上方に向かって大きく開きながら直線的にのびている。	体部外面はヘラミガキ、内面は指頭によるナデ調整と指頭圧痕が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1150	壺 体部下半	底径	体部は底部との境から上方に向かって大きく開きながら直線的にのびている。	体部外面はヘラミガキ、内面は不明。			
1151	高杯 脚端部	底径 8.5	脚台下半部は外反しながら外下方に向かって「ハ」の字に開いている。脚端部はわずかに外上方に拡張され端部は円く仕上げられている。	脚台部外面と脚端部内面はともに横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　灰黄褐色 外　灰褐色	
1152	壺　F 口縁部	口径 18.0	筒状の頸部と強く外反しながら水平にのびる口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文がつけられ、上方を向く口縁部内面には低い貼付突帯が3本まわされている。	口縁部外面は横ナデ、頸部外面はハケメ調整が加えられている。	石英・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　浅黄橙色	
1153	壺　D 口縁部	口径 13.2	口縁は頸部の屈曲部から徐々に開きながら直線的に外上方にのび、端部近くで強く外反する。平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文がつけられている。	口縁部外面は横ナデ、頸部外面はヘラミガキ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　淡赤橙色 外　橙色	
1154	壺　F	口径 14.0	筒状の頸部から強く外反しながら水平にのびる口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文がつけられている。	口縁部内外面は横ナデ調整か？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1155	壺　F 口縁部	口径 11.2	下方に垂下する口縁端部は平坦に仕上げられ、沈線によって斜格子目文がつけられている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　赤色 外　明赤褐色	
1156	壺　F 口縁部	口径 12.5	外上方にのびる口縁の端部は下方に拡張されて平坦に仕上げられ、沈線により斜格子目文がつけられている。	口縁部から頸部にかけての外面は横ナデ調整が加えられている。	雲母・長石 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1157	甕　F 口縁部	口径 17.7	外上方に大きく開く口縁部は端部が肥厚し斜行文がつけられる。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1158	壺　I 口縁部	口径 16.0	口縁は端部が下方に垂下して広い平坦面を作り出している。口縁端部には沈線により斜格子目文が描かれている。	口縁端部は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
1159	壺　F 口縁部	口径11.7 体部 最大径 20.8	筒状の頸部から大きく外反しながら上方にのびる口縁と、なだらかに外下方に開く体部を持つ広口壺。口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条めぐらされている。体部には櫛描列点文がつけられている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部から体部外面にかけては縦方向のハケメ、頸部内面は指頭によるナデ、体部内面は指オサエとナデ調整が併用されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　明黄褐色 外　明赤褐色	
1160	壺　L 口縁部	口径 15.3	強く外反する口縁は端部を上下に拡張し凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1161	壺　L 口縁部	口径 13.5	強く外反する短い口縁を持つ短頸壺。口縁端部は上下に拡張され凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒・長石 焼成良好	内　橙色 外　にぶい赤褐色	
1162	壺　F 口縁部	口径 17.7	緩やかに外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　暗赤褐色	
1163	壺　O？ 口縁部	口径 11.8	筒状の頸部からゆるやかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ直口壺。肥厚する口縁端部には刻目が施され、頂部はわずかにくぼんでいる。	口縁部外面は幅広く横ナデが加えられている。頸部外面はハケまたは板状工具による調整が縦方向に加えられている	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	

1164	壺　N 口縁部	口径 11.6	頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ直口壺。外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は、頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面は縦方向のハケメ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
1165	壺　N 口縁部	口径 11.6	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ直口壺。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面はナデ？、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1166	壺　N 口縁部	口径 9.2	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁を持つ直口壺。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面はナデ？、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも灰白色	
1167	壺　O 口縁部	口径 12.2	頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ直口壺。上方への開きは大きく口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁端部付近は横ナデ、頸部内面はナデ、頸部屈曲部付近の内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　浅黄橙色	
1168	壺　N 口縁部	口径 13.7	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ直口壺。口縁端部は平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	
1169	壺　N 口縁部	口径 9.3	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ直口壺。口縁端部は平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも浅黄橙色	
1170	壺　N 口縁部	口径 15.3	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ直口壺。平坦に仕上げられた口縁端部には刻目が施されている。	調整は不明。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも褐灰色	
1171	壺　F 口縁部	口径 16.0	頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は、頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけての外面は丁寧な横ナデ調整が加えられている。内面の調整は不明。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも橙色	
1172	壺　N？ 口縁部	口径 14.5	筒状の頸部から緩やかに外反しながら外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は外下方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ、頸部外面はハケメとヘラミガキの併用、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1173	壺　G 口縁部	口径 10.5	緩やかに外反する上方への開きの小さい壺。口縁端部は平坦に仕上げられ頂部はわずかにくぼむ。口縁部には刻目の施された貼付突帯が３本まわされている。	口縁部外面は横ナデ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成不良	内外面とも橙色	
1174	壺　G 口縁部	口径 11.7	緩やかに内湾しながら外上方に大きく開く漏斗状の口縁部を持つ。口縁端部は内外方に拡張され、平坦に仕上げられる。また、口縁部には刻目の施された断面三角形の貼付突帯が2本まわされている。	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黄橙色 外　浅黄橙色	
1175	甕　A 口縁部	口径 14.6	ほとんど膨らみを持たず直立する体部と、緩やかに外反する短い口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部外面は横ナデ調整、内面は全面に横方向のヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
1176	甕　E 口縁部	口径 13.6 体部最大径	「く」の字に屈曲する頸部と直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ、体部上半は円く膨らんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラミガキとヘラケズリが併用されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　黄橙色	
1177	甕　B 口縁部	15.8 口径 11.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、わずかな膨らみを持って外下方にのびる体部を持つ。頸部の屈曲の度合いは弱く、口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁部から頸部にかけてが横ナデ、体部はヘラミガキ、内面は口縁部から頸部にかけてがヘラミガキ、体部がヘラケズリの後ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1178	甕　B 口縁部	口径 14.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、わずかな膨らみを持って外下方にのびる体部を持つ。頸部の屈曲の度合いは弱く、口縁端部は鈍く尖らされている。	口縁部から頸部にかけての外面は横ナデ、体部外面はヘラミガキ、内面は口縁部から体部上半にかけてが横方向のヘラミガキ、体部中程から下半にかけては縦方向のヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい赤褐色	
1179	甕　B 口縁部	口径 15.9 体部最大径 15.4	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、わずかな膨らみを持って外下方にのびる体部を持つ。頸部の屈曲の度合いは弱く、口縁端部は鈍く尖らされている。	外面は口縁部から頸部屈曲部直下の体部までにかけてが横ナデ、体部はヘラミガキ、内面は全面にヘラミガキ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1180	甕　A 口縁部	口径 16.4	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ、体部はほとんど膨らみを持たない。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部内面はナデ調整が加えられている。	石英・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1181	甕　E 口縁部	口径 23.3	外反する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケとヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい黄色 外　浅黄色	

1182	甕　D 口縁部	口径 15.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、ほとんど膨らみのない直立する体部を持つ。口縁端部はわずかに下方に拡張され、平坦に仕上げられている。頸部の屈曲部は内面が突出している。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメとヘラミガキの併用、内面はヘラミガキ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも黒褐色	
1183	甕　D 口縁部	口径 17.6	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部とほとんど膨らみのない直立する体部を持つ。口縁端部はわずかに下方に拡張され、平坦に仕上げられている。頸部の屈曲部は内面が突出している。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部内外面は板状工具によるナデ調整が加えられ、頸部屈曲部内面はヘラケズリの後にナデが加えられている。	石英・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1184	甕　E 口縁部	口径 18.5	外反する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と、円く膨らんだ体部上半を持つ。口縁端部は肥厚し平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒・砂粒 焼成良好	内外面とも赤褐色	
1185	甕　H 口縁部	口径 19.2	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部はわずかに下方に拡張され平坦に仕上げられている。体部は外下方に向かって「ハ」の字に大きく開いている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1186	甕　H 口縁部	口径 15.2	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら上方にのびる口縁部と、頸部との境から外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上方に拡張されて円く仕上げられ、頸部の屈曲部は内面が突出している。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部内外面はハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも浅黄橙色	
1187	甕　H 口縁部	口径 12.4	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら上方にのびる口縁部と、頸部との境から外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は上方に拡張され円く仕上げられている。	口縁部から体部上半の一部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　にぶい褐色	
1188	甕　H 口縁部	口径 17.4	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と球形に膨らむ体部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜格子目文が付けられ、頸部の屈曲部には指頭圧痕の施された貼付突帯が1本まわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部外面はナデまたは横ナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
1189	甕　I 口縁部	口径 15.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に水平方向にのびる短い口縁部と、外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤褐色	
1190	甕　H 口縁部	口径 28.6	「く」の字に屈曲する頸部と、わずかに内湾しながら上方にのびる口縁部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は中程が凹線状にくぼんでいる。	調整は不明。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも黄橙色	
1191	高杯B？ 鉢　A？ 口縁部	口径 16.9	緩やかに内湾する体部はそのまま口縁部に移行している。外方に拡張され平坦に仕上げられる口縁端部には刻目が加えられ、直下の口縁部には凹線がめぐらされている。	口縁端部付近は内外面とも横ナデ、体部は内外面ともヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　にぶい黄褐色	
1192	高杯B？ 鉢　A？ 口縁部	口径 21.5	身の深い体部はわずかに内湾しながら上方に立ち上がりそのまま口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され、頂部はわずかにくぼんでいる。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　褐灰色	
1193	鉢　B 口縁部	口径 31.8	緩やかに内湾しながら上方にのびる身の深い体部は、口縁部との境で外折し、直線的な口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁端部付近は横ナデ、体部内面にはヘラミガキとナデ調整が併用されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒・砂粒 焼成良好	内　橙色 外　明黄褐色	
1194	壺 頸部	－	頸部から外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ。頸部には櫛描の平行線文が描かれている。	頸部外面はハケメ調整、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内　橙色 外　にぶい褐色	
1195	壺 頸部	－	よく締まった筒状の頸部から外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ。頸部には複数の凹線がめぐらされている。	頸部外面はハケメ、内面は指頭によるナデ調整が施されている。	石英・長石 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　赤褐色	
1196	壺 頸部	－	よく締まった筒状の頸部から外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ。口縁部と頸部の境、頸部と体部の境には、それぞれ刻目の施された断面三角形の貼付突帯がまわされている。	頸部外面はハケメか？内面は指頭によるナデ調整が施れている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　灰黄褐色 外　黄橙色	

1197	壺 体部	－	体部上半は緩やかに内湾しながら外下方に向かって開いている。体部上半には櫛描波状文と平行線文が描かれている。	体部上半部の外面はハケメ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい褐色 外　にぶい赤褐色	
1198	壺 頸部	体部 最大径 21.5	体部上半は球形に膨らむ。肩部にはヘラ先による連続する刺突文がつけられている。	頸部から体部上半部の外面は縦方向のヘラミガキ、体部内面は指オサエの後、ナデ調整か？	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　明褐色	
1199	壺 頸部	－	筒状の頸部と外下方に大きく膨らむ体部を持つ。頸部には連続するヘラ圧痕文がつけられている。	調整は不明。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも黄灰色	
1200	壺 頸部	－	膨らみの強い体部と頸部の境は「く」の字に屈曲するが、その屈曲部には指頭圧痕の加えられた貼付突帯がまわされている。体部上半には櫛描波状文と平行線文が描かれている。	頸部屈曲部内面はヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片石 焼成良好	内　浅黄橙色 外　橙色	
1201	壺 底部	底径 11.0	球形に強く膨らむ体部には連続する貝殻復縁文が付けられている。	体部外面は横方向の丁寧なヘラミガキ、内面はヘラミガキまたはナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　浅黄橙色 外　橙色	
1202	壺 底部	底径 9.0	体部は底部との境から上方に大きく開きながら直線的にのびていく。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄色 外　にぶい橙色	
1203	高杯 脚部	底径 11.0	脚柱部から脚端部にかけては、緩やかに外反しながら下方に開く。杯部との接合部分の脚柱部には円孔が穿たれている。脚端部は拡張されることなく円く仕上げられている。	杯部から脚台にかけての外面はヘラミガキ、杯部内面にもヘラミガキ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　橙色	
1204	高杯 脚部	底径 12.0	脚柱部から脚端部にかけては、緩やかに外反しながら下方に開く。脚端部は拡張されることなく平坦に仕上げられている。	脚端部外面はヘラミガキ、脚台部内面は板状工具によるナデ、脚端部内面は横ナデが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　褐灰色 外　橙色	
1205	高杯 脚部	口径 11.8	脚柱部から脚端部にかけては、緩やかに外反しながら下方に開く。杯部との接合部分の脚柱部には１対の円孔が穿たれている。脚端部は拡張されることなく円く仕上げられている。	脚台上半部内面には指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　にぶい黄褐色 外　橙色	
1206	鉢 底部	底径 15.1	体部は底部との境から直立する。体部と底部の境は外方に突出している。	体部外面は縦方向のヘラミガキ、体部と底部の境は横ナデ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　黄灰色 外　にぶい黄橙色	
1207	壺　D 口縁部	口径 12.4	筒状の頸部と大きく外反する口縁部を持つ広口壷。わずかに下方に垂下する口縁端部は円く仕上げられている。	口縁端部内外面は横ナデ、口縁部から頸部にかけての外面はヘラ磨きが施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　灰白色 外　にぶい黄橙色	
1208	壷　O 口縁部	口径 6.8	外下方に向かって「ハ」の字に開く脚部は、脚端部が上方に拡張される。脚柱部には細い沈線が描かれている。		石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　灰白色 外　明黄褐	
1209	壺　O 口縁部	口径 13.6	外上方にのびる口縁の端部は外方に拡張される。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部外面は縦方向のハケメ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　橙色	
1210	壺　N 口縁部	口径 12.4	筒状の頸部は屈曲部を持つことなく緩やかに外反しながら上方に向かってのび、口縁部に移行している。体部は強く球状に膨らんでいる。口縁端部は外方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁端部内外面は横ナデ、口縁部から頸部にかけての外面はヘラ磨きが施されている。体部上半にはハケ目調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1211	甕　E 口縁部	口径 12.8	強く外反する頸部から続く短い口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部内面は頸部の屈曲部直下からヘラケズリが加えられている。口縁部外面には指オサエの痕跡が残されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　黄橙色	
1212	甕　G 口縁部	口径 13.9	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と、外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデとヘラミガキ調整。体部外面はヘラ磨きとナデ、内面は指頭によるナデとヘラ磨キが併用されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも浅黄橙色	
1213	甕　E 口縁部	口径 16.0	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と、外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整。体部は内面にヘラケズリが加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　にぶい赤褐色	
1214	甕　E 口縁部	口径26.0 体部 最大径 36.0	外反する頸部からそのまま上方にのびる口縁部と、上半部が大きく球状に膨らむ体部を持つ。口縁端部は中央が凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成不良	内外面とも橙色	

1215	甕　E	口径10.2 体部 最大径 13.5 底径 5.4 器高14.6	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、中央部に最大径を持つ膨らみの大きい体部を持つ。端部が平坦に仕上げられた口縁部には1対の穿孔が加えられている。	口縁部から体部上半にかけては内外面とも調整は不明、体部下半の外面はヘラミガキが加えられ底部との境には指頭圧痕が残されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄褐色	
1216	高杯A	口径 22.5	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に水平方向にのびる口縁部と、わずかに内湾する膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	外面　口縁部・頸部とも横ナデ、体部は調整不明 内面　口縁部・頸部ともナデ体部はヘラミガキ？	石英・赤色斑粒 焼成良好	内　オリーブ黒 外　赤褐	
1217	高杯A	口径 21.9	内湾しながら外上方にのびる身の深い体部と、外反する頸部から水平方向にのびる短い口縁部を持つ。口縁端部には凹線が1条めぐらされている。	外面　口縁部は凹線1条、頸部・体部とも横ナデ・ミガキ 内面　口縁部は横ナデ、頸部・体部ともミガキ	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　暗赤褐 外　にぶい黄褐	
1218	高杯B	口径 18.6	緩やかに内湾ながら上方にのびる杯部は屈曲部を形作ることなく口縁部に移行する。肥厚し平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	内外面とも全面に丁寧なヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黄橙色 外　浅黄橙色	
1219	高杯 脚部	底径 6.0	下方への開きの小さい柱実の低い脚台。脚台端部は円く仕上げられている。	体部から脚台部にかけての外面はヘラミガキ、脚端部内面はヘラケズリが加えられている。	石英・赤色斑粒 焼成良好	内　黄灰色 外　淡赤橙色	
1220	高杯 脚部	底径 13.0	低い脚台は外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く。脚端部は平坦に仕上げられ中程がわずかに凹線状にくぼんでいる。	杯部から脚台部にかけての外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ、脚端部は内外面とも横ナデが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明黄褐色 外　にぶい黄橙色	
1221	壺 底部			外面　体部ナデ・穿孔 内面・外面とも底部ナデ	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1222	鉢 底部			外面　体部ナデ・穿孔 内面・外面とも底部ナデ	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1223	土製有孔円盤	口径　3 最大径3.4			石英・雲母・長石 焼成不良	内　にぶい赤褐 外　赤褐	
1224	土製有孔円盤	口径　3 最大径3.1			石英・雲母・長石 焼成不明	内　赤褐 外　暗褐	

第75表　SD1003出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1316	甕　L 口縁部		「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張され、凹線が2条めぐらされている。	外面　口縁部凹線 内外面ともナデ	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	

第76表　SD1005出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1317	壺　F 口縁部	口径 15.8	外反しながら上方に向かって大きく開く広口壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1318	壺　F 口縁部	口径 19.7	外上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。下方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が3条めぐらされている。	口縁部外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　橙色 外　明褐色	
1319	壺　L 口縁部	口径 14.8	外反する短い口縁部を持つ短頸壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が1条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1320	壺　N 口縁部	口径 8.8	筒状の頸部から緩やかに外反しながら口縁部に移行する上方への開きの小さい口縁を持つ直口壺。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	外面は口縁部から頸部にかけて横ナデ調整が加えられている。口縁端部直下の内面は強いナデによって大きくくぼんでいる。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　灰黄褐色 外　灰褐色	
1321	壺　N 口縁部	口径 13.0	筒状の頸部から緩やかに外反しながら口縁部に移行する上方への開きの小さい口縁を持つ直口壺。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁端部から口縁部内面にかけては横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　橙色 外　明黄褐色	
1322	甕　H 口縁部	口径 18.4	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上下に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が1条めぐらされ、頸部の屈曲部には指頭圧痕の施された突帯が1本まわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	
1323	甕　I 口縁部	口径 22.8	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされ、頸部の屈曲部には刻目の施された突帯が1本まわされている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明褐色	

1324	甕　H 口縁部	口径 22.7	頸部から外反しながら上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられ、頂部はわずかにくぼむ。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられているが、内面はその範囲が体部上半まで及んでいる。体部外面はヘラミガキか？	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	
1325	高杯F 杯部	口径 23.4	水平にのびる口縁部の内側に隆起帯を１条めぐらせる水平口縁の高杯。口縁端部は上下に拡張され凹線が２条めぐらされている。	杯部は内外面ともナデとヘラミガキが併用されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも赤橙色	
1326	高杯G 杯部	口径 20.8	外上方に向かって大きく開く身の浅い杯部と内側に向かって大きく内湾する口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。		石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1327	甕 底部	底径 5.1	体部は緩やかに外反しながら上方にのびている。体部と底部の境はわずかに外方に突出している。	体部内面はヘラケズリが施されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　明赤褐色	
1328	甕 底部	底径 5.9		体部外面の調整は不明。内面は指オサエが加えられている。	石英・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1329	甕 底部	底径 4.8	体部は緩やかに外反しながら上方にのびている。体部と底部の境は円く仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　橙色	
1330	高杯 脚部	底径 12.6	短い脚部は外下方に向かって大きく開き、上方に拡張される脚端部は円く仕上げられている。	脚台部は外面がヘラミガキ？内面はナデとハケメを併用している。脚端部外面はヘラ削りの後横ナデ調整を加えている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　黄褐色	
1331	甕 底部	底径 5.5	体部は直線的に外上方にのびている。	体部外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリ後、ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　明黄褐色 外　橙色	

第77表　SD1007出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1332	鉢　A 口縁部	口径 31.2	緩やかに内湾しながら上方にのびる身の深い体部は、そのまま口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され、平坦に仕上げられている。	体部外面は横ナデ、内面はハケメ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1333	壺 底部	底径 7.8	体部は緩やかに外反しながら上方にのびている。底部は強い上げ底になっている。	体部外面はヘラミガキ？内面はヘラケズリ？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　灰黄褐色 外　明褐色	

第78表　SD1012出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1379	壺　F 口縁部	口径 24.4	ゆるやかに外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。平坦に仕上げられた口縁端部には沈線により斜格子目文がつけられている。	口縁部は内外面ともナデ調整か？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　橙色	
1380	壺　F 口縁部	口径 20.3	ゆるやかに外反しながら上方に向かって大きく開く口縁部を持つ広口壺。平坦に仕上げられた口縁端部には沈線により斜線文がつけられている。	口縁部外面は横ナデ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　黒褐色 外　にぶい赤褐色	
1381	壺　K 口縁部	口径 12.5	筒状の頸部と、外反する短い口縁部を持つ壺。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文がつけられる。頸部には指頭圧痕の施された貼付突帯が１本まわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　明褐色 外　にぶい褐色	
1382	壺　N 口縁部	口径 7.1	筒状の頸部からそのまま移行する口縁部を持つ直口壺。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部も内外面とも指頭によるナデが加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　明黄橙色 外　黒色	
1383	甕　I 口縁部	口径 17.8	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　褐灰色 外　にぶい橙色	
1384	甕　I 口縁部	口径 17.1	上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が３条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成不良	内　オリーブ黒色 外　橙色	
1385	甕　I 口縁部	口径 20.0	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が３条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明黄褐色	
1386	甕　I 口縁部	口径 17.9	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	

1387	高杯G 口縁部	口径 22.0	外上方に向かって大きく開く身の浅い体部と内側に向かって強く内湾する短い口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキが施されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤褐色	
1388	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 19.6	内湾しながら上方にのびる体部はそのまま口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され、平坦に仕上げられている。口縁部には凹線が２条めぐらされている。	内外面とも調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　黒褐色 外　にぶい黄橙色	
1389	高杯C？ 鉢　A？ 口縁部	口径 25.4	内湾しながら上方にのびる身の浅い体部はそのまま口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され、平坦に仕上げられている。口縁部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキが施されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1390	高杯 脚端部	底径 10.8	脚部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は外上方に拡張され、凹線が２条めぐらされている。	脚台下半部外面はナデとヘラミガキの併用、脚端部は横ナデ、脚台内面は端部までヘラ削リが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1391	高杯 脚端部	底径 9.4	脚部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は外上方に拡張され、凹線が1条めぐらされている。		石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
1392	高杯 脚端部	底径 8.1	脚部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は外上方に拡張され、平坦に仕上げられている。裾部にはヘラによる刺突が加えられている。	脚台下半部外面はナデ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　褐灰色	
1393	高杯 脚端部	底径 11.5	脚部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は外上方に拡張され、凹線が２条めぐらされている。裾部にはヘラによる刺突が加えられている。	脚台下半部から脚端部にかけては内外面とも横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
1394	高杯 脚端部	底径 10.5	脚部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は外上方に拡張され、凹線が1条めぐらされている。	脚台下半部内面はヘラ削リ、脚端部は横ナデが施されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい橙色 外　にぶい黄橙色	
1395	高杯 脚端部	底径 8.0	脚部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は外上方に拡張され、凹線が1条めぐらされている。	脚台下半部内面はヘラ削リか？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内 外	

第79表　SD1015出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴		胎土・焼成	色　調	備　考
1396	壺　F 口縁部	口径 20.0	外上方に大きく開く口縁部を持つ広口壺。下方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が３条めぐらされ円形浮文が貼り付けられている。	口縁部内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも明黄褐色	
1397	壺　L 口縁部	口径 10.5	筒状の頸部と外反する短い口縁部を持つ短頸壺。上下に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1398	壺 体部		体部上半が「ハ」の字に開く壺である。頸部との境から肩にかけて櫛描波状文と平行線文が交互に描かれている。	体部内面の上半部は頸部との境付近が指頭によるナデ、それ以下は指頭圧痕とナデ調整が加えられている。	雲母・石英・赤色斑粒 焼成良好	内　褐灰色 外　橙色	
1399	甕　I 口縁部	口径 19.5	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ。上方に拡張さ平坦に仕上げられる口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	雲母・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも赤褐色	
1400	高杯G 杯部	口径 21.7	浅い皿状の体部と「く」の字状に内湾する口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から体部にかけての内面は横ナデまたはヘラミガキ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　赤褐色	
1401	壺 底部	底径 9.0	体部は上方に向かって大きく開きながら直線的に外上方にのびている。	体部は外面の調整は不明だが、内面はヘラミガキとハケメ調整が施されている。	石英・長石・砂粒 焼成良好	内　黒色 外　明黄褐色	
1402	高杯 脚端部	底径 10.0	脚端部は平坦に仕上げられ凹線が２条めぐらされている。	脚台下半部内面はヘラ削リが加えられている。	石英・長石 焼成良好	内外面とも橙色	
1403	高杯 脚端部	底径 11.1	脚部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。上方に拡張され円く仕上げられる脚端部には凹線が１条めぐらされている。	脚台下半部外面はナデ、内面はヘラ削リ、脚端部内面は横ナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩 ・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　浅黄橙色	
1404	ミニチュア土器 底部	底径 2.6	体部はわずかに内湾しながら上方にのびている。体部と底部の境は外方に突出している。体部外面には沈線による直線と曲線が組み合わされた幾何学的な文様が描かれている。	体部外面はヘラミガキ、内面は指頭によるナデ調整が施されている。	石英･雲母･長石・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい橙色	

丸山遺跡遺構出土遺物（中世）

第80表　ST1001出土遺物観察表（土器）

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1474	土師器 皿	口径12.4 底径 6.0 器高 2.4	直線的な体部とわずかに内湾する口縁部を持つ上方への開きの大きい皿。口縁端部は尖り気味に仕上げられている。	口縁から体部にかけては内外面とも丁寧な横ナデ調整が施されている。底部の切り離しは静止糸切法が使用されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	

第81表　SK1005出土遺物観察表（土器）

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1475	土師器 羽釜	口径16.0	体部から口縁部にかけては緩やかに内湾する。口縁端部は円く仕上げられ、やや下がった位置には低い鍔が廻されている。	口縁部は横ナデ、体部外面は指オサエ、内面は板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　にぶい黄橙色	

第82表　SD1005出土遺物観察表（土器）

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1476	土師器 杯	口径12.2 底径 8.2 器高 4.2	緩やかに内湾する上方への開きが小さい体部と鈍く尖らされた口縁端部を持つ杯で、体部と底部の境は円く仕上げられている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1477	土師器 杯	口径11.6 底径 5.6 器高 4.5	緩やかに内湾する上方への開きの小さい体部と、円く仕上げられた口縁端部を持つ杯で、体部と底部の境は円く仕上げられている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1478	土師器 杯	口径10.6 底径 8.0 器高 4.0	緩やかに内湾する上方への開きの小さい体部と、鈍く尖らされた口縁端部を持つ杯で、体部と底部の境は円く仕上げられている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラ切か。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい橙色	
1479	土師器 皿	口径10.4 底径 6.8 器高 2.3	緩やかに外反する上方への開きの大きい体部と薄く尖り気味に仕上げられた口縁端部を持つ杯である。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1480	土師器 杯	底径 7.8	緩やかに内湾する上方への開きが小さい体部は底部との境を四角く仕上げられている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1481	土師器 杯	底径 7.6	緩やかに内湾する上方への開きが小さい体部は底部との境が円く仕上げられている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1482	土師器 杯	底径 8.0	緩やかに内湾する上方への開きが小さい体部と鈍く尖らされた口縁端部を持つ杯である。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも浅黄橙色	
1483	土師器 杯	底径 7.0	直線的な体部は底部との境で「く」の字に屈曲しながら外上方に向かってのびている。立ち上がりは上方への開きがやや大きくなっている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1484	土師器 杯	底径 7.0	緩やかに外反する上方への開きが小さい体部は底部との境が円く仕上げられている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1485	土師器 杯	底径 7.8	直線的な体部は上方への開きが小さく体部と底部の境は「く」の字に屈曲している。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい橙色 外　橙色	
1486	土師器 杯	底径 6.8	直線的な体部は上方への開きが大きく、底部との境は円く仕上げられている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1487	土師器 杯	底径 6.2	わずかに内湾する体部下半部は上方への開きがやや大きく底部との境がわずかに外方に突出している。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1488	土師器 杯	底径 6.2	直線的な体部下半部は底部との境が明瞭に仕上げられている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい橙色 外　橙色	
1489	土師器 杯	底径 7.2	緩やかに内湾する上方への開きが小さい体部は底部との境に明瞭な屈曲部を持っている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1490	土師器 杯	底径 6.2	緩やかに内湾する上方への開きが小さい体部は底部との境に明瞭な屈曲部を持っている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	

1491	土師器 杯	底径 7.6	緩やかに内湾する上方への開きが小さい体部は底部との境に明瞭な屈曲部を持っている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
1492	土師器 杯	底径 6.6	直線的な体部は上方への開きが大きく、底部との境は円く仕上げられている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ、底部は回転ヘラキリの後にナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1493	土師器 杯	底径 5.8	緩やかに内湾する上方への開きが小さい体部は底部との境が円く仕上げられている。	底部の切り離しには回転ヘラ切が使用されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい橙色 外　橙色	
1494	土師器 杯	底径 6.4	直線的な体部は上方への開きが大きく、底部との境は円く仕上げられている。	大部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1495	土師器 杯	底径 7.8	体部は底部との境から直立気味に上方に向かってのびている。	体部はない外面とも横ナデが多段に施されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1496	土師器 杯	底径 7.0	体部と底部の境は円く仕上げられている。	底部の切り離しには回転糸切技法が使用されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　浅黄橙色	
1497	土師器 羽釜	口径14.4 体部 最大径 18.0	緩やかに内湾する口縁部からやや離れた位置に幅広の鍔がまわされている。口縁端部は円く仕上げられ、鍔の先端は下方にの	口縁部内外面は横ナデ調整が加えられる。	石英・結晶片岩・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1498	土師器 羽釜	口径26.8 体部 最大径 33.0	緩やかに外上方にのびる体部と内湾する口縁部をもち、内方に拡張され頂部が平坦に仕上げられた口縁端部からやや離れた位置には幅広い鍔が廻されている。	口縁部内外面は横ナデ、体部外面はハケ目調整が施されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1499	須恵器 高台付椀	底径 6.2	底部には幅広で断面半円形の低い高台がつけられている。	調整は不明。	長石・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも灰黄色	

第83表　SD1015出土遺物観察表

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1500	土師器 杯	口径10.0 底径 6.0 器高 2.6	直線的に外上方にのびる体と尖り気味に仕上げられた口縁部をも口径に対し器高の低い形態を持つ。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ調整、底部は回転ヘラ切。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　黄橙色	
1501	土師器 小皿	口径 7.8 底径 6.0 器高 1.5	直線的に外上方にのびる短い体と鈍く尖らされる口縁端部を持つ。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ調整、底部は回転ヘラ切。	石英・雲母 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	

第84表　包含層出土遺物観察表（弥生）

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1518	壺　A 口縁部	口径 10.9	細く締まった筒状の頸部から外上方に大きく開く口縁部と、球形に膨らむ体部を持つ広口壺。平坦に仕上げられた口縁端部には刻目が加えられ、頸部から体部上半にかけては櫛描による波状文と平行線文が描かれている。	口縁部から体部上半にかけての外面は全面ナデ調整か？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1519	壺　A	口径12.0 体部 最大径 15.5 底径 6.0 器高25.0	細く締まった筒状の頸部から外上方に大きく開く喇叭型の口縁と、球形に膨らむ体部を持つ広口壺。平坦に仕上げられた口縁端部には穿孔が加えられ、頸部と体部の境には刻目の施された貼付突帯が1本まわされている。また、体部上半には櫛描の平行線文により幾何学文が描かれている。	外面全面と口縁から頸部内面にかけての調整は不明。体部内面の上半は指頭によるナデ、中程は指オサエとハケメ、下半部はヘラケズリとナデが併用されている。	石英・結晶片岩 焼成良好	内　灰黄色 外　橙色	
1520	壺　E 口縁部	口径 13.2	筒状の頸部から大きく外反しながら上方にのびる口縁部を持つ広口壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜行文がつけられ、頸部には断面三角形の貼付突帯がまわされている。	口縁部から頸部にかけての外面は横ナデ調整、頸部内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
1521	壺 口縁部	口径 17.8	外上方に大きく開く口縁をもつ広口壺。肥厚され平坦に仕上げられた口縁端部には、ヘラ先による矢羽根状の文様をつけている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。 また口縁端部直下の外面には指オサエとハケメ調整の痕跡も残されている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　橙色 外　明褐色	
1522	壺　E 口縁部	口径 18.2	外上方に大きく開く口縁を持つ広口壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は中央がわずかにくぼみ、斜格子目文によって加飾されている。同様の文様は上方を向いた口縁部内面にも施されている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黄橙色 外　にぶい黄橙色	

1523	壺　E 口縁部	口径 18.0	外上方に大きく開く口縁を持つ広口壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は中央がわずかにくぼみ、斜格子目文によって加飾されている。同様の文様は上方を向いた口縁部内面にも施されている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整か？頸部外面は縦方向のハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成	内外面とも赤褐色	
1524	壺　I 口縁部	口径 22.3	大きく外反する口縁の端部が著しく垂下する壺。幅広い帯状の口縁端部には斜格子目文が描かれ、上方を向く口縁内面には刻目の施された貼付突帯が３本まわされている。	口縁から頸部にかけての外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1525	壺　I 口縁部	口径 20.6	大きく外反する口縁の端部が著しく垂下する壺。幅広い帯状の口縁端部には斜格子目文が描かれ、上方を向く口縁内面には刻目の施された貼付突帯が３本まわされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　淡黄色 外　浅黄橙色	
1526	壺　F 口縁部	口径 15.0	短い頸部から直線的に外上方に向かって大きく開く口縁を持つ広口壺。口縁端部は上下に拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁部外面は横ナデ、頸部外面はヘラミガキとナデの併用、体部上半は板状工具によるナデ調整が加えられている。内面の調整は不明。	石英・結晶片岩・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1527	壺　F 口縁部	口径 19.0	ななめ外上方に大きく開く口縁を持つ広口壺。口縁端部は平坦に仕上げられ、上方を向く口縁内面には穿孔によって小円孔文が列状に配置されている。	口縁部は外面に横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい褐色	
1528	壺　F 口縁部	口径 21.0	ななめ外上方に大きく開く口縁を持つ広口壺。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が３条めぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1529	壺　F 口縁部	口径 20.3	外反しなが上方に大きく開く口縁部を持つ広口壺。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が３条めぐらされ、櫛描刻線文がつけられている。また、上方を向く口縁部内面には櫛描の同心円文が描かれている。	口縁部は外面は横ナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1530	壺　F 口縁部	口径 26.0	外反しながら上方に大きく開く口縁部を持つ広口壺。上下に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が３条めぐらされ、櫛描刻線文がつけられている。また、上方を向く口縁部内面には斜格子目文によって加飾されている。	口縁部外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成	内　明赤褐色 外　橙色	
1531	壺　F 口縁部	口径 20.5	筒状の頸部から外反しながら外上方に大きく開く口縁部を持つ広口壺。上下に拡張された口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ調整か？頸部外面にはヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　明褐色	
1532	壺　F 口縁部	口径 12.8	細い筒状の頸部と、大きく外反しながら上方にのびる口縁を持つ広口壺。上下に拡張された口縁端部には凹線が１条めぐらされ、上方を向いた口縁部内面は格子目文によって加飾されている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整、頸部外面には縦方向のハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　明赤褐色 外　にぶい赤褐色	
1533	壺　F 口縁部	口径 13.8	細い筒状の頸部から大きく外反しながら上方にのびる口縁を持つ広口壺。上下に拡張された口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整で内面の横ナデは頸部にまで及ぶ。頸部外面縦方向のハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
1534	壺　F 口縁部	口径 13.0	細い筒状の頸部から大きく外反しながら上方にのびる口縁を持つ広口壺。上下に拡張された口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部は外面が縦方向のハケメ、内面はヘラミガキとハケメが併用されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも暗褐色	
1535	壺　G	口径10.0 体部 最大径 21.0 底径 7.0 器高25.9	細く締まった筒状の頸部から内湾しながら外上方に大きく開く漏斗状の口縁と、中程が算盤玉状に大きく膨らむ体部をもつ壺。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部部がわずかにくぼみ、口縁部には刻目の施された断面三角形の貼付突帯が２本まわされている。また、体部中程には櫛描列点文がつけられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部から体部上半部にかけての外面は縦方向のハケ、体部中央は横方向のヘラミガキ、体部下半は縦方向のヘラミガキ、頸部内面は指頭によるナデ、体部上半は指オサエとナデ、体部下半はハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　褐色 外　黒色	
1536	壺　G 口縁部	口径 13.6	筒状の頸部から緩やかに外反しながら上方にのびる口縁を持つ壺。外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、刻目が施されている。口縁部には刻目の施された断面三角形の貼付け突帯が２本まわされている。	口縁部外面はナデ調整か？内面の調整は不明。	石英・雲母 焼成	内　にぶい黄橙色 外　橙色	

1537	壺　G 口縁部	口径 12.0	筒状の頸部から内湾しながら外上方に大きく開く口縁部を持つ。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。口縁部には刻目の施された断面三角形の貼付け突帯２本まわされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　赤褐色 外　明赤褐色	
1538	壺　G 口縁部	口径 12.0	筒状の頸部から内湾しながら外上方に大きく開く口縁部を持つ。平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかに突出する。口縁部には断面三角形の貼付突帯が１本まわされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1539	壺　G 口縁部	口径 11.8	細く締まった筒状の頸部から内湾しながら外上方に大きく開く口縁部を持つ。内外方にわずかに拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかに突出する。口縁部には凹線が多段にめぐらされるが、その間には断面三角形の貼付突帯が２本まわされている。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部外面はハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1540	壺　G 口縁部	口径 11.6	細く締まった筒状の頸部から外上方に大きく開く口縁部を持つ。内外方にわずかに拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかに突出する。口縁部には刻目の施された断面三角形の貼付突帯が２本まわされている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成	内　褐色 外　黄色	
1541	壺　G 口縁部	口径 11.8	細く締まった筒状の頸部からわずかに内湾しながら外上方に大きく開く口縁部を持つ。肥厚する口縁端部は平坦に仕上げられる。口縁部の中央には弱い屈曲部が設けられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　黄橙色	
1542	壺　D 口縁部	口径 12.8	筒状の頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。わずかに肥厚する口縁端部は平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	
1543	壺　D 口縁部	口径 13.8	筒状の頸部から直線的に外上方にのびる比較的短い口縁部を持つ。わずかに上方に拡張される口縁端部は平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1544	壺　C 口縁部	口径 15.6	筒状の頸部から、外反しながら上方にのびる比較的短い口縁部と球状に膨らむ体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁端部は横ナデ、口縁部から頸部にかけては外面はハケメ？内面はヘラミガキ、体部外面はヘラミガキ調整が加えられている。	石英・長石 焼成不良	内　明褐色 外　赤褐色	
1545	壺　M 口縁部	口径 13.8	筒状の頸部から「く」の字に屈曲し、直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ壺。わずかに肥厚し、平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文がつけられている。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・砂粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明赤褐色	
1546	壺　M 口縁部	口径 14.6	筒状の頸部から「く」の字に屈曲し、直線的に外上方にのびる短い口縁部を持つ壺。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は中程がわずかにくぼみ、斜線文がつけられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部は外面が縦方向のハケメ、内面は横ナデ調整が加えられている。また、頸部の下半部には部分的に横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい褐色	
1547	壺　M 口縁部	口径 13.6	筒状の頸部から緩やかに外反し上方にのびる短い口縁部を持つ壺。平坦に仕上げられた口縁端部は中程がわずかにくぼみ、斜格子目文がつけられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部は外面がハケメ、内面は横ナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　明褐色 外　橙色	
1548	壺　K 口縁部	口径 10.0	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方に向かってのびる短い口縁部を持つ壺。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は、中程がわずかにくぼんでいる。頸部の屈曲部には指頭圧痕の施された貼付突帯が１本まわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面ともにぶい褐色	
1549	壺　K 口縁部	口径 9.6	「く」の字に屈曲する頸部から、直線的に外上方に向かってのびる短い口縁部を持つ壺。口縁端部は内方に拡張され平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母 焼成不良	内外面とも橙色	
1550	壺　N 口縁部	口径 10.6	頸部から直線的に外上方に向かってのびる口縁部を持つ壺。肥厚し平坦に仕上げられた口縁端部は、中程がわずかにくぼんでいる。頸部には指頭圧痕の施された貼付突帯が１本まわされている。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部外面はハケメ、内面は板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤褐色	

1551	壺　N 口縁部	口径 7.5	頸部からわずかに外反しながら上方に向かってのびる短い口縁部を持つ壺。肥厚し平坦に仕上げられた口縁端部は、中程がわずかにくぼんでいる。	口縁部外面は横ナデ、頸部外面はハケメとナデの併用、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成	内外面ともにぶい黄橙色	
1552	壺　L 口縁部	口径 15.0	外反する頸部から直線的に上方にのびる口縁部を持つ短頸壺。肥厚し平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも明黄褐色	
1553	壺　L 口縁部	口径 15.4	外反する頸部から直線的に上方にのびる口縁部を持つ短頸壺。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には、凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。また、頸部の屈曲部内面には指オサエの痕跡が残されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1554	壺　L 口縁部	口径 15.4	頸部から緩やかに外反する口縁部を持つ短頸壺。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が3条めぐらされている。頸部には斜線文の施された幅広の貼付突帯がまわされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・長石・雲母 焼成不良	内外面とも赤褐色	
1555	壺　L 口縁部	口径 17.5	頸部から緩やかに外反する短い口縁部を持つ短頸壺。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には刻目が施され、凹線が3条めぐらされている。頸部には刻目の施された低い幅広の貼付突帯がまわされている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも黒色	
1556	壺？ 甕？ 口縁部	口径 19.8	緩やかに外反する頸部から上方にのびる短い口縁部と上半部が「ハ」の字に開く体部を持つ。上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は中程がわずかにくぼんでいる。頸部には刻目の施された低い貼付突帯がまわされている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩 焼成不良	内外面ともにぶい黄橙色	
1557	壺　Q 口縁部	口径 11.6	細い頸部から緩やかに外反する口縁部を持つ壺。器壁の薄い口縁端部は平坦に仕上げられ、頸部には指頭圧痕の施された貼付突帯が1本まわされている。	口縁部から頸部にかけては外面は横ナデ、内面は横ナデと指頭によるナデ調整が併用されている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　橙色	
1558	壺　Q 口縁部	口径 14.4	頸部から大きく外反し上方に開く口縁部を持つ壺。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には刻目が加えられ、頸部には指頭圧痕の施された貼付突帯が1本まわされてる。	口縁部から頸部にかけては内外面ともナデ調整か？	雲母 焼成不良	内　にぶい黄橙色 外　浅黄橙色	
1559	壺 体部	体部 最大径 20.0	緩やかに外反する頸部からのびる上方への開きの大きい口縁部と、下半部が球状に膨らむ体部を持つ広口壺。頸部には指頭圧痕の施された低い貼付突帯がまわされている。	外面全面の調整は不明。頸部内面はナデ、体部内面の上半部は指オサエとナデ調整が併用されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明黄褐色	
1560	壺 体部	－	頸部から緩やかに内湾しながら外下方に開く体部を持つ壺。頸部には指頭圧痕の施された低い貼付突帯が1本まわされ、その下には貝殻腹縁文がまわされている。	頸部と体部の境付近の内面は指頭によるナデ調整、体部は内外面ともハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも褐色	
1561	壺 体部	－	「く」の字に屈曲する頸部から外反しながら上方へ向かって大きく開く口縁部と、膨らみの強い球形の体部を持つ広口壺である。	頸部外面はハケメの後に横ナデ、内面は横ナデ、体部上半の外面はハケメの後にヘラミガキ、内面は頸部との境付近が指頭によるナデ、上半がハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも赤褐色	
1562	壺 体部	－	「く」の字に屈曲する頸部から外下方にのびる、膨らみの強い球形の体部を持つ壺。頸部から体部上半にかけては櫛描波状文と平行線文が描かれている。	体部外面はハケメ、内面はヘラミガキ調整が加えられている。	石英・雲母・砂粒 焼成	内　明赤褐色 外　赤褐色	
1563	壺 体部	体部 最大径 19.2 底径 7.0	細く締まった頸部と下半部が球状に膨らむ体部を持っている。	体部外面は部分的にヘラミガキの痕跡が残されている。内面は頸部との境付近を棒状工具によるナデを加え、体部上半部は指オサエの後にハケメ調整している。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　橙色	
1564	壺 体部	－	体部は球形に膨らんでいる。体部上半には櫛描の波状文と平行線文が多段に描かれている。	体部内面には指オサエの後にナデ調整が施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　橙色	
1565	壺 体部	－	体部は緩やかに内湾しながら外下方に向かって開く。体部上半には櫛描の波状文と平行線文の他に、同心円文が描かれている。	体部外面はハケメ、内面は指オサエの後にハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　橙色	

1566	壺 体部	体部 最大径 9.2 底径 3.9	「く」の字に屈曲する頸部と中央部が緩やかに膨らむ紡錘形の体部を持つ。体部と底部の境は外方に突出している。	体部外面は全面にヘラミガキ、内面の上半部は指頭と板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英･長石･雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　褐灰色 外　浅黄橙色	
1567	壺	口径 6.8 体部 最大径 8.5 底径 4.8 器高 9.7	外反する頸部からのびる上方への開きの大きい口縁部と、球形に膨らむ体部を持つ小型の広口壺。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、頸部から体部上半部にかけての外面はハケメ、下半部はヘラミガキ、内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　黒褐色 外　褐灰色	
1568	壺 体部	－	頸部から緩やかに内湾しながら外下方にのびる体部を持つ小型壺。頸部には貝殻腹縁による刺突文が連続して付けられている。	体部上半部外面はヘラミガキ、内面は頸部との境付近が指頭によるナデ、それ以外は指オサエの後にナデ調整が加えられている。	石英・長石・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　暗灰黄色 外　にぶい赤褐色	
1569	甕　A 口縁部	口径 16.7	外反する頸部から直線的に上方にのびる口縁部と、膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキが施されている。	石英･長石･雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1570	甕　E 口縁部	口径 19.2	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては外面は横ナデ、内面はナデか？体部外面はハケ、内面はヘラミガキが加えられている。	石英・長石・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　明褐色	
1571	甕　A 口縁部	口径 18.4	外反する頸部から直線的に上方にのびる口縁部と、膨らみの小さい体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	ナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤褐色	
1572	甕　B 口縁部	口径 21.8	大きく外反する頸部から水平方向にのびる口縁部と、膨らみのない直立する体部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけての外面は横ナデ調整、体部はヘラミガキ調整が加えられている。内面の調整は不明。	石英・雲母 焼成良好	内　黒褐色 外　にぶい黄橙色	
1573	甕　D 口縁部	口径 21.4	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、膨らみの小さい直立する体部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	内外面とも全面にヘラミガキ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　黒褐色 外　にぶい赤褐色	
1574	甕　D 口縁部	口径 21.6	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、膨らみの小さい直立する体部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部外面にかけては横ナデ、内面はハケメ、体部外面は板状工具による縦方向のナデ、内面はハケメの後ヘラミガキ調整が加えられている。また、頸部の屈曲部外面直下は強い横ナデ調整が行われている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　淡黄色 外　灰白色	
1575	甕　G 口縁部	口径 32.0	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。肥厚する口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部までは内外面とも横ナデ調整、体部は内面にヘラミガキが加えられている。	石英・長石・雲母 焼成不良	内外面とも暗赤褐色	
1576	甕　G 口縁部	口径 18.3	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部までは内外面とも横ナデ、体部外面は調整不明、内面はナデ調整か？	石英 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	
1577	甕　H 口縁部	口径 20.2	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部には斜線文がつけられている。	口縁から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ？内面はナデか？頸部屈曲部直下の外面には強い横ナデが行われ凹線状にくぼんでいる。	石英・長石・雲母 焼成不良	内　明赤褐色 外　赤褐色	
1578	甕　G 口縁部	口径 21.8	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる短い口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張される口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は外面がハケメまたは板状工具によるナデ、内面がナデ調整か？頸部屈曲部直下の外面は強い横ナデ調整が加えられ凹線状にくぼんでいる。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい橙色 外　にぶい褐色	
1579	甕　H 口縁部	口径 17.0	強く「く」の字に屈曲する頸部から外反しながら上方にのびる短い口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。わずかに上方に拡張された口縁端部は、平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラミガキが加えられている。また頸部屈曲部直下は内外面とも強い横ナデが加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも明褐色	
1580	甕　H 口縁部	口径 17.0	強く「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら上方にのびる口縁部と、上半部が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。口縁端部は、円く仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はヘラミガキ、内面はハケメまたは板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも赤褐色	

1581	甕　H 口縁部	口径 13.4	強く「く」の字に屈曲する頸部からわずかに外反しながら上方にのびる口縁部と、上半部が球形に膨らむ体部を持つ。上方に拡張される口縁端部は、平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ調整、体部は内外面ともハケメ調整が加えられている。頸部屈曲部直下の外面には強い横ナデ調整が施されている。	石英・長石・雲母 焼成	内　にぶい褐色 外　褐色	
1582	甕　H 口縁部	口径 23.5	強く「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら水平方向にのびる口縁部と、上半部が球形に膨らむ体部を持つ。上方に拡張される口縁端部は、平坦に仕上げられている。	口縁部外面は横ナデ、内面はヘラミガキとナデ調整、体部外面は縦方向のハケメ、内面はハケメとヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　灰黄色 外　橙色	
1583	甕　H 口縁部	口径 17.5	強く「く」の字に屈曲する頸部から直線的に水平方向にのびる口縁部と、上半部が球形に膨らむ体部を持つ。わずかに上下に拡張される口縁端部は、平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は外面がハケメの後ナデ、内面が板状工具によるナデか？頸部の屈曲部直下は内外面とも強い横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　明黄褐色 外　橙色	
1584	甕　H 口縁部	口径 25.7	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半部が膨らむ体部を持つ。上方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は中程が凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては外面が横ナデ、体部は外面にハケメ調整が加えられている。頸部の屈曲部直下の外面には強い横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　明黄褐色 外　黄橙色	
1585	甕　I 口縁部	口径 27.0	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる口縁部と、膨らみの小さい体部を持つ。肥厚する口縁端部は平坦に仕上げられ、凹線が２条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は内面がナデ調整。頸部の屈曲部直下は内外面とも強い横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・砂粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　明褐色	
1586	甕　J 口縁部	口径 13.6	強く外反する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部と、上半が大きく膨らむ体部を持つ。口縁端部は上方に拡張され、平坦に仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1587	甕　H 口縁部	口径 22.4	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる口縁部と、上半が「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部は凹線凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は外面がナデ、内面がナデまたはヘラミガキか？頸部の屈曲部直下は外面に強い横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　赤褐色 外　暗赤褐色	
1588	甕　H 口縁部	口径 22.8	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる短い口縁部と、上半が「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部は凹線凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は内面がヘラミガキか？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも赤褐色	
1589	甕　I 口縁部	口径 13.6	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に水平にのびる短い口縁部と、上半が球形に膨らむ体部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が２条めぐらされている。	部分的にナデ調整が施されているか？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも赤褐色	
1590	甕　I 口縁部	口径 24.7	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる口縁部と、上半が「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部は凹線凹線状にくぼんでいる。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部外面はハケメ、内面はハケメとともに指オサエが加えられている。頸部屈曲部直下の外面には強い横ナデが施されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも褐色	
1591	甕　I 口縁部	口径 16.6	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に水平にのびる短い口縁部と、上半が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が2条めぐらされている。	口縁から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は外面に縦方向のハケメ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　浅黄橙色 外　にぶい橙色	
1592	甕　J 口縁部	口径 14.0	大きく外反する頸部からわずかに外反しながら上方にのびる短い口縁部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が３条めぐらされ、頸部の屈曲部にはヘラ先による連続する刺突文が付けられている。	口縁部は内外面ともナデ調整か？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい橙色 外　にぶい黄橙色	
1593	甕　I 口縁部	口径 24.6	「く」の字に屈曲する頸部から直線的に水平方向にのびる口縁部と、上半が外下方に向かって「ハ」の字に開く体部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部は外面に縦方向のハケメ調整が加えられている。頸部屈曲部の外面は強い横ナデが施されている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　褐色 外　にぶい黄橙色	

1594	甕 I 口縁部	口径 28.0	「く」の字に屈曲する頸部からわずかに内湾しながら外上方にのびる短い口縁部と、上半が膨らむ体部を持つ。上方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部には凹線が3条めぐらされている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデ、体部内面はハケメ調整が加えられている。また、頸部屈曲部直下の外面には強い横ナデが施されている。	石英・雲母・砂粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1595	ミニチュア甕 体部	底径 3.6	上げ底の底部と、上方に向かって直線的にのびる体部を持っている。	体部外面はヘラミガキが加えられ、底部との境には指オサエの痕跡が残されている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　橙色 外　にぶい黄橙色	
1596	高杯B 杯部	口径 19.0	杯部は内湾しながら口縁部に向かってのびる。口縁端部は内外方に拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、杯部外面は縦方向のハケメ、内面はハケメとヘラミガキを併用している。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　褐色 外　明褐色	
1597	高杯B 杯部	口径 17.6	内湾する身の深い杯部と、内屈する口縁部を持つ。口縁端部は内外方に拡張されて平坦に仕上げられ刻目が加えられている。杯部中央には櫛描簾状文が施されている。	杯部は内外面ともヘラミガキか？	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成	内　明赤褐色 外　赤褐色	
1598	高杯B 杯部	口径 21.8	内湾する身の深い杯部と、内屈する短い口縁部を持つ。口縁端部はわずかに内外方に拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、杯部外面は縦方向のハケメとヘラミガキ、内面はハケメ調整を施している。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　浅黄橙色 外　明黄褐色	
1599	高杯B 杯部	口径 18.2	緩やかに内湾しながら外上方にのびる身の浅い杯部は、そのまま口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、杯部は外面にヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　浅黄橙色 外　橙色	
1600	高杯B 杯部	口径 17.8	緩やかに内湾しながら外上方にのびる比較的身の深い杯部は、屈曲部を持つことなくそのまま口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、杯部は外面にヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　にぶい黄橙色	
1601	高杯B 杯部	口径 12.2	緩やかに内湾しながら外上方にのびる比較的身の浅い杯部は、屈曲部を持つことなくそのまま口縁部に移行する。口縁端部は内外方に拡張され平坦に仕上げられている。底部には円盤充填法が用いられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、杯部は内外面にヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　褐色	
1602	高杯B	口径 17.8	緩やかに内湾しながら外上方にのびる比較的身の深い杯部は、屈曲部を持つことなくそのまま口縁部に移行する。内外方に拡張され平坦に仕上げられる口縁端部には刻目が加えられている。比較的太い脚部は「ハ」の字に開きながら外下方に向かってのびる。脚端部は内方に拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、杯部から脚台部にかけての外面はヘラミガキ調整が施されている。内面の調整は不明。	石英・長石 焼成不良	内　赤色 外　赤褐色	
1603	高杯B 杯部	口径 21.0 底径	緩やかに内湾しながら外上方にのびる比較的身の深い杯部は、屈曲部を持つことなくそのまま口縁部に移行する。内外方に拡張され平坦に仕上げられる口縁端部には刻目が加えられている。比較的太い脚部は「ハ」の字に開きながら外下方に向かってのびる。脚端部は内方に拡張され、平坦に仕上げられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、杯部から脚台部にかけての外面は全面ヘラミガキ、杯部内面はヘラミガキの後ナデ調整、脚台部内面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1604	高杯B 杯部	口径 21.8	内湾しながら上方にのびる口縁部は端部が平坦に仕上げられている。	口縁端部周辺は横ナデ、口縁部から杯部外面にかけてはヘラミガキ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面ともにぶい黄褐色	
1605	高杯B 杯部	口径 25.7	内湾しながら上方にのびる口縁部は端部が内外方に拡張され平坦に仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ、杯部内外面はヘラミガキか？	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1606	高杯B	口径 22.4	直線的に外上方にのびる口縁部は上方への開きが大きい。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部がわずかにくぼんでいる。	口縁部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも黄橙色	
1607	高杯B 杯部	口径 19.2	緩やかに内湾しながら外上方にのびる比較的身の浅い杯部と、端部付近でわずかに外反する口縁部を持つ。口縁端部は鈍く尖らされている。	口縁部は内外面とも横ナデ、杯部は外面がヘラミガキ、内面がヘラケズリの後ヘラミガキが加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい赤褐色 外　赤褐色	
1608	高杯B 杯部	口径 27.4	緩やかに内湾しながら外上方にのびる比較的身の浅い杯部と、端部付近でわずかに外反する口縁部を持つ。口縁端部は肥厚し円く仕上げられている。	杯部は内外面ともヘラミガキか？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも橙色	

1609	高杯C 杯部	口径16.8 体部 最大径 18.9	膨らみの大きい球形の杯部と内湾する口縁部を持つ身の深い高杯。口縁端部は内外方に拡張され平坦に仕上げられている。内傾する口縁部には凹線文が多段にめぐらされている。	口縁部外面は横ナデ、杯部外面はハケメ、内面はヘラミガキ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　浅黄橙色 外　にぶい橙色	
1610	高杯C 杯部	口径22.0 杯部 最大径 23.3	杯部から内湾する口縁部を持つ。口縁端部は内外方に拡張され平坦に仕上げられる。内傾する口縁部には凹線文が3条めぐらされている。	口縁部から杯部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　灰白色 外　にぶい黄橙色	
1611	高杯C 杯部	口径 27.0	口縁部はわずかに内湾しながら上方に向かってのびる。口縁部は肥厚し、平坦に仕上げられた端部は頂部がわずかに盛り上がる。口縁部には凹線が3条めぐらされている。	口縁部外面には横ナデ調整が加えられている。	石英・長石・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　暗灰黄色 外　黄褐色	
1612	高杯C 杯部	口径 18.0	緩やかに内湾しながら外上方にひろがる杯部と、上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は内外方に拡張され、頂部は平坦に仕上げられている。口縁部には凹線が３条めぐらされている。	口縁部内外面は横ナデ、杯部内面はヘラミガキ調整が加えられている。	石英・長石・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　にぶい褐色	
1613	高杯C 杯部	口径 25.2	緩やかに内湾しながら上方にのびる口縁部を持つ。内外方に拡張され、平坦に仕上げられた口縁端部は頂部に凹線がめぐらされている。また、口縁部にも凹線がめぐらされている。	口縁部内外面はナデ調整か？	石英・長石・砂粒 焼成良好	内　明褐色 外　明赤褐色	
1614	高杯D 杯部	口径 25.0	浅い皿状の体部から湾曲しながら上方にのびる口縁部を持つ。内外方に拡張され平坦に仕上げられた口縁端部は頂部が凹線状にくぼみ、口縁部には凹線が多段にめぐらされている。	口縁部外面は横ナデ、内面はナデ、杯部は内外面ともヘラミガキ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1615	高杯E 杯部	口径 21.8	浅い皿状の体部との境で屈曲部を持ち、外反しながら上方に立ち上がる短い口縁部を持つ。口縁端部は鈍く尖らされている。口縁部と杯部の境には凹線がめぐらされている。	調整は不明。杯部外面はヘラミガキか？	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも黄橙色	
1616	高杯F 杯部	口径 17.0	水平口縁を持つ高杯。水平縁の端部は平坦に仕上げられ凹線が２条めぐらされ、水平口縁の内側には１条の隆起帯を持っている。	口縁部は内外面ともナデ調整か？	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
1617	高杯F 杯部	口径 21.2	水平口縁を持つ高杯。上下に拡張されて幅広の平坦面を形成する水平縁の端部は、中央部が浅くくぼんでいる。水平口縁の内側には１本の隆帯を持っている。	口縁部内外面は横ナデ、杯部内面はヘラケズリとヘラミガキが併用されている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　赤褐色	
1618	高杯G 杯部	口径21.2 杯部 最大径 22.0	浅い皿状の杯部は口縁部が強く内湾している。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁端部周辺は内外面とも横ナデ、杯部は内外面ともヘラミガキ調整が施されている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　赤褐色 外　明赤褐色	
1619	高杯G 杯部	口径25.0 杯部 最大径 26.0	浅い皿状の杯部は口縁部が強く内湾している。口縁端部は円く仕上げられている。	調整は不明。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　明黄褐色 外　橙色	
1620	高杯G 杯部	口径26.7 杯部 最大径 28.0	浅い皿状の杯部は口縁部が強く内湾している。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁端部周辺は内外面とも横ナデ調整が施されている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　褐色 外　灰黄褐色	
1621	高杯G 脚部	底径 10.0	外下方に向かって「ハ」の字に開く脚台部は上半部が太く高さが低い。わずかに内方に拡張される脚端部は平坦に仕上げられている。	脚台部外面はヘラミガキ、脚端部内面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも赤褐色	
1622	高杯 脚部	底径 11.8	脚台部は外下方に向かって「ハ」の字に開き、脚端部は平坦に仕上げられている。	脚台部内面はヘラケズリ、脚端部内面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成不良	内　橙色 外　明赤褐色	
1623 」	高杯 脚部	底径 11.8	外下方に向かって「ハ」の字に開く脚台部は上半部が太く高さが低い。わずかに内方に拡張される脚端部は平坦に仕上げられている。脚台上部には刻目の加えられた断面三角形の貼付突帯が１本まわされ、その下には方形の透し孔が開けられている。	脚台部内外面の調整は不明。脚端部内面には横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　赤褐色 外　にぶい褐色	
1624	高杯 脚部	底径 13.8	脚台部は外下方に向かって大きく「ハ」の字に開く。内外方に拡張される脚端部は平坦に仕上げられている。	脚台部内面には指オサエの痕跡とナデ調整、脚端部内外面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　黄灰色 外　橙色	

1625	高杯 脚部	底径 11.6	脚台部は直線的に外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は平坦に仕上げられている。脚台下半部には凹線がめぐらされている。	脚台部外面はヘラミガキ、内面はナデ調整、脚端部内面は横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも橙色	
1626	高杯 脚柱部		脚台上半のくびれ部にはヘラ描の平行直線文と綾杉文がつけられている。	脚台部外面はヘラミガキ、内面は絞り目の痕跡が残されている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　にぶい黄褐色 外　浅黄橙色	
1627	高杯 脚部	底径 10.8	円錐形の杯部と、外下方に向かって「ハ」の字に開く短い脚台をもつ。脚台部には平行直線文とともに三角形の透し孔が開けられている。	杯部から脚台部にかけての外面はヘラミガキ、杯部内面はヘラミガキと板状工具によるナデの併用、脚台部内面は指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成良好	内　にぶい橙色 外　にぶい褐色	
1628	高杯 脚部	底径 11.0	低い脚台部は比較的細い上半部と、外反しながら下方に大きく開く下半部を持つ。脚端部は外上方に拡張され平坦に仕上げられている。脚柱部には沈線により細い平行線文がつけられている。	杯部から脚台部にかけての外面はヘラミガキ、脚台部内面は指頭によるナデとヘラケズリが加えられ、脚端部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも明赤褐色	
1629	高杯 脚部	底径 12.0	比較的高さの高い脚台部。下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。外上方に拡張され平坦に仕上げられた脚端部には凹線文が1条めぐらされている。	脚台部外面の調整は不明、内面はヘラケズリ、脚端部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成不良	内　明赤褐色 外　赤褐色	
1630	高杯 脚部	底径 12.2	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。裾部と外上方に拡張され平坦に仕上げられた脚端部にはそれぞれ複数の凹線文がめぐらされている。	脚台部外面の調整は不明、内面はヘラケズリ、脚端部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1631	高杯 脚部	底径 14.5	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。内外方に拡張され平坦に仕上げられた脚端部には凹線文が1条めぐらされている。	脚台部外面の調整はヘラミガキ、内面はヘラケズリ、脚端部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　明赤褐色 外　橙色	
1632	高杯 脚部	底径 11.2	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。肥厚する脚端部は円く仕上げられている。裾部にはヘラ先による縦方向の連続刺突文が加えられている。	脚台部外面の調整は不明、内面は上半部がハケメ、下半部がヘラケズリ、脚端部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1633	高杯 脚部	底径 11.8	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は平坦に仕上げられ凹線が2条めぐらされている。裾部にはヘラ先による縦方向の連続刺突文が加えられている。	脚台部外面の調整はハケメ、内面は不明、脚端部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩 焼成不良	内外面とも赤橙色	
1634	高杯 脚部	底径 9.0	脚台下半部は外下方に向かって「ハ」の字に開く。脚端部は平坦に仕上げられ、凹線が2条めぐらされている。裾部にはヘラ先による縦方向の連続刺突文が加えられている。	脚台部外面の調整は不明、内面はヘラケズリ、脚端部は内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　明赤褐色	
1635	鉢　A 口縁部	口径 24.0	内湾する体部と、外反する頸部からわずかに内湾しながら水平方向にのびる口縁部を持つ。口縁端部は平坦に仕上げられている。	口縁部から頸部にかけては内外面とも横ナデか？体部外面の調整は不明、内面は板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　にぶい黄橙色	
1636	鉢 口縁部	口径 25.8	体部から口縁部にかけてはほぼ直立する。口縁端部はわずかに内方に拡張され頂部は平坦に仕上げられる。口縁部には水平方向の把手がつけられている。	外面は全面がヘラミガキ、内面はハケメの後にヘラミガキが加えられている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　にぶい褐色	
1637	土器台	口径 16.5		頂部外面はヘラミガキとナデ、脚台部外面は指オサエとヘラミガキが加えられている。脚台内面の調整は不明。	石英・雲母・長石・砂粒 焼成良好	内　にぶい赤褐色 外　赤褐色	
1638	ミニチュア甕 体部	底径 1.4		外面は全面が指オサエとナデ、内面が指オサエと指頭によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成不良	内外面とも明褐色	
1639	紡錘車	最大径 4.0 孔径 0.7			石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成	橙色	
1640	紡錘車	最大径 4.1 孔径 0.6			石英・雲母 焼成良好	にぶい褐色	

第85表　包含層出土遺物観察表（中世）

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	調整技法	胎土・焼成	色　調	備　考
1696	土師器 杯	口径 11.3 底径 7.8 器高 3.2	底部との境から外上方に向かって直線的にのびる体部は上方への開きが小さく、口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部から杯部にかけては内外面ともナデ幅の不規則な強い横ナデが多段に加えられている。底部外面は回転ヘラ切りの後ミガキ、内面は中心部に向かう渦巻き状のナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
1697	土師器 杯	口径11.0 底径 6.6 器高 3.4	底部との境から外上方に向かって直線的にのびる体部は上方への開きが小さい。口縁端部は鈍く尖らされ体部と底部の境は明瞭である。	口縁部から杯部にかけては内外面ともナデ幅の均一な強い横ナデが多段に加えられている。底部外面は回転ヘラ切りの後ナデまたはミガキ、内面は中心部に向かう渦巻き状のナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1698	土師器 椀	口径10.0 底径 5.6 器高 4.2	体部は緩やかに内湾しながら外上方にのびる。口縁端部は円く仕上げられ、底部と体部との境はわずかな段を持っている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。底部外面の切り離しには静止糸切り技法が使用されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
1699	土師器 椀	口径10.8 底径 4.2 器高 4.4	体部は緩やかに内湾しながら外上方にのび口縁部付近でわずかに外反する。口縁端部は円く仕上げられ、底部と体部との境はわずかな段を持っている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。底部外面の切り離しには静止糸切り技法が使用されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　にぶい黄橙色	
1700	土師器 椀	口径8.0 底径4.6 器高5.0	上方に向かって緩やかに開く直線的な体部と内湾する口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられ体部と底部との境はわずかに外方に突出している。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。底部外面の切り離しには静止糸切り技法が使用されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
1701	土師器 皿	口径12.7 底径5.5 器高2.9	わずかに内湾しながら外上方に向かって大きく開く体部と軽く外反する口縁部を持つ端反皿。口縁端部は円く仕上げられ、体部と底部の境はわずかに段を持っている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。底部外面の切り離しには静止糸切り技法が使用されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　明黄褐色	
1702	土師器 端反皿	口径11.6 底径5.0 器高2.2	わずかに内湾しながら外上方に向かって大きく開く体部と軽く外反する口縁部を持つ端反皿。口縁端部は円く仕上げられ、体部と底部の境にはわずかに段を持っている。	口縁部から体部にかけては内外面とも横ナデ調整が加えられている。底部外面の切り離しには静止糸切り技法が使用されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　橙色 外　にぶい橙色	
1703	土師器 皿	口径 17.8	外上方に向かって大きく開く直線的な体部と、薄く尖らされる口縁端部を持っている。	口縁部から体部内外面ともに横ナデ調整が施されている。	石英・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1704	土師器 椀	底径 5.9	体部は緩やかに内湾しながら外上方にのびる。底部と体部との境はわずかな段を持っている。	体部外面は横ナデ調整が加えられ、底部外面には静止糸切り技法が使用されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1705	土師器 椀	底径 4.4	体部は緩やかに内湾しながら外上方にのびる。底部と体部との境はわずかな段を持っている。	体部外面は横ナデ調整が加えられ、底部外面には静止糸切り技法が使用されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　にぶい黄橙色	
1706	土師器 皿	底径 4.2	体部は緩やかに内湾しながら外上方にのびている。	体部外面は横ナデ、内面はナデ調整が加えられ、底部は外面には静止糸切り技法が使用されている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面ともにぶい橙色	
1707	土師器 羽釜	口径20.5 体部 最大径 25.0	体部と口縁部の境には水平にのびる低い鍔がまわされている。直立する口縁は鍔との距離が比較的長く、端部は鈍く尖らされている。	口縁部外面は横ナデ、内面は板状工具による横方向のナデ調整が施されている。	石英・結晶片岩・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1708	土師器 釜	口径25.0 体部 最大径 28.5	直立する体部と、わずかに内傾する口縁部を持ち、口縁部と体部の境には、水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁部は鍔との距離が比較的長く、端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英 焼成良好	内　明黄褐色 外　明褐色	
1709	土師器 羽釜	口径 18.0	直立する体部と、わずかに内傾する口縁部を持ち、口縁部と体部の境には、水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄色 外　橙色	
1710	土師器 羽釜	口径 19.2	直立する体部と、内湾する口縁部を持ち、口縁部と体部の境には、水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁端部は鈍く尖らされている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内外面とも橙色	
1711	土師器 羽釜	口径 24.0	直立する体部と内湾する口縁部を持ち、口縁部と体部との境には水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面にナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内　橙色 外　明褐色	

1712	土師器 羽釜	口径 26.0	直立する体部は、途中、口縁部との境に水平にまわされる低い鍔をはさんで緩やかに内湾しながら口縁部に移行する。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内　明赤褐色 外　赤褐色	
1713	土師器 羽釜	口径 23.0	直立する体部と、わずかに内湾する口縁部を持ち、口縁部と体部との境には水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては指オサエの後横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも橙色	
1714	土師器 羽釜	口径 22.0	直立する体部と、わずかに内湾する口縁部を持ち、口縁部と体部との境には水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁端部は円く仕上げられている。	口縁部内外面は横ナデ、体部外面は指オサエの後にナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　明黄褐色 外　橙色	
1715	土師器 羽釜	口径 22.5	体部から口縁部にかけては緩やかに内湾する。口縁部と体部との境には、水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁端部と鍔との距離は短く、口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　明黄褐色 外　橙色	
1716	土師器 羽釜	口径 22.0	体部から口縁部にかけては緩やかに内湾する。口縁部と体部との境には、水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁端部と鍔との距離は短く、口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成不良	内　黄橙色 外　浅黄橙色	
1717	土師器 羽釜	口径 20.5	直立する体部と、内湾する短い口縁部を持ち、口縁部と体部との境には低い鍔がまわされている。口縁端部と鍔との距離は短く、口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　褐灰色 外　浅黄橙色	
1718	土師器 羽釜	口径 21.5	内湾する口縁部と体部の境には水平にのびる円い隆帯状の鍔がまわされている。口縁端部と鍔との距離は短く、口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は口縁部にナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも明赤褐色	
1719	土師器 羽釜	口径 21.0	内湾する口縁部と体部の境には水平にのびる円い隆帯状の鍔がまわされている。口縁端部と鍔との距離は短く、口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は口縁部が横ナデ、それ以下はナデ調整が加えられている。	石英・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも橙色	
1720	土師器 羽釜	口径24.0 体部 最大径 28.0	直立する体部は、途中、口縁部との境に水平にまわされる低い鍔をはさんで緩やかに内湾しながら口縁部に移行する。口縁端部と鍔との距離は短く、口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は口縁部が横ナデ、それ以下は板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	
1721	土師器 羽釜	口径22.8 体部 最大径 26.6	体部は内湾しながら口縁部に移行する。口縁部と体部との境には、水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁端部と鍔との距離は短く、口縁端部と鍔端部の高さはほぼ等しい。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　にぶい黄橙色	
1722	土師器 羽釜	底径 8.0	体部は内湾しながら口縁部に移行する。口縁部と体部との境には、水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁は鍔との距離が短く境が不明瞭で、口縁端部と鍔端部の高さはほぼ等しい。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内　黒褐色 外　橙色	
1723	土師器 羽釜	口径23.0 体部 最大径 27.0	体部は内湾しながら口縁部に移行する。口縁部と体部との境には、水平にのびる低い鍔がまわされている。口縁は鍔との距離が短く境が不明瞭で、口縁端部と鍔端部の高さはほぼ等しい。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から鍔にかけては横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母 焼成良好	内　浅黄橙色 外　灰白色	
1724	土師器 羽釜	口径 20.0	直立する体部はわずかに内湾しながら口縁部に移行する。鍔は口縁部に接する位置につけられ、口縁端部と鍔との間は凹線状のくぼみとなって口縁部をまわっている。	口縁端部とそに周辺の狭い範囲は横ナデ調整、それ以下の体部は指オサエの後ナデ調整、内面は全面に板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石・赤色斑粒 焼成不良	内外面とも明赤褐色	
1725	土師器 鍋	口径36.5 体部 最大径 36.8	上方への開きの小さい体部と、「く」の字に屈曲する頸部から直線的に外上方にのびる口縁部を持つ。口縁端部は円く仕上げられている。	外面は口縁から頸部屈曲部までは指オサエと横ナデ、体部は指オサエとナデ、内面は口縁部が横ナデ、体部が板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい黄褐色	

1726	土師器 擂鉢	口径 28.6	徐々に肥厚しながら直線的に外上方にのびる上方への開きの大きい体部と、外面に面取りを加え端部を鈍く尖らせた口縁部を持っている。	外面は口縁部が横ナデ、体部が指オサエの後にナデ調整が加えられている。内面の調整は不明。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも赤褐色	
1727	土師器 擂鉢 捏鉢	口径25.5 体部 最大径 26.5	徐々に肥厚しながら直線的に外上方にのびる上方への開きの大きい体部と、外面に面取りを加え端部を鈍く尖らせた口縁部を持っている。	内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内外面ともにぶい黄橙色	
1728	土師器 擂鉢	口径27.5 体部 最大径 28.5	徐々に肥厚しながら直線的に外上方にのびる上方への開きの大きい体部と、外面に面取りを加え端部を鈍く尖らせた口縁部を持っている。	外面は口縁部が横ナデ、体部が指オサエの後にナデ調整が加えられている。内面はナデ調整か？	石英 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　にぶい赤褐色	
1729	土師器 擂鉢	口径27.0 体部 最大径 29.0	徐々に肥厚しながら直線的に外上方にのびる上方への開きの大きい体部と、口縁部を内屈させ端部を円く仕上げた口縁部を持っている。	口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は指オサエの後にナデ、内面はハケまたは板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・赤色斑粒 焼成良好	内　浅黄橙色 外　にぶい橙色	
1730	土師器 擂鉢	口径 23.0	徐々に肥厚しながら直線的に外上方にのびる上方への開きの大きい体部と、口縁端部を内外方に拡し円く仕上げた口縁部を持つ。内面には８条１単位の擂目が付けられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は指オサエの後にナデ、内面はハケまたは板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも浅黄橙色	
1731	土師器 擂鉢	口径26.0 底径12.2 器高11.9	緩やかに内湾しながら外上方にのびる上方への開きの大きい体部と、口縁端部を内方に拡張し頂部を平坦に仕上げた口縁部を持つ。内面には３条１単位の擂目がつけられている。	口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は指オサエの後にナデ、内面はハケまたは板状工具によるナデ調整が加えられている。	石英・雲母・結晶片岩・赤色斑粒 焼成良好	内　にぶい黄橙色 外　明黄褐色	
1732	土師器 擂鉢	底径 10.1	内面には５条１単位の擂目がつけられている。	外面は体部が指オサエの後にナデ、内面はナデ調整か？	石英・雲母・赤色斑粒 焼成良好	内　黄橙色 外　橙色	
1733	土師器 擂鉢	底径 13.6	内面には７条１単位の擂目がつけられている。	体部外面はハケまたは板状工具によるナデ、内面はナデ調整が加えられている。	石英・雲母・長石 焼成良好	内外面とも赤灰色	
1734	瓦質土器 擂鉢	底径 13.0	内面には５条１単位の擂目がつけられている。	外面は体部が指オサエの後にナデ、内面はナデ調整か？	石英・雲母・長石 焼成不良	内　褐灰色 外　灰黄褐色	
1735	須恵器 壺	高台径 8.0	低い高台の付いた底部から直線的に上方にのびる開きの小さい体部を持っている。	体部外面は幅が不規則な横ナデ、内面は幅の狭い横ナデが強く加えられている。	雲母・長石・赤色斑粒 焼成良好	内外面とも灰色	
1736	備前 擂鉢	口径28.5 体部 最大径 29.5	直線的に外上方にのびる上方への開きの大きい体部と、下方に拡張され平坦に仕上げられた口縁部を持つ。内面には７条１単位の擂目が付けられている。	内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・長石 焼成良好	内　黄灰色 外　にぶい赤褐色	備前
1737	須恵器 捏鉢	口径 32.5	上方への開きの大きい体部と上下に拡張され平坦に仕上げられた口縁部を持っている。	内外面とも横ナデ調整が加えられている。	石英・長石・結晶片岩 焼成良好	内外面とも灰色	
1738	帯留						

第86表　包含層出土遺物観察表（近世）

番号	器　種	法量(cm)	特　　徴	備　考
1739	陶器 鉢	口径22.0	緩やかに内湾する比較的上方への開きが大きい体部と、肥厚じ頂部が平坦に仕上げられた口縁部を持つ。内外面には釉がかけられ、鉄釉で文様が描かれている。	唐津焼
1740	陶器 鉢	底径 9.5	上方への開きの大きい体部と断面方形の削り出し高大を持つ。体部内外面には褐釉がかけられるが高台部分は施釉がされない。	唐津焼
1741	陶器 鉢	底径 8.6	上方への開きの大きい体部と断面方形の削り出し高台を持つ。体部内外面には褐釉がつけられるが高台部分は施釉されない。	唐津焼
1742	陶器 鉢	底径 8.8	上方への開きの大きい体部と断面方形の高い削り出し高台を持つ。体部内外面には褐釉がかけられるが高台部分は施釉されない。	唐津焼
1743	陶器 鉢	底径 9.0	上方への開きの大きい体部と断面方形の削り出し高台を持つ。体部内外面には褐釉薬がかけられるが高台部分は施釉されない。	唐津焼
1744	磁器 椀	底径 9.5	上方への開きの大きい体部と畳み付け部分が尖る削り出し高台を持つ。体部内外面には褐釉がかけられるが高台部分は施釉さ。	唐津焼
1745	磁器 椀	口径12.0	緩やかに内湾しながら上方にのびる体部には染付けにより縦縞とヨロケ縞模様が交互に描かれ。	伊万里焼
1746	磁器 椀	口径10.0	直線的な上方への開きの小さい体部をもつ。体部外面と口縁部内面には染付による文様が描かれ。	伊万里焼
1747	磁器 椀	口径 5.0	緩やかに内湾する体部を持ち、体部外面には染付けによる文様が描かれている。	
1748	磁器 椀	口径 4.5	緩やかに内湾する上方への開きの小さい大部と比較的高い高台を持ち、体部外面には染付けにより花文様が描かれている。	伊万里焼
1749	磁器 皿	底径 7.7	緩やかに内湾する上方への開きの小さい体部と低い高台を持ち、体部内面には染付けにより唐草文様が描かれている。内面見込み部は蛇の目釉ハギ。	
1750	磁器 皿	底径 8.5	低い削り出し高台と内湾する浅い体部を持ち内面には染付けによる模様が描かれ。	

1751	磁器 徳利	底径 3.4	下膨れの体部と比較的高い高台を持つ鶴首の徳利。体部外面には染付けにより草花が描かれている。	
1752	陶器 鉢	口径18.5	上方への開きの小さい体部と強く内側に巻き込まれる口縁部を持つ。外面と口縁端部内面の一部に鉄釉がかけられている。	
1753	陶器 擂鉢	口径18.4	直線的な上方への開きのやや大きい体部と貼り付けによって肥厚する口縁部を持つ。体部外面は鉄釉がかけられている。	
1754	陶器 秉燭	底径 3.0	深い椀状の体部中央に燈芯受けが付けられている。	
1755	陶器 灯明皿	口径10.0	緩やかに内湾する浅い体部は回転ヘラケズリにより薄く仕上げられる。口縁端部には煤が付着している。	
1756	加工円盤	直径 約6.5	瓦片の縁辺部を研磨して形を丸く整えている。	
1757	瓦質 焙烙	口径39.6	浅い皿状の体部と「く」の字に屈曲し水平にのびる口縁部を持つ。口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は指オサエ、内面はハケメ調整が加えられている。	

第87表　SB1001出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
4	打製石鏃	2.6	2.1	0.4	2.3	片側の側縁部がわずかに外湾弧を描くものの平面形がほぼ二等辺三角形の平基無茎式の石鏃。背腹両面に素材の剥片本来の剥離面が残されている。	サヌカイト	先端部欠失
5	打製石鏃	4.0	1.7	0.6	3.4	長さが幅の2倍以上になる細身の凸基有茎式石鏃。茎と身の境は明瞭に作り出されている。	サヌカイト	茎と先端部を欠失
6	打製石鏃	2.2	2.0	0.4	1.6	側縁部は左右非対称に作られている。	サヌカイト	先端部と基部を欠失
7	打製石錐	3.1	1.6	0.4	1.5	頭部と錐部の境が明瞭で頭部の大きさと比較して錐部は長い。	サヌカイト	
8	細部調整が加えられた剥片	3.9	2.1	0.6	5.6	横長の剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ簡単な調整を加えて刃部を作り出している	サヌカイト	
9	細部調整が加えられた剥片	3.0	2.1	0.6	3.0	横長剥片の遠端部縁辺に両面から簡単な調整を加えたものを、縦に折断し、折断面を打面にして両極剥離を加えている。	サヌカイト	
10	細部調整が加えられた剥片	3.0	2.1	0.4	2.0	背面に自然面を残す横長の剥片の打面と遠端部縁辺を中心に、両極剥離が加えられている。	サヌカイト	
11	細部調整が加えられた剥片	2.8	2.1	0.4	3.0	折断面を持つ剥片を素材にし、折断面を含む縁辺部に調整が加えられている。	サヌカイト	
12	細部調整が加えられた剥片	3.9	2.1	0.6	5.6	自然面を打面とする剥片の側辺を打面と直角に折断し、その折断面から背面に向けて簡単な調整が加えられている。	サヌカイト	

第88表　SB1003出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
27	打製石鏃	2.4	1.8	0.5	1.5	両側縁が外湾弧を描く凹基無茎式の石鏃。基部の抉りは比較的深く、逆刺は鋭く作り出されている。	サヌカイト	一方の逆刺を欠失
28	打製石鏃	1.5	1.8	0.3	0.5	凸基無茎式で基部が円基式のものか？	サヌカイト	基部の一部のみ残存
29	打製石鏃	1.7	2.0	0.3	1.0	側縁部が外湾弧を描く凸基無茎式の石鏃で基部は円く仕上げられている。調整は丁寧だが、背腹両面に素材の剥片本来の剥離面が大きく残されている。	サヌカイト	身部の下半部が残存
30	打製石鏃	2.7	1.7	0.2	1.0	側縁部に加えられる調整は比較的角度が急で細かい。背腹両面には素材の剥片本来の剥離面を大きく残している。	サヌカイト	基部の一部を欠失
31	打製石鏃	2.2	1.4	0.3	0.8	側縁部が緩やかな外湾弧を描き逆刺を持たない石鏃である。基部の一部を欠くため正確に分類できないが凸基有茎式か凸基無茎式に属すると考えられる。	サヌカイト	茎を欠失
32	打製石錐	1.8	1.2	0.1 0.3	0.4	剥片の折断面と側縁部の交点に両面から調整を加えて短い錐部を作出している。	サヌカイト	
33	細部調整が加えられた剥片	2.5	1.4	0.6	1.6	折断面を持つ小型の剥片の縁辺部に主剥離面側から簡単な調整を加えるとともに、折断面にも背面から急角度の深い調整を加え鋸歯状の刃部を作り出している。	サヌカイト	
34	細部調整が加えられた剥片	3.0	2.6	0.8	5.8	複数の折断面を持つ不整形の剥片の折断面に片面から急角度の調整が加えられ刃部を作り出している。	サヌカイト	
35	細部調整が加えられた剥片	3.2	2.1	0.9	6.2	両極打法が加えられた両面調整の石器を折断し折断面に一方から調整を加え刃部を作出している。	サヌカイト	
36	細部調整が加えられた剥片	2.1	1.9	0.2	1.3	両極打法によって生み出された可能性のある横長の剥片の遠端部縁辺に両面から調整を加え簡単な刃部を作り出している。	サヌカイト	
37	横長剥片	14.2	9.3	1.6	190.7	大型の横長剥片。背面は2枚の大きな剥離面と打面調整の際に加えられた複数の小さな剥離面が残されている。主剥離面側も打面部分を中心に複数の剥離面が残され、打面と打瘤が完全に除去されている。	サヌカイト	

第89表　SB1004出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
38	打製石鏃	2.0	1.7	0.3	1.0	左右対称な側縁部を持つ二等辺三角形の平基無茎式石鏃。側縁部には比較的急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	
39	打製石鏃	2.4	2.3	0.3	2.0	側縁部が大きく外湾弧を描く平基無茎式の石鏃。縁辺部の調整は剥離角が大きく背腹両面に剥片本来の剥離面が大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
40	打製石鏃	2.7	1.8	0.5	2.1	側縁部が外湾弧を描く凹基無茎式の石鏃。基部の抉りは比較的浅く逆刺の長さが異なる左右非対称の形状に仕上げられている。片面には素材の剥片本来の剥離面が大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
41	打製石鏃	1.6	1.6	0.3	0.9	側縁部がわずかに外湾弧を描き基部の抉りが浅い凹基無茎式の石鏃。素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
42	打製石鏃	1.8	1.9	0.3	1.0	側縁部が外湾弧を描き基部の抉りが深い凹基無茎式の石鏃。片方の逆刺がもう一方より長く左右非対称の形状に仕上げられている。素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
43	打製石鏃	4.0	1.5	0.5	2.9	側縁部が外湾弧を描く凸基有茎式石鏃。身部と茎の境は内湾弧を描いている。	サヌカイト	茎の一部を欠失
44	打製石鏃	2.6	2.4	0.4	1.9	身の上半部のみを残す大型の石鏃。縁辺部の剥離の角度は小さい。	サヌカイト	基部を欠失
45	打製石鏃	3.1	1.2	0.4	1.4	側縁部が外湾弧を描く凸基無茎式または凸基有茎式の石鏃。幅に対して長さが3倍を越える細身に仕上げられている。	サヌカイト	基部を欠失
46	打製石鏃	4.5	2.1	0.4	3.7	側縁部が外湾弧を描く凸基無茎式の石鏃。横長の剥片の縁辺部に加えられる調整は粗く剥離角は小さい。	サヌカイト	基部を欠失
47	打製石鏃	3.2	1.3	0.4	1.9	片側の側縁は折断または截断面を持ちその面を打面にした調整が加えられている。	サヌカイト	未製品？
48	打製石鏃	2.4	2.1	0.3	2.1	凸基無茎式で基部が円く作られる石鏃。縁辺部の剥離は角度が急で背腹両面に剥片本来の剥離面を大きく残している。	サヌカイト	先端部を欠失
49	打製石庖丁	6.7	3.7	0.8	20.9	横長剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ調整を加え刃部を作り出すとともに片側の側縁部には紐かけ用の抉りが加えられている。打面側の主剥離面側には殆ど調整が施されていないが、遠端部縁辺の主剥離面側には連続する調整が加えられている。打面側、遠端部縁辺側ともに縁辺部は使用による摩滅が残されている。	サヌカイト	
50	細部調整が加えられた剥片	9.3	5.1	1.3	64.3	打面に自然面をそのまま残す横長剥片の遠端部縁辺に粗い調整が加えられている。調整は粗い階段状剥離を行った後に細かな調整を加えている。	サヌカイト	
51	打製石庖丁	10.0	4.1	0.4	29.8	素材に背面に自然面を持つ剥片を使用し、両側辺に浅い抉りが加えられた短冊形の形態の石庖丁。背部または刃部と考えられる長軸側の二辺はいずれも縁辺がズルズルに磨り減っている。	結晶片岩	
52	打製石庖丁	10.2	6.4	1.2	95.2	結晶片岩の剥片を素材に使用し、縁辺部に調整を加えて不整台形の形態に仕上げている。長軸に平行する二辺のうち背部と考えられる短い方の一辺は縁辺部が摩滅している。また、両側辺には抉りと考えられる、ごく浅いくぼみがつけられている。	結晶片岩	
53	敲石	14.2	3.6	2.8	302.3	大型の柱状石斧の刃部と側面部を敲打に使用している。側面の敲打の痕跡は稜の部分に集中している。	結晶片岩	
54	敲石	13.0	6.7	1.8	218.5	扁平な礫の側縁部と先端部分が部分的に敲打の痕跡が残されている。また礫の片側の面と側縁の一部が砥石として使用されたらしく研磨の痕が残されている。	緑色岩	
55	敲石	8.0	5.8	2.3	167.5	扁平な楕円形の礫の周辺部に部分的に敲打痕が残されている。	砂岩	

第90表　SB1005出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
75	打製石鏃	1.9	1.7	0.2	0.6	片側の側縁が直線的であるのに対してもう一方はわずかに内湾弧を描き、長さと幅がほぼ均しい平基無茎式の石鏃。両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部の両端を欠失

76	打製石鏃	3.6	2.1	0.7	3.7	直線的な側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。調整は石鏃としては角度が大きく短い。表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている部分がある。	サヌカイト	先端部を欠失
77	打製石鏃	2.3	0.9	0.5	0.9	外湾弧を描く側縁部と狭く平坦な基端部を持つ平基無茎式の石鏃。調整はやや角度が急で短く表裏両面には部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
78	打製石鏃	2.7	1.7	0.6	2.5	大きく外湾弧を描く側縁部と平坦に仕上げられた狭い基部を持つ平基無茎式の石鏃。側縁部の調整は粗い階段状の剥離痕が残されている。また、片面には部分的に素材の剥片本来の剥離面が残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
79	打製石鏃	1.9	1.4	0.5	1.2	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持った凹基無茎式の石鏃。しかし抉りは極めて浅く、平基式との差はわずかである。	サヌカイト	片方の逆刺を欠失
80	打製石鏃	2.6	1.6	0.4	0.5	片側がわずかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は階段状で粗く背面はほぼ全面に調整が及んでいるが主剥離面側は素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
81	打製石鏃	2.9	1.7	0.4	1.3	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深く、表裏両面の全面に及んでいる。	サヌカイト	逆刺の一部を欠失
82	打製石鏃	4.0	1.8	0.4	3.3	直線的な側縁部とわずかに抉りが加えられた基部を持つ長さが4cmを越える大型の凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深く表裏両面ともほぼ全面に調整が加えられている。	サヌカイト	先端を欠失
83	打製石鏃	2.2	1.3	0.2	0.8	外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた狭い基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深く側縁部は鋸歯状を呈する。表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
84	打製石鏃	2.6	1.3	0.4	1.2	外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深く、表裏両面の全面に及んでいる。	サヌカイト	未製品？
85	打製石鏃	2.5	2.1	0.4	1.3	大きく外湾弧を描く側縁部とU字型の深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。逆刺は長く先端は尖らされている。側縁部の調整は鋭角で長く表裏両面とも全面に調整が加えられている。	サヌカイト	逆刺の一部を欠失
86	打製石鏃	4.1	1.8	0.6	4.3	外湾弧を描く側縁部がそのまま基端部に移行する木葉形の形態に仕上げられた凸基無茎式の石鏃。調整は階段状で短く、表裏両面には部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
87	打製石鏃	2.1	1.9	0.6	2.1	直線的な側縁部と外方に大きく突出する基端部を持つ不整五角形の形態の凸基無茎式の石鏃。調整は剥離が粗くて短いため表裏両面とも部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
88	打製石鏃	3.1	1.7	0.6	2.4	外湾弧を描く側縁部と基端部から内湾弧を描く短い茎を持つ凸基有茎式の石鏃。片面は粗い調整が全面に加えられているが、もう一方は素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
89	打製石鏃	3.4	2.5	0.4	3.5	緩やかに外湾弧を描く側縁部と扁平で短い茎を持つ凸基無茎式の石鏃。逆刺の部分は鋭く尖る。調整は鋭角で長いが表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が部分的に未調整のまま残されている。	サヌカイト	
90	打製石鏃	2.7	1.8	0.4	1.8	正三角形に近い身部と扁平でやや長めの茎を持つ凸基有茎式石鏃。表裏両面には部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。茎部分は片面がやや急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	
91	打製石鏃	2.4	1.4	0.3	0.8	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ細身の石鏃。両面には部分的に素材の横長剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
92	打製石鏃	3.1	1.7	0.6	2.0	剥片の縁辺部に片面から急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	未製品？
93	打製石鏃	2.9	1.7	0.3	1.3	直線的な側縁部には比較的単位が大きい粗い剥離が加えられている。両面には素材の横長剥片本来の剥離面が大きく残されている。	サヌカイト	先端部のみ残存
94	打製石鏃	2.7	1.5	0.5	1.8	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ石鏃。両面に素材の横長剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部の一部を欠失
95	打製石鏃	2.2	1.3	0.4	0.7	側縁部は緩やかな外湾弧を描いている。	サヌカイト	先端部のみ残存

96	打製石鏃	2.1	2.1	0.6	1.8	直線的な側縁部を持つ左右対称に作られた石鏃。側縁部に加えられる調整は剥離の単位が大きく粗い。	サヌカイト	先端部のみ残存
97	打製石鏃	2.6	1.8	0.3	1.6	緩やかに外湾弧を描く側縁部には剥離の単位が大きい粗い調整が加えられている。両面には部分的に素材の横長剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
98	打製石鏃	1.9	1.1	0.3	0.6	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ細身の石鏃。片面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基部を欠失
99	打製石鏃	2.7	1.5	0.3	1.0	残された片側の側縁部は外湾弧を描き基端部付近には茎を思わせるような抉りが加えられている。凸基有茎式の可能性が考えられる。側縁に加えられる調整は角度が急で剥離の単位が細かい。	サヌカイト	片側の側縁部から基部にかけてが大きく破損
100	打製石鏃	2.3	1.5	0.5	1.3	残された片側の側縁部は外湾弧を描き基端部付近には茎を思わせるような抉りが加えられている。凸基有茎式の可能性が考えられる。	サヌカイト	片側の基部から側縁部にかけてを欠失
101	打製石鏃	2.6	1.1	0.2	1.1	剥片の縁辺部に片面から急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	未製品？
102	打製石鏃	3.3	1.6	0.3	1.9	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ石鏃。両面に素材の横長剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部と両側縁の一部を欠失している。
103	打製石鏃	2.4	1.8	0.4	1.5	直線的な側縁部を持つ石鏃。両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	片側の側縁から基部の一部にかけてのみ残存
104	打製石鏃	1.8	1.2	0.3	0.6	残された基部の形から平基無茎式か凹基無茎式と考えられる。	サヌカイト	基部の一部のみ残存
105	打製石鏃	2.6	1.0	0.2	0.7	横長剥片の打面と遠端部縁辺を側縁に使用した石器である。調整はナイフ形石器の刃潰し加工のように急角度で、打面側は背面から主剥離面側に、遠端部縁辺では主剥離面側から背面に向かってそれぞれ片面ずつ加えられている。	サヌカイト	
106	打製石鏃	1.9	1.7	0.5	6.4	剥片の縁辺部に両面から細かい調整を加え石鏃の形状に整えられている。平基無茎式か？	サヌカイト	先端部を欠失 未製品？
107	打製石錐	2.6	2.4	0.7	3.4	縁辺部に自然面が残る剥片を直角に折断し、折断面と側縁部の交点に調整を加えて細長い錐部を作り出している。縁辺部側に加えられる調整が浅く抉り込まれる比較的角度の急な両面調整であるのに対して、折断面側の調整はほぼ直角に近い急角度の調整が片面から加えられている。	サヌカイト	
108	打製石錐	2.4	2.3	0.6	2.4	自然面が残る剥片の縁辺部にやや角度の急な調整を加えT字型の頭部と細く長い刃部を作り出している。	サヌカイト	
109	打製石錐	4.7	2.1	0.3	2.7	折断面を持ち角張った頭部と細く長い錐部を持ち、錐部先端にはわずかだが自然面が残されている。	サヌカイト	
110	打製尖頭器	4.6	2.7	0.9	7.4	大きく外湾弧を描く側縁部をもつ両面調整の石器。基端部は円いが剥片の側縁部の形状そのもので調整は加えられていない。調整は粗く長い階段状の剥離だが、表裏両面とも基部付近は素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
111	打製尖頭器？	4.9	3.3	0.7	2.4	基部に折断面をそのまま残し左右非対称の不整三角形の形態に仕上げられた尖頭器。調整には両極打法が使用されたと考えられ、鋭角で粗い階段状剥離が全面に残されている。	サヌカイト	
112	楔型石器？	3.1	2.7	0.6	7.9	打面と遠端部縁辺の向かい合う二辺に両極打法を加えた剥片を縦に截断したもの。遠端部側の縁辺は潰れが認められる。	サヌカイト	
113	楔型石器	2.7	2.0	0.7	4.2	打面と遠端部縁辺の向かい合う二辺に両極打法を加えた剥片を適当な間隔を置いて縦に連続して截断したもの。二辺とも縁辺の潰れはわずかだが、背面側が階段状の剥離が多く残されているのに対して主剥離面側では剥離の痕跡はわずかである。	サヌカイト	
114	楔形石器	3.3	2.2	0.5	4.7	横長剥片の打面に両面調整を加え刃部を作り出している。	サヌカイト	
115	楔型石器	3.2	2.3	0.7	5.3	背面に自然面を残す横長剥片の打面と遠端部縁辺の向かい合う二辺に両極打法による調整を加え、さらに一端を縦に截断している。	サヌカイト	
116	楔型石器	3.1	1.6	0.4	23.2	互いに向かい合う四辺すべてに両極打法による剥離痕が残されている。長辺側の縁辺部は稜の潰れが認められる。	サヌカイト	
117	削片	2.8	1.2	0.8	2.3	楔型石器から截断により剥ぎ取られた削片。側面には截断面を打面にした剥離作業の痕が残されている。	サヌカイト	
118	細部調整が加えられた剥片	2.7	2.7	0.4	2.2	不整形な剥片の縁辺部に調整を加え刃部を作り出している。	サヌカイト	

119	細部調整が加えられた剥片	2.3	2.3	0.4	2.5	折断面を持つ横長の剥片の縁辺部に片側から急角度の細かい調整を加えて刃部を作り出している。	サヌカイト	
120	細部調整が加えられた剥片	3.3	2.6	0.9	3.1	自然面が残る剥片の縁辺部に片側から粗い調整を加え刃部を作り出している。	サヌカイト	
121	細部調整が加えられた剥片	6.1	4.7	0.6	2.3	横長剥片の遠端部縁辺に両面から細かい調整が加えられ刃部が作り出されている。	サヌカイト	
122	細部調整が加えられた剥片	1.9	3.7	0.8	10.6	截断面が残される剥片の打面に主剥離面側から背面に向かって粗い調整が加えられ刃部を作り出している。	サヌカイト	
123	打製石庖丁	8.3	4.8	0.7	45.2	横長剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ調整を加えて平行する短冊形の形態に仕上げている。側縁部は自然面のまま残され紐掛け用の抉りは加えられていない。背面側の縁辺部は潰れが顕著に残されている。	サヌカイト	
124	打製石庖丁	7.5	4.1	0.6	25.7	刃部と一方の端部だけに調整が加えられている。	結晶片岩	
125	打製石庖丁	11.9	4.8	1.2	78.3	不整四辺形の形態の剥片の長軸方向の片側の縁辺と両端に調整を加え刃部とくり込みが作り出されている。	結晶片岩	
126	打製石庖丁	6.8	4.2	0.4	16.9	刃部の調整は細かく、残された一方の端部にはくり込みが作り出されている。	結晶片岩	
127	打製石庖丁	4.7	4.0	0.8	22.6	残された一方の端部にはくり込みが作り出されている。	結晶片岩	
128	敲石	12.6	7.0	4.3	664.6	太型蛤刃石斧の表裏両面と片側の側面に敲打痕が集中して残されている。	片岩	
129	敲石	12.6	7.0	4.3	664.6	破損した柱状石斧を再利用している。	片岩	
130	砥石	12.0	3.2	1.0	84.9	扁平な長楕円形の礫の表裏両面が砥面として使用されている。	片岩	
131	砥石	15.4	9.2	2.1	521.1	扁平な不整楕円形の礫の表面と側面が砥面として使用されている。	片岩	
132	磨製石斧	12.4	7.5	3.7	616.7	頭部付近に敲打痕が集中して残されている。	片岩	
133	敲石	11.2	7.2	4.9	464.8	不整形の礫の稜線に敲打痕が集中して残されている。	片岩	

第91表　SB1006出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
142	打製石鏃	3.4	1.9	0.4	2.6	側縁部がわずかに外湾弧を描く左右対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
143	打製石鏃	1.7	1.7	0.2	0.5	長さと幅がほぼ均しく側縁部が緩やかな外湾弧を描く凹基無茎式の石鏃で基部の抉りは浅い。両面に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	凹基式、逆刺の一部を欠失
144	打製石鏃	2.3	1.6	0.4	0.9	側縁部が外湾弧を描き基部がU字形に深く抉り込まれた凹基無茎式の石鏃。先端は両側縁から浅い抉りが加えられ鋭く尖らされている。両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	逆刺の一部を欠失
145	打製石鏃	2.8	1.6	0.4	1.8	側縁部がわずかに外湾弧を描き、基部の抉りが深い凹基無茎式石鏃。縁辺部の調整は粗く腹面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
146	打製石鏃	2.2	2.2	0.4	2.0	直線的な側縁部を持つ凹基無茎式の石鏃。縁辺部に加えられる調整は剥離角が小さい。	サヌカイト	先端と両方の逆刺を欠失
147	打製石鏃	2.4	1.6	0.5	2.1	基部の一部を欠くが凸基無茎式と考えられる。縁辺部の調整は丁寧で素材の剥片本来の剥離面を殆ど残さない。	サヌカイト	先端部と基部をそれぞれ欠失
148	打製石鏃	3.2	1.1	0.3	1.2	先端から基端部にかけて両側縁部が緩やかな外湾弧を描く凸基無茎式の石鏃。両面には素材の剥片本来の剥離面を未調整のまま残しているが、背面側には摩滅痕が残されている。また、側縁部には部分的に研磨が加えられている。	サヌカイト	
149	打製石鏃	3.3	1.5	0.4	2.0	片側が側縁部から基端部にかけて外湾弧を描くのに対して、もう一方の凸基部が内湾弧を描くような調整が加えられた左右非対称の凸基無茎式の石鏃。背腹両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
150	打製石鏃	2.5	2.5	0.5	2.1	大きく外湾弧を描く側縁部とU字型に深く抉り込まれた基部を持つ凹基無茎式の石鏃と考えられる。残された片方の逆刺は長く鋭く仕上げられている。	サヌカイト	先端と片方の逆刺を欠失
151	打製石錐	3.0	1.6	0.6 0.2	2.6	折断面を持つ剥片の縁辺部に両端から調整を加え、細く短い錐部を作り出したもので、頭部は未整形のまま残されている。	サヌカイト	
152	楔型石器	3.1	2.7	0.9	7.3	側縁に裁断面を持ち上下に両極打法が加えられたもので、上方の打面は潰れが著しい。側縁部の裁断面にはこれを打面として複数の加撃が行なわれている。	サヌカイト	

153	楔型石器	3.8	2.1	0.9	7.1	打面と遠端部縁辺に両極打法による調整が加えられた横長と考えられる剥片を、適当な間隔を置いて縦に連続して折断したもの。	サヌカイト	
154	削器	4.4	3.1	0.8	7.4	側面に自然面をそのまま残す不整台形の形態の剥片の遠端部縁辺に、簡単な両面調整を加えて刃部を作り出している。	サヌカイト	
155	細部調整が加えられた剥片	5.0	4.9	0.8	18.2	剥片の打面の一部と側縁および遠端部縁辺にそれぞれ簡単な調整が加えられ刃部を作り出している。打面側の調整は背面に向かう連続した調整が加えられるのに対して側縁部と遠端部縁辺はごく狭い範囲に限られている。	サヌカイト	
156	細部調整が加えられた剥片	4.0	3.8	0.7	9.5	打面に両面調整を加えた横長剥片を折断して得られた不整三角形の剥片の蝶番状の折断面の縁辺部に調整が加えられている。	サヌカイト	
157	削器	4.6	3.7	0.6	9.9	打面に両面調整を加えた横長剥片を縦に折断している。	サヌカイト	
158	細部調整が加えられた剥片	2.7	2.3	0.3	2.7	打面を除去した剥片の縁辺の一部に主剥離面側から背面に向かう階段状の調整を加え、簡単な刃部を作り出している。	サヌカイト	
159	細部調整が加えられた剥片	3.7	2.4	0.7	6.5	横長剥片を縦に分割するように側縁部に折断面が残されている。向かい合う長辺と折断面にはそれぞれ調整が加えられている。	サヌカイト	
160	細部調整が加えられた剥片	2.9	2.5	0.7	4.3	折断によって不整形な形態に分割された剥片の折断面に簡単な調整が加えられている。	サヌカイト	
161	細部調整が加えられた剥片	3.8	2.3	0.6	5.0	截断によって縦に分割された剥片の縁辺部に調整が加えられている。打面と遠端部縁辺には両極打法による剥離痕が残されているが、さらに截断面を打面にして両極打法による剥離を加えようとした痕跡が残されている。	サヌカイト	
162	細部調整が加えられた剥片	2.7	2.3	0.3	2.7	剥片の打面から左側縁にかけては主剥離面側から背面、右側縁は背面から主剥離面側に向かって調整が加えられ、打面は除去されている。	サヌカイト	
163	細部調整が加えられた剥片	3.4	2.4	0.7	6.3	打面に自然面が残る横長剥片の遠端部縁辺に両面調整が加えられたものを縦に折断している。遠端部には主剥離面側から背面に向かって抉り込まれたノッチ状の調整が残されている。	サヌカイト	
164	打製石庖丁？	6.6	4.2	0.9	27.8	横長剥片の遠端部縁辺に両面から調整を加え刃部が作り出されている。縁辺部の調整は遠端部縁辺全面に加えられる訳ではなく両面とも左縁側にかたよっている。また、向かい合う側縁には両極打法による加撃が行なわれている。	サヌカイト	
165	打製石庖丁？	7.8	3.1	0.9	21.8	横長剥片の打面と縁端部縁辺に調整を加え両端が尖った紡錘型の形態に仕上げられている。	サヌカイト	
166	打製石庖丁	6.1	4.0	0.9	24.3	打面の一部に自然面が残る横長剥片の遠端部縁辺に両面調整が加えられ刃部が作り出されている。残された側縁部には両面から紐かけのための深い抉りが残されている。	サヌカイト	
167	打製石庖丁	10.9	5.7	0.9	71.1	端部に抉りが加えられ、短冊形の形態に仕上げられている。背部縁辺は潰れが著しい。	結晶片岩	
168	打製石庖丁	7.5	4.3	1.0	30.9	背部と刃部の長さが著しく相違する不整台形の形態の石庖丁。刃部と考えられる長辺側の縁辺部は背部と考えられる短辺部に比べて厚く鈍い。	結晶片岩	
169	打製石庖丁	9.0	3.7	0.9	30.5	剥片の縁辺に粗い両面調整を加えわずかに内湾弧を描く刃部を作り出している。背部の調整は刃部同様粗いが、使用によるものか、意図的な刃潰しかは不明だが縁辺部は円くなっている。	結晶片岩	
170	敲石	8.2	6.3	5.4	384.9	楕円形の自然石の表裏両面と両端に敲打痕が集中している。また片側には敲打痕の他に研磨が加えられている。	砂岩	
171	扁平片刃石斧	7.0	3.0	0.7	25.6	薄い片岩の剥片の周囲と表裏両面に部分的な研磨を加え短冊形の形態に整えたものの端部を研磨して刃部を作り出している。	結晶片岩	
172	扁平片刃石斧	6.1	2.1	0.7	16.6	表裏両面と縁辺に剥離と研磨を加え不整形な短冊形の形態に仕上げた剥片の一端を両面から研磨して先端が円い刃部を作り出している。	結晶片岩	
173	柱状片刃石斧	6.8	3.0	1.0	34.5	刃部に入念な研磨が加えられた柱状片刃石斧の破片。	結晶片岩	
174	敲石	14.9	10.1	3.1	874.2	扁平な楕円形の自然石の端から側辺にかけて片側から粗い調整が加えられている。	結晶片岩	
175	石錘	3.3	3.0	2.3	30.3	円礫の中央を一周する縦方向の溝を研磨によって彫り込んでいる。	砂岩	

第92表　SB1008出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
183	打製石鏃	2.0	1.9	0.4	1.1	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ左右対称の形態に仕上げられた長さが幅の約２倍ある細身の凹基無茎式の石鏃。	サヌカイト	
184	打製石鏃	2.4	1.2	0.5	0.9	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ左右対称の形態に仕上げられた長さが幅の約２倍ある細身の凹基無茎式の石鏃。	サヌカイト	
185	打製石鏃	3.1	1.7	0.4	1.8	わずかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持ち左右対称の形態に仕上げられた凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深く、側縁部は鋸歯状を呈する。また表裏両面には素材の横長剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	逆刺の一部を欠失
186	打製石鏃	3.2	1.7	0.4	1.9	わずかに外湾弧を描く側縁部を持ち左右対称の形態に仕上げられた平基無茎式または凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長く背面側はほぼ全面に調整が行われているが、主剥離面側は素材の横長剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部を欠失
187	打製石鏃	2.8	1.5	0.3	1.2	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ石鏃両面には素材の横長剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基部を欠失
188	細部調整が加えられた剥片	2.4	1.1	0.3	1.1	折断面を持つ剥片の縁辺部に片側からの急角度の細かい調整を加えて刃部を作り出している。	サヌカイト	
189	削器	5.5	2.2	0.7	6.9	側面に自然面が残る横長剥片の遠端部縁辺を折断し、縁辺に簡単な両面調整を加えた石器。	サヌカイト	
190	細部調整が加えられた剥片	3.6	3.6	1.0	14.2	両極打法による剥離が加えられた縁辺部を持つ剥片を截断と折断により分割し、一辺に両極打法による剥離痕を残す不整方形の塊に分割したもの。截断面の交点にはさらに截断面を打面として複数の截断作業が行われている。	サヌカイト	
191	削器	2.4	2.7	0.5	3.7	向かい合う二辺に両極打法による剥離が行われ、側縁部に抉りが加えられた両面調整が施された石器を折断によって分割したもの。折断面にはさらに細部調整が加えられている。片側の縁辺は稜に潰れが認められる。	サヌカイト	打製石庖丁の転用か？
192	調整が加えられた剥片	3.0	6.1	1.0	24.7	背面の一部に自然面を残す横長剥片の主剥離面側にいったん両極打法による剥離を加えたものを縁端部側を横方句に折断した後その折断面を新たな打面にして再び両極打法による加撃が行われている。縁辺部は稜の潰れが残されている。	サヌカイト	
193	削器	2.9	1.8	0.4	1.9	向かい合う二辺に両極打法による剥離面が残されている。片側の縁辺は稜に潰れが認められる。	サヌカイト	
194	打製石庖丁	9.0	4.0	1.5	56.3	横長剥片の両側縁に両面から紐かけ用の抉りを加え、遠端部縁辺に調整を加え刃部を作り出しいる。刃部の調整はほぼ背面側に集中しているが、背部は主剥離面側に大きな剥離痕が残され調整の後に縁辺部は粗い研磨が加えられている。また、側縁部には抉りが加えられる前に両極打法にいる剥離が行われている。	サヌカイト	
195	打製石庖丁	9.4	4.2	0.8	35.8	剥片の縁辺部に調整を加え不整台形の形態に仕上げている。長軸に平行する背部と刃部の二辺の縁辺は使用により円みを帯びている。	サヌカイト	
196	打製石庖丁	13.6	4.7	0.8	91.1	長軸の方向が使用される石の節理の方向に直交する短冊形の形態に仕上げられた石器。刃部または背部と考えられる長軸に平行する二辺は縁辺の潰れが著しい。	結晶片岩	

第93表　SB1009出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
215	打製石鏃	3.5	2.4	0.4	3.4	先端部が外湾弧を描く側縁部と大きく抉りが加えられ逆刺が尖らされた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深いが表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残された部分がある。	サヌカイト	先端部と片側の逆刺、側縁部の一部を欠失
216	打製石鏃	2.4	1.7	0.3	1.2	外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は比較的急角度で浅く表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面がほとんど未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
217	打製石鏃	3.2	1.8	0.4	2.7	外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深いが表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている部分がある。	サヌカイト	先端部と片側の逆刺を欠失
218	細部調整が加えられた剥片	4.2	3.0	0.5	7.2	剥片の打面と遠端部縁辺の主剥離面側を中心に調整を加え刃部が作り出されている。	サヌカイト	
219	細部調整が加えられた剥片	4.7	3.6	1.5	19.7	打面の一部に自然面を残す横長剥片の遠端部縁辺に両面調整を加えて直線的な刃部が作り出されている。また両側縁には両極打法による剥離が残されている。	サヌカイト	
220	細部調整が加えられた剥片	2.3	1.3	0.5	1.9	打面と遠端部縁辺に両極打法が加えられた両面調整の剥片を適当な間隔で縦に連続して折断して短冊形の破片に分割されたもの。片方の折断面には背面から主剥離面に向かって急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	
221	細部調整が加えられた剥片	4.7	3.2	1.1	18.1	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両面調整を加えたものを適当な間隔をあけて縦に連続して折断し、不整方形の形に分割している。	サヌカイト	
222	打製石庖丁	11.2	4.9	1.4	68.4	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両面から調整を加えるとともに両側縁に一対の比較的深い抉りを加え形状を整えた打製石庖丁に一方の端から適当な間隔を置いて連続した截断を加え楔型石器を作り出している。またもう一方の側縁には横方向に截断が行われている。	サヌカイト	
223	打製石庖丁	11.5	5.6	1.4	83.0	背面に自然面を大きく残す大型の横長剥片の遠端部縁辺に浅い鋭角の調整を両面に加え刃部を作り出している。また両側縁には一対の浅い抉りが加えられている。主剥離面側の刃部は使用による摩滅痕が顕著に認められるのに対して、背面側はそれほど明瞭ではない。	サヌカイト	

第94表　SB1010出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
224	打製石鏃	2.8	2.1	0.4	2.6	片方が緩やかに外湾弧を描く左右非対称の身部と薄く短い茎を持った凸基有茎式の石鏃。基端部は外方に突出し茎との境は明瞭な段を持っている。調整は右辺側は背面から主剥離面側へ、左辺では逆に主剥離面側から背面側へ向かって急角度の短い調整が加えられている。	サヌカイト	
225	細部調整が加えられた剥片	2.4	2.3	0.3	2.3	剥片の縁辺部に背面側を中心に細かな調整が加えられている。	サヌカイト	

第95表　SB1011出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
249	打製石鏃	1.8	1.4	0.4	0.9	大きく外湾弧を描く側縁部は基部近くに浅い抉りが加えられている。	サヌカイト	
250	打製石鏃	2.7	1.9	0.5	1.9	片側の側縁部の先端部近くに大きく抉り込まれるような調整が加えられた平基無茎式の石鏃。片面には素材の剥片本来の剥離面が部分的に未調整のまま残されている。	サヌカイト	
251	打製石鏃	1.6	2.0	0.4	1.0	長さに対して幅が長く、緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。	サヌカイト	
252	打製石鏃	3.1	2.5	0.6	3.0	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持ち、左右対称に仕上げられた凹基無茎式の石鏃。片面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
253	打製石鏃	2.7	1.6	0.4	1.8	残された側縁は緩やかな外湾弧を描き基部に加えられる抉りはやや深い。表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端と片側の側縁の一部を欠失
254	打製石鏃	3.7	2.1	0.5	3.5	側縁部への調整が片側だけでもう一方は殆ど未調整のまま表裏両面に、剥片の剥離面を大きく残す未製品と考えられる石鏃。	サヌカイト	
255	打製石鏃	3.7	1.3	0.5	2.0	素材の剥片に残された折断面に調整を加え形態を整えようとしている。	サヌカイト	未製品？

256	打製石鏃	2.9	1.2	0.5	2.3	素材に使用した剥片の折断面に粗い調整を加え側縁部を作り出している。	サヌカイト	石鏃、石錐未製品？
257	打製石鏃	3.3	2.0	0.4	2.6	緩やかな外湾弧を描く側縁部には階段状の調整が残されている。	サヌカイト	基部を欠失
258	打製石鏃	1.9	1.7	0.5	1.3	背腹両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	片側の側縁部から基部にかけてのの一部のみが残存
259	打製石鏃	1.2	1.5	0.3	0.6	側縁部の調整は階段状で粗く、表裏面には素材の剥片の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	身部中央のみ残存
260	細部調整が加えられた剥片	4.8	2.9	0.5	9.2	抉りを持つ打製石庖丁の側縁付近を抉りの部分を付けた状態で剥離された横長剥片の縁辺部に両面調整を加え刃部を作り出している。	サヌカイト	未製品？
261	楔形石器	4.0	2.9	0.8	10.4	長軸側の向かい合う二辺に両極打法による剥離が加えられた剥片を適当な間隔を置いて縦に截断している。	サヌカイト	他の石器に比べて風化が進んでいる。
262	楔形石器	2.6	3.2	0.7	8.9	向かい合う四辺に両極打法による剥離を加えたものを截断している。截断後、この截断面を打面にして両極打法が繰り返されている。	サヌカイト	
263	細部調整が加えられた剥片	1.9	1.9	0.5	2.0	縁辺部には両極打法による調整が加えられている。	サヌカイト	
264	細部調整が加えられた剥片	2.7	2.3	0.8	5.8	自然面を残す剥片を折断し両極打法による調整を加えて形を整えるとともに刃部を作り出している。	サヌカイト	
265	細部調整が加えられた剥片	3.6	2.2	0.5	4.1	横長剥片の遠端部縁辺に両面から不規則な細かい調整を加え刃部を作り出している。	サヌカイト	
266	細部調整が加えられた剥片	2.2	1.8	0.7	4.3	折断面を持つ剥片の折断面に両極打法による調整を加え刃部を作り出している。	サヌカイト	
267	打製石庖丁	10.6	5.1	1.4	105.7	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整を加えて短冊形の形態に仕上げ、両側辺には浅い抉りを加えている。背部と比較して刃部側には殆ど調整が加えられていない。	結晶片岩	
268	打製石庖丁	7.0	5.0	1.0	38.0	背面の一部に自然面を残す剥片の縁辺に調整を加え短冊形の形態に仕上げ、側辺に深い抉りが加えられている。刃部と考えられる長軸に平行する１辺の縁辺はズルズルに摩滅している。	結晶片岩	
269	打製石庖丁	8.5	3.7	0.7	30.0	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整を加え鰹節型の形態に仕上げている。長軸方向に平行する二辺の縁辺の潰れは少ない。	結晶片岩	
270	打製石庖丁	7.2	4.0	0.9	31.2	背面に自然面を残す不整菱形の剥片の長軸に平行する一辺に両面から調整を加え刃部を作り出している。他の三辺には調整が加えられていない。	結晶片岩	
271	削器？	8.6	8.1	0.9	86.4	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に片面または両面調整が加えられている。調整が加えられた縁辺部には鋭く尖り潰れが殆ど残されていない。	結晶片岩	
272	磨製石斧	8.0	2.6	1.1	33.8	扁平な長楕円形の礫の一端に両面から研磨を加え刃部を作り出している。また、もう一端も面取りが施され平坦に仕上げられている。	緑色岩	
273	敲石	10.1	5.4	4.8	350.3	大型の礫を分割した際に、生じた平坦面を敲打に使用している。	結晶片岩	

第96表　SB1012出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
279	打製石鏃	2.5	2.0	0.5	2.5	縁辺部に粗い調整を加え、左右非対称の不整形な形態に仕上げた平基無茎式の石鏃。両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
280	打製石鏃	2.4	2.1	0.4	1.8	緩やかな外湾弧を描く側縁部と比較的深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。残された片側の逆刺は鋭く仕上げられている。両面中央部には部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	片方の逆刺を欠失
281	打製石鏃	2.4	1.6	0.5	1.3	本来は直線的な側縁部と短い茎を持った凸基有茎式の石鏃であったと考えられるが、片方の側縁から茎にかけてを大きく破損したため、破損部分を再調整して左右非対称の形態に仕上げている。	サヌカイト	
282	打製石鏃	2.1	2.0	0.3	1.0	直線的な側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	側縁部から基部の一部にかけてのみ残存
283	打製石鏃	3.1	1.7	0.5	1.9	剥片の折断面を打面として調整を加えている。表裏両面に素材の剥片本来の剥離面が大きく残されている。	サヌカイト	未製品？
284	細部調整が加えられた剥片	2.7	2.1	0.4	3.5	剥片の縁辺部に両面調整を加えたものを折断している。刃部には潰れが観察できる。	サヌカイト	
285	細部調整が加えられた剥片	2.6	1.7	0.5	2.3	縁辺部に両極打法の剥離が残される剥片を縦に折断したもの。折断面には簡単な調整が行われている。	サヌカイト	

286	細部調整が加えられた剥片	1.8	1.9	0.4	1.4	長軸方向に向かい合う二辺に両極打法による剥離が行われた剥片で意図的かは不明だが縦の截断面が残されている。	サヌカイト	
287	細部調整が加えられた剥片	2.5	2.4	0.7	5.4	四方を折断し、菱形の形態に整えた剥片の三辺の折断面にそれぞれ急角度の調整を加えて刃部を作り出している。	サヌカイト	
288	細部調整が加えられた剥片	4.8	4.7	0.8	18.0	打面の一部に自然面を残す剥片の両側縁と遠端部縁辺に主として主剥離面側からの調整が加えられている。	サヌカイト	
289	打製石庖丁	5.9	5.1	0.5	21.7	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に両面調整を加えている。	結晶片岩	
290	打製石庖丁	6.2	4.9	1.3	47.9	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に両面調整が加えられている。残された片側の側辺には抉りを加えようとした痕跡が認められる。背部の縁辺は鈍く潰れている。	結晶片岩	
291	敲石					不整楕円の自然礫の表裏両面や側縁部を中心に敲打痕が残される他、一端が大きく打ち欠かれている。	片岩	
292	石皿	21.0	18.6	6.8	3080.0	表面の平坦部が砥面として使用されているが、同じ場所に敲打痕が多数残されている。	砂岩	

第97表　SB1013出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
300	打製石鏃	2.5	1.5	0.5	1.7	わずかな外湾弧を描く側縁部を持つ左右非対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。素材に比較的厚みのある剥片を使用し、調整は粗く階段状の剥離痕が残されている。	サヌカイト	
301	打製石鏃	2.0	2.4	0.5	2.8	直線的な側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。側縁部に加えられる調整は階段状で粗い。片面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	身部上半を欠失
302	打製石鏃	1.5	2.0	0.4	0.8	基部に比較的深い抉りが加えられた凹基無茎式の石鏃。残された側縁部の一部は緩やかな外湾弧を描いている。	サヌカイト	身部上半を欠失
303	打製石鏃	2.0	2.2	0.3	1.7	直線的な側縁部とやや抉りの浅い基部を持つ凹基無茎式の石鏃。残された片方の逆刺は鋭く作り出されている。両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま多く残されている。	サヌカイト	先端と逆刺の一部を欠失
304	打製石鏃	1.9	1.1	0.3	0.7	わずかな外湾弧を描く側縁部を持つ左右非対称の形態を持つ石鏃。	サヌカイト	基部を欠失
305	打製石鏃	2.0	2.0	0.5	1.7	外湾弧を描く側縁部は左右非対称で両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部を欠失
306	細部調整が加えられた剥片	2.9	2.2	0.4	2.6	縁辺部に両極打法によると考えられる剥離が残されている。	サヌカイト	
307	細部調整が加えられた剥片	2.8	1.9	0.3	2.2	向かい合う二辺に両極打法による剥離が残され縁辺部には潰れが観察できる。	サヌカイト	
308	細部調整が加えられた剥片	2.5	2.4	0.5	3.0	向かい合う二辺に両極打法によると考えられる剥離が残されている。縁辺部には潰れが残されている。	サヌカイト	
309	細部調整が加えられた剥片	2.8	2.4	0.7	3.3	交差する二辺の折断面それぞれに背面または主剥離面側から直角に近い急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	
310	打製石庖丁	10.2	4.3	0.9	65.5	自然礫から剥離された扁平な剥片の縁辺部に両面調整が加えられ不整四辺形の形態に仕上げられている。背部、刃部両辺とも縁辺部の潰れはわずかしか残されていない。	結晶片岩	
312	打製石鍬	－	5.8	－	42.0	片面に自然面を残す剥片の縁辺部に両面調整を加え鈍い刃部が作り出されている。	粘板岩？	先端部のみ
313	敲石	9.5	3.1	2.9	134.9	断面が円形の柱状片刃石斧の頭部付近を中心に側面部や刃部先端に敲打痕が集中して残されている。また、頭部近くの表裏両面にはそれぞれ大きくくぼんだ部分が１カ所ずつ認められる。		

第98表　SB1014出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
328	打製石鏃	1.9	1.1	0.2	0.6	小型の横長剥片の縁辺部に比較的角度の急な調整を加え平基無茎式の石鏃の形態に整えている。	サヌカイト	
329	打製石鏃	2.5	1.8	0.6	2.5	緩やかな外湾弧を描く側縁部と平坦に仕上げられた基部を持つ平基無茎式の石鏃。縁辺部には階段状で粗い調整が加えられている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
330	打製石鏃	3.6	2.2	0.6	3.9	外湾弧を描く側縁部と平坦な基部を持つ、横長剥片を素材にした平基無茎式の石鏃。側縁部には剥離の単位が大きい調整が加えられているのに対して基部にはほとんど調整が加えられていない。表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
331	打製石鏃	3.1	1.4	0.4	1.8	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ長さが幅の２倍以上ある細身の形態の平基無茎式の石鏃。調整は階段状でやや粗くなっている。	サヌカイト	
332	打製石鏃	2.7	1.2	0.4	1.1	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。長さが幅の約２倍を越える細身の形態で、表裏両面には部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
333	打製石鏃	2.5	1.5	0.2	1.1	緩やかな外湾弧を描く側縁部と、やや深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。逆刺は両方とも鋭く仕上げられ、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
334	打製石鏃	2.5	2.4	0.4	1.4	直線的な側縁部と深い抉りが加えられた凹基無茎式の石鏃。長さと幅がほぼ均しく先端部と逆刺はそれぞれ円みを持っている。	サヌカイト	全面に風化が進んでいる。
335	打製石鏃	2.1	1.5	0.3	0.9	緩やかに外湾弧を描く側縁部と比較的深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。逆刺は両方とも先端が円く仕上げられている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
336	打製石鏃	3.0	1.7	0.3	1.7	緩やかに外湾弧を描く側縁部と短く突出する茎を持つ凸基有茎式の石鏃。身と茎の境は緩やかに内湾弧を描き不明瞭である。横長剥片の打面と遠端部縁辺をそれぞれ側縁部として調整を加えているが、打点部分を除去する必要からか打面側への調整が強く行われている。また、両面とも素材の剥片本来の剥離面が大きく残されている。	サヌカイト	
337	打製石鏃	4.2	1.2	0.6	2.2	長さが幅の３倍以上ある細身の凸基有茎式石鏃。身部の下方には両方の側縁部にわずかな抉りが加えられ茎が作り出されている。調整は階段状剥離で粗くなっている。	サヌカイト	
338	打製石鏃	2.3	1.5	0.6	2.3	短い茎が作り出された凸基有茎式の石鏃。基端部と茎の境は内湾弧を描いている。側縁部に加えられる調整は階段状で粗くなっている。	サヌカイト	先端部を欠失
339	打製石鏃	2.2	2.5	0.5	3.5	両面調整が加えられた側縁部は外湾弧を描いている。表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面を未調整のまま大きく残している。	サヌカイト	基部と先端を欠失
340	細部調整が加えられた剥片	2.1	1.4	0.3	1.3	小型の横長剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ急角度の片面調整が加えられている。調整の方向は打面側は背面から、遠端部縁辺は主剥離面側からとそれぞれ調整の向きが異なっている。	サヌカイト	
341	細部調整が加えられた剥片	2.4	1.4	0.3	1.2	剥片の縁辺部に片側から調整が加えられている。	サヌカイト	
342	楔型石器	2.6	1.7	0.5	3.1	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両極打法による剥離を加え、適当な間隔を置いて縦に截断して不整方形の形態にしたもの。	サヌカイト	
343	楔型石器	2.1	2.8	0.6	3.4	両極打法による剥離と截断面が残された剥片。	サヌカイト	
344	楔型石器	2.8	2.2	0.4	2.5	薄い剥片の向かい合う四辺に両極打法による剥離が残されている。	サヌカイト	
345	細部調整が加えられた剥片	2.6	3.5	0.4	3.3	横長剥片の打面と遠端部縁辺の向かい合う二辺の背面側に両極打法によると考えられる剥離が加えられている。	サヌカイト	
346	細部調整が加えられた剥片	3.0	2.9	0.5	4.4	側縁部に折断面を残す剥片の遠端部縁辺に主剥離面側から急角度の調整を加え円い刃部を作り出している。また、折断面にはこれを打面として両極打法による剥離を加えようとした痕跡が残されている。	サヌカイト	
347	細部調整が加えられた剥片	4.7	3.3	1.0	14.5	背面に自然面を残す横長剥片の遠端部端縁辺と左側縁には、それぞれ遠端部縁辺は主剥離面から背面に、側縁部は背面から主剥離面に向かう調整が加えられている。	サヌカイト	
348	楔型石器	3.0	1.7	0.8	4.3	向かい合う二辺に両極打法による剥離を加えた両面調整の剥片を適当な間隔をあけて縦に連続した截断を加えスポール状の削片が剥ぎ取られている。	サヌカイト	
349	楔型石器	4.3	2.5	1.0	10.9	遠端部縁辺を除く三辺に折断面と截断面が残される不整方形の剥片の長軸方向の向かい合う二辺に両極打法による剥離が加えられている。	サヌカイト	

350	打製石庖丁	4.5	3.6	0.7	13.0	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両極打法による剥離を加え側縁に紐かけのための浅い抉りを施したものを縦に截断している。	サヌカイト	
351	打製石庖丁	3.6	4.0	0.8	9.2	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両極打法による剥離を加え、長辺が端部に向かって外湾弧を描く形態に整えたものを適当な部分で縦に截断している。	サヌカイト	
352	打製石庖丁	4.5	3.4	1.1	20.1	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両極打法による剥離を加え形を整えたものを適当な間隔をあけて連続して縦に截断し分割している。	サヌカイト	
353	打製石庖丁	7.4	4.1	1.0	33.1	横長剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ両面調整を加え形を整えている。両方とも縁辺の稜に潰れが残されているが、打面側に比べて遠端部縁辺側のほうが潰れの程度が少なく縁辺の角度が鋭角に仕上げられている。	サヌカイト	
354	剥片	8.5	5.3	0.9	47.6	翼状剥片に類似する横長剥片。背面が二つの大きな剥離面で構成される剥片の打面には剥離の進行方向に向かう細かな打面調整が加えられている。	サヌカイト	
355	打製石庖丁	8.3	3.5	0.5	20.1	側辺の一方がもう一方に対して広がる不整四辺形の形態に仕上げられている。	結晶片岩	
356	打製石庖丁	6.6	3.4	0.7	19.6	外湾弧を描く刃部と、円く仕上げられた側辺部を持っている。	結晶片岩	
357	打製石庖丁	7.5	4.6	0.6	34.5	背面に自然面を残す剥片の縁辺に両面調整を加え不整四辺形の形態に仕上げられている。残された片側の側辺には抉りが加えられている。	結晶片岩	
358	打製石庖丁	5.6	2.7	0.5	10.2	直線的な刃部と外湾弧を描く背部を持ち、両側辺には抉りが加えられている。刃部には両面調整が加えられているが、背部は未調整のまま残されている。	結晶片岩	
359	打製石庖丁	12.7	4.4	0.6	35.0	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に両面調整を加え、不整四辺形に仕上げられている。片側の側辺には抉りが加えられている。	結晶片岩	
360	敲石	6.9	6.5	6.2	362.2	凹凸のある不整形な自然礫の稜線に敲打痕が集中して残されている。	石英	
361	磨製石斧	4.0	1.9	0.5	4.7	柱状片刃石斧の先端部の破片。	片岩	
362	磨製石斧	7.9	2.6	0.7	12.1	板状剥片の二辺の交点に研磨が加えられている。	片岩	

第99表　SB1015出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
368	打製石鏃	1.8	1.6	0.3	0.8	長さと幅がほぼ同じで左右対称に仕上げられた平基無茎式考えられる石鏃であるが、基部中央には茎が設けられていた痕跡が残され有茎式の可能性もある。表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	平基無茎式？凸基有茎式？
369	打製石鏃	2.3	1.6	0.3	1.3	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。基端部は比較的角張っているのに対して先端部は円く仕上げられて鈍い。表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
370	打製石鏃	2.8	2.1	0.3	2.3	大きく外湾弧を描く側縁部と平坦に仕上げられた基部を持つ平基無茎式の石鏃。両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
371	打製石鏃	2.2	1.4	0.4	1.3	一方が直線的、もう一方が外湾弧を描く左右非対称の形態の平基無茎式の石鏃。	サヌカイト	
372	打製石鏃	2.2	1.7	0.5	1.2	直線的な側縁部とやや浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は粗く、階段状の剥離痕が残されている。片面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
373	打製石鏃	2.0	2.1	0.3	1.3	緩やかな外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。残された逆刺の状態から左右非対称の形態が考えられる。縁辺部の調整は丁寧だが身部中央までは及ばず片面には素材の剥片本来の剥離面が大きく残されている。	サヌカイト	両方の逆刺を欠失
374	打製石鏃	2.6	1.8	0.5	2.0	片方がわずかに外湾弧を描く側縁部を持つ左右非対称の凹基無茎式の石鏃。基部の抉りは浅く平基式との区別はつきにくい。基部に比べて先端部付近がより角度が大きい調整が加えられている。	サヌカイト	先端部を欠失 全体に風化が進んでいる。
375	打製石鏃	1.9	1.8	0.4	1.1	直線的な側縁部とやや浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は丁寧だが、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
376	打製石鏃	2.8	1.8	0.3	1.6	緩やかな外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は丁寧で縁辺部の剥離は中央部まで及び、素材の剥片本来の剥離面は全く残らない。	サヌカイト	逆刺の一部を欠失

377	打製石鏃	2.8	1.9	0.4	1.9	緩やかな外湾弧を描く側縁部と深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。長い逆刺は鋭く尖らされている。表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が残されている。	サヌカイト	一方の逆刺と先端部を欠失
378	打製石鏃	3.7	1.8	0.7	3.4	側縁部が大きく外湾弧を描く木葉形の形態に仕上げられた凸基無茎式の石鏃。調整は粗い階段状の剥離が身の中程まで達している。	サヌカイト	先端部を欠失
379	打製石鏃	3.1	1.4	0.2	1.1	身部は先端部から茎との境まで緩やかに外湾弧を描く凸基有茎式の石鏃。調整は細かい剥離が縁辺部に行われているだけで、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	全体に風化が進んでいる。
380	打製石鏃	4.5	2.5	0.5	4.2	わずかに外湾弧を描く側縁部と長い茎を持つ大型の凸基有茎式石鏃。身と茎の境は明瞭で「く」の字に括れている。	サヌカイト	
381	打製石鏃	1.7	1.6	0.3	1.0	一方の側縁部には折断面が残されている。	サヌカイト	先端部と基部を欠失未製品？
382	打製石鏃	1.6	1.7	0.4	1.1	残された両側縁部は緩やかに外湾弧を描いている。	サヌカイト	先端部と基部を欠失
383	打製石鏃	2.3	1.8	0.3	1.3	一方の側縁が大きく外湾弧を描くのに対して、もう一方は内湾弧を描く左右非対称の形態を持つ。調整は丁寧だが表裏両面には素材の剥片本来の剥離痕が大きく残されている。	サヌカイト	基部と片側の側縁部を大きく欠失
384	打製石鏃？	2.4	2.9	0.6	4.7	背面に自然面を持つ剥片を素材にし、基部にU字型の抉りが加えられている。形態からは打製石庖丁の可能性がある。	サヌカイト	身部上半を欠失
385	打製石錐	2.5	1.6	0.4	1.9	頭部は小さく、素材に使用した剥片の縁辺部にわずかな調整が加えられているだけである。頭部と錐部の境は不明瞭でわずかに括れているだけである。	サヌカイト	錐部先端を欠失
386	打製石錐	3.3	2.6	0.7	3.6	大きな頭部と長い錐部を持つ。階段状の粗い調整が加えられた頭部には表裏両面に素材の剥片本来の剥離面が残され、錐部との境は明瞭に仕上げられている。折断面を打面とした両極打法が加えられている。	サヌカイト	錐部先端を欠失
387	打製石鏃	2.9	2.1	0.4	2.9	横長剥片の遠端部縁辺以外の周縁部に急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	未製品？
388	細部調整が加えられた剥片	2.3	2.4	0.4	1.9	剥片の縁辺部に鋭角で長い調整が加えられている。	サヌカイト	打製石鏃？
389	細部調整が加えられた剥片	2.4	2.2	0.7	4.7	剥片の縁辺部のごく限られた部分に主剥離面側から背面に向かう微細な調整が加えられている。	チャート	
390	細部調整が加えられた剥片	2.3	2.2	0.6	3.0	剥片の右側縁の縁辺に沿って鋭角で微細な調整が両面に加えられている。	サヌカイト	
391	細部調整が加えられた剥片	2.9	2.3	0.8	4.1	両極打法による剥離が加えられた剥片の側縁に急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	
392	細部調整が加えられた剥片	3.9	2.1	0.3	3.6	横長剥片の打面に両面から調整を加え薄い刃部を作り出している。	サヌカイト	
393	細部調整が加えられた剥片	4.3	2.2	0.7	6.3	折断によって得られた二等辺三角形の剥片の長辺側の向かい合う二辺に両極打法による剥離を加えるとともに、折断面の交点付近に主剥離面側から折断面に向かう調整を加え交点付近を錐状に尖らせている。	サヌカイト	
394	細部調整が加えられた剥片	2.9	2.3	0.5	3.6	縁辺部に急角度の調整を加えた剥片を分割して得られた不整三角形の形態の剥片の折断部分に急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	
395	削器	5.4	3.5	0.8	20.4	折断面を打面に持つ横長剥片の打面と遠端部縁辺の向かい合う二片に両極打法による剥離を加え短い短冊形の形態に整えた剥片の右側縁に微細な調整と使用による摩滅が残されている。	サヌカイト	
396	打製石庖丁	4.0	2.3	0.5	8.3	刃部には両面に研磨痕が残されている。	結晶片岩	
397	磨製石斧	5.1	3.2	1.5	31.8	磨製石斧の破片の縁辺部に調整を加え打製石斧に転用しようとしている。	片岩	打製石斧に転用
398	磨製石斧	6.1	2.8	0.9	32.6	柱状石斧の破片の側辺と端部を研磨して新たに石斧を製作しようとしている。	片岩	
399	磨製石斧	7.4	3.3	1.0	34.3	全面に丁寧な研磨が加えられた柱状磨製石斧の頭部付近の破片。	片岩	

第100表　SB1016出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
407	打製石鏃	3.0	2.1	0.6	2.6	直線的な側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。階段状の粗い調整が両面に加えられているが浅く、表裏両面には部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
408	打製石鏃	3.0	1.8	0.6	2.8	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ凸基無茎式の石鏃。調整は粗い階段状剥離が両面に深く加えられている。	サヌカイト	先端部を欠失
409	打製石鏃	2.5	1.7	0.4	1.3	残された側縁部は外湾弧を描いている。調整は両面に加えられ丁寧だが浅く、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部のみ残存
410	打製石鏃	2.8	1.8	0.5	1.6	直線的な側縁部を持つ石鏃。調整は粗い階段状の剥離が加えられるが、部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	身部のみ残存
411	打製尖頭器	4.4	3.1	0.7	11.3	横長剥片の打面と縁端部縁辺を側縁部に、左側縁を基部に持つ。側縁部は外湾弧を描き基部は円く仕上げられている。調整は粗く階段状で両曲打法が使用された可能性がある。	サヌカイト	先端部を欠失
412	楔型石器	3.7	2.1	1.4	11.0	向かい合う二辺に両極打法による両面調整を加えた剥片を適当な間隔を置いて連続して縦の截断が加えられている。	サヌカイト	
413	打製石錐	3.6	2.6	0.7	6.4	剥片の縁辺部に浅い調整を加えただけで剥片本来の剥離面を大きく残す厚く大きい頭部と、側縁部に調整を加え短い錐部を持つ。	サヌカイト	
414	細部調整が加えられた剥片	4.7	2.1	0.5	5.6	横長剥片の遠端部縁辺にごく浅い調整を両面に加えて刃部を作り出している。打面は自然面をそのまま使用している。	サヌカイト	
415	細部調整が加えられた剥片	3.9	3.5	0.6	13.0	遠端部縁辺に両面から浅い調整を加えた剥片の両側縁を縦方向に折断し不整方形の形態にしている。	サヌカイト	
416	細部調整が加えられた剥片	2.9	2.2	0.5	4.1	縁辺部の両面に浅い調整を加えた横長剥片を縦方向に折断したもの。	サヌカイト	
417	細部調整が加えられた剥片	3.4	2.9	0.8	7.7		サヌカイト	
418	細部調整が加えられた剥片	6.4	5.7	0.9	31.7	遠端部縁辺の主剥離面側だけに浅い調整を加えた大型剥片が横方向の折断によって大小２つの剥片に分割されたもの。打面が残る小さいほうの剥片の折断面はさらに調整が加えられている。また遠位端側の大型剥片の縁辺部に加えられた調整は分割前のものか分割後のものかは不明である。	サヌカイト	
419	打製石庖丁	10.1	4.8	1.1	83.1	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整を加え不整四辺形の形態に仕上げられ、側辺には浅い抉りが加えられている。刃部は直線的なのに対して背部は緩やかな外湾弧を描いている。	結晶片岩	
420	打製石庖丁	13.3	4.1	0.8	62.4	剥片の縁辺部に調整を加え両側縁が円みを持つ長楕円形の形態に仕上げられている。	結晶片岩	
421	磨製石斧	9.0	2.6	1.0	45.2	扁平な長楕円形の自然礫の両端に両面から研磨を加え刃部を作り出している。	片岩	
422	磨製石斧	8.8	3.6	1.2	70.6	板状の片岩の剥片の縁辺部に調整を加え短冊形の形態に整形している。	片岩	未製品か？

第101表　SB1017出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
431	打製石鏃	3.1	2.1	0.5	3.0	わずかに外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。片面は調整が深く殆ど中部まで剥離がのびているのに対して、もう一面では中央部付近に未調整の部分が大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
432	打製石鏃	4.4	2.0	0.5	3.6	わずかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。表裏両面とも比較的深い丁寧な調整が加えられているが、中央部付近には未調整の部分が残されている。	サヌカイト	先端と両方の逆刺を欠失
433	打製石鏃	3.8	2.3	0.5	3.4	左右非対称な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は浅く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
434	打製石鏃	2.4	1.4	0.4	0.9	直線的な側縁部と鈍い先端部を持ち左右対称の形態に仕上げられた平基無茎式の石鏃。調整は粗いが深く身部中央にまでのびている。	サヌカイト	
435	打製石鏃	2.4	1.4	0.4	0.9	わずかに外湾弧を描く側縁部と深い抉りが加えられた基部を持つ左右対称の形態に仕上げられた凹基無茎式の石鏃。逆刺は鋭く仕上げられている。調整は丁寧だがやや浅く、両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	

436	打製石鏃	4.7	1.3	0.9	2.7	外湾弧を描く側縁部を持ち長さが幅の3倍以上にもなる細身の凸基無茎式石鏃。調整には比較的深い階段状剥離が加えられている。	サヌカイト	
437	打製石鏃	2.5	1.6	0.3	1.1	直線的な側縁部を持つ石鏃。背面に加えられる調整が比較的深いのに対して主剥離面側は浅く、素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部を大きく欠失
438	細部調整が加えられた剥片	3.6	2.2	0.5	3.2	側縁部を折断し、不整台形の形態にした剥片の打面を除去するとともに、主剥離面側を中心に浅い調整を加えて刃部を作り出している。	サヌカイト	
439	細部調整が加えられた剥片	4.0	3.8	0.6	11.0	打面を除去した剥片の側縁部と遠端部縁辺にそれぞれ調整が施されている。側縁部の調整は鋭角で比較的長いが、遠端部は急角度で短い。	サヌカイト	
440	打製石庖丁	6.1	2.7	1.1	30.9	背面に自然面を残す短冊形の剥片の縁辺に軽い調整を加えて刃部が作り出されている。また背部には敲打痕が残されている。	結晶片岩	
441	敲石	4.8	3.6	3.5	82.7	磨石としても使用されている。	砂岩	
442	敲石	20.3	10.4	4.1	1296.7	不整楕円の自然礫の縁辺部に敲打痕が残されている。	片岩	
443	砥石	26.4	13.9	6.2	3250	盤状の自然礫の表裏両面を研磨に使用しているが、片面の磨り減り方が著しい。	砂岩	

第102表　SB1018出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
460	打製石鏃	3.4	2.4	0.6	3.5	直線的な側縁部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は片面が粗い階段状剥離で全面に及ぶのに対してもう一方は比較的鋭角で浅い調整が加えられ素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基部の一部を欠失
461	打製石鏃	3.7	2.4	0.5	4.4	片方の側縁部が大きく外湾弧を描き左右非対称の形態に仕上げられた平基無茎式の大型石鏃。調整は鋭角で浅く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端を欠失
462	打製石鏃	3.0	2.1	0.4	2.2	大きく外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。背面の調整は階段状で粗いのに対して主剥離面側では鋭角で浅く素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
463	打製石鏃	3.0	1.4	0.5	2.0	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。階段状の粗い調整が両面ともほぼ全面に加えられている。	サヌカイト	先端部を欠失
464	打製石鏃	1.9	1.5	0.6	1.6	内湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。表裏両面とも階段状で粗い調整が加えられている。	サヌカイト	先端部を欠失
465	打製石鏃	2.6	2.1	0.6	4.1	外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の大型石鏃。調整は粗く、片面では全面に調整が加えられている。	サヌカイト	先端部を欠失
466	打製石鏃	2.8	1.5	0.3	1.2	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。調整は鋭角で浅く、表裏両面とも部分的に素材の剥片本来の剥離面が残されている。	サヌカイト	
467	打製石鏃	2.3	2.1	0.4	1.5	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深いが表裏両面とも部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
468	打製石鏃	2.3	1.5	0.4	1.0	緩やかな外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で浅く、片面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
469	打製石鏃	2.8	2.5	0.4	1.9	直線的な側縁部と比較的深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深いが表裏両面とも部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	片側の逆刺を欠失
470	打製石鏃	2.8	2.1	0.4	2.1	わずかな外湾弧を描く側縁部と浅く抉り込まれた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は基部付近は鋭角で浅いが先端部近くでは階段状で粗い。	サヌカイト	先端部を欠失
471	打製石鏃	3.0	1.8	0.3	1.7	わずかな外湾弧を描く側縁部と浅く抉り込まれた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。基部付近の調整は鋭角で浅いが先端部近くでは階段状で粗い。表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
472	打製石鏃	2.9	1.9	0.5	1.9	わずかな外湾弧を描く側縁部と大きく抉り込まれた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。逆刺は先端が鋭く仕上げられている。調整は階段状で粗い。	サヌカイト	逆刺の一部を欠失
476	打製石鏃	3.1	1.6	0.5	2.3	外湾弧を描く側縁部を持つ石鏃。片面の調整は鋭角で丁寧だが、もう一方は階段状で粗い。	サヌカイト	身部下半を欠失
474	打製石鏃	2.5	1.3	0.3	1.0	先端部付近が外湾弧を描く側縁部を持つ石鏃。調整は浅く、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	一方の側縁から基部にかけてを大きく欠失

475	打製石鏃	2.7	2.0	0.3	1.1	残された側縁部が直線的な石鏃。調整は浅く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	身部下半を欠失
476	打製石鏃	1.9	2.0	0.4	1.7	大きく外湾弧を描く側縁部と円く突出する基部を持った凸基無茎式と考えられる石鏃。調整は鋭角で浅く、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部のみ残存
477	打製石鏃	2.2	1.8	0.4	1.6	側縁部が左右非対称に作り出された凸基無茎式の石鏃。調整は浅く、側縁部の一方は片面だけしか調整が行われていない。	サヌカイト	基部のみ残存
478	打製石錐	3.4	1.4	0.7	3.6	厚みのある剥片を折断して得られた交差する二辺の端部に急角度の調整を加え、短い錐部を作り出している。殆ど調整を加えていない頭部と錐部の境は不明瞭である。	サヌカイト	
479	細部調整が加えられた剥片	3.1	2.1	0.5	3.1	剥片の遠端部縁辺を中心として主に主剥離面側から背面方向への急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	
480	細部調整が加えられた剥片	3.9	3.6	0.9	9.1	側縁部に自然面を持つ大型の剥片の遠端部縁辺部に丁寧な両面調整が加えられている。	サヌカイト	
481	細部調整が加えられた剥片	2.4	1.8	0.4	2.6	折断によって得られた不整形の剥片の縁辺部に急角度に近い片面調整が加えられている。	サヌカイト	
482	細部調整が加えられた剥片	2.6	2.6	0.9	6.3	一辺に丁寧な両面調整が加えられた石器の直線的な縁辺部を残し、三方を不整形に折断して得られた剥片の折断面に急角度に近い調整が加えられている。	サヌカイト	
483	細部調整が加えられた剥片	5.4	4.3	0.8	21.0	打面の一部に自然面が残された横長剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ両面調整が加えられた剥片の両端に折断が加えられている。	サヌカイト	
484	細部調整が加えられた剥片	2.8	2.3	0.5	4.3	一辺に剥片の縁辺部を残し三方を折断して得られた不整方形の剥片の折断面の一部に主剥離面側から背面に向かう比較的角度の急な調整が加えられている。	サヌカイト	
485	細部調整が加えられた剥片	1.9	1.7	0.2	0.8	剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ浅い両面調整が加えられている。	サヌカイト	石鏃未製品？
486	細部調整が加えられた剥片	2.0	1.7	0.4	1.8	両極打法による調整によって刃部が作り出されている。	サヌカイト	
487	楔型石器	3.2	3.1	0.9	13.1	打面とそれに向かい合う折断面に両極打法による剥離が加えられた剥片に適当な間隔をあけて縦に連続する截断が加えられている。	サヌカイト	
488	楔型石器	3.4	2.9	0.7	7.4	向かい合う四辺に両極打法による剥離が加えられた剥片の一辺を折断し、さらにその折断面とそれに向かい合う一辺に両極打法による剥離が加えられている。また一辺には刃潰しと考えられる研磨が加えられている。	サヌカイト	
489	打製石庖丁	9.3	4.9	1.0	69.9	横長剥片の打面と向かい合う遠端部縁辺にそれぞれ両面調整を加え、截断または折断された両端には紐かけの抉りが加えられている。背に使用されたと考えられる打面には粗い階段状の剥離が加えられ潰れが残されているのに対して、刃部として使用された遠端部縁辺の調整は鋭角で縁辺部に潰れは観察されず内湾弧を描いている。	サヌカイト	
490	打製石庖丁	13.7	4.1	0.6	39.5	両側辺を大きく欠くが、もとは長楕円形の形態に整えられていたと考えられる。刃部・背部とも縁辺部は薄く鋭利に仕上げられている。	結晶片岩	
491	砥石	12.5	4.7	1.8	105.5	断面方形で平坦な砥面を持っている。	?	
492	敲石	14.6	5.3	3.1	368.4	長い棒状の自然礫の一端を折断して得られた平坦部周辺に敲打痕が集中して残されている。	片岩	
493	敲石	7.5	5.8	2.1	136.6	太型蛤刃石斧と考えられる片岩の破片の縁辺部を敲打に使用している。	?	
494	敲石	10.3	5.2	1.1	72.2	扁平な楕円形の自然礫の両端に細かな敲打痕が残されている。	片岩	
495	敲石	13.3	7.8	3.8	359.1	不整形な自然礫の表面には敲打痕以外に鼠噛状痕が多く残されている。	緑色岩	

第103表　SB1019・1020出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
498	打製石鏃	4.4	1.8	0.4	2.7	長さが幅の2倍以上で緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ細身の平基無茎式石鏃。調整は鋭角で比較的長く部分的には平行する剥離痕が残されている。また、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
499	打製石鏃	2.0	1.5	0.3	1.2	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。先端部を欠失しているが、欠失部を打面にして両極打法による加撃がされている。	サヌカイト	先端部を欠失

500	打製石鏃	2.5	1.9	0.4	1.5	直線的な側縁部と比較的深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。先端は鈍い。調整は片面が鋭角の調整を全面に加えるのに対してもう一面は剥片本来の剥離面が未調整のまま残される。	サヌカイト	両方の逆刺を欠失
501	打製石鏃	3.2	1.8	0.5	2.4	わずかに外湾弧を描く側縁部と比較的深い抉りが加えられた基部を持つ左右対称の凹基無茎式の石鏃。調整はやや粗く階段状で、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
502	打製石鏃	3.9	1.3	0.5	1.8	平行する直線的な側縁部と円く仕上げられた先端部を持つ凹基無茎式の石鏃。基部の抉りは浅い。調整は概して鋭角で深く、片面にはほぼ全面に調整が及んでいる。また、部分的には研磨が加えられている。	サヌカイト	
503	打製石鏃	2.9	1.1	0.5	1.7	外湾弧を描く側縁部を持つ凸基無茎式の石鏃で最大幅は身部中央から先端部よりに位置している。調整は先端部周辺は階段状であるが、基部近くでは急角度の調整が行われている。	サヌカイト	
504	打製石錐	4.7	0.8	0.6	2.1	縁辺部に両面調整が施された大型の石器を刃部に沿って折断または裁断したものを素材とし折断面に急角度の調整を加えて錐部を作り出している。	サヌカイト	
505	細部調整が加えられた剥片	3.5	3.2	0.7	8.1	打面に両極打法による剥離が加えられ適当な間隔を置いて縦の截断が連続して加えられた剥片の截断面に背面から主剥離面側に向かう調整が施されている。	サヌカイト	
506	細部調整が加えられた剥片	1.7	1.7	0.4	1.0	折断された剥片の縁辺部に主剥離面側から背面に向かって比較的急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	
507	打製石庖丁	9.1	3.6	0.7	31.8	両端に自然面を残す横長剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ階段状の調整を加え刃部と背部を作り出している。内湾弧を描く遠端部縁辺が刃部と考えられるが、背部縁辺の稜線には潰れはほとんど残されていない。	サヌカイト	
508	打製石剣	3.4	2.7	1.6	20.9	横長剥片を素材にしたと考えられる石器。打面と遠端部縁辺を側縁部に使用し急角度の調整を加えた後、研磨を加えてレンズ状の厚い断面の石器に仕上げている。	サヌカイト	
509	細部調整が加えられた剥片	3.4	2.8	0.4	4.1	剥片の折断面とヒンジフラクチャーの縁辺部に両極打法による剥離と鋭角で短い連続した調整が残されている。	サヌカイト	
510	細部調整が加えられた剥片	4.0	2.9	0.5	6.8	剥片の主剥離面の縁辺部には背面からの調整が加えられている。また、背面には部分的に研磨が加えられている。	サヌカイト	
511	敲石	14.3	5.2	3.1	428.3	長い棒状の自然礫の一端に敲打痕が集中して残されている。	片岩	

第104表　SB1021出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
522	打製石鏃	2.5	1.3	0.3	0.9	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持ち左右対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深く、表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面を殆ど残していない。	サヌカイト	
523	打製石鏃	2.4	1.9	0.4	1.4	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられ左右対称に仕上げられた凹基無茎式の石鏃。調整は粗く階段状で素材の剥片本来の剥離面を殆ど残していない。	サヌカイト	先端部と片側の逆刺を欠失
524	打製石鏃	4.8	2.3	0.5	4.9	菱形の形態に仕上げられた凸基無茎式の石鏃。調整は粗く短くて表裏両面には素材の横長剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
525	打製尖頭器	4.7	2.7	0.5	7.3	大きく外湾弧を描く側縁部と円い基部をもつ横長剥片を素材にした石器。主剥離面側の調整は鋭角だが、背面側は打面を除去する必要性からか部分的に階段状剥離が残されている。また素材の横長剥片本来の剥離面が両面に大きく残されている。	サヌカイト	
526	打製尖頭器	4.9	2.7	0.6	6.8	大きく外湾弧を描く側縁部と円い基部をもつ横長剥片を素材にした石器。主剥離面側の調整は鋭角だが、背面側は打面を除去する必要性からか部分的に階段状剥離が残されている。また素材の横長剥片本来の剥離面が両面に大きく残されている。	サヌカイト	

527	打製尖頭器	5.3	2.9	0.5	8.3	大きく外湾弧を描く側縁部と平坦に仕上げられた基部をもつ横長剥片を素材にした石器。背面側の調整が遠端部縁辺と片側の側縁部以外全面に及んでいるのに対して主剥離面側は遠端部縁辺がほとんど未調整のままである。素材の横長剥片本来の剥離面は両面に大きく残されている。	サヌカイト	
528	細部調整が加えられた剥片	3.7	1.0	0.3	1.7	縁辺部に丁寧な両面調整が行われる石器の片面に両極打法による剥離が加えられたものをさらに折断し不整方形の形態に仕上げている。	サヌカイト	
529	細部調整が加えられた剥片	3.4	3.0	0.7	7.6	ヒンジフラクチャーの遠端部縁辺を持つ剥片を縦に截断し遠端部の縁辺に微細な調整が加えられている。	サヌカイト	
530	細部調整が加えられた剥片	4.4	2.3	0.7	6.9	主剥離面側から背面に向かう細部調整が加えられた縁辺部の一部を残し、三方を折断した不整形な剥片の折断面の一辺に、主剥離面側から背面に向かう調整が加えられている。	サヌカイト	
531	細部調整が加えられた剥片	7.1	4.7	0.7	25.3	不定形な剥片の打面部分に主剥離面側から背面に向かう比較的急角度の調整が加えられている。また剥片の縁辺部には部分的に微細な調整が残されている。	サヌカイト	
532	細部調整が加えられた剥片	2.8	2.7	0.4	3.5	縁辺部に両極打法による剥離が加えられた剥片に折断を加え不整方形の形態に仕上げている。	サヌカイト	
533	細部調整が加えられた剥片	3.1	2.8	0.8	6.3	縦に截断された横長剥片の縁辺部と截断面にそれぞれ細かな調整が加えられている。	サヌカイト	
534	細部調整が加えられた剥片	3.7	3.6	1.0	10.4	両極打法による剥離痕と折断面が残される剥片の縁辺部と截断面にそれぞれ比較的角度の急な調整が加えられている。	サヌカイト	
535	細部調整が加えられた剥片	3.2	1.8	0.3	2.1	剥片の打面と右側縁の両面に鋭角な調整が加えられている。	サヌカイト	

第105表　SB1022出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
603	打製石鏃	2.5	1.3	0.4	1.1	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持ち、左右対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。調整は深く粗い階段状剥離が全面に残されている。	サヌカイト	
604	打製石鏃	2.1	1.2	0.2	0.7	側縁部は緩やかな外湾弧を描いている。調整は鋭角だが浅く、素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部を欠失
605	打製石鏃	2.7	2.1	0.4	2.3	わずかに外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。調整は階段状剥離が比較的深く残されているが、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
606	打製石鏃	2.1	1.6	0.3	1.1	緩やかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持ち、左右対称に仕上げられた凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で浅く素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部と逆刺の一部を欠失
607	打製石鏃	3.1	1.5	0.4	1.6	直線的な側縁部と深い抉りが加えられた凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深く階段状剥離によって表裏両面ともほぼ全面に剥離が行われている。	サヌカイト	先端と逆刺の一部を欠失
608	打製石鏃	3.7	1.5	0.6	2.6	緩やかに外湾弧を描く側縁部とわずかに抉りが加えられた基部を持つ長さが幅の2倍以上ある細身の形態の凹基無茎式の石鏃。主剥離面側の調整は鋭角で浅いが背面は階段状の粗い調整が加えられている。表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されているがその範囲は主剥離面側が大きい。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
609	打製石鏃	3.8	2.6	0.7	3.7	大きく外湾弧を描く側縁部を持つ凸基無茎式の石鏃。調整は主剥離面側が鋭角で浅く素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されているのに対して、背面側では粗く深い階段状の剥離が全面に及んでいる。	サヌカイト	
610	打製石鏃	3.7	1.9	0.6	3.1	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ身部と、基部との境で括れを持つ長い茎のついた凸基有茎式石鏃。単位が大きい階段状剥離が表裏全面に残されている	サヌカイト	先端部を欠失
611	打製石鏃	1.7	1.2	0.4	0.8	剥片の縁辺部に粗い階段状剥離が残される凸基無茎式と考えられる石鏃。素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
612	打製石錐	2.3	1.8	0.5	2.1	剥片の縁辺部に粗い調整を加え頭部と錐部の境に浅い括れを持たせ錐の形態に整えている。錐部は断面がレンズ型で薄い。	サヌカイト	
613	打製石錐	4.2	3.0	0.4	2.5	殆ど未調整のままの頭部と細く長い錐部を持つ。頭部との境を明瞭に仕上げられた錐部は断面がレンズ状でやや薄く仕上げられている。	サヌカイト	

614	細部調整が加えられた剥片	3.8	2.9	0.4	3.0	縁辺部に主剥離面側から背面に向かう調整を加えた剥片の打点周辺を折断して三角形の形状に作り出している。	サヌカイト	
615	細部調整が加えられた剥片	2.5	2.4	0.4	3.2	打面と遠端部縁辺にそれぞれ両面調整を加えた横長剥片の両側縁が折断されている。	サヌカイト	
616	細部調整が加えられた剥片	3.3	2.4	0.8	5.5	剥片の縁辺部全面に両極打法による剥離を加え不整楕円の形状を作り出している。	サヌカイト	
617	細部調整が加えられた剥片	3.8	3.6	1.1	13.8	遠端部縁辺に粗い階段状の両面調整を加えた横長剥片を斜めに折断し不整三角形の形状に整えている。折断面にはさらに部分的に剥離が加えられている。	サヌカイト	
618	細部調整が加えられた剥片	5.9	5.0	1.5	37.9	遠端部縁辺の両面に浅い調整を加えた大型の横長剥片を縦に折断し方形の形状に整えている。側縁の向かい合う折断面には両極打法が行われ、右側辺側は大きな抉りが残されている。	サヌカイト	
619	細部調整が加えられた剥片	3.5	2.2	0.9	8.9	折断面を持つ剥片の打面をさらに截断で除去し、主剥離面側から折断面に向かう急角度の粗い調整を加えている。調整が加えられた縁辺部は鋸歯状を呈している。	サヌカイト	
620	細部調整が加えられた剥片	4.2	2.9	0.6	4.8	横長剥片の遠端部縁辺と左側縁に断続的なごく浅い調整が加えられている。	サヌカイト	
621	細部調整が加えられた剥片	3.9	3.7	0.9	13.3	打面と遠端部縁辺の向かい合う二辺に加えられた両極打法によって作り出された剥離面が表裏両面に大きく残され、縦に截断された剥片の縁辺部に、比較的急角度の短い片面調整が施されている。両極打法が加えられたまま残されている縁辺部の稜線は著しく潰れている。	サヌカイト	
622	打製石鏃	2.0	1.6	0.3	1.0	薄い剥片の打面と遠端部縁辺に鋭角できわめて浅い調整が加えられている。	サヌカイト	未製品？
623	楔型剥片	6.9	2.7	0.7	15.7	打面と遠端部縁辺に両極打法による剥離が加えられた横長剥片の両側辺を折断または截断し、この側辺を打面とした両極打法によって剥片をさらに横方向に截断している。	サヌカイト	
624	打製石鏃	2.6	－	0.3	1.3	薄い剥片の両側縁部に鋭角で浅い調整が加えられている。	サヌカイト	剥片の打面周辺のみ残る未製品？
625	細部調整が加えられた剥片	4.3	2.5	0.8	6.8	いずれも外湾弧を描く横長剥片の打面と遠端部縁辺に両極打法による剥離を加え、両端を縦に截断している。	サヌカイト	
626	細部調整が加えられた剥片	3.4	2.8	0.6	6.8	両極打法によって剥離された可能性のある横長剥片の主剥離面側の打面と遠端部縁辺に調整が加えられている。調整はいずれも鋭角で短く打面側の方が強い。	サヌカイト	
627	打製石庖丁	－	4.6	0.6	15.7	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両面調整を加えそれぞれ背部と刃部を作出し端部には紐かけのための抉りが作り出されている。	サヌカイト	
628	打製石庖丁	14.4	4.7	1.2	109.1	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に両面調整を加え平行する刃部と背部が作り出され、両側辺には深い抉りが加えられている。	結晶片岩	
629	打製石庖丁	9.7	4.2	1.1	56.8	背面に自然面を残す剥片の縁辺に両面調整を加え不整四辺形の形態に仕上げている。両側辺には抉りが加えられているが、片方は深く抉り込まれている。	結晶片岩	
630	打製石庖丁	9.8	4.9	0.6	31.0	表裏両面とも自然面を残す扁平な板状の礫の縁辺部に細かな両面調整を加え不整四辺形の形態に仕上げている。残された片側の側辺には抉りが加えられ背部の縁辺は摩滅している。	結晶片岩	
631	打製石庖丁	6.8	5.7	1.1	56.5	背面に自然面を持つ剥片の縁辺に両面調整を加え平行する刃部と背部が作り出され、残された側辺には深い抉りが加えられている。	結晶片岩	
632	打製石庖丁	12.1	5.1	0.5	47.5	片方の側辺がもう一方より細い不整形な形態で両側辺には抉りが加えられている。	結晶片岩	
633	打製石庖丁	10.0	3.1	0.6	28.4	扁平な剥片を両面調整によって不整四辺形の形態に整えている。片方の側辺には浅い抉りが加えられている。	結晶片岩	
634	打製石庖丁	8.2	4.8	0.9	37.4	背面に自然面を残す剥片の背部は大きく外湾弧を描いている。	結晶片岩	
635	打製石庖丁	－	4.0	1.2	30.4	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整を加え外湾弧を描く刃部と背部を作り出している。	結晶片岩	

第106表　SB1024出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
647	打製石鏃	2.4	1.7	0.5	1.2	直線的な側縁部を持ち左右非対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。粗い階段状剥離が表裏面全面に残されている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失。

648	打製石鏃	3.5	2.1	0.3	2.4	緩やかに外湾弧を描く側縁部と大きく抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深いが、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている部分がある。	サヌカイト	先端部を欠失
649	打製石鏃	2.8	2.0	0.5	2.5	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。先端部と基端部は円く仕上げられている。調整は剥離の単位が大きく粗い階段状に残されている。表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
650	打製石鏃	3.1	1.4	0.4	1.8	緩やかに外湾弧を描く側縁部は茎との境でわずかに括れている。調整は鋭角で浅い剥離と階段状剥離の両方が残されている。調整は全面に及んでいる。	サヌカイト	茎を欠失
651	打製石鏃	2.4	2.3	0.3	1.7	残された側縁部は緩やかに外湾弧を描いている。調整は鋭角に深く加えられているが表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	身部の下半部を大きく欠失
652	打製石鏃	2.9	2.3	0.4	2.4	緩やかな外湾弧を描く側縁部をもつ石鏃。粗い階段状剥離の調整が深く加えられているが、片面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基部を欠失
653	打製石鏃	4.2	2.0	0.4	2.8	長さが幅の２倍以上ある細身の石鏃。粗い階段状剥離が全面に残されている。	サヌカイト	先端の一部と基部を欠失
654	打製石鏃	4.0	1.7	0.3	1.5	直線的な側縁部を持った細身の石鏃。背面には鋭角な深い調整が残されているが、主剥離面側は先端部を中心としたごく限られた範囲の調整だけで、素材の剥片本来の剥離痕が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	身部下半を大きく欠失
655	打製石鏃	1.9	1.9	0.4	1.5	残された側縁部は「く」の字の屈曲部を持ち五角形のような多角形の形態が考えられる。表裏両面には素材の剥片本来の剥離痕が残されている。	サヌカイト	身部の中央のみ残存
656	細部調整が加えられた剥片	3.9	3.6	0.7	9.9	向かい合う二辺に両極打法による調整が加えられた剥片を縦に截断している。二辺とも折断面または截断面を打面に使用している。	サヌカイト	
657	細部調整が加えられた剥片	2.5	1.9	0.6	2.4	折断によって分割された三角形の形状の剥片の遠端部縁辺に主剥離面側から背面に向かって片面調整が加えられている。	サヌカイト	
658	細部調整が加えられた剥片	3.1	2.8	－	4.3	縁辺部に比較的急角度の調整を交互に繰り返す剥片から折断によって分割された不整三角形の剥片。	サヌカイト	
659	細部調整が加えられた剥片	4.4	2.1	0.7	5.8	長軸方向の向かい合う二辺に両極打法による剥離が加えられている。片面は両極打法による大きな剥離面が残されている。	サヌカイト	
660	細部調整が加えられた剥片	4.9	3.1	0.7	10.8	向かい合う二辺に両極打法による調整が加えられた剥片の両端を縦に折断している。一方の折断面には折断部の直角の縁は使用により摩滅している。	サヌカイト	
661	細部調整が加えられた剥片	8.5	4.0	1.2	26.6	遠端部縁辺に片面調整が交互に繰り返された横長剥片。背面は１枚の剥離面で構成され、打面には複数の丁寧な調整が加えられている。	サヌカイト	
662	敲石	11.5	7.0	6.0	632.4	不整楕円形の自然礫の側面に敲打痕が集中して残されている。	砂岩	
663	敲石	7.6	7.3	4.5	441.0	自然礫の片面に敲打痕が集中して残されている。同じ面には研磨痕が残され磨石としても使用されている。	緑色岩	

第107表　SB1025出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
668	打製石鏃	3.2	3.5	0.5	5.4	ほぼ正三角形の形状に整えたれた平基無茎式の大型の石鏃である。調整は剥離の単位が大きく粗いが表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
669	打製石鏃	2.6	1.9	0.5	2.0	緩やかに外湾弧を描く側縁部とわずかに浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深く、素材の剥片本来の剥離面はわずかしか残されていない。	サヌカイト	
670	細部調整が加えられた剥片	3.2	2.3	0.6	5.3	楔型石器の截断面に微細な調整が加えられている。	サヌカイト	
671	打製石庖丁	7.4	3.8	1.0	33.5	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に両面調整を加え不整四辺形の形態に作り出されている。片方の側辺は剥片のくぼみをそのまま使用しているが、もう一方には浅い抉りが加えられている。また、刃部・背部とも縁辺部に摩滅が認められる。	結晶片岩	

672	打製石庖丁	11.3	4.9	0.8	72.9	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整を加え長楕円形の形態に仕上げられ、片方の側辺には浅い抉りが加えられている。背部には調整が殆ど加えられず、縁辺は著しく摩滅している。	結晶片岩	

第108表　SB1026出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
702	打製石鏃	2.7	1.9	0.5	2.0	直線的な側縁部を持ち左右対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。調整は深く粗い階段状剥離が残されているが、片面には部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
703	打製石鏃	3.3	2.1	0.5	2.6	直線的な側縁部を持ち左右非対称の形態に仕上げられた平基無茎式の石鏃。調整は粗い階段状剥離が加えられているが表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	一方の逆刺をわずかに欠失
704	打製石鏃	4.2	1.9	0.5	3.1	直線的な側縁部を持ち長さが幅の2倍以上ある細身の平基無茎式の石鏃。調整は長い階段状剥離が残されているが、表裏両面とも部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基部の一部を欠失
705	打製石鏃	2.5	1.7	0.5	1.7	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は長い階段状の剥離痕が大きく残されている。	サヌカイト	基部を欠失
706	打製石鏃	2.5	1.8	0.4	1.5	わずかに内湾弧を描く側縁部と比較的深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は粗い階段状剥離が全面に残されている。	サヌカイト	両方の逆刺を欠失
707	打製石鏃	3.0	2.6	0.6	3.1	緩やかに外湾弧を描く側縁部と抉りが加えられた基部を持ち、左右対称に仕上げられた幅広の凹基無茎式の石鏃。逆刺の端部は鋭く仕上げられている。調整は単位が大きい剥離が全面に残されている。	サヌカイト	
708	打製石鏃	3.0	2.0	0.2	1.4	直線的な側縁部と茎との境が明瞭な屈曲部を持つ凸基有茎式？の石鏃。調整は鋭角で浅く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	茎を欠失
709	打製石鏃	4.5	1.4	0.6	2.8	緩やかに外湾弧を描く側縁部は長い茎との境には弱い括れを持ち、左右対称に仕上げられた細身の凸基有茎式の石鏃。逆刺の端部は鋭く仕上げられている。調整は単位が大きい階段状剥離が全面に残されているが身部の一部には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	茎を欠失
710	打製石鏃	2.3	1.2	0.4	1.0	わずかに内湾弧を描く側縁部を持つ石鏃。調整は深く階段状剥離が全面に残されているが、片面には素材の剥片本来の剥離面がわずかに残されている。	サヌカイト	基部を欠失
711	打製石鏃	2.8	1.5	0.6	2.0	先端部分がわずかに外湾弧を描く石鏃。調整は片面が鋭角で深く丁寧なのに対してもう一面は粗い階段状剥離が残されている。	サヌカイト	基部を欠失
712	打製石鏃	1.8	2.2	0.4	1.6	先端が鈍く仕上げられた石鏃。調整は鋭角で長いが片面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基部を欠失
713	打製石鏃	2.4	1.6	0.5	1.6	片側の側縁部が大きく外湾弧を描き左右非対称に仕上げられた石鏃。調整は粗い階段状剥離が残されているが、片面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基部を欠失
714	打製石鏃	6.0	2.2	0.5	10.2	横長剥片の打面と遠端部縁辺をそれぞれ側縁部に使用した長さcmを越える大型の平基無茎式の石鏃。側縁部は基部近くでは直線的であるが先端に近づくにつれて緩やかに外湾弧を描いている。調整は階段状剥離による比較的剥離の単位の大きいものだが、表裏両面には素材の横長剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
715	楔型石器	5.3	2.9	0.9	13.4	横長剥片の打面と遠端部縁辺の向かい合う二辺に両極打法による打撃され、両端は縦に截断されている。	サヌカイト	
716	楔型石器	4.2	3.7	2.3	42.0	不整方形の形態の剥片の向かい合った二辺に両極打法による剥離が残されている。残りの二辺のうち一辺は自然面に両極打法が加えられ、これに向かい合うもう一辺には截断が行われている。	サヌカイト	
717	細部調整が加えられた剥片	3.8	2.6	0.7	4.9	背面の一部に自然面を残す横長剥片の右側縁から遠端部縁辺にかけて調整が加えられている。	サヌカイト	

718	細部調整が加えられた剥片	3.7	3.1	0.4	4.2	遠端部縁辺の一部に両面調整が加えられた剥片を縦に折断し、片面に折断面を打面にして両極打法による剥離が加えられている。	サヌカイト	
719	細部調整が加えられた剥片	2.6	2.4	0.6	4.1	横長剥片の打面と遠端部縁辺には粗い階段状剥離が両面に加えられている。	サヌカイト	
720	細部調整が加えられた剥片	2.3	1.9	0.4	1.8	剥片の向かい合う二辺に両極打法による剥離を加えた後、遠端部縁辺に背面からやや角度の急な連続する調整が加えられている。	サヌカイト	
721	細部調整が加えられた剥片	2.5	2.4	0.3	2.3	薄い横長剥片の向かい合う二辺に両極打法による剥離が加えられている。	サヌカイト	
722	打製石庖丁	7.9	3.9	1.0	31.9	一方の側辺が直線的であるのに対して、もう一方は大きく外湾する左右非対称の形態。刃部縁辺は摩滅している。	結晶片岩	
723	打製石庖丁	7.9	3.2	0.8	49.1	薄い板状の剥片の縁辺部に調整を加え不整四辺形の形に整形している。刃部の縁辺部は若干摩滅している。	結晶片岩	
724	打製石庖丁	9.6	4.4	0.6	30.3	薄い板状の剥片の縁辺部に調整を加え左右非対称の不整形な形に作り出されている。刃部、背部とも調整は細かい。	結晶片岩	
725	打製石庖丁	7.0	5.8	0.9	33.9	側辺部に大きな抉りが加えられた不整四辺形の形態と考えられる石庖丁。背部の縁辺は著しく摩滅している。	結晶片岩	
726	磨製石斧	17.5	4.7	2.6	410.8	全面に丁寧な研磨が加えられた柱状石斧の両側辺に敲打痕が残されている。	片岩	敲石に転用している。
727	磨製石斧	8.0	2.9	1.2	46.9	柱状石斧の破片の端部に両面から研磨が加えられ刃部が作り出されている。	片岩	
728	敲石	13.5	11.4	5.9	1213.5	不整楕円の自然礫の一端に細かい敲打痕が残されている。	緑色岩	
729	敲石	15.4	7.0	4.6	551.6	棒状の自然礫の一端に細かい敲打痕が残されている。	片岩	
730	敲石	18.6	5.6	3.4	452.4	円盤状の自然礫を打ち欠いてできた三日月状の破片の縁辺部に敲打痕が残されている。	片岩	

第109表　SB1027出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
739	打製石庖丁？	－	2.8	1.0	10.6	横長剥片を素材に使用し、縁辺部に調整を加えて端部を方形に仕上げている。階段状剥離が加えられているが、一部には両極打法によると考えられる調整も見られる。表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が大きく残されている。	サヌカイト	
740	打製石庖丁	5.4	3.3	1.2	22.1	背面の一部に自然面を残す横長剥片を素材に使用している。残された片方の縁辺部は鈍く尖らされている。調整は不規則で部分的には両極打法によると考えられる打撃の痕跡が残されている。縁辺部の稜線は一部に潰れが見られる。	サヌカイト	
741	打製石庖丁	7.5	4.1	0.9	35.2	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整を加え不整四辺形の形に整形している。	結晶片岩	

第110表　SA1001出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
753	細部調整が加えられた剥片	10.7	5.1	1.2	49.3	横長剥片の遠端部縁辺のほぼ全面に両面調整が加えられている。	サヌカイト	SP1128出土
763	打製石鏃	2.2	1.6	0.3	1.2	側縁部は直線的に仕上げられている。	サヌカイト	SP1129出土
764	細部調整が加えられた剥片	3.4	2.6	0.9	8.2	三方に折断面を持つ不整四辺形の剥片の折断面を打面にして両極剥離が加えられている。	サヌカイト	SP1129出土
755	打製石鏃	2.9	1.7	0.5	2.4	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。先端部は円みを持ち鈍く仕上げられている。	サヌカイト	SP1142出土
756	打製石鏃	3.2	1.9	0.3	1.7	直線的な側縁部をもつ石鏃。	サヌカイト	SP1142出土
757	打製石鏃	2.3	1.6	0.7	2.5	平基無茎式の石鏃か？	サヌカイト	SP1142出土
758	打製石錐	4.3	2.1	0.5	3.3	扁平な頭部と長い錐部を持つ。頭部と錐部の境は緩やかな内湾弧を描きながら括れている。	サヌカイト	SP1142出土
759	打製石庖丁	5.6	4.1	0.4	18.5	表面に自然面を残す剥片の縁辺に調整を加え方形の形に整えられて、端部にはくり込みが作り出されている。	結晶片岩	SP1137出土
760	打製石庖丁	7.0	3.3	0.6	21.7	表面に自然面が残る剥片を方形に整え両端にくり込みが作り出されている。	結晶片岩	SP1142出土
761		2.7	1.5	0.3		直線的な側縁部をもつ石鏃。	サヌカイト	SP1142出土
762	打製石鏃	2.1	1.9	0.4	1.6	片方がわずかに外湾弧を描く側縁部を持つ左右非対称の凹基無茎式の石鏃。	サヌカイト	SP1149出土

第111表　SA1002出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
754	細部調整が加えられた剥片	3.6	1.8	1.0	5.4	剥片を折断して得られた不整四辺形の剥片の折断面に背面からの急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	SP1145出土

第112表　SK1006出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
840	盤状剥片	7.7	7.3	2.3	118.6	背面には異なる方向から剥離された2枚の剥離面が残されている。剥片は折断によって分割されている。	サヌカイト	

第113表　SK1024出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
841	打製石鏃	3.9	1.4	0.5	2.5	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持ち、長さが幅の2倍を越える細身の凸基無茎式の石鏃。横長剥片の打面と遠端部縁辺をそれぞれ側縁部に使用している。調整は打面除去のためか基部近くで急角度なのに対して先端部付近は鋭角で浅い。表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
842	打製石鏃	2.1	1.5	0.3	0.5	残された側縁部は直線的で表裏両面には粗く長い階段状の剥離が加えられている。	サヌカイト	基部を欠失
843	打製石鏃	2.5	1.6	0.3	1.1	直線的な側縁部を持つ石鏃。背面の調整は粗く全面に加えられているが、主剥離面側の調整は先端部を中心に行われ、素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基部を欠失

第114表　SK1027出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
844	細部調整が加えられた剥片	2.8	1.6	0.4	2.1	小型の横長剥片の遠位端縁辺部に主剥離面側から急角度の浅い調整を加えノッチ状に加工している。	サヌカイト	
867	敲石	11.4	6.3	1.7	219.7	扁平な楕円形の礫の両端と側縁にそれぞれ敲打痕が集中する部分が残されている。	片岩	

第115表　SK1035出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
846	打製石庖丁	9.7	5.1	1.0	46.7	大型の横長剥片の打面と遠位端縁辺にそれぞれ両面調整を加え平行する背と刃部が作り出され、端部には深い抉りが作り出されている。背の部分と考えられる打面側の縁辺部は潰れが観察され、部分的に粗い研磨が行われている。刃部側には研磨の痕跡は確認されないが、背側と同じく部分的に縁辺部に潰れが認められる。	サヌカイト	一端を欠いている。
847	打製石庖丁	5.7	4.7	0.8	33.7	背と刃部が非並行な不整形の形を持つ石器。残された端部にはくり込みは作り出されないが部分的に摩滅している。	結晶片岩	一端を欠いている。
868	磨製石斧	7.6	3.0	2.0	79.1	楕円形の自然礫の一端に両面から研磨が加えられ刃部が作り出されている。研磨の範囲は表裏両面から側面の一部に及んでいる。	片岩	
869	敲石	7.8	7.4	5.6	278.1	やや扁平な円礫の側縁の一部に敲打痕が集中して残されている。	片岩	

第116表　SK1040出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
848	打製石鏃	1.8	2.1	0.4	2.0	おそらく緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。背面の調整は粗く深いが主剥離面側は鋭角で浅く素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
849	細部調整が加えられた剥片	1.7	1.2	0.3	0.5	三角形の剥片の一辺に主剥離面側から浅い急角度の調整を加え直線的な刃部を作り出している。	サヌカイト	
850	細部調整が加えられた剥片	3.3	2.8	0.6	7.0	両面調整が加えられた横長剥片の遠端部縁辺部を囲むように三方を折断し不整形の四辺形にしたもの。	サヌカイト	
851	楔形石器	4.1	2.0	0.8	6.7	横長剥片を縦に折断後、遠端部縁辺に平行するように剥片を横に折断しさらにもう一方の側縁を裁断している。折断面を打面として平行する縁辺部との間で両極打法による打撃が行われている。折断面側の縁辺部は片面に著しい潰れが残されているが、相対する遠端部側の縁辺部には大きな潰れは観察できない。	サヌカイト	

第117表　SK1047出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
793	打製石鏃	2.6	1.9	0.7	3.1	大きく外湾弧を描く側縁部を持つ無茎平基式の石鏃。先端部は鈍く尖らされている。	サヌカイト	
794	削器	2.9	3.2	0.5	3.2	剥片の縁辺部に背面から主剥離面側に向けて急角度の調整を加え刃部を作り出している。	サヌカイト	
795	打製石鏃	2.5	1.2	0.5	1.4	一方は外湾弧、もう一方は内湾弧を描く側縁部を持つ左非対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。片面は鋭角な浅い調整が加えられ素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されているのに対して、もう一面は階段状の粗い剥離が加えられている。	サヌカイト	先端部を欠失
796	打製石鏃	3.1	1.5	0.4	1.8	片側が緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ左右非対称の形態に仕上げられた凸基無茎式石鏃。調整は階段状で粗いが表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	茎を欠失
852	打製石庖丁	5.8	4.0	0.9	27.4	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に両面から調整を加え背部と刃部を作り出し、残された片側の側辺には抉りが加えられている。刃部および背部への調整は主剥離面側から背面に向かって加えられるものが殆どである。	結晶片岩	欠損

第118表　SK1076出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
870	敲石	9.7	7.8	4.4	476.9	楕円形の自然礫の上下両端と片方の側縁部が敲打に使用されている。	石英	

第119表　SK1079出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
	打製石鏃	2.8	1.5	0.3	1.4	凹基式	サヌカイト	
853	打製石庖丁	10.3	4.6	0.7	49.3	刃部、背部とも緩やかな外湾弧を描き、側辺には浅い抉りが加えられている。刃部、背部とも縁辺部は摩滅している。	結晶片岩	
854	打製石庖丁	8.1	4.3	0.4	24.5	刃部、背部とも丁寧な両面調整が加えられている。背部はわずかに外湾弧を描き、縁辺部には刃潰し加工が加えられている。残された片方の側辺には浅い抉りが加えられている。	結晶片岩	

第120表　SK1080出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
871	敲石	9.5	7.1	4.1	409.9	楕円形の礫の両端と側面の一部に細かい敲打痕が集中している。特に両端には大きな力が加えられたためか複数の剥離痕が残されている。	石英	

第121表　SK1112出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
855	打製石鏃	2.0	1.7	0.4	0.9	基部に比較的深い抉りが加えられた凹基無茎式の石鏃。調整は浅く、表裏両面には鋭角な調整が浅く加えられている。	サヌカイト	身部上半を欠失。

第122表　SK1114出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
828	打製石鏃	2.9	1.3	0.6	1.6	直線的な側縁部を持ち左右対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。調整は粗く、階段状剥離が残されているが主剥離面側には部分的に素材の剥片本来の剥離痕が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
829	打製石鏃	4.2	1.5	0.6	2.6	左右非対称に仕上げられた長さが幅の2倍以上を占める細身の平基無茎式の石鏃。調整は階段状で深いが、基端部付近には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基端部の一部を欠失
830	打製石鏃	3.7	1.6	0.6	2.3	先端から基端部にかけてが大きく外湾弧を描く凸基無茎式の石鏃。調整は深く多くは階段状であるが主剥離面側には素材の剥片本来の剥離面が残されている。	サヌカイト	
831	細部調整が加えられた剥片	3.1	1.8	0.4	2.6	剥片の折断面を使用して両極剥離が加えられている。	サヌカイト	
832	細部調整が加えられた剥片	4.1	3.8	0.6	7.9	剥片の遠端部縁辺に背面に向かって浅い調整が加えられている。	サヌカイト	
833	盤状剥片	12.5	7.9	1.5	127.3	自然面を打面にして剥ぎ取られた横長の大型剥片。打面には両面から加撃され剥片が剥離されている。	サヌカイト	
834	勾玉	1.4		0.5	0.9	半円形の形態で頭部と尾部の大きさがほぼ等しく作り出されている。	ヒスイ	

第123表　SK1116出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		素材	備考
856	細部調整が加えられた剥片	2.8	2.3	5.0	2.5	折断によって不整三角形に分割された剥片の2辺に折断面に主剥離面側から急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	

第124表　SK1117出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
857	打製石庖丁	7.3	3.1	1.0	24.5	短冊形の形態に仕上げられ片方の側辺には浅い抉りが加えられている。背部は内湾弧を描き、刃部は全体的に摩滅している。	結晶片岩	

第125表　SK1122出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
858	打製石鏃	2.4	1.5	0.4	1.2		サヌカイト	先端部と逆刺をわずかに欠失
872	扁平片刃石斧	11.5	4.2	1.9	216.2	整形の際の敲打痕をそのまま残す側面部に対し、刃部周辺には入念な研磨が加えられ直線的な刃先が作り出されている。片刃とは言っても片面がもう一方の面よりわずかに膨らむ程度でほとんど両刃に近い。	片岩	欠損？

第126表　SK1124出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
873	敲石	11.2	5.9	5.9	560.1	円礫の表裏両面と縁辺部にそれぞれ強い敲打痕が残されている。表裏両面は磨石としても使用され敲打痕は深くくぼんでいる。	砂岩	

第127表　SK1126出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
859	打製石鏃	1.8	1.5	0.3	0.5	内湾弧を描く側縁部を持ち左右対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長い。	サヌカイト	
860	打製石鏃	2	1.8	0.3	0.8	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持ち、左右対称に仕上げられた凹基無茎式に石鏃。調整は鋭角で長い。	サヌカイト	先端部を欠失する。
861	打製石錐	2.2	1.3	0.3	1.2	頭部は小さく錐部との境は緩やかに内湾弧を描くだけで不明瞭な仕上がりである。	サヌカイト	錐部を欠失する。
862	尖頭器？	5.4	3.7	0.4	9.6	横長剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ短い両面調整を加え、扁桃型に仕上げている。	サヌカイト	先端部を欠失する。
863	削器	3.3	2.3	0.9	5.5	折断によって適当な大きさに分割された剥片の折断面に片側から急角度の調整を加え鋸歯状の刃部を作り出すとともに、他の折断面を打面にして両極打法による剥離を加えている。	サヌカイト	
864	削器	3.7	2.8	0.9	9	折断によって適当な大きさに分割された剥片の折断面に片面調整を加え厚い刃部を作り出している。	サヌカイト	

第128表　SK1133出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
865	打製石鏃	3.0	1.1	0.4	1.5	長さが幅の3倍以上ある細身の凸基無茎式の石鏃。調整は主剥離面側では鋭角で短く素材に使用された横長剥片の本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失する。
874	敲石	19.1	7.0	5.1	1099.9	棒状の礫の上下両端と側縁部に敲打痕が集中して残されている。	片岩	
875	敲石	11.0	9.1	4.9	829.4	長楕円形の礫の側面全体に敲打痕が集中して残され、その範囲は破損部分まで及んでいる。	砂岩	

第129表　SK1145出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
866	打製石鏃	2.9	1.9	0.5	2.0	側縁部がわずかに外湾弧を描く左右非対称の平基無茎式の石鏃。調整は鋭角で短く表裏両面には剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部を欠失

第130表　SX1003出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	素材	備考
888	打製石鏃	2.4	1.7	0.3	1.1	直線的な側縁部とやや浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。逆刺の先端は鋭く尖らされている。調整は鋭角で長いが、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	片側の逆刺を欠失
889	打製石鏃	1.5	1.4	0.5	0.8	直線的な側縁部とわずかに抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は階段状で粗い。	サヌカイト	
890	打製石鏃	2.5	1.2	0.2	0.9	緩やかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で短く、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
891	打製石鏃	2.2	1.2	0.3	0.8	残された側縁部は緩やかに外湾弧を描いている。先端部の調整は鋭角で長い。基部には階段状の粗い剥離が加えられている。	サヌカイト	
892	打製石鏃	1.9	2.0	0.4	1.5	円く仕上げられた基部を持つ凸基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長く、残された部分では背面のほぼ全面に調整が加えられている。	サヌカイト	基部のみ残存
893	打製石鏃	3.3	1.7	0.3	1.3	小さい頭部と細長い錐部を持つ。頭部の片面には頂部の折断面を打面にして細かい調整が加えられている。	サヌカイト	
894	打製石鏃	1.8	2.1	0.5	2.0	基部に浅い抉りが加えられた凹基無茎式の石鏃を横方向に折断し、その折断面を打面にして縦の截断が行われている。	サヌカイト	意図的かどうかは不明。
895	石鏃未製品	3.2	2.2	0.3	1.6	薄い横長剥片の縁辺部に鋭角な細かい調整を加え大きく外湾弧を描く側縁部を持つ形態の石鏃に形を整えようとしている。	サヌカイト	
896	石鏃未製品	4.1	2.5	0.3	3.2	薄い横長剥片の打面を鋭角な調整で除去し、打面に隣接する側縁にも調整を加えて二辺の交点付近を鋭く尖らせている。	サヌカイト	
897	細部調整が加えをられた剥片	3.8	2.5	0.5	5.3	横長剥片の縁辺部に粗い階段状剥離を加え扁桃形に仕上げられている。	サヌカイト	
898	打製石庖丁	4.5	3.2	0.9	16.7		結晶片岩	

第131表　SX1004出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
902	打製石鏃	2.3	1.3	0.5	1.3	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。基端部の端は円く仕上げられている。	サヌカイト	先端部を欠失
903	打製石鏃	2.9	1.2	0.5	1.3	直線的な側縁部を持ち左右非対称に仕上げられた細身の平基無茎式の石鏃。調整は階段状で深く、未調整の部分は片面の基部付近にわずかに残されているにすぎない。	サヌカイト	
904	打製石鏃	2.4	1.3	0.3	1.0	緩やかに外湾弧を描く側縁部と、浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。粗い調整が浅く加えられているため表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
905	打製石鏃	1.9	1.5	0.3	0.6	内湾弧を描く側縁部と比較的深い抉りが基部に加えられ左右対称に作られた凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深いが片面の身部中央には未調整の部分が残されている。	サヌカイト	
906	打製石鏃	3.7	2.0	0.5	3.4	直線的な側縁部とやや浅い抉りが基部に加えられた左右対称の大型石鏃。調整は深く表裏両面とも未調整の部分は残されていない。	サヌカイト	先端部を欠失
907	打製石鏃	2.8	1.9	0.5	2.1	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ凹基無茎式の石鏃。側縁部の調整は比較的急角度で粗い調整が浅く加えられているため表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部を欠失
908	打製石鏃	3.2	1.8	0.3	1.7	大きく外湾弧を描く側縁部と円く仕上げられた先端部を持つ凸基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深いが、表裏両面には素材の横長剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
909	打製石錐	3.3	2.6	0.7	5.0	折断された打面と截断された右側縁の鈍く尖る交点に調整を加え短い錐部を作り出している。頭部には折断面を打面とした両極打法による剥離が残されている。錐部は使用により先端部が摩滅している。	サヌカイト	

第132表　SX1005出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
912	打製石鏃	2.4	1.3	0.3	1.1	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ石鏃。側縁部に加えられる調整は背面側は深いが主剥離面側は浅く、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整で大きく残されている。	サヌカイト	基部の一部を欠失
913	打製石鏃	1.7	1.4	0.2	0.5	緩やかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。側縁部に加えられる調整は90度近い急角度で浅く、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整で大きく残されている。	サヌカイト	
914	打製石鏃	2.6	1.8	0.6	1.6	逆刺の部分がわずかに外湾弧を描く以外、左右対称で直線的な側縁部とやや浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。全面に深い階段状が加えられている。	サヌカイト	
915	打製石鏃	2.9	1.5	0.6	2.2	緩やかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持ち、左右非対称に仕上げられた凹基無茎式の石鏃。調整は主剥離面側の一部を除いて深い階段状の剥離がほぼ全面に加えられている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
916	細部調整が加えられた剥片	3.8	2.8	0.5	4.6	遠端部縁辺に両面調整が加えられた剥片を折断によって分割し、折断面に急角度の浅い調整を加えている。	サヌカイト	

第133表　SX1006出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
931	削器	7.0	4.0	1.1	28.6	遠端部縁辺に両面調整を加えた横長剥片を折断によって分割している。両面調整を加えた縁辺部には軽い研磨が施されている。折断面を打面にして截断が行われている。	サヌカイト	
932	敲石	13.9	6.6	2.4	292.7	扁平な長楕円形の礫の端部に敲打痕が集中して残されている。	片岩	
933	敲石	19.0	5.4	5.0	955.6	一端を打ち欠いた棒状の自然礫の側面部に敲打痕が集中して残されている。	片岩	
934	打製石庖丁？石鍬？	17.8	6.5	1.1	156.9	長楕円形の自然礫から剥離された背面に自然面を残す剥片の縁辺部に両面調整を加えられている。	結晶片岩	

第134表　SX1007出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
945	打製石鏃	2.5	2.3	0.6	2.8	直線的な側縁部を持つ正三角形に近い形態の平基無茎式の大型石鏃。調整は深く、階段状剥離が全面に加えられている。	サヌカイト	
946	打製石鏃	2.6	1.4	0.3	1.1	片側が緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ左右非対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。調整は鋭角で浅く、表裏両面には剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
947	打製石鏃	2.1	1.4	0.3	0.7	緩やかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持ち左右対称に仕上げられた凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深い剥離が全面に加えられている。	サヌカイト	
948	打製石鏃	2.0	1.9	0.3	1.0	緩やかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。先端部と逆刺の端部はいずれも円く仕上げられている。調整は鋭角で深い剥離が主剥離面側の基部の一部を除きほぼ全面に加えられている。	サヌカイト	
949	打製石鏃	3.0	1.2	0.3	1.0	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持ち、左右対称に仕上げられた細身の凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深いが、片面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
950	打製石鏃	2.7	1.4	0.4	1.3	緩やかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で深い剥離が基部の一部を除きほぼ全面に加えられている。	サヌカイト	基部と先端を欠失
951	打製石錐	2.2	1.1	0.4	1.0	小さな頭部と長い錐部からなると考えられる。頭部と錐部との境は内湾弧を描きわずかに括れている。調整は角度が急で浅く、素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	錐部は先端部を欠失
952	楔型石器	4.0	2.9	1.1	14.8	打面と遠端部縁辺の向かい合う二辺に両極打法を加えた横長剥片を、折断と截断によって縦に分割し不整方形の形状にしたもの、打面側の稜線は潰れが著しい。	サヌカイト	
953	ピエスエスキーユ	4.4	2.0	1.0	5.1	連続する折断によって三角形の形状に分割された剥片の折断面を打面にして両極打法による剥離が行われている。	サヌカイト	
954	打製石庖丁	8.3	4.7	1.3	55.6	両面調整が加えられた刃部は研磨されている。	結晶片岩	欠損
955	打製石庖丁	9.1	5.9	0.9	69.9	背面に自然面を残す剥片を使用し、縁辺部に調整を加えて不整四辺形の形態に仕上げている。残された片方の側辺には浅い抉りが加えられている。	結晶片岩	欠損

956	打製石庖丁	8.0	3.1	0.7	21.2	両面調整が加えられる直線的な刃部と、外湾弧を描く背部を持つ。背部には殆ど調整が加えられていない。	結晶片岩	
957	敲石	13.9	5.9	4.4	623.7	長楕円形の自然礫の一端に敲打痕が残されている。	片岩	

第135表　SX1008出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
961	打製石鏃	2.8	1.2	0.3	0.8	横長剥片の打面と遠端部縁辺を側縁に使用し、外湾弧を描く側縁を持った凸基有茎式の石鏃。調整は鋭角で短い。	サヌカイト	
962	楔型石器	3.1	2.7	0.8	8.5	不整方形の剥片の三辺にそれぞれ両極打法による剥離が加えられ、残る一辺には截断面が残されている。	サヌカイト	
963	敲石	11.0	3.8	3.1	166.0	長い棒状礫の両端に敲打痕が残されている。	結晶片岩	

第136表　SX1030出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
992	横長剥片	15.9	6.1	1.9	144.0	打面は丁寧な打面調整が行われ、背面は２枚の剥離面が残されている翼状剥片。	サヌカイト	

第137表　SP1042出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1011	打製石庖丁	5.8	4.7	1.0	34.5	剥片の表裏両面に調整が加えられ短冊形に仕上げられている。側辺部には抉りが加えられていない。	結晶片岩	

第138表　SP1118出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1012	打製石庖丁	8.5	3.3	1.0	31.6	残された片方の側辺と刃部、背部はそれぞれ部分的に摩滅している。	結晶片岩	

第139表　SP1147出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
993	打製石鏃	4.8	2.3	0.3	3.9	横長剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ調整を加え側縁を尖らせていいる。	サヌカイト	未製品

第140表　SP1162出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1018	敲石							
1019	敲石							

第141表　SP1177出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
994	打製石庖丁	2.7	1.2	0.3	0.9	両側縁が外湾弧を描き両端が尖らされた凸基無茎式の石鏃。	サヌカイト	

第142表　SP1199出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
995	打製石鏃	3.0	1.6	0.5	2.1	外湾弧を描く側縁と抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。	サヌカイト	

第143表　SP1220出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
996	細部調整が加えられた剥片	1.9	1.5	0.4	1.6	折断によって分割された縦約1.5cm、横２cmの剥片の縁辺部に急角度の浅い調整を加え刃部を作り出している。刃部が作り出された縁辺の一部は調整の前に研磨が加えられている。	サヌカイト	

第144表　SP1222出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
997	細部調整が加えられた剥片	3.0	2.3	0.6	5.7	打面と遠端部縁辺に両極打法により加撃された剥片を截断と折断により縦に分割し不整方形の形態に整えたもの。両極打法による剥離痕は主剥離面側に集中し、背面側には殆ど認められない。	サヌカイト	

第145表　SP1225出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
998	打製石剣	9.0	4.7	1.5	103.4	背面の一部に自然面が残る大型の横長剥片の縁辺部に調整を加え基端部がわずかに円い短冊形の形態に整えたもの。調整は階段状で浅く、縁辺部は潰れが顕著に残されている。	サヌカイト	打製石鍬

第146表　SP1262出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1020	敲石	12.5	8.9	7.5	1126.7	大型の磨製石斧の破片を敲石に転用したもので側面は激しい敲打痕が残されている。	片岩	

第147表　SP1277出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
999	細部調整が加えられた剥片	7.0	3.9	0.7	16.4	背面の一部に自然面を残す剥片の遠端部縁辺から側縁の一部にかけて短い階段状の調整が両面に加えられて刃部が作り出されている。	サヌカイト	

第148表　SP1330出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1000	打製石鏃	1.8	2.4	0.3	1.3	浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で浅く、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	身部上半を欠失
1001	楔形石器	2.1	3.5	0.9	10.3	打面と遠端部縁辺に両極打法による調整を加えた剥片を縦に連続して截断し分割したもの。両極打法が加えられた縁辺部は潰れが著しい。	サヌカイト	

第149表　SP1405出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1013	打製石庖丁	11.0	5.2	1.3	78.0	背面に自然面を持つ剥片の縁辺に両面調整を加えて不整四辺形の形態に整え、両側辺に抉りを加えている。刃部、背部と考えられる二辺はいずれも縁辺が摩滅している。	結晶片岩	

第150表　SP1417出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
	敲石					扁平な楕円形の自然礫の縁辺部に敲打痕が残されている。	砂岩	

第151表　SP1459出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1021	柱状片刃石斧	12.8	3.6	1.8	147.3	前主面、後主面以外は全く研磨が加えられず、前主面・後主面の研磨も部分的に行われているだけである。	片岩	

第152表　SP1478出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1022	磨製石斧	5.7	3.7	1.0	38.6	柱状石斧の破片の周辺に調整を加え不整台形にしたものに、破損部分に部分的に研磨を加えている。	片岩	扁平石斧の未製品？

第153表　SP1491出土遺観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1002	打製石鏃	2.3	1.6	0.4	1.3	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。逆刺の先端は鋭く仕上げられている。階段状の深い調整が全面に加えられている。	サヌカイト	

第154表　SP1517出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1014	打製石庖丁	5.8	4.4	0.6	25.1	身部は両面調整によって短冊形の形態に仕上げられ、残された片方の側辺には浅い抉りが加えられている。	結晶片岩	

第155表　SP1520出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1015	打製石庖丁	6.8	4.2	0.9	34.3	不整四辺形の剥片の長軸に平行する一辺に両面から調整を加え刃部を作り出している。	結晶片岩	

第156表　SP1613出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1016	打製石庖丁	11.7	4.4	1.5	101.0	扁平な長楕円形の自然礫の長軸側の二辺に両面から調整を加え短冊形の形態に仕上げている。	結晶片岩	打製石鍬？

第157表　SP1694出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1017	打製石庖丁	6.6	4.6	1.1	44.2	長軸に平行する二辺にそれぞれ片面調整が加えられ不整四辺形の形態に仕上げられている。	結晶片岩	

第158表　SP1752出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1003	打製石鏃	2.2	2.1	0.5	2.1	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃で、先端部は円く仕上げられている。調整は鋭角で深く全面に加えられている。	サヌカイト	両方の逆刺を欠失

第159表　SP1776出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1023	敲石	13.2	8.0	4.2	851.8	磨製石斧の破損品を敲石に転用している。		

第160表　SP1842出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1004	打製石鏃	2.4	1.9	0.4	1.5	片側は直線、もう一方はわずかに外湾弧を描き浅い抉りが加えられた基部を持ち左右非対称の形態に仕上げられた凹基無茎式の打製石鏃。調整は鋭角で深いが、片面には素材の剥片本来の剥離面が部分的に未調整のまま残されている。	サヌカイト	

第161表　SP1883出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1005	打製石鏃	2.3	3.3	0.6	3.2	深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整はきわめて粗く階段状の深い剥離が残されている。	サヌカイト	身部上半を欠失

第162表　SP1900出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1006	打製石錐	3.2	2.2	0.7	5.6	折断面を持つ剥片の二辺の鋭角な交点に調整を加えごく短い錐部を作り出している。頭部は未調整で錐部先端は摩滅している。	サヌカイト	
1007	楔形石器	4.2	2.6	1.2	10.4	折断によって剥片から分割された三角形の形態の剥片の基端部に截断を加え、相対する二辺の折断面を打面とした両極打法が加えられている。	サヌカイト	

第163表　SP1911出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1008	打製石鏃	2.5	1.5	0.3	1.0	横長剥片の打面と遠端部縁辺に浅い調整を加え石鏃の側縁に使用したもの。先端部は打面側が全く未調整なため鈍い剥片の縁辺がそのまま残されている。	サヌカイト	未製品？

第164表　SP1918出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1009	打製石鏃	2.7	2.0	0.6	3.4	一方の側縁がもう一方より大きく外湾弧を描く左右非対称の平基無茎式石鏃。表裏両面には深い階段状の剥離が全面に残されている。	サヌカイト	先端部を欠失

第165表　SP1919出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1010	打製石鏃	2.7	2.1	0.5	2.6	直線的な側縁部とやや浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は背面側が深く全面に調整が加えられているのに対して、主剥離面側では部分的に急角度の浅い調整が縁辺部に加えられるだけで素材の剥片本来の剥離面を大きく残している。また、基部の抉りは背面側に急角度の調整が加えられているだけである。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失

第166表　SP1922出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1024	扁平片刃石斧	8.1	3.1	0.9	49.9	板状の剥片を頭部に円みを持つ不整四辺形の形に整え、一端に両面から研磨を加え刃部を作り出している。	片岩	

第167表　SD1027出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1245	打製石鏃	2.6	2.6	0.6	3.5	側縁部がわずかに外湾弧を描くが平面形が概ね正三角形に近い形態を持つ平基無茎式の石鏃。調整は階段状で短く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1246	打製石鏃	2.5	2.4	0.6	4.2	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。調整には両極打法が使用され基部と片側の側縁部は稜線が著しく潰れている。	サヌカイト	先端部を欠失
1247	打製石鏃	2.5	1.7	0.5	2.0	大きく外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。調整は長い階段状剥離が加えられているが表裏両面とも剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1248	打製石鏃	2.5	2.0	0.3	1.3	わずかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ左右対称の凹基無茎式石鏃。調整は鋭角で長いが表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が部分的に未調整のまま残されている。	サヌカイト	
1249	打製石鏃	2.2	1.8	0.5	1.4	わずかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ左右対称の凹基無茎式石鏃。調整は階段状で深いが身部中央部には部分的に素材の剥片本来の剥離面が残されている。	サヌカイト	
1250	打製石鏃	2.0	1.7	0.2	0.7	わずかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ左右対称の凹基無茎式石鏃。調整は鋭角で短く表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1251	打製石鏃	3.2	2.1	0.5	2.7	片側の側縁部がわずかに外湾弧を描き基部に比較的深い抉りが加えられた左右非対称の凹基無茎式の石鏃。調整は階段状で長いが表裏両面とも部分的ではあるが身部中程に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
1252	打製石鏃	3.4	1.8	0.4	2.1	側縁部が左右非対称の形態に仕上げられ、深い抉りを持つ凹基無茎式の石鏃。横長剥片の打面と遠端部縁辺を側縁部に使用しているため厚い打面側の側縁部の調整の角度が急なのに、遠端部縁辺側は鋭角で短く、剥片本来の厚みがそのまま調整方法に反映されている。	サヌカイト	片側の逆刺をわずかに欠失
1253	打製石鏃	3.5	1.6	0.4	1.8	先端部近くが外湾弧を描く側縁部と深くU字状に抉り込まれた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。片面は長い階段状剥離が全面加えられているのに対して、もう片面の調整は鋭角で短く、素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残され調整が異なっている。	サヌカイト	
1254	打製石鏃	2.5	1.7	0.5	1.3	先端部付近がわずかに外湾弧を描く側縁部と大きく抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長く、全面に及んでいる。	サヌカイト	両方の逆刺の先端を欠失
1255	打製石鏃	2.2	1.5	0.4	0.8	内湾弧を描く側縁部と、大きく抉り込まれた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は非常に丁寧で鋭角で長い平行剥離が全面に残されている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
1256	打製石鏃	1.6	1.3	0.4	0.4	直線的な側縁部とV字状に深く切れ込んだ抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。側縁部には角度の急な深い調整が加えられ鋸歯状に仕上げられている。	サヌカイト	
1257	打製石鏃	3.8	2.5	0.6	3.5	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。鋭角で幅広く深い調整が全面に加えられている。稜線の潰れは観察されないものの両極打法が調整に使用された可能性がある。	サヌカイト	身部上半と片方の側縁から逆刺にかけてを部分的に欠失
1258	打製石鏃	2.8	1.7	0.4	1.9	外湾弧を描く側縁部と円く仕上げられた基部を持つ凸基無茎式の石鏃。調整は階段状剥離が深く加えられているが、主剥離面側には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
1259	打製石鏃	3.6	1.1	0.4	1.6	外湾弧を描く側縁部を持ち長さが幅の3倍以上ある細身の凸基無茎式の石鏃。主剥離面側の調整が鋭角で浅く素材の剥片本来の剥離面を残すのに対して背面側には粗い階段状剥離が全面に残されている。	サヌカイト	
1260	打製石鏃	3.1	0.9	0.5	1.1	中央部の断面がレンズ状に仕上げられた中膨らみの錐状の形態の凸基無茎式石鏃。先端部の断面は扁平。	サヌカイト	基部をわずかに欠失

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1261	打製石鏃	3.3	2.0	0.5	3.9	折断面を持つ剥片の縁辺に比較的角度の急な粗い階段状の調整を加えているが、基部は折断面が未調整のまま残されている。石鏃の未製品と考えられる。	サヌカイト	打製石錐？
1262	打製石鏃	2.6	1.8	0.5	1.8	外湾弧を描く側縁部を持ち左右非対称に仕上げられた身部と幅広で扁平な茎を持つ凸基有茎式石鏃。身と茎の境は明瞭な括れを持っている。	サヌカイト	
1263	打製石鏃	2.0	1.2	0.4	0.6	左右対称に仕上げられた直線的な側縁部を持つ。	サヌカイト	身部下半を欠失
1264	打製石鏃	2.3	1.9	0.2	1.0	剥片の縁辺部に鋭角な短い調整が両面に加えられている。	サヌカイト	未製品？
1265	打製石鏃	1.5	1.2	0.3	0.4		サヌカイト	
1266	打製石鏃	1.5	2.1	0.2	0.5	剥片の折断面を打面にして鋭角な調整が加えられている。	サヌカイト	未製品？
1267	細部調整が加えられた剥片	4.4	1.9	0.6	5.5	剥片の縁辺部に比較的角度の急な調整を両面に行い、側縁部には抉りが加えられている。片面は使用痕が残されている。	サヌカイト	打製石庖丁？
1268	尖頭器	5.7	3.8	1.0	20.2	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両面からの調整を加え鋭角に交わる交点を作り出し、左側辺を基部にして左右非対象の扁桃形に仕上げられている。	サヌカイト	
1269	楔型石器	3.2	3.7	0.8	15.2	向かい合う四辺に両極打法による剥離を加えた後、そのうちの一辺を截断して除去し、さらにその截断面を打面にして両極剥離を行っている。	サヌカイト	
1270	楔形石器	4.3	3.9	0.8	14.5	長軸方向の向かい合った二辺に加えられた両極打法による剥離が表裏両面に大きく残された横長剥片を、適当な間隔をおいて截断と折断によって不整方形の形態に分割している。	サヌカイト	
1271	楔型石器	3.4	2.5	0.8	6.2	向かい合う二辺に、両極打法による剥離が加えられた横長剥片が折断と截断によって縦に分割されている。	サヌカイト	
1272	楔型石器	3.1	2.3	0.8	6.3	打面と遠端部縁辺に、両極打法による剥離が加えられた横長剥片を縦に截断している。	サヌカイト	
1273	打製石庖丁	5.2	3.7	1.0	31.5	横長剥片に両極打法による剥離が加えられ短冊形の形態に仕上げられたものを途中で縦に折断し折断面と向かい合う残されたもう一方の端部との間で再び両極剥離が行われている。	サヌカイト	
1274	打製石庖丁	2.6	3.0	0.9	9.0	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両面調整を加え断面レンズ状に仕上げたものを適当な間隔をあけて長軸と直交する方向に折断している。刃部には殆ど潰れは認められない。	サヌカイト	
1275	打製石庖丁？	1.9	2.9	0.8	5.0	打面と遠端縁辺に、両極打法による剥離が加えられた横長剥片に縦の截断が行われている。	サヌカイト	
1276	楔型石器	4.4	3.4	1.7	23.5	盤状または板状の剥片を分割しその際に生じた平坦面を打面にして両極剥離が行われた剥片をさらに截断している。	サヌカイト	
1277	楔型石器	4.8	4.1	1.5	49.5	両極打法による剥離を加えた大型剥片を、縁辺部の一部を残して截断と折断によって不整方形の剥片に分割し、さらに截断面を打面にして向かい合う縁辺との間で両極打法による剥離が行われている。	サヌカイト	
1278	細部調整が加えられた剥片	6.4	8.0	1.5	70.3	打面が除去された剥片の遠端部縁辺と側縁の一部に比較的角度の急な調整が加えられている。	サヌカイト	
1279	細部調整が加えられた剥片	6.3	8.0	0.9	53.2	背面の一部に自然面を残す剥片の遠端部縁辺に背面側から主剥離面側に向けて比較的急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	
1280	打製石庖丁	12.1	4.4	0.7	58.8	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整を加え不整四辺形の形態に仕上げ、両側片には抉りが加えられている。長軸に平行する二辺のうち長辺側の縁辺部は直線的で潰れが観察されるのに対して短辺側の縁辺部は外湾弧を描き潰れが少ない。	結晶片岩	
1281	打製石庖丁	5.3	3.8	0.6	16.8	不整四辺形の形態で、幅に対して長さが極端に短くなっている。側縁は直線的でくり込みは作り出されていない。破損品に再調整を加えた可能性がある。	結晶片岩	
1282	打製石庖丁	11.8	6.8	1.2	128.9	直線的な刃部と大きく外湾弧を描く背部を持つ大型の石器。片側の側辺には縁辺部に刃潰し加工が施され浅い抉りが加えられている。	結晶片岩	
1283	打製石庖丁	5.8	4.4	1.2	40.0	長軸に平行する二辺は大きく外湾弧を描き、側辺部は鈍く尖らされている。背部側の縁辺は鈍く潰れている。	結晶片岩	
1284	打製石庖丁	9.3	4.2	1.0	57.4	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整を加え不整四辺形の形態に仕上げ、片方の側辺には抉りが加えられている。背部は外湾弧を描き端部が円いが、刃部側は直線的で端部は薄く鋭い仕上がりである。	結晶片岩	

1285	打製石庖丁	8.8	5.3	1.2	66.9	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整を加え平行する刃部と背部を作り出している。また残された片方の側辺には浅い抉りが加えられている。	結晶片岩	
1286	打製石庖丁	10.8	4.0	0.6	38.4	刃部と背部はほぼ平行する。側辺部にはくり込みは作り出されていない。	結晶片岩	
1287	打製石庖丁	8.4	4.2	1.2	57.9	背面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整を加え平行する刃部と背部を作り出している。一方の側偏は欠失しているが、残されたもう一方は直線的でくり込みは作り出されていない。	結晶片岩	
1288	打製石庖丁	8.2	3.4	1.3	46.6	背面に自然面を残す剥片の長軸に並行する一辺に両面調整を加え刃部が作り出されている。背の部分は未調整のまま残されている。	結晶片岩	
1289	打製石庖丁	8.3	3.2	0.9	38.0	片岩の剥片の長軸に平行する一辺に粗い調整を加え刃部が作り出されている。背の部分はほとんど未調整のまま残されている。	結晶片岩	
1290	打製石庖丁	7.9	4.4	0.9	54.0	不整四辺形の剥片の長軸に平行する１辺に両面調整を加え鈍い刃部が作り出されている。	結晶片岩	
1291	打製石庖丁	5.6	3.9	1.4	39.0	不整四辺形の形態で、幅に対して長さが極端に短くなっている。側縁は直線的でくり込みは作り出されていない。破損品に再調整を加えた可能性がある。	結晶片岩	
1292	削器？	11.2	7.7	1.5	162.8	扁平な自然礫の一辺に交互に剥離を加え鋸歯状の粗い刃部を作り出している。	結晶片岩	
1293	削器？	7.2	6.5	1.2	73.6	背面に自然面を持つ剥片の縁辺部に粗い調整を加えて刃部を作り出している。	結晶片岩	
1294	削器？	7.8	7.9	1.2	107.2	扁平な自然礫の縁辺に両面調整を加え直線的な刃部を作り出している。刃部の縁辺は一様に磨滅が著しい。	結晶片岩	
1295	打製石鍬	15.9	6.1	1.6	281.1	長楕円形の礫を打ち割り得られた背面に自然面を残す楕円形の大型剥片の縁辺部に調整を加え、円い頭部と平行する側縁部が作り出されている。	結晶片岩	
1296	打製石鍬	8.4	4.2	1.3	79.6	長楕円形の礫を打ち割り得られた背面に自然面を残す楕円形の大型剥片の縁辺部に調整を加え、円い刃部と平行する側縁部が作り出されている。	結晶片岩	
1297	磨製石斧	10.3	4.3	1.2	127.5	全面に丁寧な研磨が加えられた扁平片刃石斧。刃部には調整が加えられ端部は鋸歯状になっている。	緑色片岩	
1298	磨製石斧	7.7	3.1	0.6	36.0	薄い板状の剥片の側面と頭部に敲打を行い短冊状の形態に整え、側縁部と刃部に研磨を加えて扁平片刃石斧に仕上げている。	片岩	
1299	磨製石斧	8.5	4.3	2.4	147.8	小型の蛤刃石斧の頭部と刃部に敲打痕が集中して残されている。	蛇紋岩	敲石に転用
1300	磨製石斧	14.1	7.9	5.3	883.3	太型蛤刃石斧の刃部付近に加撃が加えられている。	結晶片岩 (砂質片岩かも)	敲石に転用
1301	磨製石斧	10.6	7.4	4.3	570.5	表裏両面と頭部に敲打痕が残されている。	結晶片岩	敲石に転用
1302	磨製石斧	13.8	7.4	4.9	909.2	表裏両面と側面に敲打痕が残されている。	結晶片岩？	敲石に転用
1303	磨製石斧	12.8	7.0	4.0	458.5	斧身の上部に敲打痕が集中している。	砂岩？	敲石に転用
1304	磨製石斧	7.7	8.7	5.3	813.4	表裏両面と端部はわずかに研磨された痕跡を残す自然面によって占められ、平行する側面部には激しい敲打痕が集中している。石斧未製品の可能性もある。	緑色片岩？	敲石に転用
1305	磨製石斧	17.5	7.4	2.3	492.5	扁平な長楕円形の自然礫の一端に研磨を加え刃部を作り出している。側縁部や表裏両面、刃部付近には部分的に敲打痕が集中して残され、敲石として使用されている。	緑色片岩	敲石に転用
1306	磨製石斧	11.2	7.8	5.6	832.7	斧身上部は一部を残して敲打が前面に加えられている。	結晶片岩？ (蛇紋岩)？	敲石に転用
1307	敲石	13.5	3.7	3.8	291.0	元々は長楕円形の礫の端部を研磨して刃部が作りだされた磨製石斧であったものを、縦に打ち割り、端部を中心に敲打が加えられている。その際一部を再び研磨している。	緑色片岩	
1308	敲石	13.7	5.1	2.1	235.7	一端が平らな棒状の自然礫の、端部平坦部付近から両側縁に掛けて敲打痕が集中して残されている。	緑色片岩	
1309	敲石	9.4	5.0	3.5	302.2	長楕円形の自然礫の両端に敲打痕が集中して残されている。	結晶片岩	
1310	敲石	7.8	6.5	3.7	331.0	扁平な円礫の側面全体が敲打に使用されている。	緑色片岩	
1311	砥石	8.1	4.8	1.2	81.6	扁平で不整形な礫の表面を砥石として使用し片側の側面は粗く打ち欠かれている。	緑色片岩	
1312	敲石	8.0	5.2	4.3	237.0	楕円形の礫の両端に細かい敲打痕が集中している。	石英	
1313	敲石	7.3	6.1	3.6	187.2	表面は側面の一部を残してほぼ前面が激しい敲打の痕跡と剥離痕に覆われている。	石英	
1314	敲石	12.2	9.0	3.7	651.6	やや角ばる自然礫の両端と側面の一部に細かい敲打痕や剥離の痕が残されている。	石英	
1315	台石	30.5	17.8	14.8	8550.0	片側の側面が大きく打ちかかれた不整楕円の礫の表面に研磨と敲打の痕跡が残されている。	砂岩	

第168表　SD1003出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1334	打製石鏃	2.1	1.1	0.3	0.5	直線的な側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。調整が比較的急角度で短いため表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1335	打製石鏃	2.9	1.5	0.4	1.4	緩やかな外湾弧を描く側縁部と浅いレンズ状の抉りが加えられた凹基無茎式石鏃。調整は鋭角で長く背面側ではほぼ全面に調整が及んでいるが、主剥離面側では素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている部分がある。	サヌカイト	
1336	打製石鏃	2.3	2.3	0.5	2.0	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ左右非対称に仕上げられた凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長いが、表裏両面とも部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
1337	打製石鏃	2.6	1.8	0.5	1.7	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ石鏃。調整は鋭角で長く先端部は鋭く尖らされている。表裏両面には部分的に剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基部を欠失
1338	打製石鏃	2.0	1.8	0.8	3.3	片側の側縁部が緩やかに外湾弧を描き左右非対称に仕上げられた石鏃。調整は鋭角で長い調整が加えられているが部分的には急角度の階段状剥離が加えられている。	サヌカイト	基部を欠失
1339	打製石鏃	2.8	1.6	0.4	1.8	直線的な側縁部を持つ平基または凹基無茎式の石鏃。調整は粗い階段状剥離が縁辺に加えられているが短いため、表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部を欠失
1340	打製石鏃	1.9	1.8	0.4	1.7	側縁部に粗い階段状剥離が加えられた凸基無茎式の石鏃。表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	身部上半を欠失

第169表　SD1005出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1341	打製石鏃	3.2	2.0	0.4	3.3	緩やかに外湾弧を描く側縁部を持つ石鏃。表裏両面には素材の剥片本来の剥離面を未調整のまま大きく残している。	サヌカイト	基部を欠失
1342	打製石鏃	2.9	1.2	0.3	1.2	直線的な側縁部を持ち長さが幅の２倍以上ある細身の石鏃。調整は比較的急角度で短いため表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部を欠失
1343	打製石鏃	2.2	1.8	0.3	1.0	緩やかな外湾弧を描く側縁部とやや深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式石鏃。調整は鋭角で短く表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1344	打製石鏃	2.2	1.4	0.3	0.9	わずかに外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた凹基無茎式の石鏃。背面側は鋭角で長い調整が全面に加えられているのが、主剥離面側は短く素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
1345	打製石鏃	1.7	2.1	0.4	1.6	直線的な側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長く表裏両面ともほぼ全面に及んでいる。	サヌカイト	身部上半を欠失
1346	打製石鏃	1.6	1.9	0.4	1.1	緩やかな外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式石鏃。調整は鋭角で長くほぼ全面に及んでいる。	サヌカイト	身部上半を欠失
1347	打製石鏃	2.5	2.3	0.5	1.9	一方が外湾弧、もう一方が内湾弧を描く側縁部とやや深い抉りが加えられた基部を持ち左右非対称に仕上げられた凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長く、主剥離面側はほぼ全面に調整が加えられているが、背面には素材の剥片に残されていた自然面が部分的に残されている。	サヌカイト	両方の逆刺を欠失
1348	打製石鏃	3.2	1.8	0.6	3.4	大きく外湾弧を描く側縁部と円く仕上げられた基端部を持つ凸基無茎式の石鏃。背面側の調整がやや急角度で長くほぼ全面に及んでいるのに対して主剥離面側では鋭角で短い調整のため剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
1349	打製石鏃	3.2	1.7	0.3	2.1	外湾弧を描く側縁部と身部との境が明瞭にくびれ狭い茎を持つ凸基有茎式石鏃。調整は鋭角で浅く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部と茎を欠失
1350	打製石錐	3.9	2.6	0.5	4.1	大きな頭部と長い錐部を持つ。頭部の調整は背面に集中して行われている。	サヌカイト	先端部を欠失
1351	細部調整が加えられた剥片	2.1	2.6	0.5	3.1	相対する二辺同士で両極打法を行い不整形な形態に仕上げている。部分的に縁辺部の潰れが認められる。	サヌカイト	

1352	打製尖頭器	5.1	2.9	0.8	12.5	片側がわずかに内湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ尖頭器。両側縁部には急角度の調整が片側から加えられているが、同様な調整は基部にも見られる。	サヌカイト	打製石庖丁を転用
1353	打製尖頭器	6.0	2.5	0.6	9.3	両側縁部が緩やかな外湾弧を描く。一部が欠失している基部は背面側は円く仕上げられた可能性がある。調整はやや角度が大きくて短いため、表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部を欠失
1354	打製石剣	6.1	2.9	1.3	26.8	緩やかな外湾弧を描く側縁部には比較的角度が急で長い丁寧な調整が加えられ、断面が肉厚のレンズ状に仕上げられている。また、先端部は表裏両面とも丁寧な研磨が加えられている。	サヌカイト	先端部の破片。
1355	細部調整が加えられた剥片	4.2	3.2	0.6	9.4	剥片の遠端部縁辺には主剥離面側から背面に向かって部分的にノッチ状にくぼむ角度の急な調整が加えられている。	サヌカイト	
1356	細部調整が加えられた剥片	2.0	2.0	0.7	4.2	截断と折断によって不整方形に作り出された剥片の一辺に主剥離面側から急角度の調整が加えられU字形にくぼんでいる。また、他の二辺にもそれぞれ使用による細かい剥離痕が残されている。	サヌカイト	
1357	打製石庖丁	7.2	3.2	0.9	31.6	横長剥片の打面と遠端部縁辺にそれぞれ階段状の粗い調整を加えて背部と刃部を作りだし、側縁部には紐架け用の浅い抉りが加えられている。遠端部側の側縁はわずかに内湾弧を描いている。	サヌカイト	
1358	打製石庖丁	7.9	3.9	0.6	25.8	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両極剥離を加えレンズ状の形態に仕上げている。遠端部縁辺はヒンジフラクチャーの平たん面が未調整のまま大きく残され、背部を構成している。	サヌカイト	
1359	翼状剥片	5.7	5.4	0.9	38.5	３枚の剥離面で構成された背面と左側縁に自然面が残される横長剥片。だ面には調整が加えられている。	サヌカイト	
1360	盤状剥片	9	7.3	1.8	113.9	打面は除去され、主剥離面側から調整が加えられている。	サヌカイト	
1361	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	238.4	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	サヌカイト	
1362	打製石庖丁	10.1	3.9	0.7	41.6	背面に自然面を残す剥片の長辺に調整を加え直線的な刃部が作り出されている。また両端には明確なくり込みが作り出されている。背部の縁辺は研磨されている。	結晶片岩	
1363	打製石庖丁	8.4	4.6	0.9	49.2	背面に自然面を残す剥片の長辺に調整を加え直線的な刃部が作り出されている。両端には明確なくり込みが作り出されている。	結晶片岩	
1364	打製石庖丁	9.7	9.7	2.0	46.9	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	サヌカイト	
1365	打製石庖丁	9.7	9.7	2.0	81.7	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	サヌカイト	
1366	打製石庖丁	9.7	9.7	2.0	40.7	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	サヌカイト	
1367	打製石庖丁	9.7	9.7	2.0	35.7	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	サヌカイト	
1368	打製石庖丁	9.7	9.7	2.0	35.0	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	サヌカイト	
1369	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	373.0	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	サヌカイト	
1370	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	33.0	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	緑色片岩	
1371	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	86.4	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	結晶片岩	
1372	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	559.6	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	結晶片岩	
1373	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	730.4	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	結晶片岩？	敲石に転用。
1374	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	618.6	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	結晶片岩	
1375	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	1057.1	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された２枚の剥離面が残されている。	結晶片岩	

1376	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	727.1	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された2枚の剥離面が残されている。	結晶片岩	
1377	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	259.2	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された2枚の剥離面が残されている。	結晶片岩	
1378	盤状剥片	9.7	9.7	2.0	2587.2	遠端部縁辺に自然面を持つ剥片。背面には同じ方向から剥離された2枚の剥離面が残されている。	サヌカイト	

第170表　SD1006出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1469	盤状剥片	10.1	11.2	1.2	126.3	同じ打面から連続して剥片が剥離されている。	サヌカイト	
1470	敲石	8.5	4.1	2.7	150.8	長楕円形の礫の端部を中心に敲打が加えられている。	蛇文岩	

第171表　SD1012出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1405	打製石鏃	2.8	1.8	0.4	1.8	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式の石鏃。調整の角度はまちまちだが全体的の剥離の長さは短いため表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1406	打製石鏃	3.2	1.7	0.7	3.0	緩やかな外湾弧を描く側縁部を持ち左右非対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。背面の調整は粗く階段状の剥離が加えられているが主剥離面側は素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1407	打製石鏃	3.8	2.7	0.6	5.5	わずかに外湾弧を描く側縁部を持つ大型の平基無茎式鏃。調整は背面が階段状の長い剥離が全面に残されているのに対して主剥離面側では鋭角な浅い調整が縁辺部に加えられるだけで、大部分は未調整のまま残されている。	サヌカイト	
1408	打製石鏃	3.6	2.2	0.5	3.8	末端が蝶番状の剥片の打面と遠端部縁辺を側縁部にして石鏃の形状を整えている。	サヌカイト	未製品？
1409	打製石鏃	3.4	2.5	0.5	4.5	打面と遠端部縁辺を側縁部に持ち基部に浅い抉りが加えられた凹基無茎式の石鏃。表裏両面とも粗い階段状剥離が加えられているが、主剥離面側には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
1410	打製石鏃	3.2	1.4	0.3	1.6	外湾弧を描く側縁部と平坦な基部を持つ平基無茎式の石鏃。背面側の調整は鋭角で長くほぼ全面に行われているが、主剥離面側は短く、剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失
1411	打製石鏃	2.3	2.3	0.6	2.4	基部の抉りが比較的深く片側の逆刺が大きく作り出され左右非対称に仕上げられた凹基無茎式の石鏃。表裏両面とも粗い調整が全面に残されている。	サヌカイト	片方の逆刺を欠失
1412	打製石鏃	2.7	2.2	0.5	2.4	わずかに外湾弧を描く側縁部とやや深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式鏃。片方の逆刺がもう一方より長く左右非対称に仕上げられている。調整は背面側が階段状の長い剥離が全面に残されているのに対して主剥離面側では鋭角で短い調整が加えられ部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
1413	打製石鏃	3.0	1.7	0.3	2.1	片側の側縁部が大きく外湾弧を描く左右非対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。基端部には素材の剥片が持っていた自然面が未調整のまま残されている。調整は鋭角で短く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1414	打製石鏃	2.5	2.4	0.5	2.6	大きく外湾弧を描く側縁部と深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長いが、表裏両面とも部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
1415	打製石鏃	3.0	1.4	0.4	1.3	緩やかな外湾弧を描く側縁部と、浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。背面に自然面を残す剥片を素材に使用しているが、その背面側、主剥離面側ともに剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	基部の一部を欠失する。
1416	打製石鏃	1.8	2.4	0.6	2.4	基部に浅い抉りが加えられた凹基無茎式の石鏃か？調整は長く階段状で表裏両面ともほぼ全面に加えられている。	サヌカイト	基部のみ残存する。
1417	打製石鏃	2.7	1.6	0.5	2.1	側縁部から基端部にかけて大きく外湾弧を描く側縁部を持つ凸基無茎式の石鏃。やや角度の大きい剥離が加えられているが、表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	

1418	打製石鏃	4.1	1.6	0.6	3.2	緩やかに外湾弧を描く側縁部と、身部との境がわずかに括れる茎を持つ、凸基有茎式の石鏃。調整は鋭角で長く、調整の範囲は表裏両面ともほぼ全面に及んでいる。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失する。
1419	打製石鏃	3.4	1.5	0.5	2.2	わずかに外湾弧を描く側縁部と基端部に抉りを加え作り出された比較的長い茎を持つ凸基有茎式石鏃。調整は粗くて短く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部をわずかに欠失する。
1420	打製石鏃	2.6	1.5	0.5	2.3	直線的な側縁部と片側に抉りを加え短い茎を作り出した基部を持つ凸基有茎式の石鏃。調整は粗く階段状の剥離が片側の側縁部に残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
1421	打製石鏃	3.0	2.0	0.4	1.9	おそらく緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ石鏃。調整は鋭角で短いため表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	基部を欠失
1422	打製石鏃	2.8	1.5	0.6	2.6	片方が直線的、もう片方は緩やかな外湾弧を描く側縁部を持つ左右非対称に仕上げられた石鏃。調整は背面側がほぼ全面に粗い階段状剥離が行われているのに対して、主剥離面側では素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	身部中央のみ残存
1441	細部調整が加えられた	3.9	3.9	1	13.7	剥片の遠端部縁辺に背面から主剥離面に向かって鋭角で細かい調整が加えられている。	サヌカイト	
1442	細部調整が加えられた	3	3	0.5	4.7	剥片の打面には鋭角な調整が両面に、遠端部縁辺には片面に加えられている。	サヌカイト	
1445	楔型石器	4.3	2.8	0.9	13.4	剥片の向かい合う4辺に両極剥離を加え不整方形の形に仕上げている。打面側の縁辺部は潰れが観察され、左側縁は折断面を打面にして両極剥離が加えられている。	サヌカイト	
1447	打製石庖丁	4.5	2.8	0.8	7	自然面を打面とする横長剥片の遠端部縁辺に両面調整を加え刃部を作り出している。	サヌカイト	
1448	楔型石器	5.3	4.6	1.6	31.6	不整形な剥片の縁辺に両極剥離が加えられた靴形の剥片の一辺に截断が行われている。	サヌカイト	
1449	楔型石器	3.3	2.9	0.9	11.2	打面と遠端部縁辺に両極剥離を加え平行する2辺を作り出した剥片を適当な間隔をあけて斜めに連続して截断している。片方の截断面には截断面に向かって微細な剥離痕が残されている。	サヌカイト	
1450	細部調整が加えられた剥片	5.2	9.1	1.4	58	打面に自然面をそのまま残す横長剥片の側縁と遠端部縁辺にそれぞれ主剥離面側から急角度の調整が加えられている。	サヌカイト	
1451	細部調整が加えられた剥片	5.4	6	1.4	34.7	截断面を持つ横長剥片の縁辺部に主剥離面、背面どちらか一方からの微細の調整が加えられている。	サヌカイト	
1454	打製石庖丁	10.7	6.3	1.2	109.3	表面に自然面を残す剥片の縁辺部に調整が加えられている。	結晶片岩	
1455	打製石庖丁	6.5	5.2	0.9	51.1	一端を欠くが残されたもう一方の端部にはくり込みが作り出されている。	結晶片岩	
1456	打製石庖丁	6.1	3.1	0.6	15.7	薄い剥片の長軸に沿って調整が加えられている。	結晶片岩	
1462	打製石鍬	16.3	7.1	3.3	623.2	楕円形の礫から剥離された表面に自然面が残される大型の剥片の縁辺部に両面から調整が加えられている。	結晶片岩	
1463	柱状片刃石斧	9.9	1.8	1.4	44.7	頭部の一部を除き全面に丁寧な研磨が加えられている。	緑色片岩	
1466	打製石鍬	20.1	7.7	3	605.8	楕円形の礫の一端を大きく打ち欠いてできた剥離面の縁辺部に両面から調整が加えられている。また、残された自然面の一部は研磨されている。	緑色片岩	
1467	磨製石斧	11.4	4.4	3	252.5	全面が研磨された蛤刃石斧。一部には敲打痕が残されている。	結晶片岩	敲石に転用されている。
1468	磨製石斧	12.6	5.6	2	269.6	扁平な楕円形の礫の一端を研磨して刃部が作り出された磨製石斧の縁辺に粗い敲打が行われている。	緑色片岩	敲石に転用されている。

第172表　SD1015出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1423	打製石鏃	4.0	2.2	0.6	4.2	基部近くが外湾弧を描く側縁部を持つ平基無茎式石鏃。片面は粗い階段状剥離が全面に加えられているが、もう一面は調整の及ぶ範囲が狭く素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
1424	打製石鏃	2.5	1.8	0.5	1.7	直線的な側縁部を持ち左右非対称に仕上げられた平基無茎式の石鏃。片面の調整は粗く階段状で全面に調整の範囲が及んでいるが、もう一面は鋭角で短く部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	
1425	打製石鏃	2.8	2.1	0.3	1.8	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長く片面はほぼ全面に調整が加えられている。	サヌカイト	

1426	打製石鏃	2.0	2.0	0.4	1.4	直線的な側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長く片面はほぼ全面に調整が加えられているが、もう一面は部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
1427	打製石鏃	2.2	2.1	0.4	1.5	直線的な側縁部とやや深い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は鋭角で長く片面はほぼ全面に調整が加えられているが、もう一面は部分的に素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	先端部と片方の逆刺を欠失
1428	打製石鏃	3.2	2.0	0.4	3.2	大きく外湾弧を描く側縁部と浅い抉りが加えられた基部を持つ凹基無茎式の石鏃。調整は比較的急角度で短く表裏内外面は素材の剥片本来の剥離面が未調整なまま大きく残されている。	サヌカイト	
1429	打製石鏃	2.5	1.3	0.3	0.8	外湾弧を描く側縁部を持つ凸基無茎式の石鏃。背面がやや急角度の長い調整が全面に加えられているのに対して主剥離面側では鋭角で短く素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1430	打製石鏃	2.8	1.7	0.3	1.6	大きく外湾弧を描く側縁部を持つ凸基無茎式石鏃。調整は鋭角で短く、表裏両面とも素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1431	打製石鏃	3.7	1.8	0.4	2.4	外湾弧を描く側縁部を持つ凸基無茎式の石鏃。調整は鋭角で短く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	先端部を欠失
1432	打製石鏃	3.7	1.4	0.4	2.0	身部下半が外方に突出する凸基無茎式の石鏃。調整は両面調整の部分もあるが、身部下半や片側の側縁では比較的急角度の調整が片面のみに加えられている。表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。	サヌカイト	
1433	打製石鏃	3.8	1.0	0.6	2.3	先端から基部にかけての側縁が緩やかに外湾弧を描く凸基無茎式の石鏃。片側の側縁は途中わずかに括れるが明確な茎とは認められない。調整は他の石鏃と比較してかなり急角度で階段状の剥離が目立っている。	サヌカイト	
1434	打製石鏃	4.2	1.5	0.4	3.2	先端から緩やかな外湾弧を描く側縁が途中括れ部を持ち長い茎が作り出された凸基有茎式石鏃。調整はやや急角度で短く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま残されている。	サヌカイト	茎の先端をわずかに欠失
1435	打製石鏃	2.8	2.5	0.4	2.4	わずかに外湾弧を描く側縁部を持つ石鏃。調整は鋭角で短く表裏両面には素材の剥片本来の剥離面が未調整のまま大きく残されている。身部は中程で大きく破損しているが、背面にはその破損面を打面にして複数の剥離が行われている。	サヌカイト	基部を欠失
1436	打製石鏃	3.9	1.3	0.4	2.7	横長剥片の打面と遠端部縁辺をそれぞれ側縁部に使用した石鏃。調整は先端部付近を除いてすべて背面側に集中している。基部は未調整のまま残されている。	サヌカイト	未製品？
1437	細部調整が加えられた剥片	2.5	1.8	0.6	2.0	剥片の縁辺部に主剥離面側から背面に向かってやや急角度の調整が加えられ直線的な刃部が作り出されている。	サヌカイト	
1438	細部調整が加えられた剥片	3.2	2.8	0.5	4.5	折断面と交差する縁辺部は、背面からの片面調整によってノッチ状のくぼみが作り出され、折断面に加えられた調整とともに交点が錐状に短く尖らされている。	サヌカイト	打製石錐？
1439	細部調整が加えられた剥片	6.1	5.2	1	40.5	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両極剥離が加えられている。背面側と主剥離面の打面の調整は鋭角で階段状であるが主剥離面側の遠端部縁辺の調整は角度が急で稜の潰れが他と比較して目立っている。	サヌカイト	打製石庖丁？
1440	細部調整が加えられた	4	2.9	0.9	9.2	剥片の打面に背面側から急角度の調整が加えられ打面は完全に除去されている。	サヌカイト	
1443	細部調整が加えられた剥片	5.6	3.1	0.6	10.8	横長剥片の遠端部縁辺に鋭角な調整が加えられ、部分的にはさらに粗い研磨が行われている。	サヌカイト	
1444	細部調整が加えられた	4.1	2.8	0.7	9.6	横長の剥片の縁辺部全体に粗い両面調整が加えられ、打面が除去されている。	サヌカイト	
1446	細部調整が加えられた剥片	7.1	5	1	44.5	横長剥片の打面と遠端部縁辺に両極剥離が加えられている。背面側と主剥離面の打面の調整は鋭角で階段状であるが主剥離面側の遠端部縁辺の調整は角度が急で稜の潰れが他と比較して目立っている。	サヌカイト	打製石庖丁？
1452	楔型石器	4.8	3.7	2	34.7	截断によって不整方形の形態に整えられた剥片。截断によって生じた平たん面を打面にして激しい両極剥離が加えられ稜線には潰れが顕著に残されている。	サヌカイト	

1453	楔型石器	6	5.4	2.6	100	大型の剥片の縁辺に截断を加え不整台形の形態にしたもの。截断によって生じた平たん面を打面にして激しい両極剥離が加えられ、稜には潰れが顕著に残されている。	サヌカイト	
1457	打製石庖丁	9.2	4.2	0.9	46.3	表裏両面との自然面が残る扁平な礫の縁辺部に調整を加え刃部が作り出されている。	結晶片岩	
1458	打製石庖丁	9.2	4.2	0.9	46.3	表面に自然面が残る剥片の縁辺部に調整を加え刃部が作り出されている。	結晶片岩	
1459	打製石庖丁	7.8	5.6	0.9	47.7	表面に自然面が残る剥片の縁辺部に調整を加え鈍い刃部が作り出されている。残された片側の端部にはくり込みが作り出されている。	結晶片岩	
1460	打製石庖丁	7.1	4.6	0.8	36	剥片の縁辺部に細かな調整が加えられている。	結晶片岩	
1461	打製石庖丁	5.5	3.4	0.6	15.6	背部の縁辺は摩滅している。	結晶片岩	
1464	磨製石斧	7.1	2	2	46.2	手頃な大きさの柱状の礫を素材に使用している。	結晶片岩	
1465	磨製石斧	4.8	2.3	0.4	9.1	厚さ5mmに満たない扁平な石斧。片側は丁寧に研磨されている。	結晶片岩	

第173表　SD1018出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1471	敲石	7.2	7.1	5.3	355.3	楕円形の礫の縁辺部全面に細かい敲打痕が残されている。	石英	
1472	石鍬	8.4	5.8	1.2	107.7	円い部頭部と、抉りが加えられくびれ部が作り出された側縁部を持つ。	片岩	

第174表　SD1030出土遺物観察表（石器）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1473	礫器	11.5	7	1.7	445	扁平な不整方形の礫の縁辺部に調整を加えて整形し、最も厚みの少ない一辺を両面から調整して粗い刃部を作り出している。	緑色岩？ 結晶片岩？	

第175表　包含層出土遺物観察表（石器）

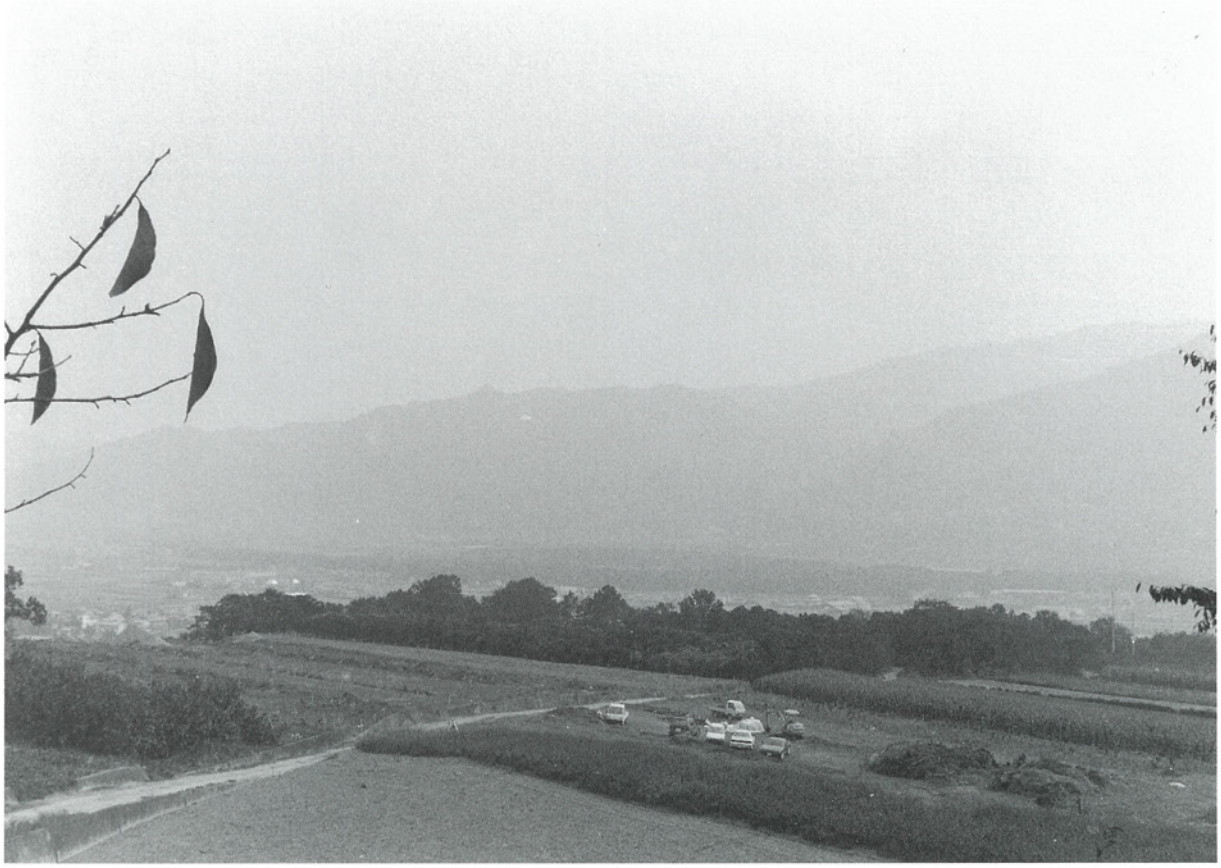
番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	特徴	材質	備考
1641	打製石剣	6.3	2.8	1	22.4	両面調整によって断面レンズ状に仕上げられている。両側縁は切っ先に向かって緩やかに外湾弧を描いている。	サヌカイト	表面に摩滅痕が残されていることから打製石庖丁を転用したものと考えられる。
1642	打製石剣	3.6	2.8	0.7	9	両面調整によって断面レンズ状に仕上げられている。両側縁は切っ先に向かって緩やかに外湾弧を描いている。切っ先近くの破	サヌカイト	
1643	打製石庖丁	11.2	5.4	1.2	9.3	翼状剥片と考えられる横長剥片の縁辺部に両極剥離を加え形態を整えている。両端には刃部よりの位置にくり込みが作り出され部分的に摩滅している。背の部分の縁辺部	サヌカイト	
1644	打製石庖丁	10	3.8	1	52.3	横長剥片の縁辺部に両極剥離による調整を加え長方形の形に整形している。両端には浅いくり込みが作り出されている。	サヌカイト	
1645	打製石庖丁	8.2	4.2	1	41.5	横長剥片の縁辺部に調整を加え長方形の形に整形している。両端には浅いくり込みが作り出されている。背の部分の縁辺部は潰	サヌカイト	
1646	打製石庖丁	8.5	5.1	1.1	46	截断面を打面に持つ横長剥片の縁辺部に調整を加えて加え不整台形の形に整えられている。両端には深いくり込みが作り出されている。背の縁辺部は潰れが残されている。	サヌカイト	
1647	打製石庖丁	6.3	3.3	1.1	25.2	直線的な刃部と外湾弧を描く背の部分を持つ。両端にはくり込みは作り出されていない。背の部分の縁辺部には潰れが残されている。	サヌカイト	
1648	打製石庖丁	2.8	2.7	0.7	6	横長剥片を使用し端部にくり込みを作り出した打製石庖丁を折断している。	サヌカイト	
1649	打製石庖丁	6.9	4.8	1.1	51.2	横長剥片の縁辺部に調整を加え不整方形の形に整え端部にくり込みを作り出した石庖丁を截断している。刃部近くは使用によって著しく摩滅している。	サヌカイト	
1650	打製石庖丁	10.3	4.7	1		翼状剥片と考えられる横長剥片の縁辺部に両面調整を加え直線的な刃部と外湾弧を描く背の部分の形態を整えている。両端には刃部よりの位置にくり込みが作り出されている。片側の端部から刃部中央部にかけて大きく破損するが破損部分に再度調整を加	サヌカイト	
1651	削器	9	5	1.1	60.7	翼状剥片の打面と遠端部縁辺に調整が加えられている。	サヌカイト	打製石庖丁？
1652	削器	6.8	4.4	1	33.7	翼状剥片の打面と遠端部縁辺に調整が加えられている。	サヌカイト	打製石庖丁？
1653	局部磨製石器	3.4	1.7	0.4	3	打製石鏃の基部を両面から研磨してノミ状の刃部を作り出している。	サヌカイト	
1654	局部磨製石器	2.4	1.7	0.4	1.6	打製石鏃の破損部分を片面から研磨して刃部を作り出している。	サヌカイト	
1655	局部磨製石器	3.7	2.8	1.1	13.5	断面が肉厚の打製石庖丁、または打製石剣の破片に両面から研磨を加え石斧状の刃部を作り出している。	サヌカイト	

1656	局部磨製石器	4.3	3.3	0.9	11.2	剥片の打面と遠端部縁辺に両面調整を加え切っ先を作り出した尖頭器の先端部と側縁部の一部にそれぞれ研磨を加えている。	サヌカイト	
1657	局部磨製石器	2.1	1.4	0.8	1.7	折断面と縁辺の交点を研磨して短い錐部が作り出されている。	サヌカイト	
1658	局部磨製石器	4.5	3.9	1	14.1	両側縁が折断された剥片の主剥離面側の遠端部縁辺が研磨されている。	サヌカイト	
1659	局部磨製石器	2.8	1.9	0.8	5	折断面を打面にして両極剥離が加えられる剥片の遠端部縁辺の主剥離面側が研磨されている。	サヌカイト	
1660	局部磨製石器	3.3	2.5	0.6	5.1	折断により分割された剥片の残された打面が研磨されている。	サヌカイト	
1661	局部磨製石器	3.2	2.7	1	10.1	折断面を持つ剥片の折断面と遠端部縁辺に調整が加えられた縁端部縁辺が研磨されている。	サヌカイト	
1662	局部磨製石器	4.1	2.9	0.8	12.6	打面と遠端部縁辺に両極剥離が加えられた剥片の側縁部が両面から研磨されている。	サヌカイト	
1663	局部磨製石器	2.3	1.6	0.5	2.3	折断によって不整形に分割された剥片主剥離面側の一部が研磨されている。	サヌカイト	
1664	局部磨製石器	4.3	2	0.6	4.5	鋭角に交わる２つの折断面の交点の一部に微細な調整が加えられ部分的的している。	サヌカイト	
1665	局部磨製石器	1.8	2.3	0.5	2	小型の剥片の遠辺部に両面から研磨を加え直線的な刃部が作り出されている。	サヌカイト	
1666	局部磨製石器					小型の剥片の一部が両面からわずかに研磨され直線的な側縁部に仕上げられている。	サヌカイト	
1667	局部磨製石器	2.7	2.1	0.7	3.3	楔形石器の表裏両面を部分的に研磨しています。	サヌカイト	
1668	局部磨製石器	3	2.5	0.4		剥片の表面が部分的に研磨されている。この研磨は剥片が剥離される以前のものと考えられる。	サヌカイト	
1669	剥片	8.8	6.7	1.1	75.1	打面を180度変えて剥離された横長剥片。打面には入念な調整が加えられている。剥片の遠端部縁辺には両面に調整が加えられている。	サヌカイト	
1670	盤状剥片	8.8	8.5	1.5	92.4	自然面をそのまま打面にして剥離されている。背面は複数の剥離面が残され、主剥離面側の打面近くには、２回剥離を剥離した痕跡が残されている。遠端部縁辺には主剥離面から背面に向かって調整が加えられている。	サヌカイト	
1671	盤状剥片	9.5	6.8	1.5	89.5	背面に異なる方向から剥離された剥離面が２つ残されている。打面は複数の剥離によって除去されている。		
1672	盤状剥片	8.4	8.4	1.4	96.5	打面が折断された大型の剥片。側縁部に加えられた調整によって一方の側縁は大きく内湾ている。遠端部縁辺と側縁部には調整が加えられている。	サヌカイト	
1673	盤状剥片	7.8	4.8	2.5	94.6	折断によって分割された盤状剥片の打面部分。一方の側縁には主剥離面側から背面に向かって直角に近い調整が加えられている。	サヌカイト	
1674	盤状剥片	12	8.5	2.4	286.5	同じ方向から連続して剥離された剥片。打面は折段によって除去されている。剥片の縁辺は摩滅している部分が多いが側縁部には交互剥離が加えられている。	頁岩？ 泥岩？	
1675	石核	9.9	7.1	4	375.1	不整楕円形のチャートの礫の側面に同一方向から加えられた複数の剥離痕が残されている。打面調整は行われず鋸歯状の縁辺が残されている。	チャート	
1676	柱状片刃石斧	10.5	2.3	0.7	36.8	柱状片刃石斧が石材の節理に沿って縦に割れた破片を再度研磨している。	結晶片岩	
1677	柱状片刃石斧	10	1.9	3	119.5	柱状片刃石斧の破損部分に敲打痕が残されている。	結晶片岩？ 緑色片岩？	
1678	柱状片刃石斧	16	2.9	4.5	365.4	側面の一部を残して全面に丁寧な研磨が加えられている。抉りは作り出されていない。	結晶片岩？ 緑色片岩？	
1679	柱状片刃石斧	21.8	4.2	2.5	513.6	片側の側面の一部を残して全面に丁寧な研磨が加えられている。	結晶片岩？ 緑色片岩？	
1680	扁平片刃石斧	5.6	3.3	1	35.6	表裏両面の一部と刃部に丁寧な研磨が加えられている。	結晶片岩？ 緑色片岩？	
1681	扁平片刃石	5.1	3	0.6	22.5	片面と刃部に丁寧な研磨が加えられている。	結晶片岩？ 緑色片岩？	
1682	磨製石斧	6.4	1.8	1.1	19.2	扁平な棒状の礫の一方の側面打撃	結晶片岩？ 緑色片岩？	
1683	磨製石斧	6.8	3.8	1.1	53.7	扁平な楕円形の礫の側面と端部が研磨されている。	緑色片岩	
1684	磨製石斧	5.4	3.6	1.2	33.3	一端が尖る不整形な礫の一端を敲打して頭部の形を整え、もう一端を研磨して刃部が作り出されている。	緑色片岩	
1685	敲石	12.8	7.4	4.6	887	破損した磨製石斧の表面に細かい鼠歯状の敲打痕が残されている。	緑色片岩	
1686	敲石	10	5.5	4.4	378	砂岩の礫を使用した磨製石斧を敲石に転用している。表裏面には敲打痕のほかに太い溝状の砥面が残されている。	砂岩	
1687	磨製石斧	8.4	7.6	3.4	215.3	太型蛤刃石斧の刃部の破片	緑色片岩？	
1688	磨製石斧	7.1	5.1	2.5	10.3	磨製石斧の直線的な刃部付近の破片。	緑色片岩？	
1689	不明石器	7.7	4	1.2	66.4	扁平な楕円形の礫の側面に筋状の刻目が残されている。	緑色片岩	

1690	不明石器	6.6	1.9	1.4	32.4	棒状の礫の先端部が細かく研磨されている。	緑色片岩	
1691	不明石器	7.9	2.3	1.4	57.8	表面が磨かれた棒状の礫の両端に細かい敲打痕が残されている。	緑色片岩	
1692	砥石	19.3	10.9	5.6	189.4	不整楕円の礫の表面を砥面に使用している。側面には敲打痕が残されている。	砂岩	
1693	石製紡錘車	2.3		0.5		片岩の剥片を研磨して円盤状に加工し両面から穿孔を加えている。	片岩	
1694	磨製石斧	21	9	3.7	1323.4	先端部をわずかに欠く以外ほぼ全形を保った状態で出土している。敲石に転用された痕跡はない。	緑色片岩	
1695	磨製石斧	23.5	9.8	5.3	1742.6	大型の楕円形の礫の側面に粗い調整を加え整形している。	結晶片岩	

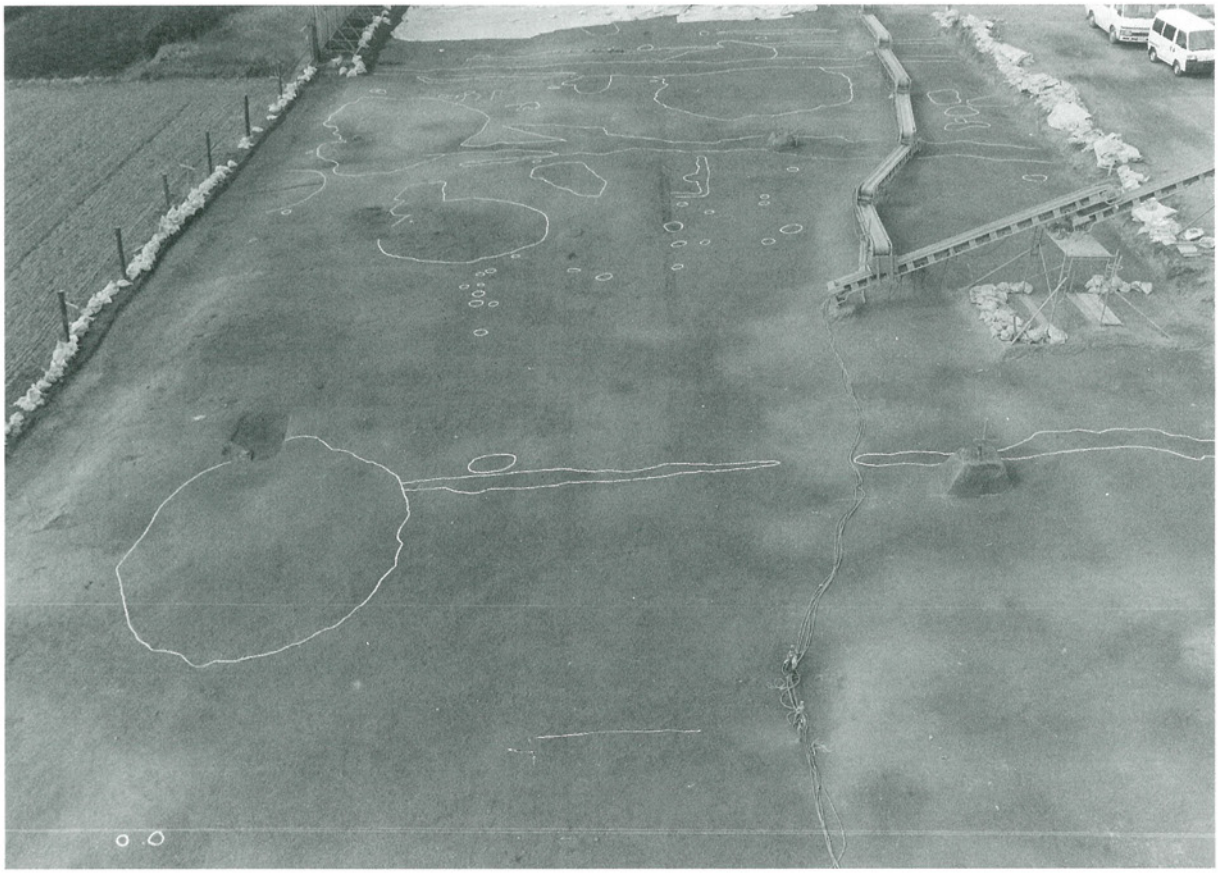
図　　版

丸山遺跡遠景

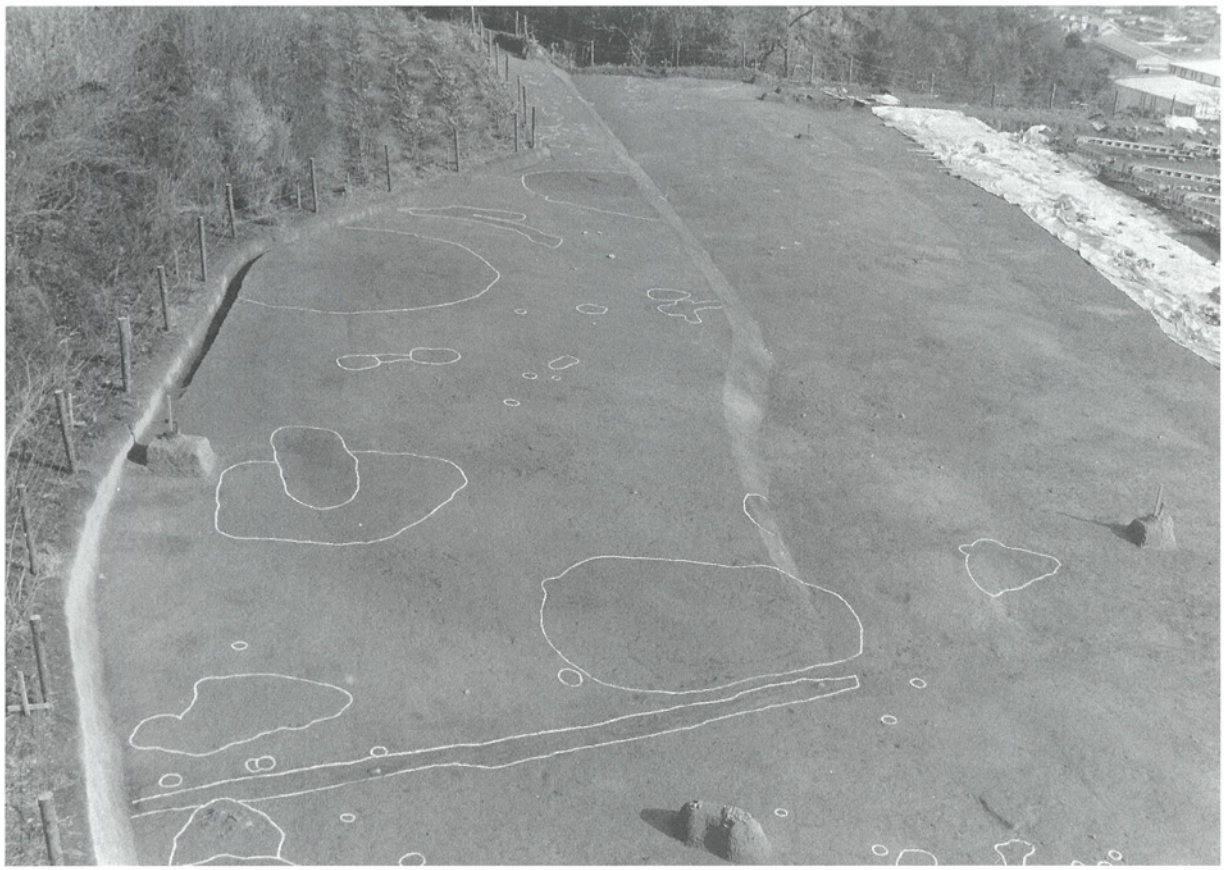


丸山遺跡調査前風景

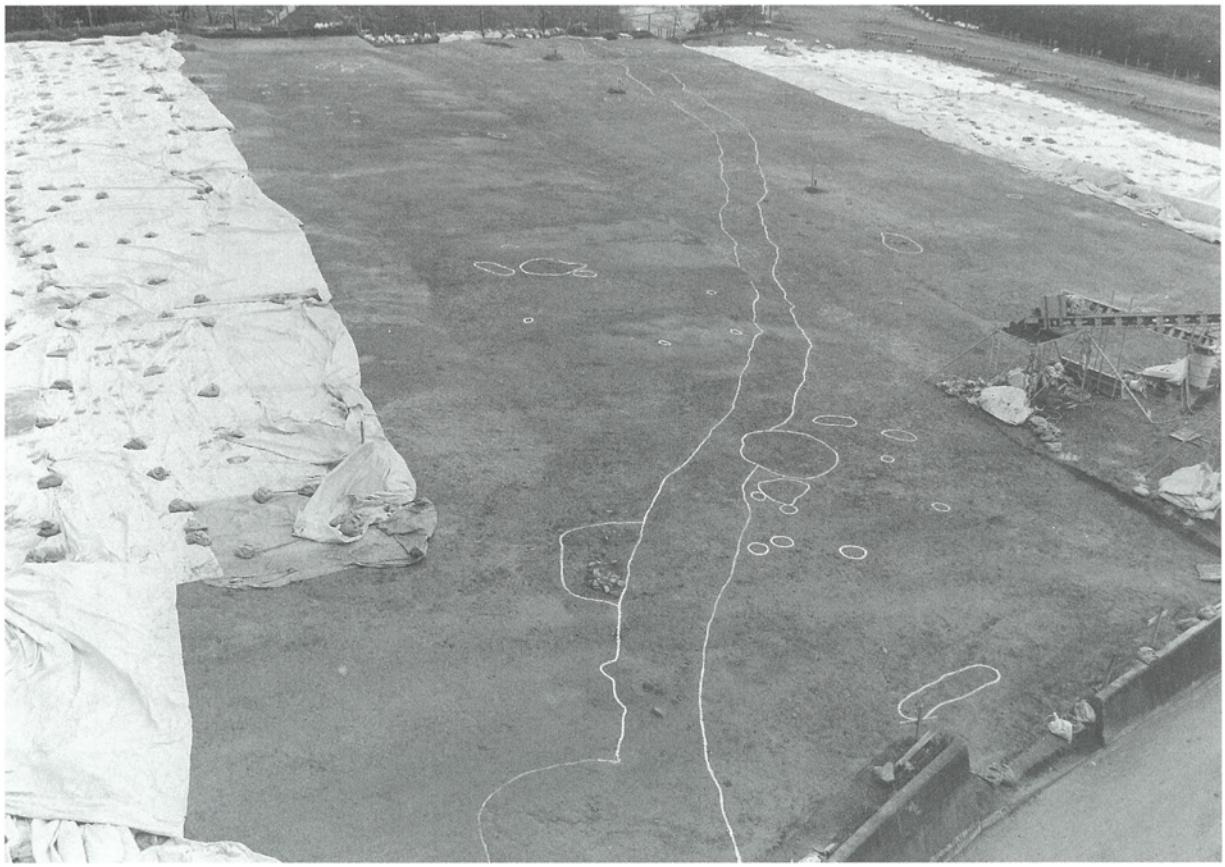
調査区北西部遺構検出状況



調査区南西部遺構検出状況



調査区北東部遺構検出状況（西から）

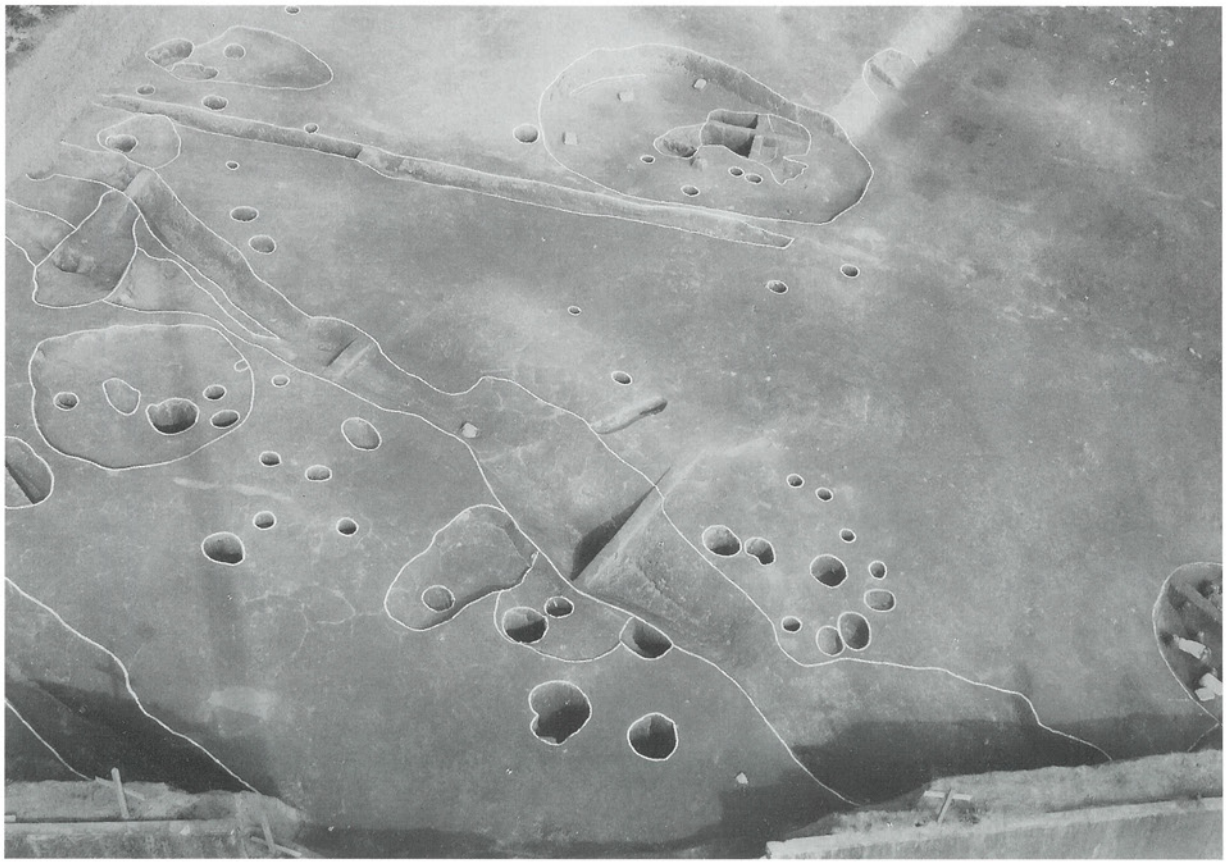


調査区南東部遺構検出状況（西から）

調査区中央部遺構完堀状況

調査区中央部遺構完堀状況

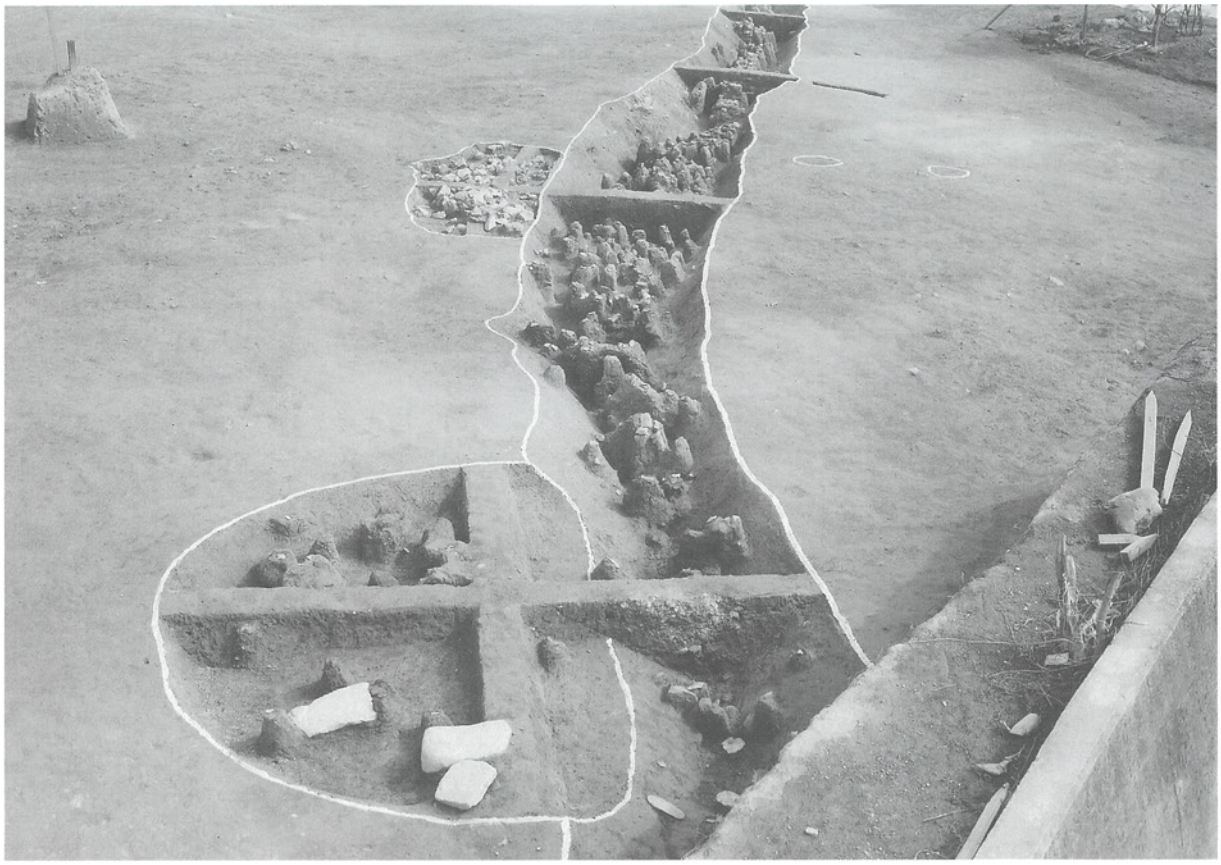
調査区北東部完堀状況



調査区南東部完堀状況

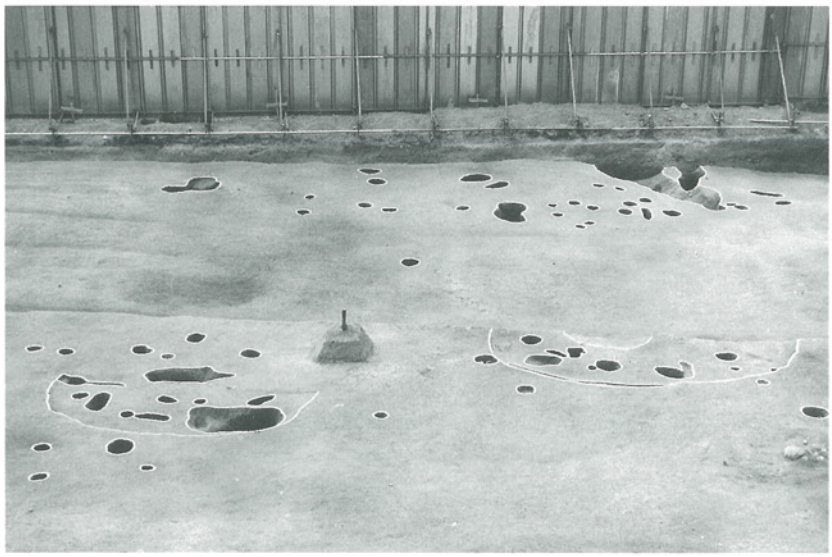
SD1027A地区遺物出土状況（北西から）

SD1027A地区遺物出土状況（南東から）

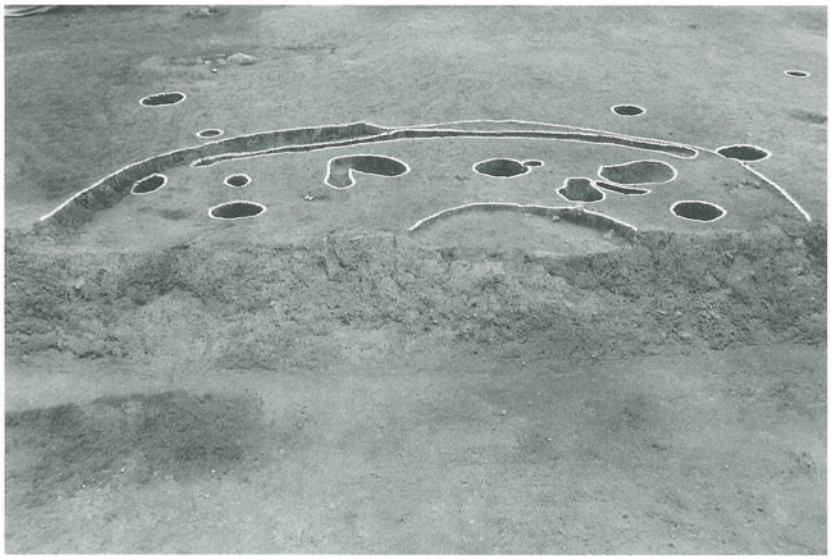


SD1027B地区遺物出土状況

SD1027C地区遺物出土状況



SB1001・1002
遺構完堀状況



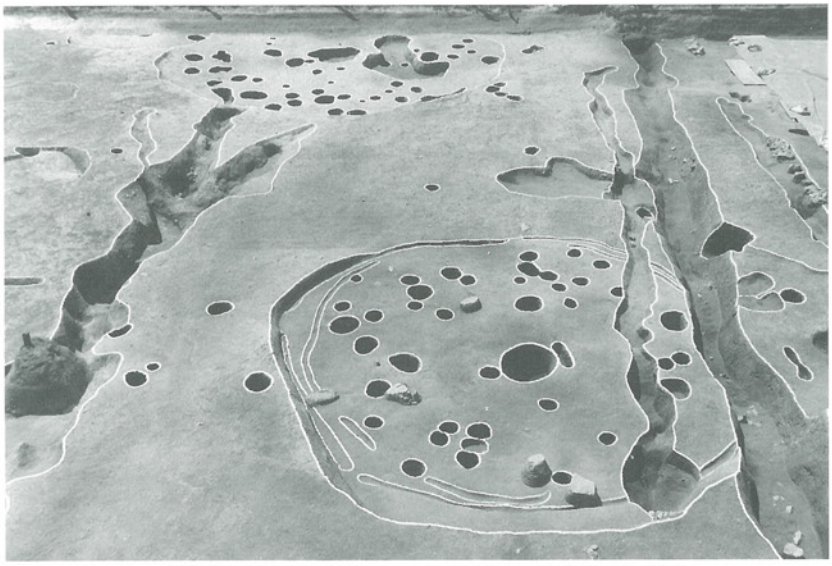
SB1001遺構完堀状況

SB1002遺構完堀状況

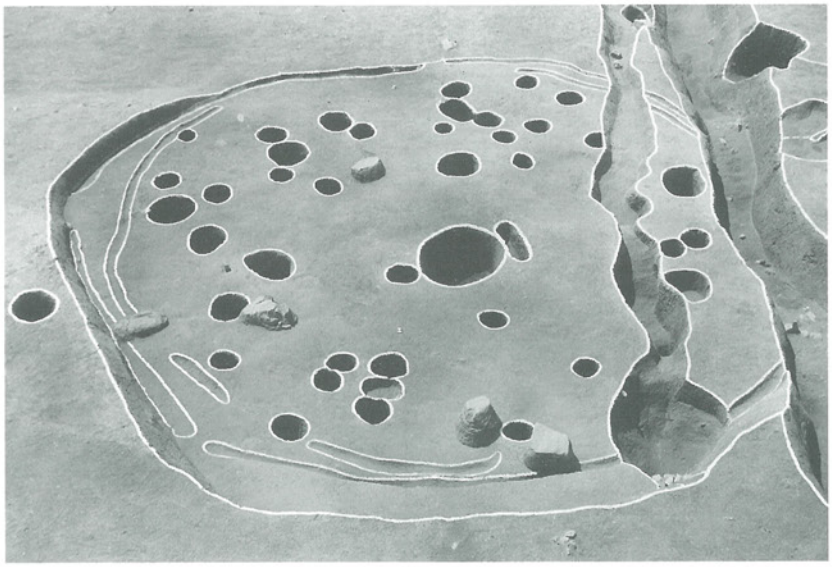
SB1003・1004遺構検出状況

SB1003・1004
SX1006床面精査状況

SB1003・1004
SX1006遺構完堀状況

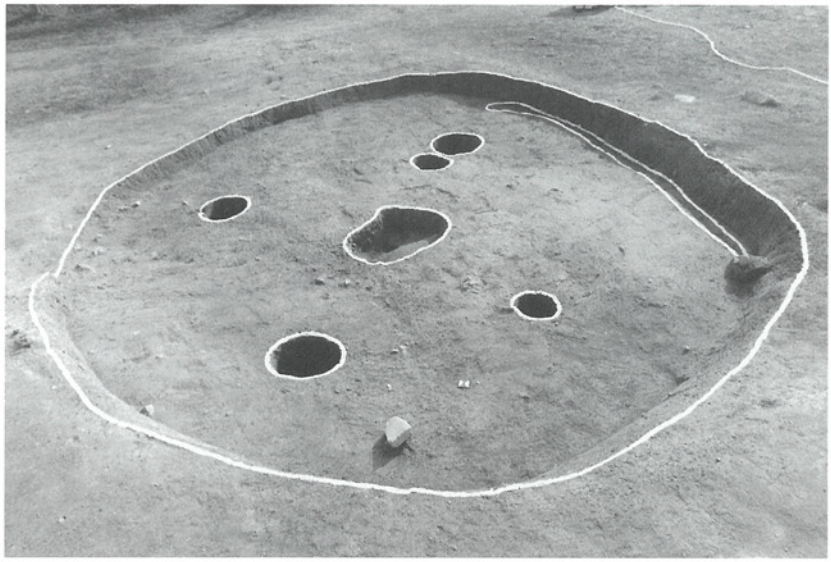


SB1005・1006
遺構完堀状況

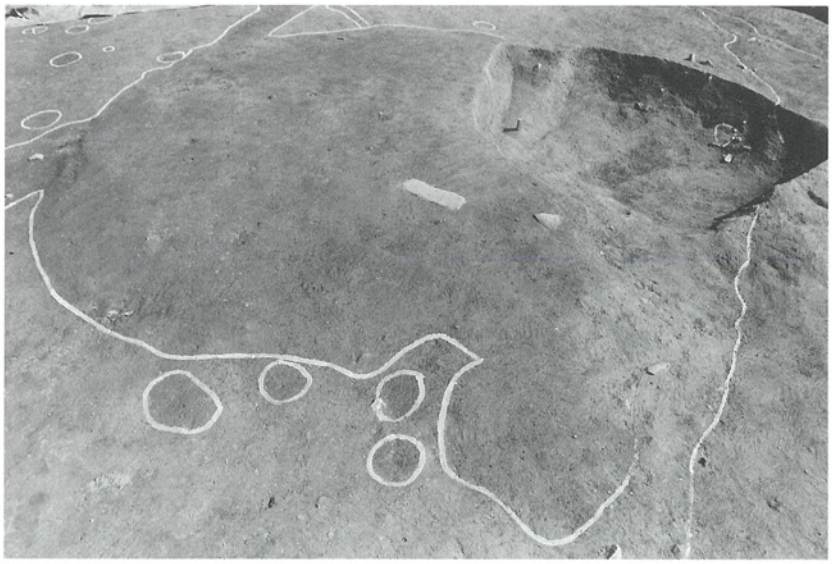


SB1005遺構完堀状況

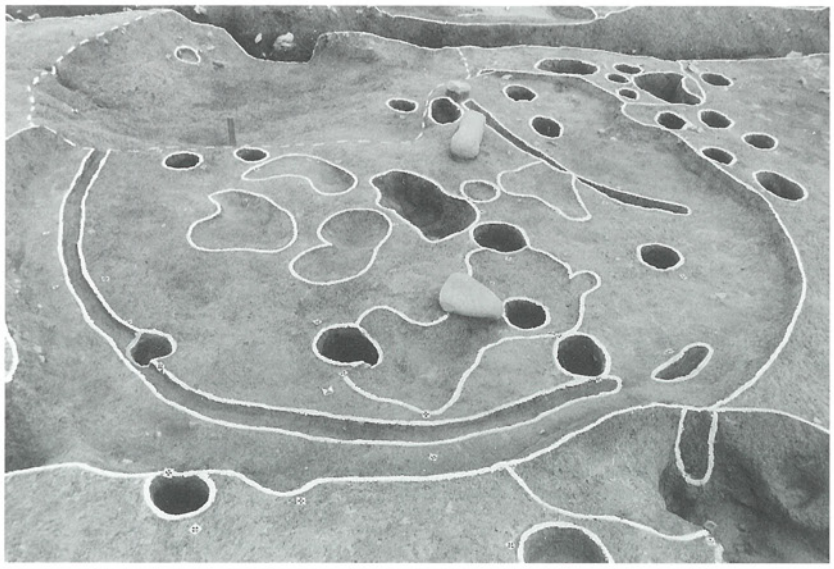
SB1006遺構完堀状況



SB1008遺構完堀状況



SB1010遺構検出状況

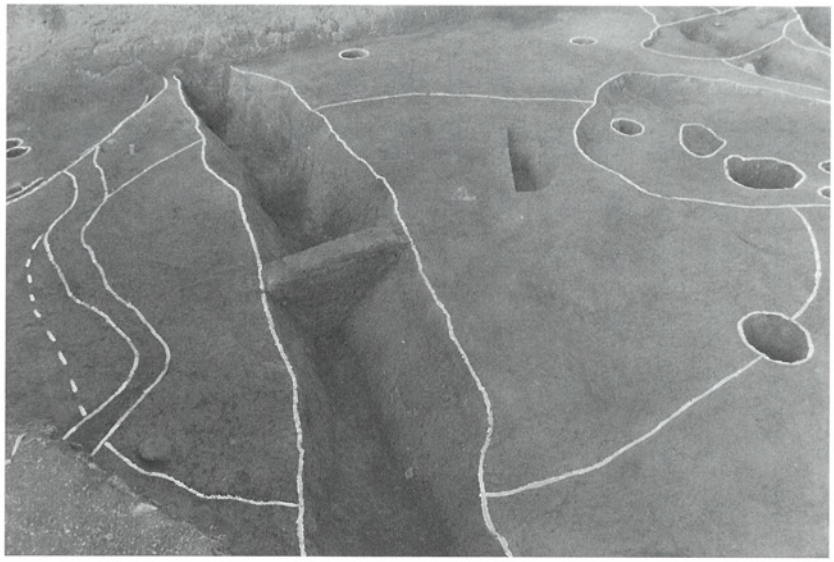


SB1010遺構完堀状況

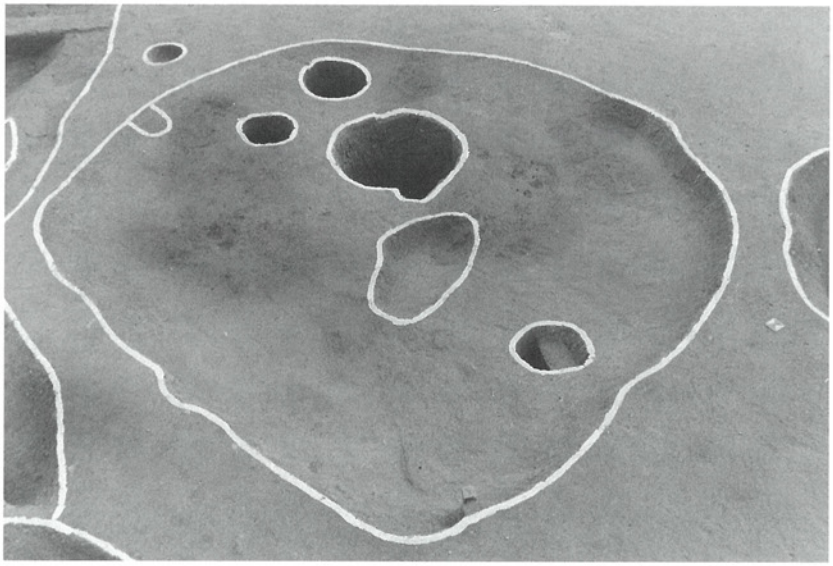
SB1012・1013床面精査状況

SB1012・1013遺構完堀状況

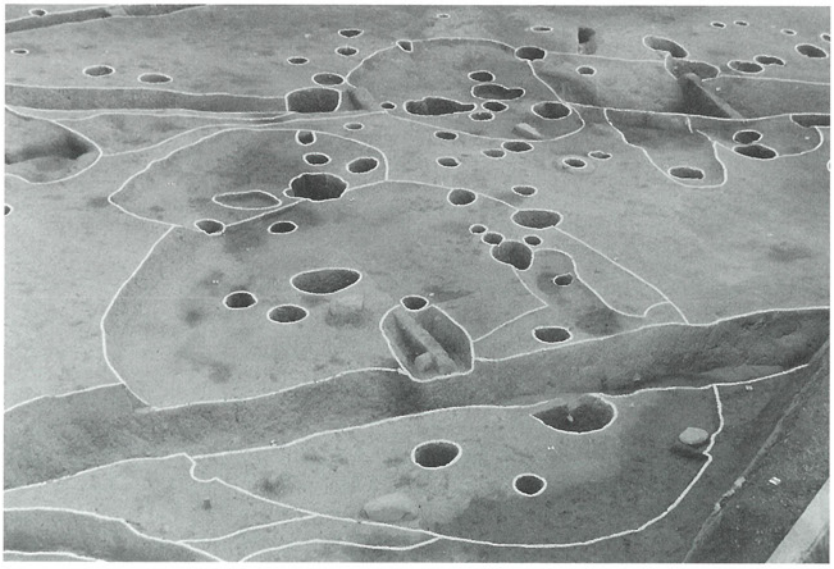
SB1014遺構完堀状況



SB1016遺構検出状況

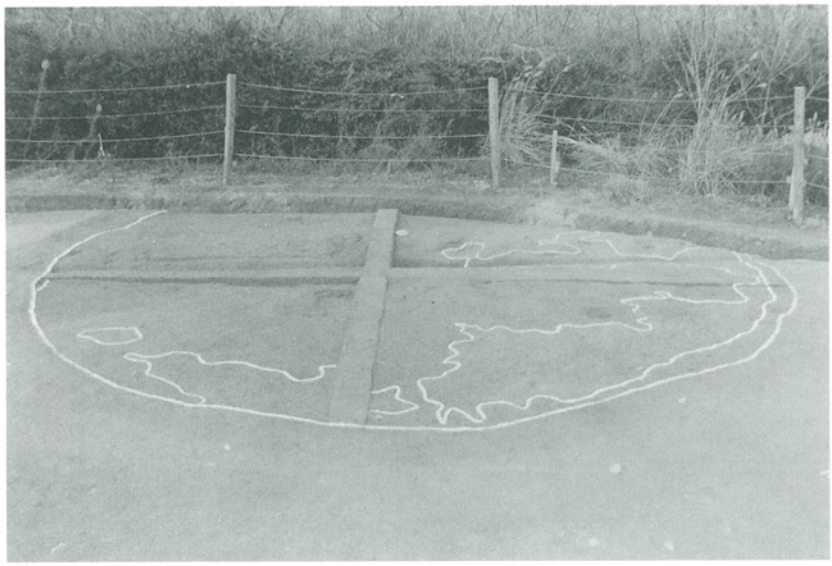


SK1114遺構完堀状況

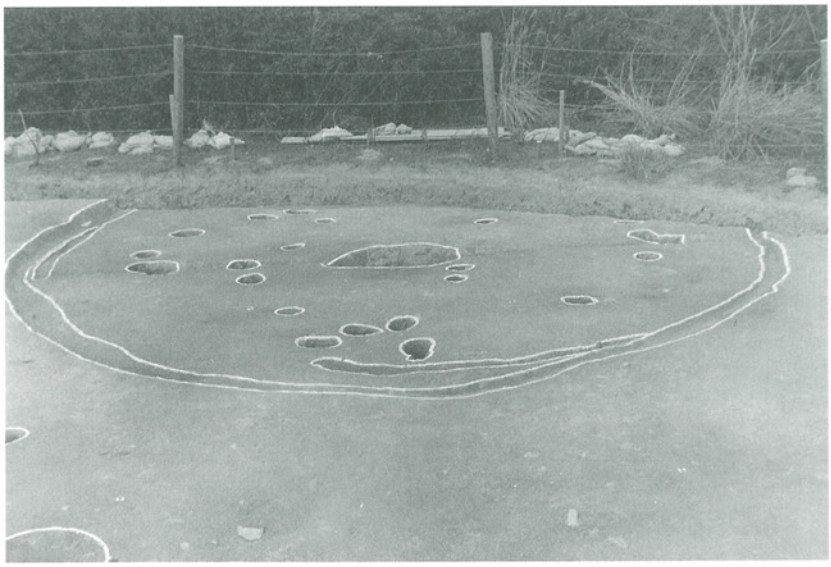


SB1016・1017
SK1114遺構完堀状況

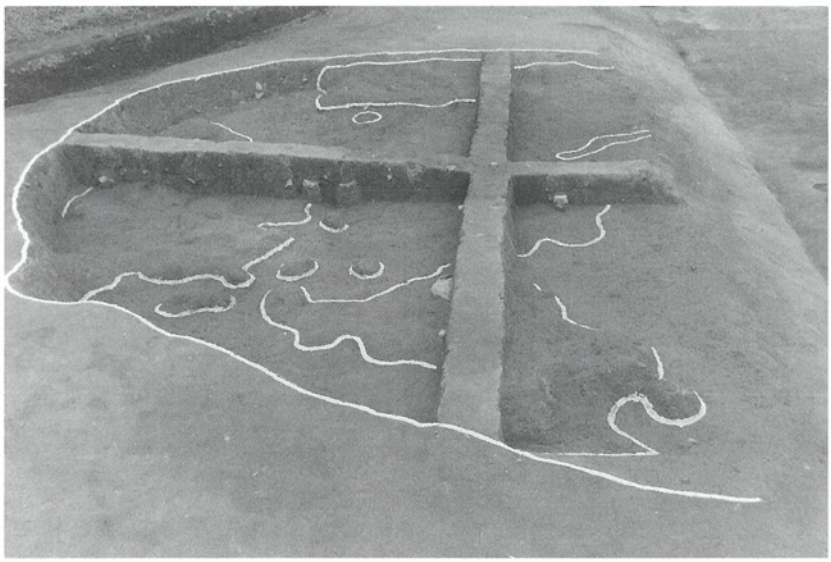
SB1019・1020遺構堀削状況



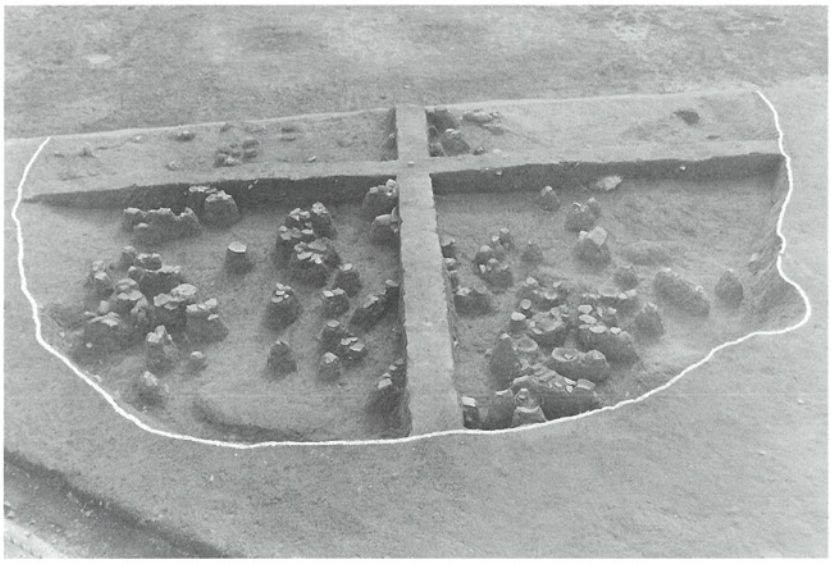
SB1021焼土分布状況



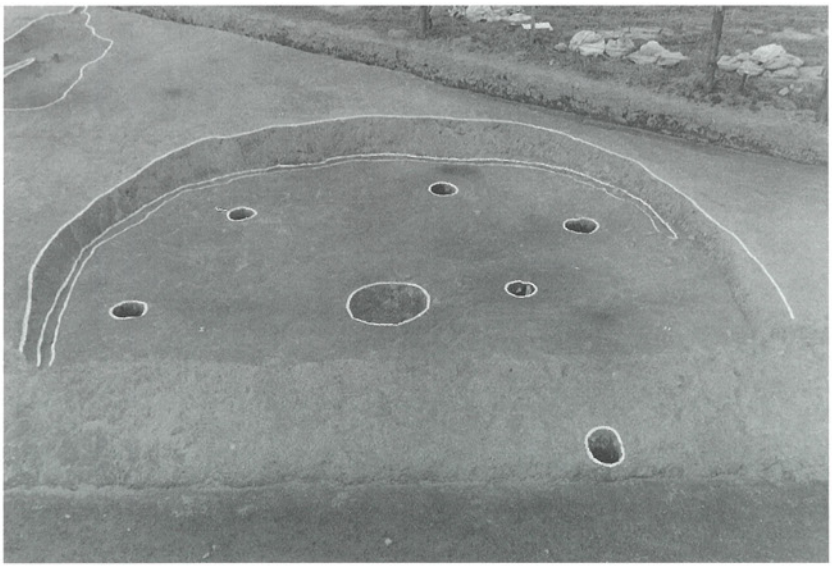
SB1021遺構完堀状況



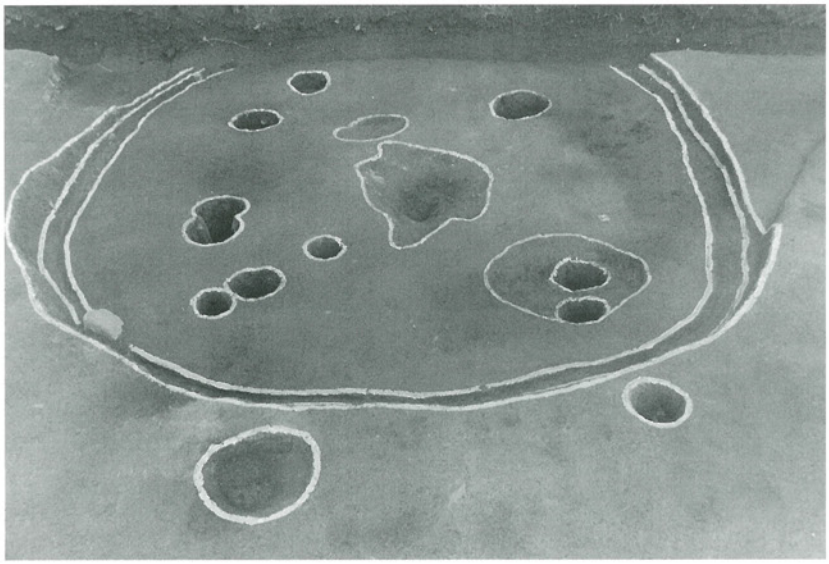
SB1022内焼土分布状況



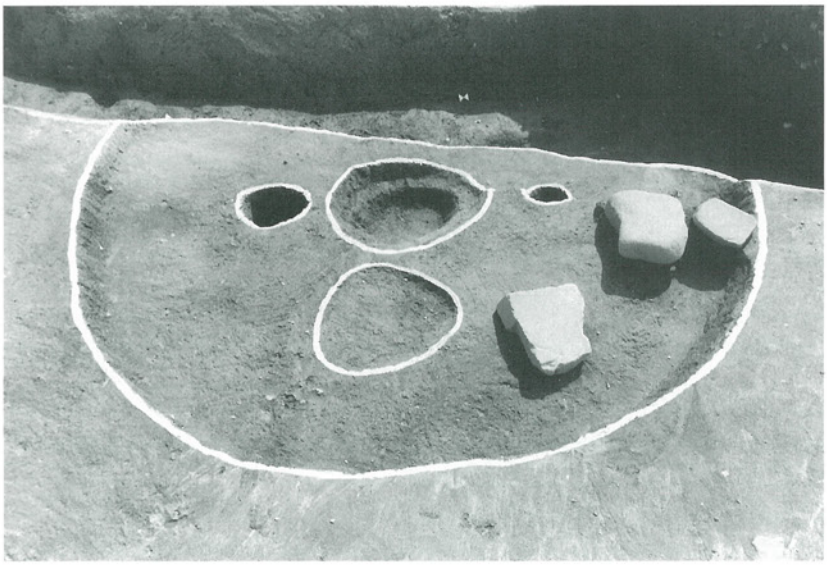
SB1022遺物出土状況



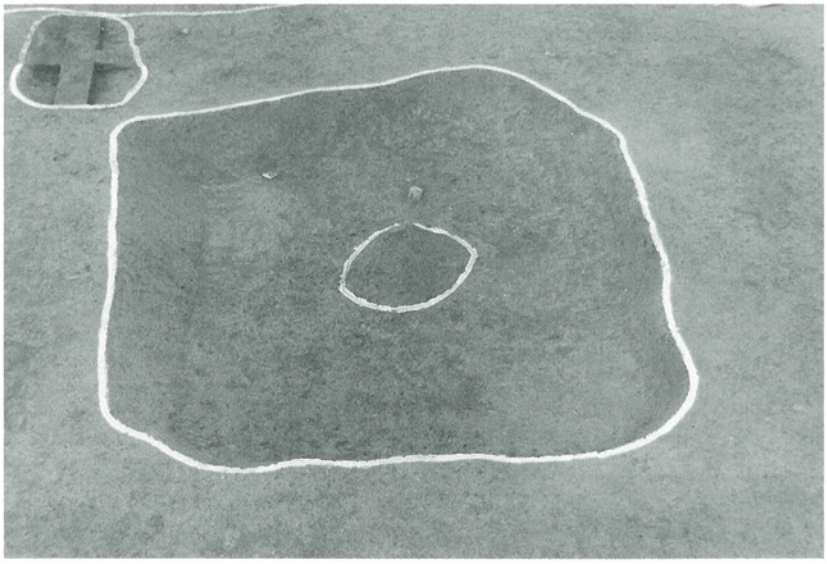
SB1022遺構完堀状況



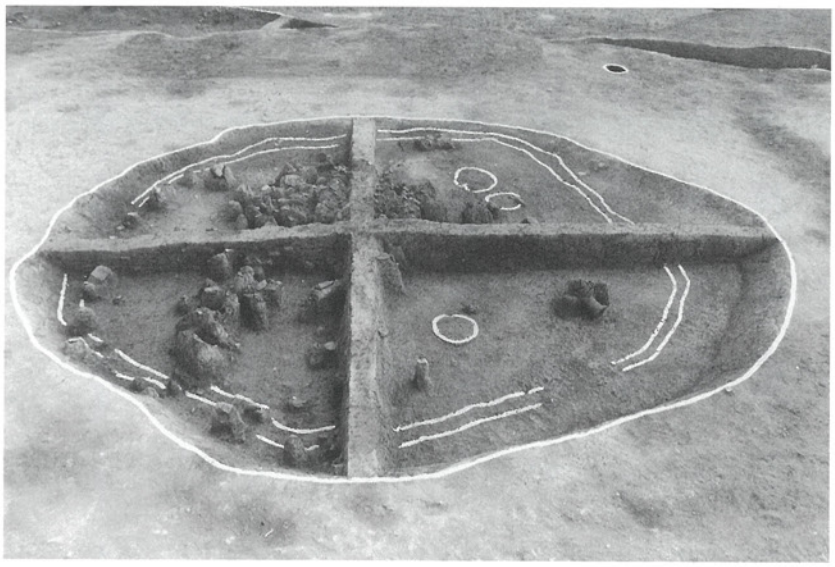
SB1024遺構完堀状況



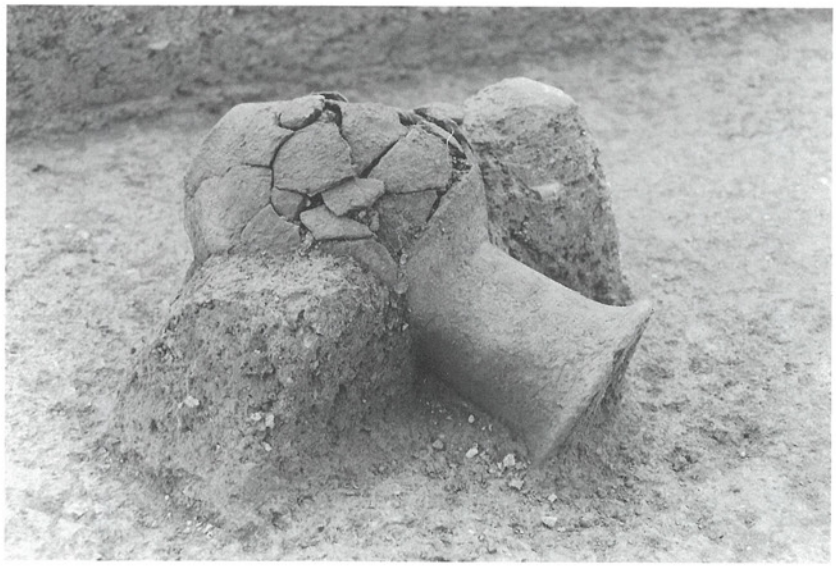
SB1025遺構完堀状況



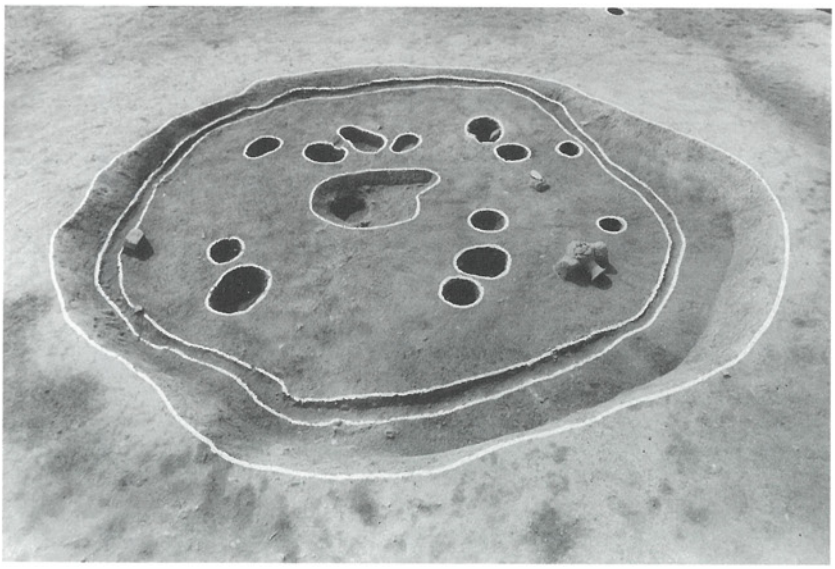
SB1027遺構完堀状況



SB1026遺物出土状況



SB1026遺物出土状況



SB1026遺構完堀状況

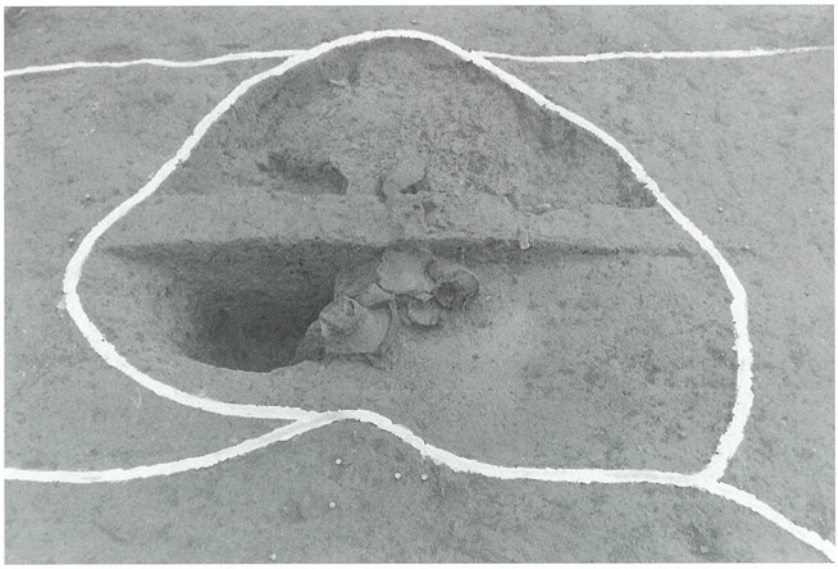
SA1001・1002完堀状況

SD1005遺構堀削状況

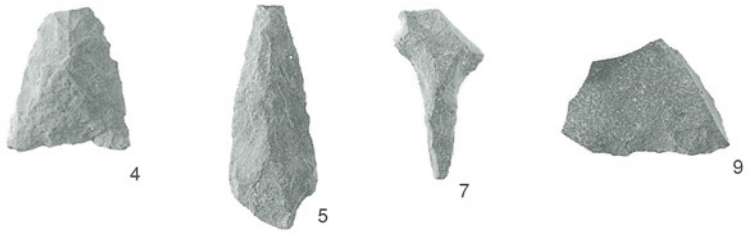
SD1005遺構堀削状況

SK1027配石部分

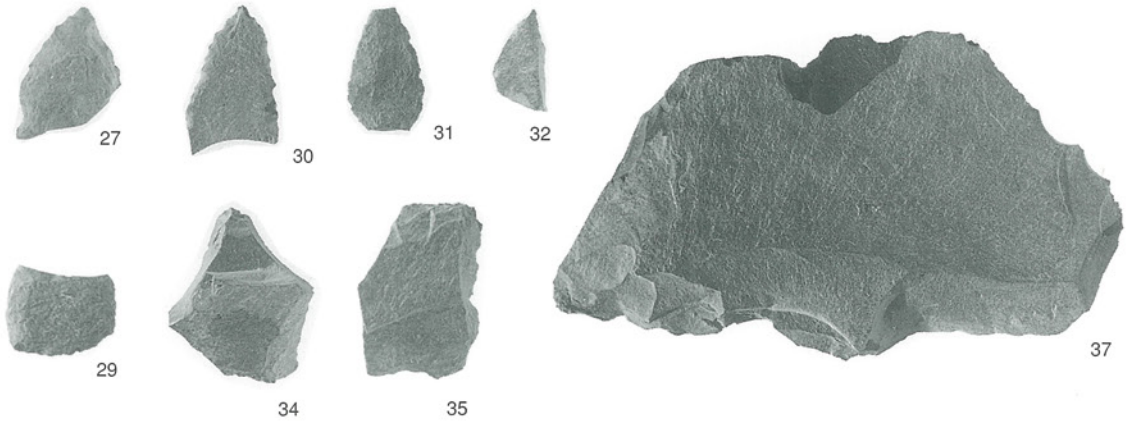
SK1112遺物出土状況



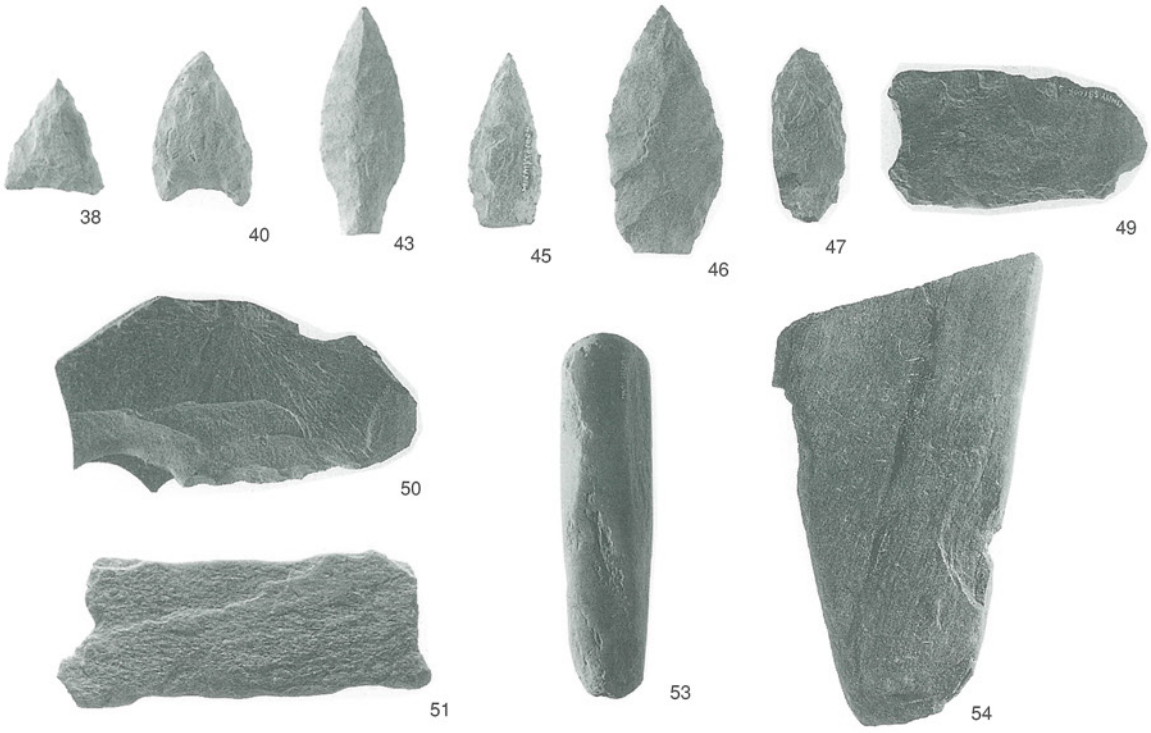
SK1112遺物出土状況



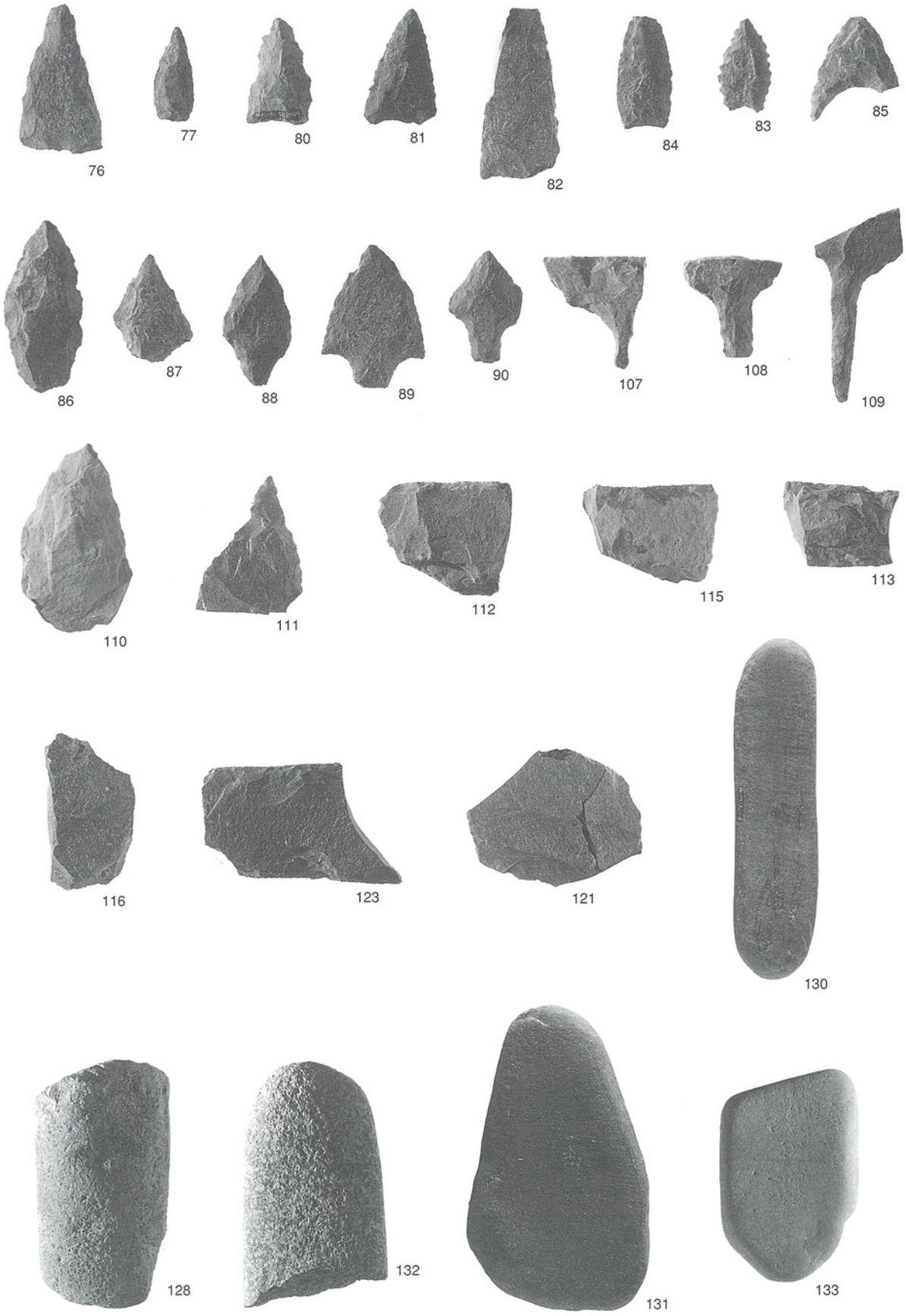
SB1001　出土遺物（石器）



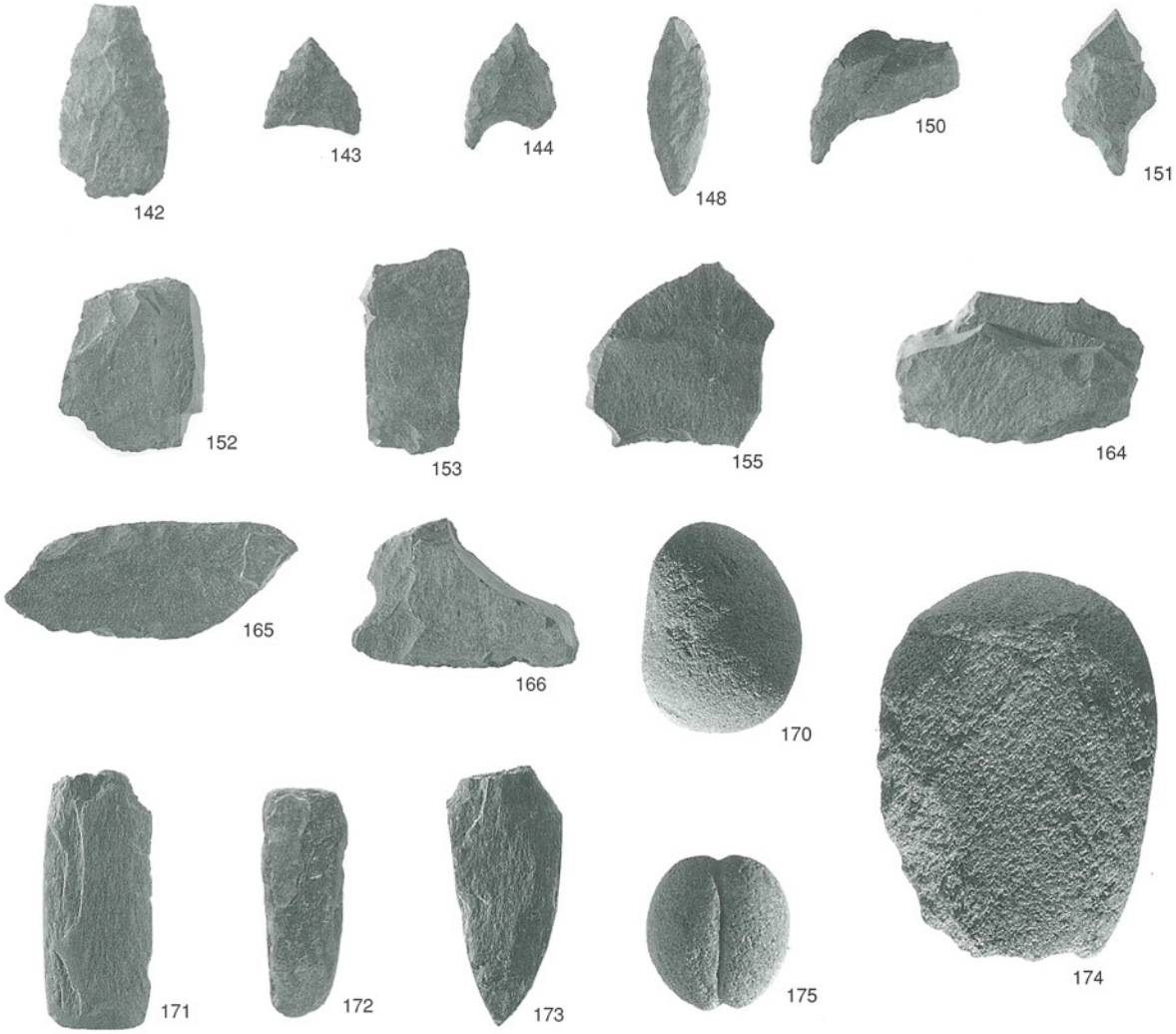
SB1003　出土遺物（石器）



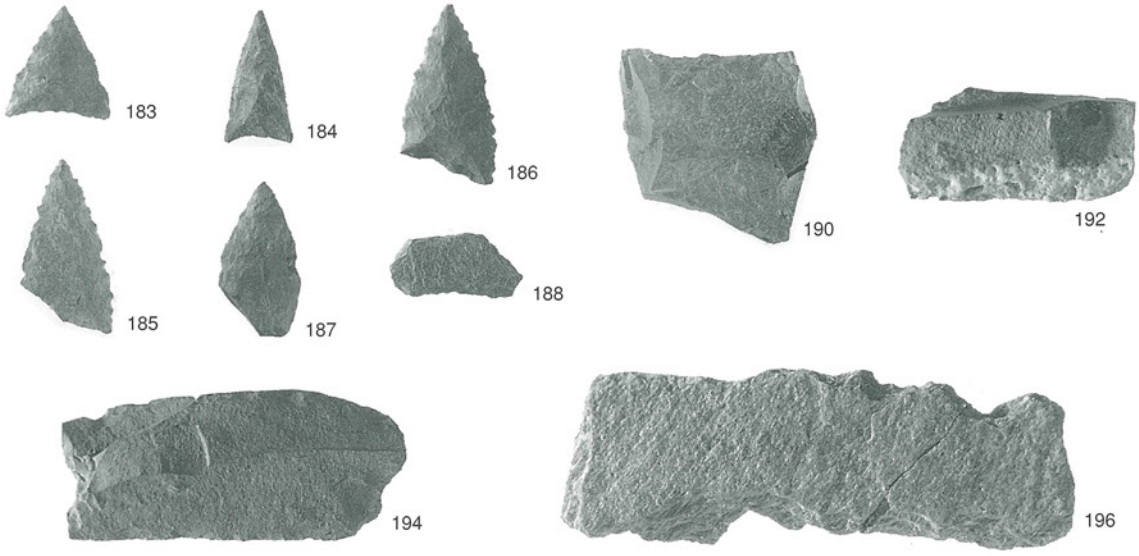
SB1004　出土遺物（石器）



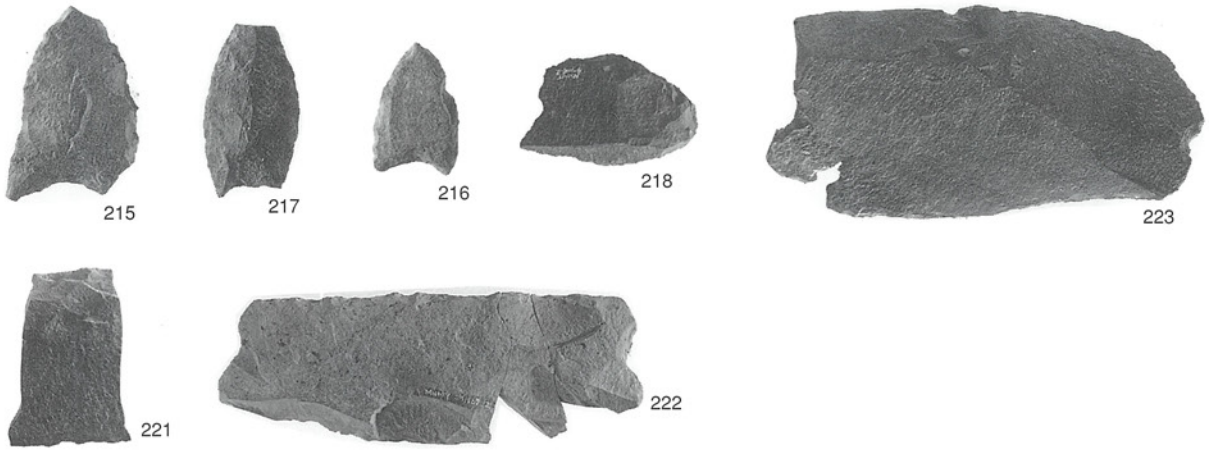
SB1005　出土遺物（石器）



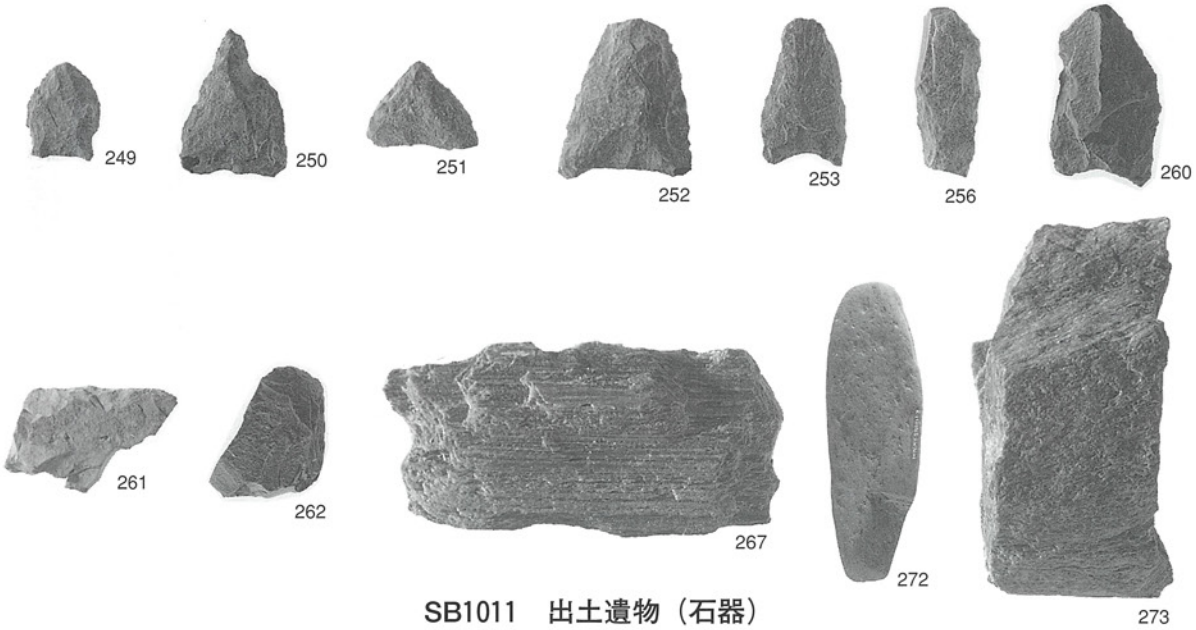
SB1006　出土遺物（石器）



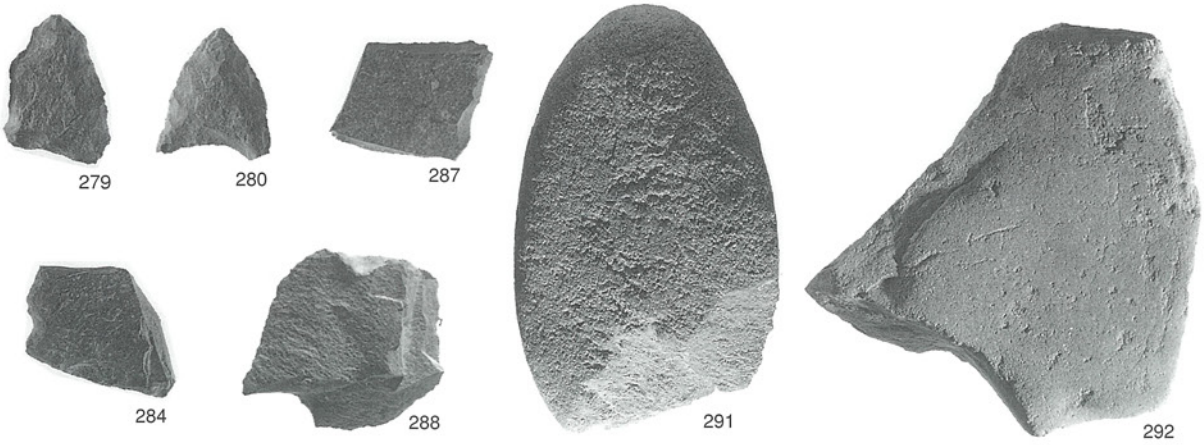
SB1008　出土遺物（石器）



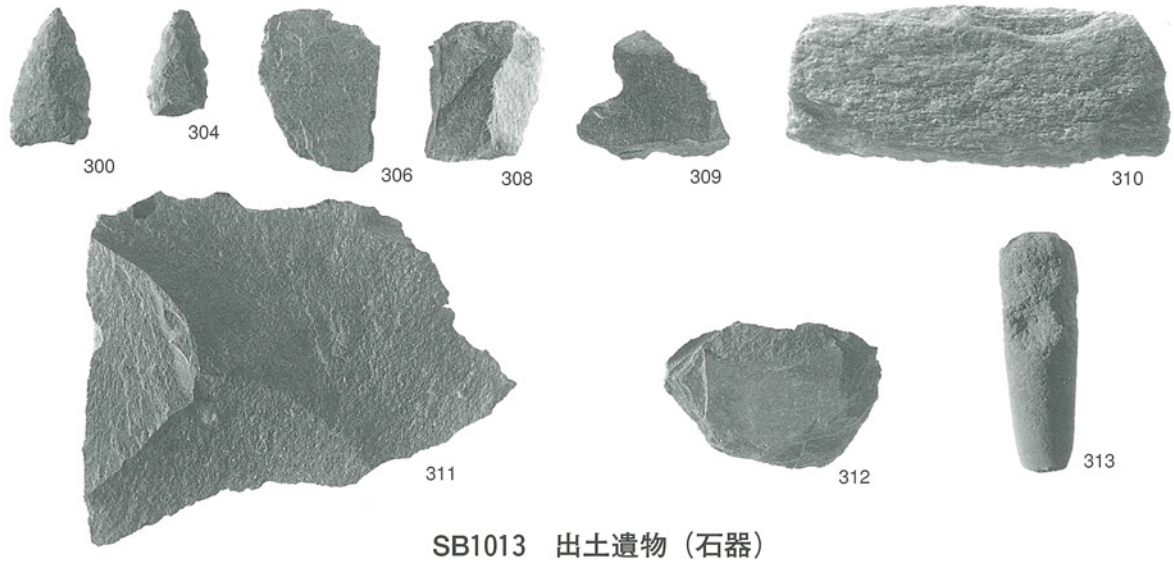
SB1009　出土遺物（石器）



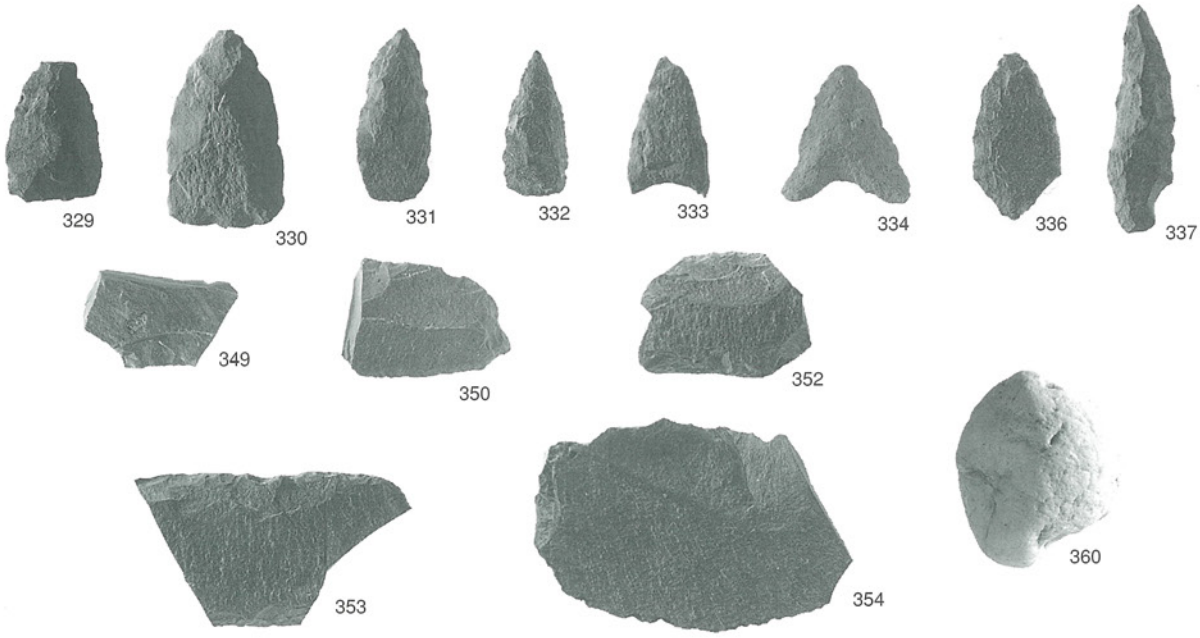
SB1011　出土遺物（石器）



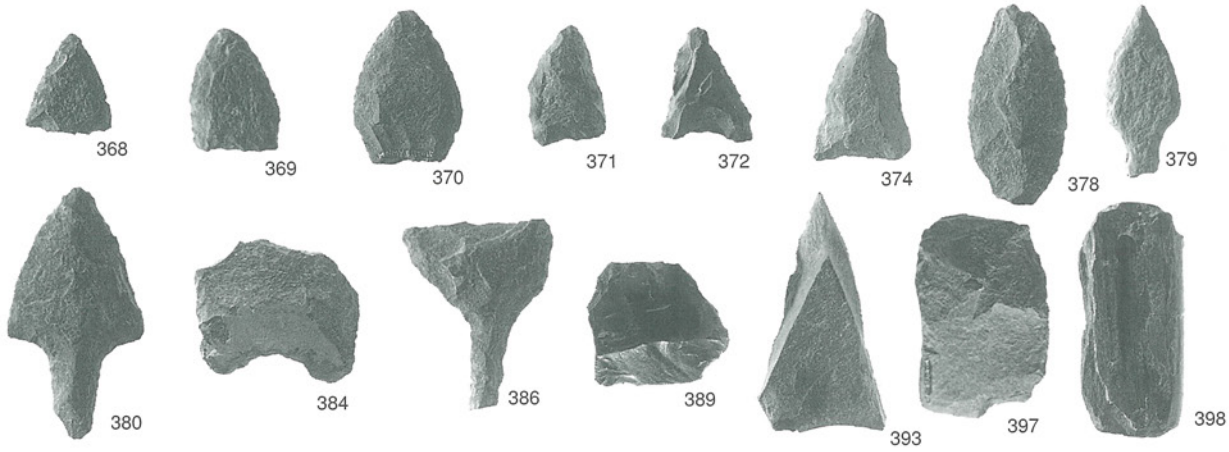
SB1012　出土遺物（石器）



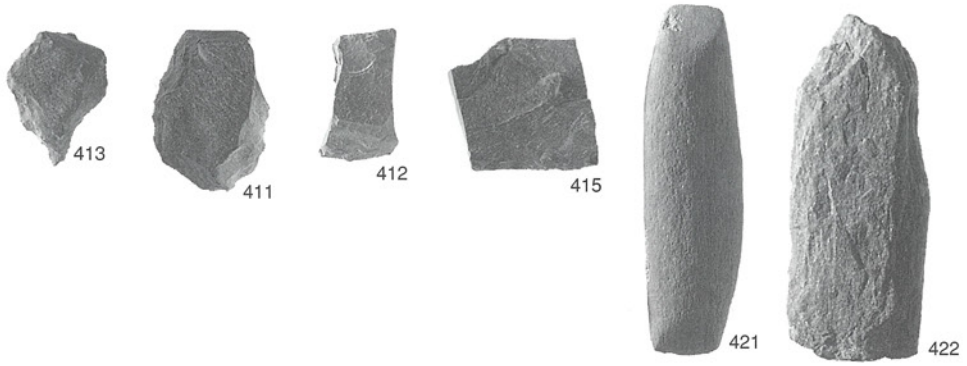
SB1013　出土遺物（石器）



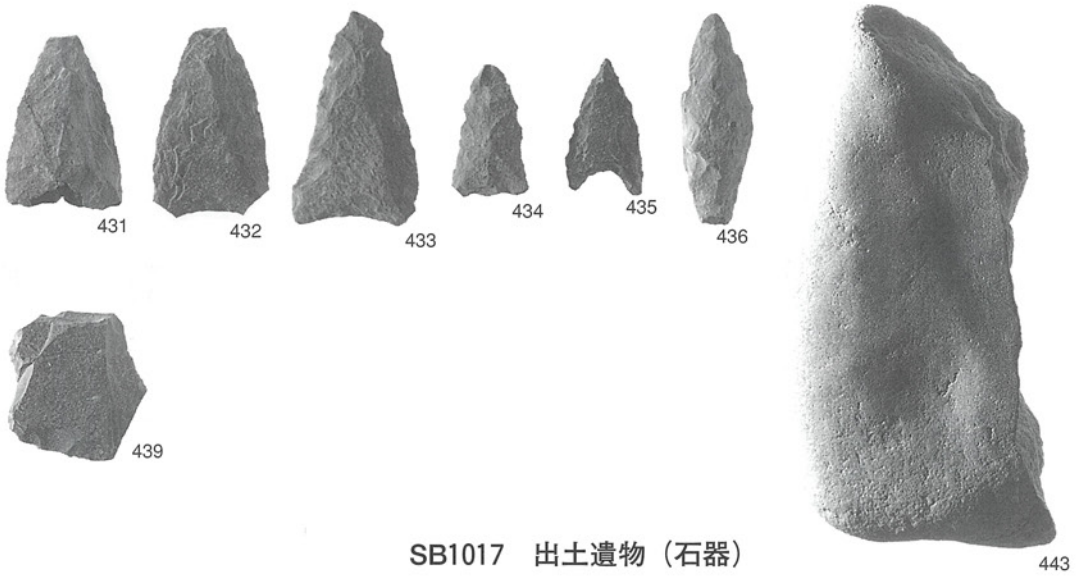
SB1014　出土遺物（石器）



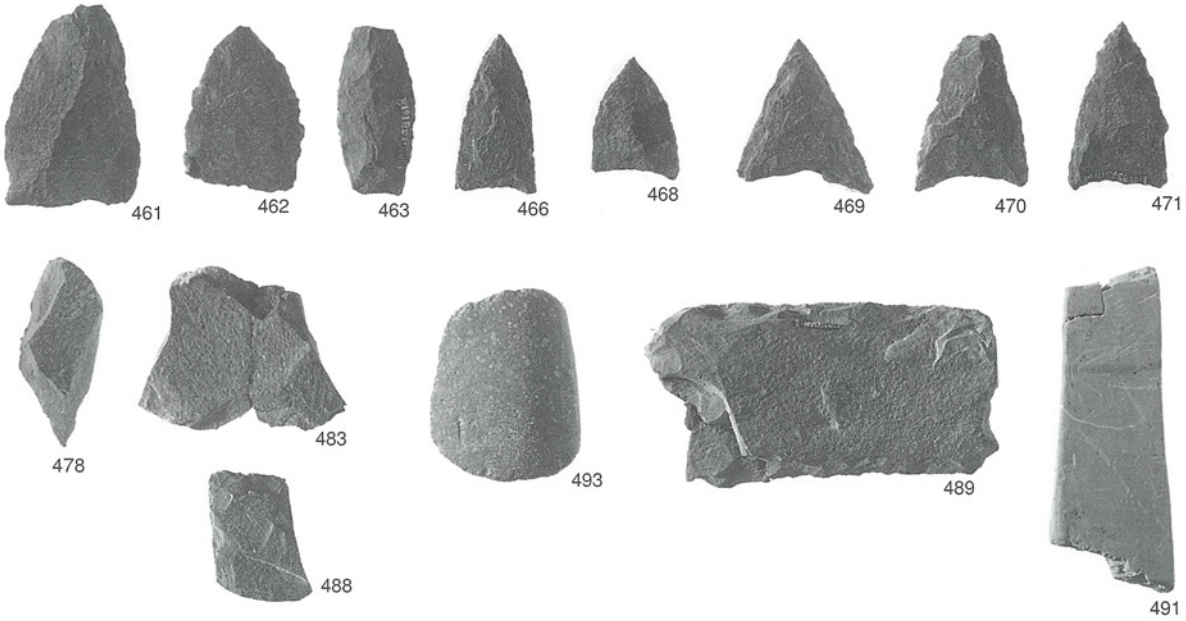
SB1015　出土遺物（石器）



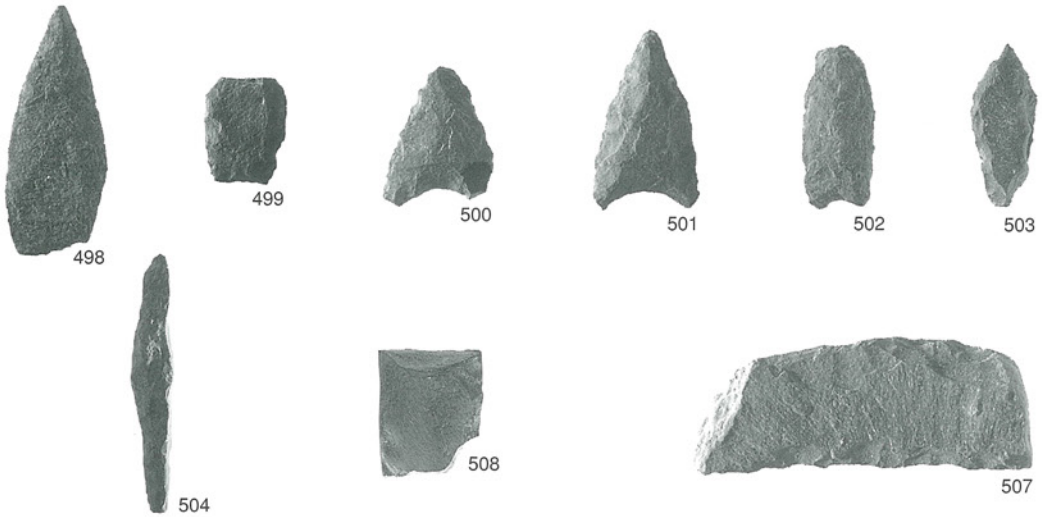
SB1016　出土遺物（石器）



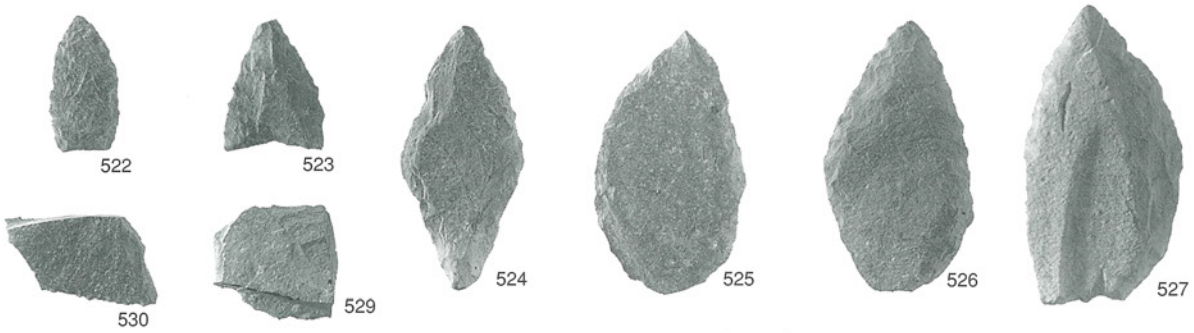
SB1017　出土遺物（石器）



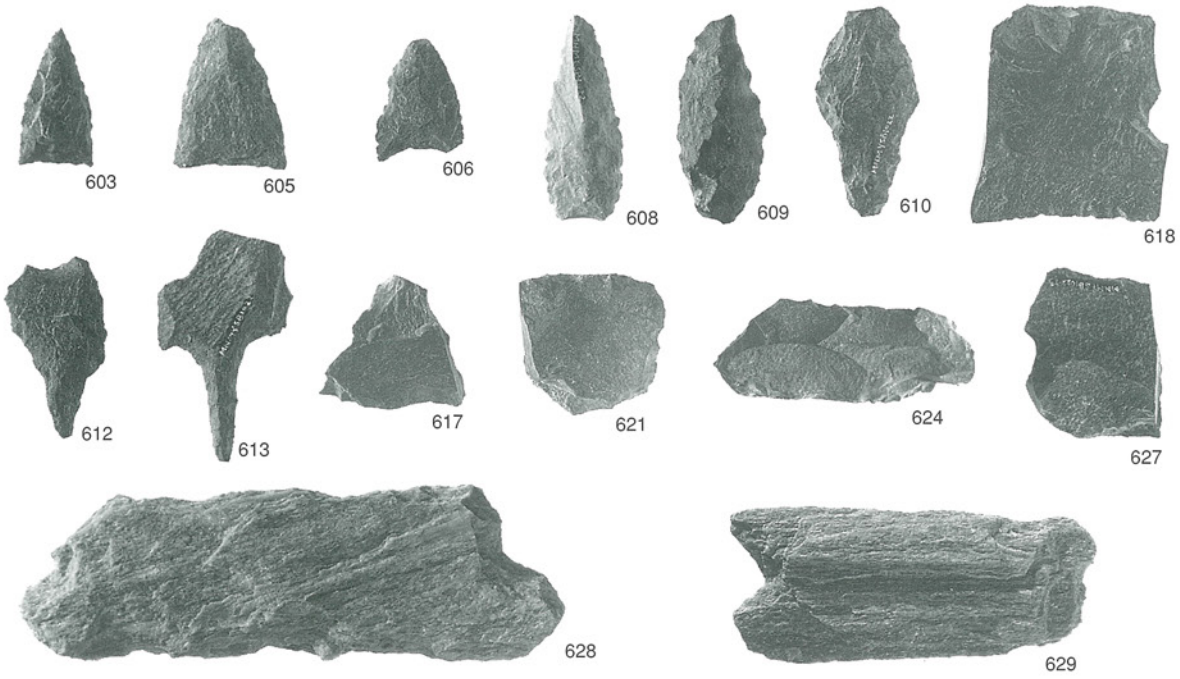
SB1018　出土遺物（石器）



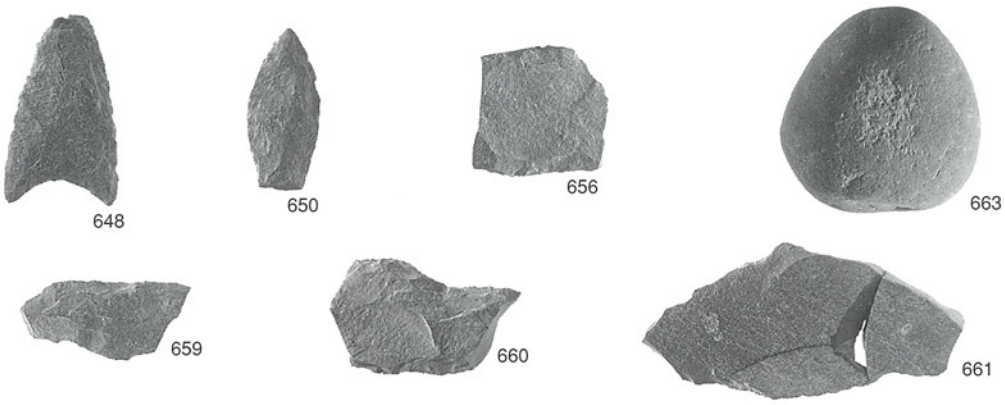
SB1019　出土遺物（石器）



SB1021　出土遺物（石器）

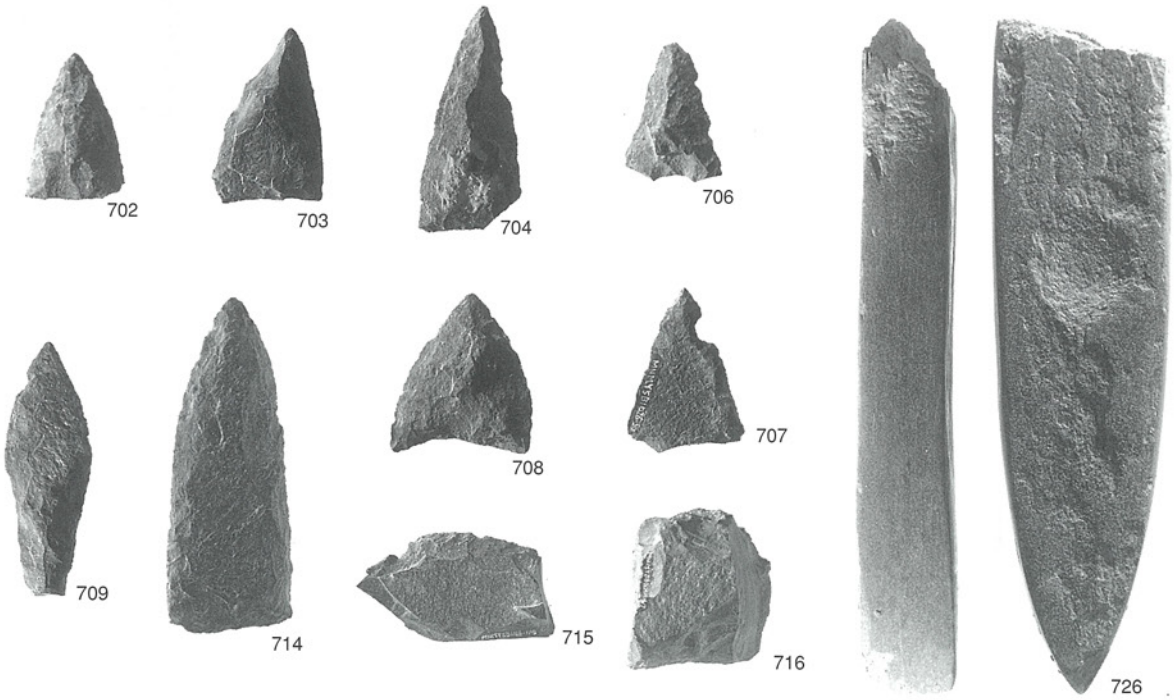


SB1022　出土遺物（石器）



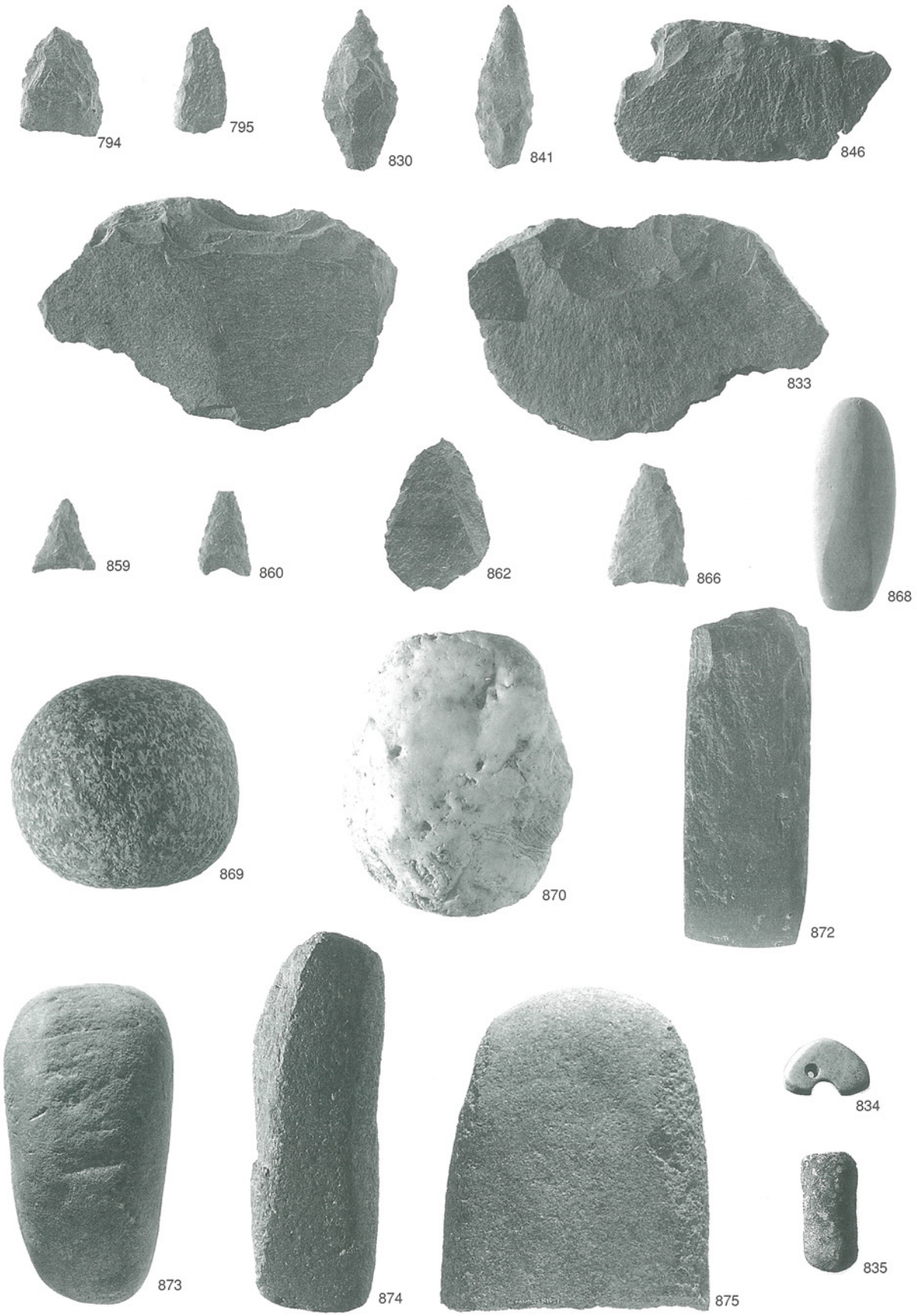
SB1024　出土遺物（石器）

SB1025　出土遺物（石器）

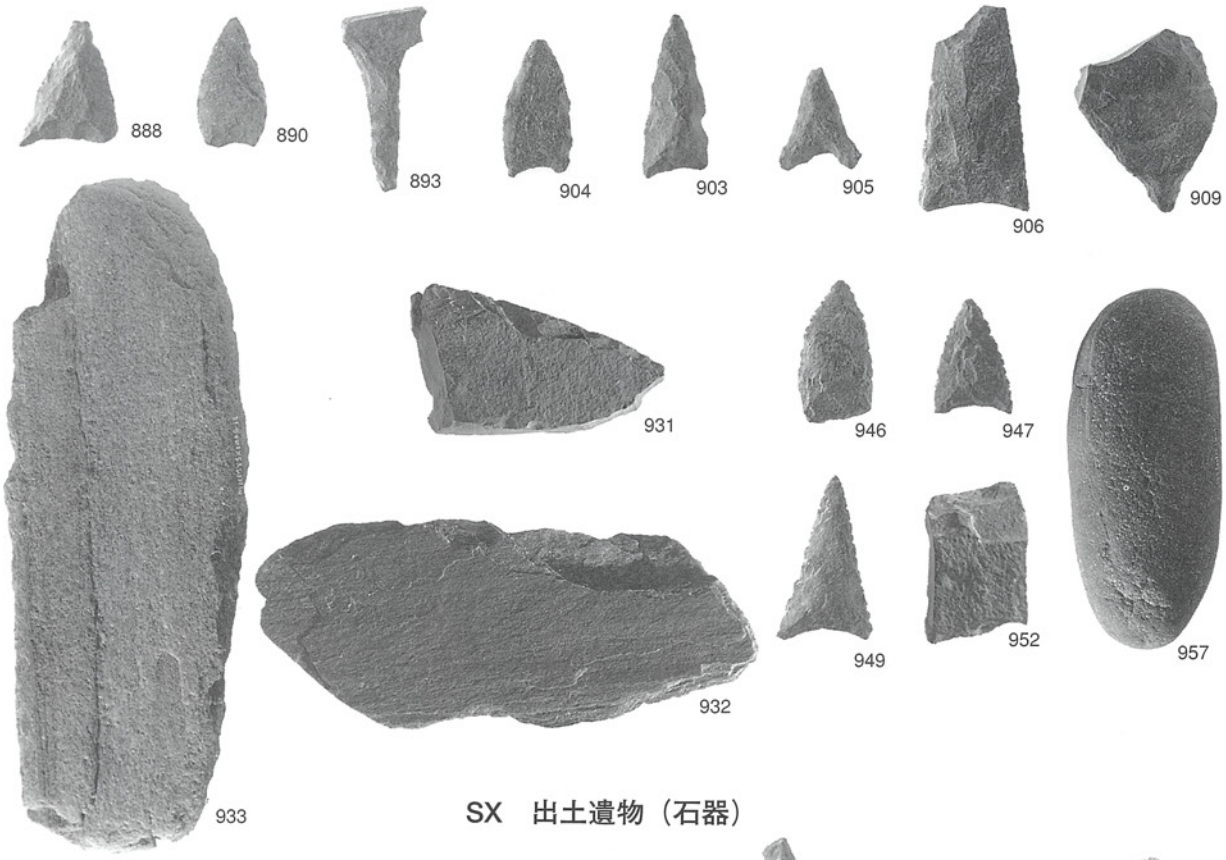


SB1026　出土遺物（石器）

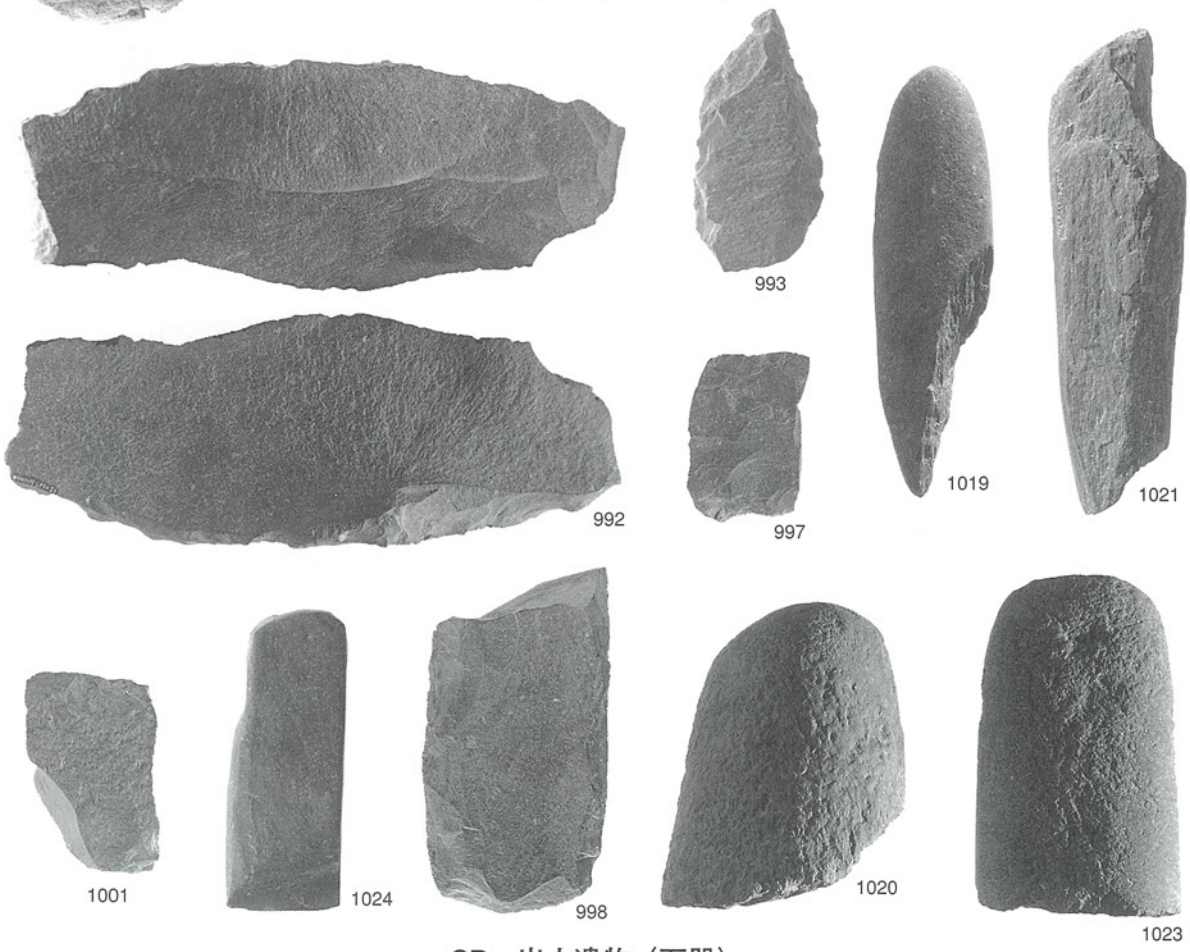
SB1027　出土遺物（石器）


794
795
830
841
846
833
859
860
862
866
868
869
870
872
873
874
875
834
835

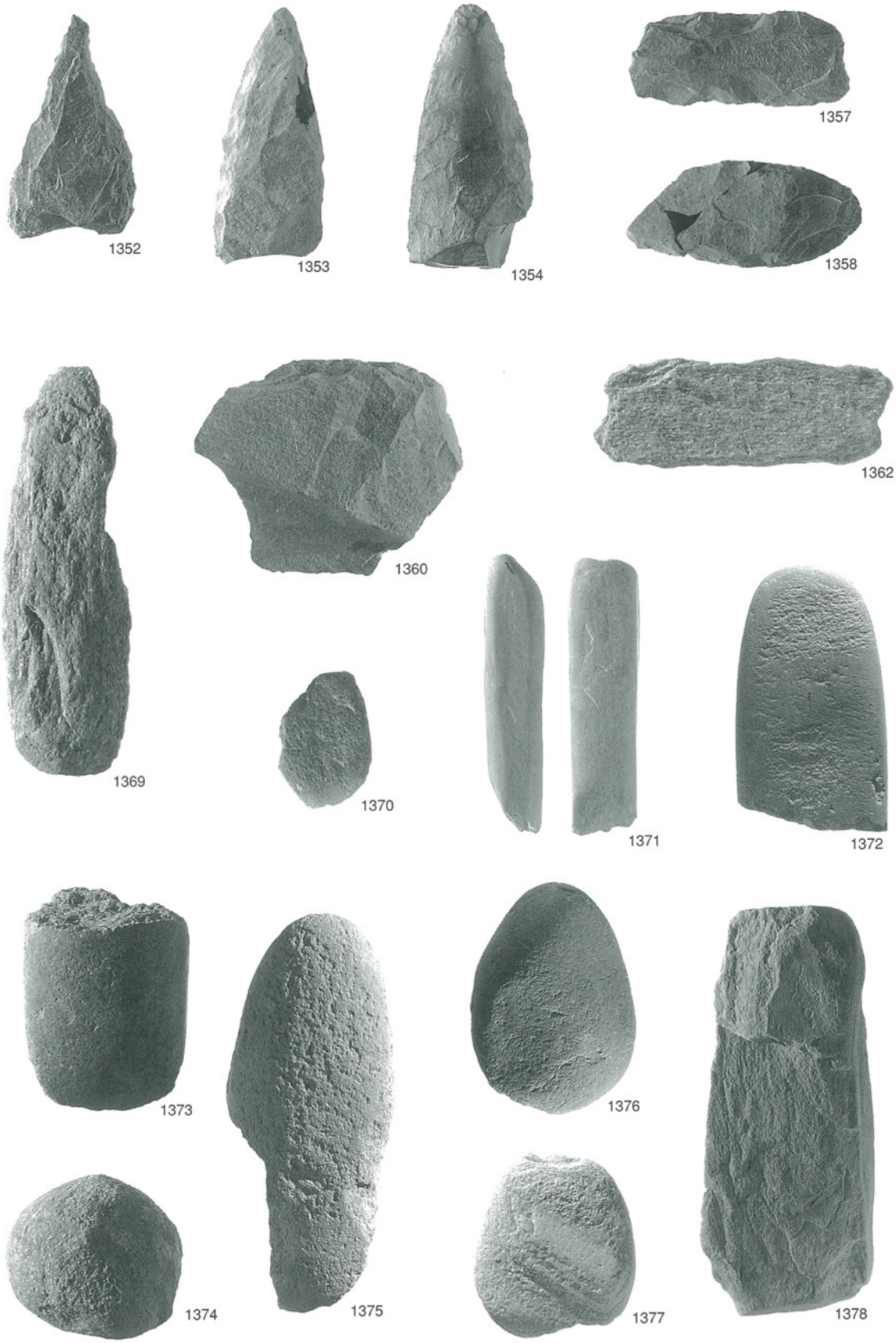
SK　出土遺物（石器）



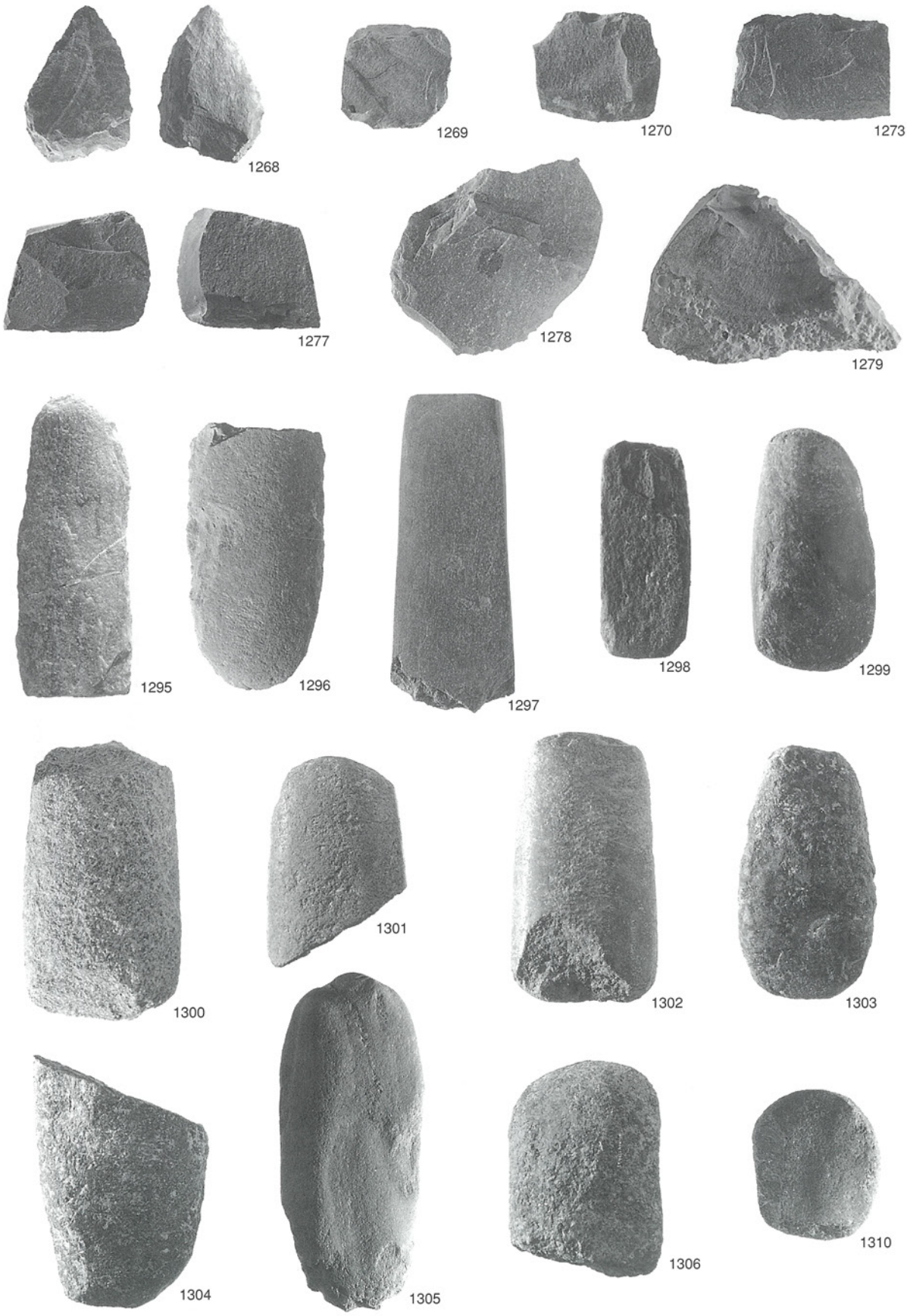
SX　出土遺物（石器）



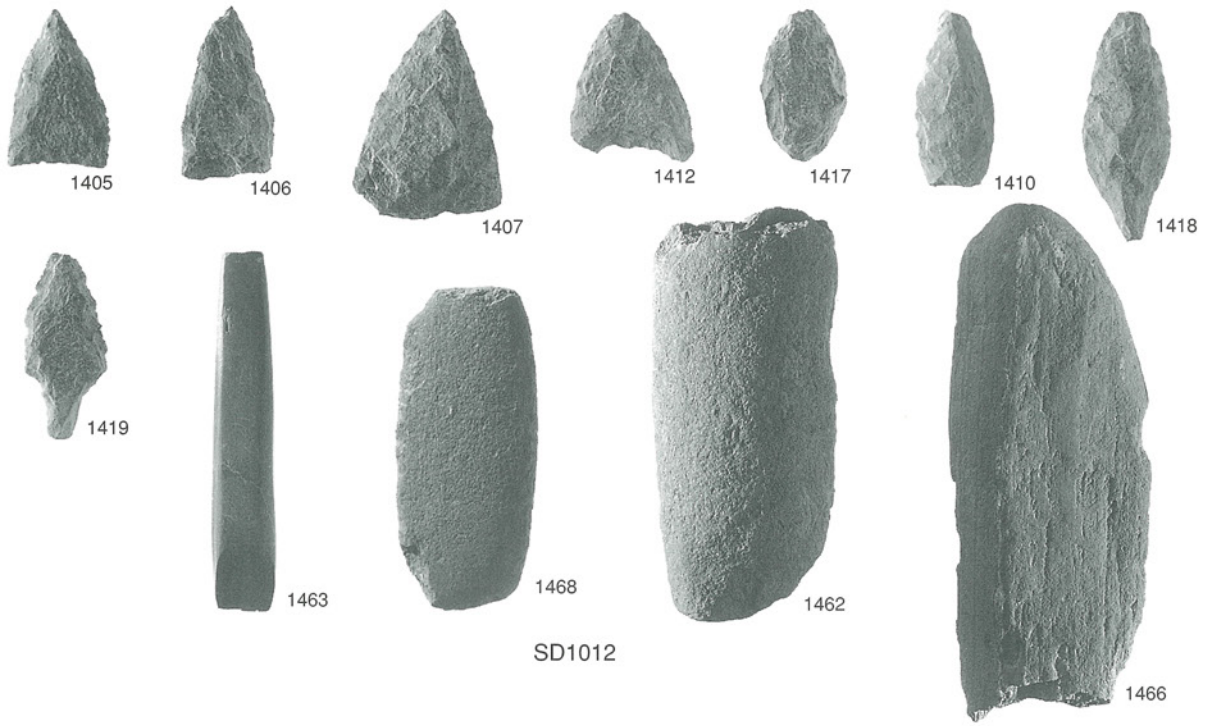
SP　出土遺物（石器）



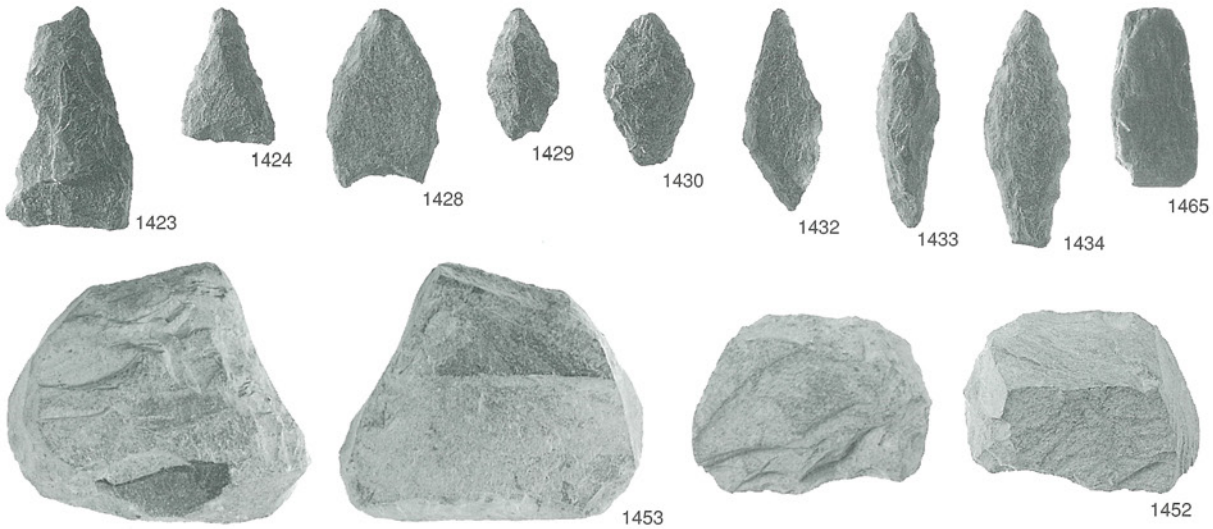
SD1005　出土遺物（石器）



SD1027　出土遺物（石器）



SD1012

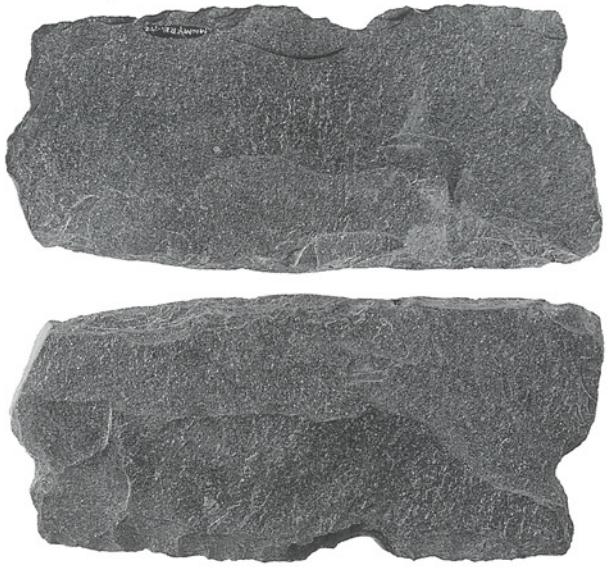


SD1015

SD1018　　SD1030

SD　出土遺物（石器）

1642



1644

1645

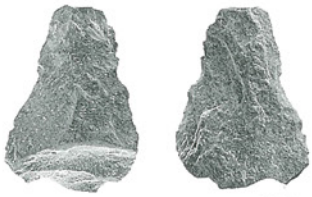
1646

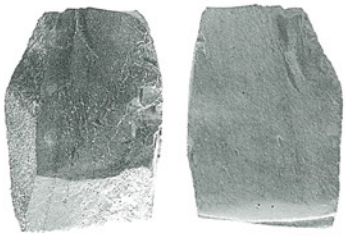
1647

1648

包含層　出土遺物（石器）

1654


1655


1660

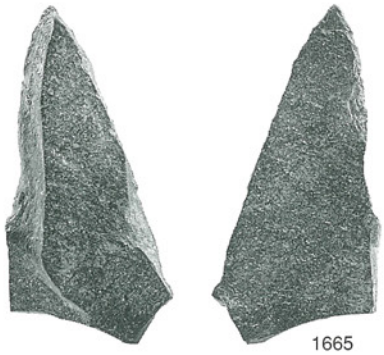
1656

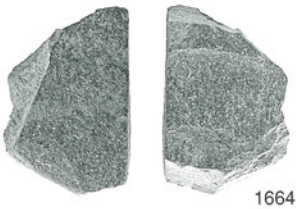
1661

1659

1662

1663


1665


1664

1666

包含層　出土遺物（石器）